三重県埋蔵文化財調査報告１４７

安　濃　津

—本　文　編—

１９９７．３

三重県埋蔵文化財センター

南方上空から

全景（北から・合成写真）

溝ＳＤ１７６の
中世前期遺物
（西から）

土中に据えられた
常滑産大甕
（SK263　東から）

大土坑SZ20北壁

土坑SK287西壁

井戸SE152西壁

序

三重県の中央部に位置します安濃郡は、安濃川が形成した肥沃な土壌の影響で、古来より高い文化を形成してきました地域であります。その河口に位置する安濃津は、福岡県の博多津、鹿児島県の坊津とともに、中国にも名を知られた「日本三津」のひとつとして著名であります。しかし、この安濃津は、これまで実態が全くわからない港でもありました。

この度、県立津実業高等学校が新しく生まれ変わることになり、総合学科棟と体育館が校庭に新しく造成されることとなりました。それに先立ち発掘調査を行いました結果が、この報告書であります。これまで実態の不明であった安濃津を間近に感じることができる発掘であり、濃密な遺構が見つかるとともに、出土しました遺物も膨大な量でした。

さて、この発掘に対する関心は県民ばかりでなく、県外からも強いものがありました。三重県のひとつの原点ともいえる安濃津に対する関心の高さには、発掘調査を担当いたしました当センターとしましても、ひとつの驚きでありました。三重県が全国に誇れる遺跡がまたひとつ増えたことは大いなる喜びである一方、記録保存という結果になったことは残念でもあります。しかし、この報告書によって、中世の海上交通や物流に対し、新たな光が与えられることになれば、消え去った遺跡の新しい一歩が踏み出せるものと思います。また、我々もこの報告書を第一歩として、安濃津に関する研究を深めてみようと思っている次第です。調査の成果を三重県の財産としてどのように活用していくかが、今後の我々に課せられた重要な問題と考えております。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、および関係各位から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

１９９７年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　奥　村　敏　夫

例　言

1　本書は、三重県津市柳山津興地内を中心に所在する安濃津遺跡群の発掘調査報告書である。今回の調査地は、津市柳山津興字松村1,239番地に相当する。

2　本書は、出土遺物観察表および写真図版を別冊として編集している。

3　この調査は、三重県立津実業高等学校総合学科棟・体育館建築工事に伴う緊急発掘調査である。

4　調査は平成8年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹兼調査第一課長　吉水康夫

調査第一課第一係長　前川嘉宏

技　師　伊藤裕偉　　主事　船越重伸

技　師　高田恵理子　　臨時技術補助員　石淵誠人

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真は、伊藤・船越・高田・石淵が撮影した。科学分析以外の執筆と、全体の編集は伊藤が行った。

6　調査にあたっては、津市・嬉野町在住の各位、津市役所、津市教育委員会、および県教育委員会総務課、津実業高等学校から多大な協力を受けたことを明記する。

7　報告書作成にあたっては、下記の方々から有益な御教示を得た（順不同、敬称略）。

飯田良一（津実業高等学校）、石井進（国立歴史民俗博物館）、伊藤克幸（三重県史編纂室）、大庭康時（福岡市教育委員会）、岡野友彦（皇学館大学）、尾野善裕（京都国立博物館）、加藤益幹（椙山短期大学）、金子健一（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）、萱室康光（津市教育委員会）、小島道裕（国立歴史民俗博物館）、小玉道明（海の博物館）、小西瑞恵（大阪樟蔭女子大学）、小林秀（博物館建設準備室）、佐伯弘次（九州大学）、鈴木正貴（（財）愛知県埋蔵文化財センター）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館）、中野晴久（常滑市歴史民俗博物館）、播磨良紀（四日市大学短期大学部）、藤田達生（三重大学）、藤田充子（津市教育委員会）、馬淵和雄（鎌倉市教育委員会）、三木清一郎（名古屋大学）、目崎茂和（三重大学）、矢田俊文（新潟大学）

7　当地は、国土座標第Ⅵ系に属する。挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏6°30′（平成2年）、真北方位は西偏0°18’である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき……「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。

わん……「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、発掘調査段階で付加した遺構の略記号を付けた。

ＳＡ…柱列　ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝　ＳＥ…井戸　ＳＦ…焼土坑　ＳＫ…土坑・大土坑・埋甕など

ＳＺ…大土坑・性格不明遺構、落ち込みなど　　pit…ピット、柱穴

11　題字は、宇河雅之氏（斎宮歴史博物館）の揮毫による。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の契機と経過 ……（伊　藤）（1）
1　調査の契機 ……（1）
2　調査の経過 ……（2）
3　調査の方法 ……（5）
4　遺跡の名称について ……（5）

Ⅱ　位置と環境～問題の所在～ ……（伊　藤）（6）
1　緒言～伊勢と港・港町～ ……（6）
2　安濃津をとりまく歴史的環境 ……（6）
3　中世を中心とした安濃津の状況 ……（8）
4　安濃津周辺の遺跡について……（11）
5　小結……（12）

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～ ……（伊　藤）（14）
1　調査区の地形と基本層位……（14）
2　検出した遺構……（13）
a　古墳時代の遺構……（13）
b　中世前期の遺構……（20）
c　中世後期の遺構……（21）
d　近世の遺構……（40）
e　近代以降の遺構 ……（50）

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～ ……（伊　藤）（60）
1　中世以前の遺物……（60）
2　中世の土器……（60）
a　中世前期……（60）
b　中世後期……（62）
3　中世の土製品……（67）
4　中世の石製品……（68）
5　中世の瓦類……（69）
6　中世の金属製品……（70）
7　加工円盤……（70）
8　人骨……（70）
9　近世～近代の遺物……（71）

Ⅴ　調査資料の科学分析 ……（127）
1　伊勢地域の遺跡出土中世土器の蛍光Ｘ線分析……（三辻利一）（127）
2　蛍光Ｘ線分析結果に見る伊勢地域の中世土器……（伊　藤）（136）

3　安濃津遺跡群の土壌・古植生等の自然科学分析……（パリノ・サーヴェイ（株））…（139）

Ⅵ　安濃津に関する基礎検討……（伊　藤）（149）
1　安濃津の景観復元 ……（149）
a　安濃の松原・洞津・穴津 ……（151）
b　砂堆（沿岸洲）・安濃川・岩田川 ……（151）
c　藤方 ……（152）
d　明応の大地震と安濃津住人 ……（153）
e　安濃津の都市空間と港の位置について ……（157）

2　陶器類から見た物資集積と拡散 ……（159）
a　未使用陶器と物資集積 ……（159）
b　物資集積・拡散の媒体 ……（160）
c　物資流通における安濃津の機能について ……（162）

3　安濃津都市空間の変遷 ……（164）
a　発掘で確認された遺構の推移 ……（164）
b　地籍図にみる調査区周辺の状況 ……（165）

4　中世後期の土器類について ……（169）
a　出土中世土器の上限と安濃津の被災について ……（169）
b　中北勢系の土器群について ……（169）
c　土器の製作と廃棄にかかる問題 ……（173）

5　加工円盤に関する基礎作業 ……（174）
a　分類 ……（174）
b　出土状況 ……（174）
c　機能（用途）……（174）

6　近世以降の陶器井戸枠について ……（177）
a　使用方法 ……（177）
b　土器枠の形態と変遷について ……（177）
c　年代観について ……（179）

Ⅶ　総括～安濃津遺跡群の歴史的意義～……（伊　藤）（180）
1　都市・安濃津の背景 ……（180）
2　残された課題 ……（181）
3　おわりに ……（182）

挿 図 目 次

fig.1　伊勢湾西岸部の中世主要港と安濃津周辺の遺跡
fig.2　調査区周辺現況図
fig.3　調査区西壁南部土層断面図
fig.4　中世遺構面平面図
fig.5　溝SD176関連実測図　その1
fig.6　溝SD176関連実測図　その2
fig.7　溝SD176関連実測図　その3
fig.8　溝SD310遺物出土状況
fig.9　土坑SK278平面・断面図
fig.10　井戸SE53平面・断面図
fig.11　井戸SE78平面・断面図
fig.12　井戸SE81平面・土層断面図
fig.13　井戸SE205･212平面・断面図
fig.14　井戸SE289平面・断面図
fig.15　大土坑SZ20･54･SK69北壁土層断面図
fig.16　大土坑SZ20平面・杭列断面図
fig.17　大土坑SZ60遺物出土状況および土層断面図
fig.18　大土坑SZ73･SK90平面･土層断面図
fig.19　大土坑SK137･SK139平面・断面・立面図
fig.20　溝SD174　i6グリット土層
fig.21　大土坑SK241平面・土層断面図
fig.22　大土坑SK261平面・土層断面図
fig.23　大土坑SK296･306平面・土層断面図
fig.24　大土坑SK305平面・土層断面図
fig.25　溝SD254･255土層断面図
fig.26　土坑SK115遺物出土状況
fig.27　土坑SK192平面・土層断面図
fig.28　土坑SK209遺物出土状況
fig.29　埋甕SK263平面・立面図
fig.30　焼土坑SF77平面・土層断面図
fig.31　掘立柱建物SB346･348付近実測図
fig.32　掘立柱建物SB349付近実測図
fig.33　近世～近代遺構面平面図
fig.34　井戸SE13平面・断面図
fig.35　井戸SE21平面・土層断面図
fig.36　井戸SE79平面・断面図
fig.37　井戸SE152平面・土層断面図
fig.38　井戸SE160平面・立面図
fig.39　井戸SE282平面・断面図
fig.40　井戸SE328平面・断面図
fig.41　貿易陶磁器類の分布
fig.42　中世銭貨の分布
fig.43　人骨の分布
fig.44　古代以前の遺物
fig.45　溝SD176出土土器(1)
fig.46　溝SD176出土土器(2)
fig.47　溝SD176出土土器(3)
fig.48　溝SD176出土土器(4)
fig.49　溝SD176出土土器(5)
fig.50　小土坑SK278他出土土器
fig.51　溝SD310他出土土器
fig.52　落ち込みSZ15出土土器
fig.53　大土坑SZ20他出土土器
fig.54　大土坑SZ60出土土器
fig.55　大土坑SK69他出土土器
fig.56　溝SD45他出土土器
fig.57　大土坑SZ73他出土土器
fig.58　土坑SK192他出土土器
fig.59　大土坑SK184･175出土土器
fig.60　大土坑SK166他出土土器
fig.61　溝SD174･大土坑SK229出土土器
fig.62　土坑SK209出土土器
fig.63　大土坑SK230出土土器
fig.64　大土坑SZ241出土土器
fig.65　大土坑SK261他出土土器
fig.66　大土坑SK276出土土器
fig.67　埋甕SK263他出土土器
fig.68　土坑SK200他出土土器
fig.69　大土坑SK296他出土土器
fig.70　大土坑SK305、各地区ピット他出土土器
fig.71　各地区出土土器　土師器・陶器
fig.72　各地区出土土器　瀬戸・信楽・瓦質土器
fig.73　各地区出土土器　常滑

fig.74　各地区出土土器　土師器鍋・羽釜
ig.75　各地区出土土器　土師器羽釜・茶釜
fig.76　各地区出土土器　貿易陶磁器・犬形土製品ほか
fig.77　出土石製品(1)　スタンプ類ほか
fig.78　出土石製品(2)　硯・砥石ほか
fig.79　出土石製品(3)　砥石
fig.80　出土石製品(4)　砥石
fig.81　出土石製品(5)　五輪塔
fig.82　出土瓦(1)
fig.83　出土瓦(2)
fig.84　出土土錘・金属製品
fig.85　出土銭貨(1)
fig.86　出土銭貨(2)
fig.87　出土銭貨(3)
fig.88　出土加工円盤(1)
fig.89　出土加工円盤(2)
fig.90　出土加工円盤(3)
fig.91　出土加工円盤(4)
fig.92　土坑SK44他出土土器
fig.93　井戸SE151他出土土器
fig.94　近代の土器、銭貨ほか
fig.95　各地区出土土器　常滑大甕・井戸枠
fig.96　井戸SE152土器枠
fig.97　井戸SE160土器枠
fig.98　岩出遺跡群(12～13世紀)のK－Ca分布図
fig.99　岩出遺跡群(12～13世紀)のRb－Sr分布図
fig.100 岩出遺跡群(14～15世紀)のK－Ca分布図
fig.101 岩出遺跡群(14～15世紀)のRb－Sr分布図
fig.102 前田町屋遺跡のK－Ca分布図
fig.103 前田町屋遺跡のRb－Sr分布図
fig.104 櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区のK－Ca分布図
fig.105 櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区のRb－Sr分布図
fig.106 下川遺跡のK－Ca分布図
fig.107 下川遺跡のRb－Sr分布図
fig.108 安濃津遺跡群(13世紀)のK－Ca分布図
fig.109 安濃津遺跡群(13世紀)のRb－Sr分布図
fig.110 安濃津遺跡群(15･18･19世紀)のK－Ca分布図
fig.111 安濃津遺跡群(15･18･19世紀)のRb－Sr分布図
fig.112 安濃津遺跡群の南伊勢系(15世紀)K－Ca分布図
fig.113 安濃津遺跡群の南伊勢系(15世紀)R b－Sr分布図
fig.114 安濃津遺跡群の中北勢系(15世紀)K－Ca分布図
fig.115 安濃津遺跡群の中北勢系(15世紀)Rb－Sr分布図
fig.116 主要珪藻化石群集
fig.117 花粉化石群集
fig.118 植物珪酸体組成と組織片の産状
fig.119 白色物質のX線回折図
fig.120 19世紀中葉頃の安濃津周辺
fig.121 安濃津の景観復元
fig.122 安濃津・博多出土の墨書土器
fig.123 港を介在した陶器の流れ（想定図）
fig.124 時期別主要遺構
fig.125 調査区周辺地籍図（明治後期頃）
fig.126 中北勢系羽釜の形態
fig.127 中北勢系羽釜に見られる煤の付着状況概念図
fig.128 鍋・羽釜に見られる製作手法痕
fig.129 加工円盤 直径の分布
fig.130 加工円盤 直径と重量の相関
fig.131 陶器井戸枠A1類の変遷

挿入写真目次

巻首図版１　調査区の風景
巻首図版２　遺構
巻首図版３　調査区の土層
pho.1　重機による表土掘削
pho.2　掘る！
pho.3　調査の様子
pho.4　細かく掘る
pho.5　調査区の測量
pho.6　遺構の実測
pho.8　現地説明会の状況
pho.7　工事に追われて
pho.9　珪藻化石
pho.10 花粉化石
pho.11 植物珪酸体・木材
pho.12 陶器椀内面に残った重ね焼き時の高台
pho.13 三雲町・宮ノ腰遺跡検出の井戸（SE17）
pho.14 松阪市・櫛田地区の井戸

表目次

tab.1　遺構一覧表(1)
tab.2　遺構一覧表(2)
tab.3　遺構一覧表(3)
tab.4　遺構一覧表(4)
tab.5　遺構一覧表(5)
tab.6　遺構一覧表(6)
tab.7　遺構一覧表(7)
tab.8　遺構一覧表(8)
tab.9　遺構一覧表(9)
tab.10 中世土器胎土分析値(1)
tab.11 中世土器胎土分析値(2)
tab.12 中世土器胎土分析値(3)
tab.13 中世土器胎土分析値(4)
tab.14 分析試料および分析項目
tab.15 粒度分析結果
tab.16 Folk& Ward(1957)による粒度分析結果の評価
tab.17 SD176出土土器構成（口縁部計測）
tab.18 SD176出土土器構成（破片数）

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

津市の橋南地区にある県立津実業高等学校は、その前身が県立津高等女学校にあたる歴史の古い高校である。三重県下における実業高等学校の先駆けとして成立し、夜間を中心とした勤労学生の修学の場として重要な場である。

この高等学校の中身をより充実させることは、三重県教育委員会としても重視していたところである。そこで、総合学科を設けることで、昼間の修学も可能とする施設を充実させることとなった。しかし、それに伴う学校施設は充分とはいえず、また、体育館の老朽化も激しいため、現在グランドとして使用しているところに総合学科棟および体育館を新設し、現在の体育館部分をグランドとして用いる計画がなされるに至った。

このような経緯のなか、教育委員会内部事業の埋蔵文化財保護についても充分な整備を進めていた県文化芸術課と三重県埋蔵文化財センターに、津実業高等学校敷地内の津市柳山津興字松村1,239番地内における埋蔵文化財の有無に関する事業紹介が平成7年度になされた。

三重県教育委員会文化芸術課および三重県埋蔵文化財センターでは、開発を伴う公共事業に対し、埋蔵文化財の有無を確認するための公共事業照会を毎年行っている。そして、文化財保護行政の徹底のために、遺跡と認識される可能性のある場所については、事前に試掘調査を行い、その結果をもとに保護協議を行っているところである。しかし、今回の場合は、平成8年度に工事着工することが決定している事業であり、公共事業照会がその目的通り機能しない結果となってしまった。

今回の事業に対して、三重県埋蔵文化財センターは、事業計画地内は中世の港として国内外に著名であった安濃津の港町の一角に相当する可能性が高いということと、現状がグランドであり、事前の遺物散布調査（分布調査）を行ってもさほどの成果が得られないという見通しもあって、試掘調査を行う必要がある旨を県教育委員会総務課に対し回答した。教育委員会総務課からは、試掘調査を早期に実施してほしい旨の打診があった。そこで、平成8年3月25日に、技師伊藤裕偉を担当として試掘調査を行った。その結果、事業予定地内全域から中世を中心とした遺物が認められ、約3,900㎡全体が発掘調査の必要な場所として認識されるに至った。

この回答の後、今後の対応を県教育委員会総務課、文化芸術課、および三重県埋蔵文化財センターで行った。総務課は、当該事業が県としての重要事業でもあり、津実業高等学校の新規開校が平成9年度と決定していることからも、早期の対応が必要という旨の意向であった。三重県埋蔵文化財センターは、調査担当職員の慢性的な不足状況と、平成8年度における他部局関係の事業にかかる発掘調査必要面積が過剰状態であることから、早々の対応は難しい旨の説明を常々行っていた。しかし、県の重要事業と

pho.1　重機による表土掘削

pho.2　掘る！

いう趣旨から、平成８年度に対応することとして３者は合意した。

2　調査の経過

a　調査経過概要

この事業は、学校の新規開校が平成９年度であることからも、平成８年度中に建物工事を進める必要があった。そのため、同年６月中には調査対象範囲の北半部約1,500㎡について、工事に着工する必要があった。さらに、調査区全体についても９月までには終了させなければならないという、非常に切迫した調査を強いられることとなった。また、調査の進捗方法により、調査区を３分割して行わなければならないという状況になった。

そのような経緯のもと、試掘調査から一ヶ月も経ない平成８年４月17日から表土掘削を開始し、４月30日には作業員を投入しての調査が開始された。上述の当初引き渡し部分約1,500㎡については、６月20日には引き渡しをすることができた。７月13日には２分割目の調査区を対象として現地説明会を開催した。その後、３分割目の調査に入り、全体の調査が終了したのは、８月19日のことであった。最終的な調査面積は、3,700㎡であった。

その間、津高等女学校時代の基礎の搬出作業、グランドに張られていたネットの取り外し、グランド脇の樹木の移植、さらにグランド照明灯の撤去などなど、現地調査と並行して行われていた。さらに、北半部の調査区が引き渡しされた後は、大型重機が建設工事のために稼動する真横で調査を行うこととなった。このように、非常に切迫したなかでの調査が続いた現場となった。

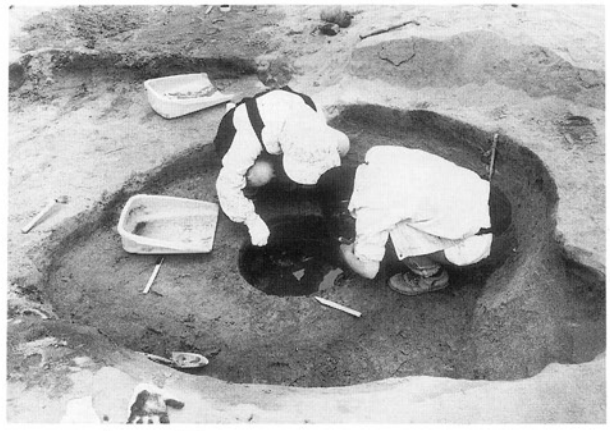
また、調査に関していえば、調査区の遺構基盤が細砂層であり、掘削作業が比較的楽なのに対し、遺構の崩壊には甚だしいものがあった。現地事務所で鳴る電話に向かうのにも、遺構の崩壊を怒れて走ることができず、途中で切れる、という状況が度々生じていた。

このような、現地作業の緊迫した状況とはうらはらに、中世の港町・安濃津の発掘調査ということで市民・マスコミをはじめ、歴史学研究者の非常に注目する発掘調査となった。現地説明会では、350名もの県内外からの参加者を得たのはもとより、通常の作業日でも数人の見学者が訪れるという状況が続いた。その意味で、調査員冥利に尽きる現場であったのも事実であった。

いずれにしても、忙しいの一言に尽きる現場であった。このような現場作業を支えて頂いたのは、地元各位や、（株）鈴木組の各位、さらには津実業高校の各位の御誠意であり、これらの方々の支援なくしては現場作業が成り立たなかったであろう。特に、暑い中、現地作業にあたっていただいた作業員各位にはお礼のことばもない。ここの御芳名を記して感謝の位を表します。

五十嵐一子、大倉みさ子、奥山千恵子、笠井安夫、加藤修一、川北純子、川口和泉、川守巳恵、木村礼子、倉田　保、倉田ふじゑ、古賀一夫、後藤幸子、小林嘉兵衛、小室太郎、小森嘉代子、小森秀子、坂森正一、坂森節子、里路あやの、杉山　奏、鈴木一子、鈴木久子、関塚住子、関塚秀之、田中ミツエ、

pho.3　調査の様子



pho.4　細かく掘る

丹野貞夫、林　定、長谷川ハルエ、糠　光雄、浜崎純子、土方一夫、藤原義久、船木文雄、堀美代子、前川時子、前坂　明、松浦ノブ子、松田きみ、松原忠秋、松吉道幸、三崎澄人、山際喜代子、山崎　衛、倭　綾子、山村美恵子、山本和夫、山本力夫、脇田英治、（50音順、敬称略）

b　調査日誌(抄)

4月17～24日　重機による表土掘削
4月23日　道具類搬入
4月24日　地区設定
4月30日　掘削作業開始
5月　7日　g3付近で区画溝を確認
5月　9日　須恵器片出土。ベルコン故障。
5月13日　津実業高校の生徒見学
5月14日　SE14、SZ15検出。SZ15からは土器多量。県教育次長来訪。
5月15日　SE21検出。ベルコン故障続出。
5月16日　SZ21から銀環出土。
5月17日　SE53の木枠を検出。
5月20日　SE21bを検出。SE53内木枠内に曲物を確認。ベルコンまたも故障！
5月21日　SF77掘削・写真。
5月22日　SE78に方形の木枠、SE79に円形木枠を確認。三重大学目崎茂和先生来訪。
5月23日　ピットを中心とした掘削を開始。砂質のため掘りやすく、検出が掘削に追いつかない。SD76の延長部を確認。三重タイムズに調査の記事が掲載され、新聞社各社が取材。
5月24日　中京テレビの取材。
5月27日　あすなろ学園の生徒・先生が見学。
5月28日　第2区の重機表土掘削開始。
5月29日　第1区の清掃、実測基準点設置。
6月3～6日　第1区の実測（前川嘉宏、越賀弘幸、伊藤、船越、高田、石淵）。
6月　6日　三重大学藤田達夫先生、皇學館大学岡野友彦先生および三重大学・皇學館大学学生の見学。三重大学目崎先生、大川学園大川吉崇氏および津市職員の見学。SD23の土層図作成。
6月10日　SE78･79の断ち割り。
6月11日　第2区の調査開始。黒褐色砂上面にて、近世遺構面を検出。
6月12日　SE152検出。土器枠を確認。
6月13日　SE160を検出。やはり土器枠。
6月17日　中世遺構面の検出開始。銭貨6枚出土。うち1枚は五銖銭。
6月19日　中世遺構面の検出続行。銭貨今日も8枚出土。2個体目の犬形土製品出土。
6月20日　近所の保育園児30名が見学。
6月25日　k～lの13～14ラインに人骨とおぼしきもの多く確認。
6月27日　SD176から、陶器類・土師器類が多量に投棄された状態で出土。
6月28日　SD176の写真撮影。
7月　1日　SK192から二枚貝多く出土。
7月　2日　SD176の埋土上に掘られたピットを実測後、下部を調査。土器類の出土はあいかわらず多い。

pho.5　調査区の測量

pho.6　遺構の実測

7月 4 日　SD176の写真。SK263を検出。常滑の大甕が完形で据わっている模様。中が楽しみ。

7月10日　SD214とSK174は一連のものと判明。北端のSK174部分には土器類多い。SK241内から人骨片や五輪塔が出土。

7月11日　現地説明会開催の資料提供を津市政記者クラブにて行う。区画溝SD244·245の調査。

7月12日　完形の常滑大甕内には、何も入っていなかった。無念！SK262は埋土中に焼土粒を含み、人為的な埋め戻しがなされていることが判明。

7月13日　現地説明会を開催。遺構説明を高田、遺物説明を伊藤が行う。約350名の参加を得て盛況であった。三重ＴＶ・ＮＨＫが取材。小西瑞恵先生来訪。

7月15日　SK274付近で五輪塔を2点ほど確認。第2区の掘削作業終了。

7月16日　全景写真、実測基準点の設置。SD76の実測と遺物採り上げ。

7月17～24日　遺構実測（木野本和之・前川明男・伊藤・船越・高田・石淵）。

7月19日　新潟大学矢田俊文先生来訪。

7月23日　名古屋大学三木清一郎先生、椙山女学園加藤益幹先生、四日市大学短期大学部播磨良紀先生、三重大学藤田先生ほか、中世史研究会諸氏来訪。

7月24日　第3区の重機表土掘削開始。

7月26日　第3区の調査開始。

7月29日　遺構検出。ピット少なく、大振りの遺構が多い。

8月 1 日　国立歴史民俗博物館小島道裕先生来訪。SE292に木枠を確認。

8月2日　SE292の写真。夕方、津のルーツを探る会主催のシンポジウムに参加（伊藤）。

8月 5 日　SD76の延長を確認。土器類多い。大土坑SK305・306完掘。

8月6～8日　北西部の実測にかかる（前川嘉宏・伊藤裕之・越賀）。

8月 8 日　掘削作業がほぼ終了。

8月12日　清掃・後かたづけ。本日にて掘削作業は終了した。実測の続行（吉水康夫・前川嘉宏・田中久生）。

8月13日　遺構実測。井戸SE289·315·343を検出。

8月14日　遺構実測。SD76の遺物採り上げ完了。

8月19日　SE152ほか、井戸の断ち割り。調査作業が全て終了。ベルコンの返却。道具搬出。調査区埋め戻しの開始。

8月26日　調査区の引き渡し。

c　文化財保護法等にかかる手続きなど

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成8年4月15日付け教総第768号（県知事通知）

・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成8年3月22日付け教文第689号（県教育長通知）

pho.7　工事に追われて

pho.8　現地説明会の状況

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成8年10月1日付け教文第18-63号(県教育長通知)

3　調査の方法

a　掘削について

調査にあたっては、表土層約50㎝と、近世の包含層に相当する約20～30㎝については、重機による掘削を行った。それ以外については、人力掘削による。ただし、井戸のうち、断ち割りを行ったものについては、重機による掘削も伴った。

b　小地区設定について

今回の調査では、調査区内を4ｍ四方の升目で切ることによって小地区を設定した。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は、国土座標軸とは無関係である。

c　遺構図面について

調査の前に、座標・標高点を調査区に移動している。これについては、（株）イビソクとの契約を行い、実行した。調査区の平面図は任意の測点を設定し、1/20で作成している。また、土坑・溝などの出土遺物を伴うような遺構のうち一括性の高いものや、井戸のうち、木組などが残っているものについては、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

4　遺跡の名称について

今回の発掘調査は、当初「安濃津柳山遺跡」として開始した。しかし、発掘調査を進め、元来の安濃津の範囲を考えていくなかで、遺跡は南北約3.8㎞、東西約0.5㎞の広大な範囲として認識する必要のあることが判明した。また、中世の安濃津に限っても、船着場、町屋、寺院などの多様な施設が存在する。さらに、中世都市・安濃津以前である古墳時代などの遺構も確認できた。これら各個別遺跡および時期を越えた遺跡群の複合体として安濃津の遺跡を把握してゆけば、安濃津発生の問題や大きく展開する中世の実態もより具体的に理解する道が開けるものと考えられる。したがって、これらの総称として「安濃津遺跡群」と呼称することとする。遺跡の範囲については、第Ⅵ章１で触れる。

Ⅱ　位置と環境～問題の所在～

1　緒言～伊勢と港・港町～

伊勢湾西岸部の伊勢・志摩地域は、中世の港が多数認められる地域である。文献史料によく見られる港を北から列挙するだけでも、桑名（桑名市）・四日市庭（四日市）・楠（楠町）・長太・白子（以上、鈴鹿市）・別保（河芸町）・白塚・安濃津（以上、津市）・矢野（香良洲町）・細汲（細頸、松阪市）・大淀（明和町・伊勢市）・有滝・大湊（以上、伊勢市）・泊（鳥羽市）・甲賀（阿児町）といったような港がある。伊勢・志摩地域には、稲本紀昭氏によれば、50箇所を越える港が存在していたという[1]。このことは、伊勢の中世史を語るうえで、港あるいはそれに伴って形成された港町の位置づけが極めて重要であることを示すものに他ならない。

しかし、これらの港・港町には、文献史料の不足という大きな制約がある。そのこともあってか、これまでに具体的な検討がなされたものは少ない。

一方、港町に関連した考古学的な調査も、ほとんど進んでいない。伊勢湾沿岸部、とりわけ伊勢・志摩地域におけるかつての港町は、市街化の進行による遺跡確認の難渋によって、埋蔵文化財包蔵地としても認識されにくいのが実態である。

このような現状とはうらはらに、海運、とくに東国での物資流通が検討される場合には、必ずといってよいほど伊勢の港が取り沙汰されている[2]。伊勢の港町の評価にあたって、当地における港・港町そのものの研究進展が伴わない場合、その評価のみが一人歩きしてしまう危険性がある。

このような状況下で今必要なのは、とりもなおさず伊勢・志摩地域における港・港町の実態究明である。そして、この地域の港・港町の持つ伊勢湾沿岸部における地域史的意義の追求、さらには広く太平洋沿岸部における海運と伊勢・志摩地域の港・港町との関係などについて、この地域の港・港町からの視点で眺める必要があるといえる。そのためには、考古学的調査の蓄積による検討が極めて重要な意味を持つといえる。

さて、上記の港・港町のなかでも、特筆される重要なものが、桑名・安濃津・大湊の三者であることは、まず異論のないところであろう。このうち、桑名と大湊については諸先学により文献史料を中心とした研究の積み重ねがいくつかあるし[3]、伊勢湾地域における海運の総論的な研究についても稲本紀昭氏によってなされている[4]。しかし、今回の発掘調査対象となった安濃津については、目崎茂和氏の地理学的研究[5]や安濃津関連の史料を収集した稲本紀昭氏の研究以外は、一部郷土史研究家による検討がある程度であり、未だまとまった研究はない。

安濃津は、15世紀初頭段階で、伊勢における「この國のうちの一都會」[7]と認識されている。つまり安濃津は、伊勢の港・港町を語るうえで重要というばかりでなく、伊勢の地域史を考察していく上でも非常に重要な位置にあると考えられるのである。

ここではまず、安濃津に関する文献史料も含め、安濃津をとりまく歴史的環境を見る。これらから、安濃津という場がどのような背景を有していたのかを確認していきたい。

2　安濃津をとりまく歴史的環境

安濃川を主要河川とした平野の広がるこの地域は、かつての安濃郡に相当する。ここは、弥生時代には伊勢平野における最大規模の拠点集落・納所遺跡[8]（津市納所町）を育み、古来より伊勢における重要な地域であったことを物語る。

古墳時代中期前半には、2つの造出を持つ全長81mの巨大方墳・明合古墳[9]（安濃町）が築かれる。また、ほぼ同じ時期と考えられる池の谷古墳は、安濃津からも眺望できる位置に造られた全長約90mの前方後円墳[10]である。大型古墳の少ない伊勢にあって池の谷古墳の規模は突出しており、安濃津が形成される場を見おろす位置にあるのも、極めて重要な意味があろう。

古墳時代前期から後期にかけて、六大A遺跡[11]（津市大里窪田町）が形成されている。ここからは、組紐文や火炎状透かしを持つような、出現間もない須恵器や韓式系土器のほか、湧水点祭祀を示す遺構や

それに伴う端正な木製品類が数多く確認されている。六大A遺跡の確認によって、伝来間もない大陸文化を伊勢でいち早く受け入れている地域として、この地域が重視されるに至った。

さて、六大A遺跡が形成されている時期、5世紀後半には、志摩の海岸部におじょか古墳[12]（阿児町）が造成される。北部九州の石室構造を受容したと考えられるこの古墳は、明らかに海上交通によってもたらされたものと考えられる。

おじょか古墳の存在は、古墳時代における海上交通が、想像以上に活発であったことを雄弁に物語る記念物である。そして、このことを念頭におくと、六大A遺跡に見られる大陸文化受容の背景には、近畿地方からの陸路による間接的伝達以上に、海上交通による九州あるいは大陸からの直接的伝達を考慮するべきかと思われる。そして、六大A遺跡あるいはおじょか古墳の存在は、日本列島では古来より海運が盛んで、大きく見れば東アジアという海域に形成された文化域の一地域として把握する必要にあることを如実に物語っている。この視点に立てば、日本列島に見られる“先進的”とされている文化を、全て近畿地方を経由しなければその東方へと伝播することができないと考える必要は全くない。そして、安濃津という港の原形は、少なくとも古墳時代にまで遡ることは充分に考えられるのである。

奈良・平安時代の当地は、考古学的にはあまり明確でない。ただし、六大A遺跡や六大B遺跡[13]（津市大里窪田町）には、平安時代を中心とした大規模な集落があり、獣足硯や石帯なども確認されていることから、大里窪田町周辺には官衙的な建物群が立ち並んでいたものと考えられる。

中世では、安濃郡内にも各地に荘園が形成されている。とくに多いのが伊勢神宮の御園・御厨で、安濃津自身も御厨であった。安濃津の北部には近衛家領から禁裏御料所となった栗真庄[14]がある。六大A・B遺跡を含む一帯は窪田庄であった。

中世前期における遺跡のなかでとくに注目されるのが川北城跡[15]（津市川北町）である。ここからは、東西約70m、南北約50mの堀で区画された鎌倉時代の屋敷地が確認されている。また、この屋敷地の周囲にも大小の屋敷地が確認できる。伊勢において、中世前期の大規模な屋敷地が明確に確認されているのはこの川北城跡のみである。地頭などを含めた有力な在地領主層の屋敷と考えられ、中世後期後半に爆発的に増加する方形居館の原点を考えるうえで、全国的にも重要な遺跡と考えられる。

中世後期の安濃郡は、国人領主・長野工藤氏との関わりが強い。北長野（美里村）に拠点を持つこの一族は、安濃郡内に大規模な支城をちりばめて支配を行っており、南伊勢を中心とした北畠氏と再三にわたって対峙し、ある時は北畠氏を滅亡直前にまで追い込んでいる。一方、北畠氏も安濃郡への浸食を漸次行い、16世紀後半には安濃津の南、藤方の地に一族を配置している。長野氏は、16世紀後半には北畠氏の支配下に入ったようであるが、さらに織田氏の伊勢侵攻に伴い、織田氏に摂取されている。長野氏と安濃津との関連については、後述する。

近世には、織田氏・富田氏の支配により、当地に安濃津城（津城）が築かれ、17世紀初頭に藤堂氏が入部して幕藩体制下に入る。藤堂氏は伊勢における居城として津城を整備するが、幕藩体制下に日本各地で「名城」を築いた藤堂高虎の城としては津城は単純で、城そのものは織田氏段階の増築の域を出そうにない。しかし、この津城築城に伴って実施されたであろう城下町形成が、港湾都市・安濃津の終焉を決定付けることになる。しかし、津は城下町としてその姿を変え、なお伊勢における中心的都市として存続する。

このように通覧してくると、近世の開始時期まで港湾都市・安濃津が果たした役割の重要性を再度認識することができる。また、城下町としてその姿を一変した津（安濃津）は、大幅な内部的改変を伴っていることが想像に難くないが、原則的にはそれまでの安濃津の繁栄を引き継いでいる、と見ることができる。

3　中世を中心とした安濃津の状況

安濃津にかかる文献史料については、先述のように稲本紀昭氏がまとめられている。稲本氏の業績を中心に、まずは安濃津とそれに関わった領主権力を見ておく。

a　中世の安濃津と領主権力

fig. 1　伊勢湾西岸部の中世主要港と安濃津周辺の遺跡

安濃津は、永長元（1096）年の段階で、既にに多くの「民戸」が存在していたことが知れる[34]。また、この地には神宮領安濃津御厨があり、伊勢神宮の支配地であったことも確認することができる。「無指寄作田畠」であった安濃津神人等は、「往反諸国、成交易之計」していたのであり[117]、神宮によってその行動が保障されていた。

安濃津と伊勢神宮との関わりは、文明7（1475）年までの史料で確認することができる。史料の少ない安濃津の状況を考慮すれば、この関係は、明応7（1498）年の大地震による壊滅時以後も継続していたと推測する。

さて、安濃津が関わった領主権力は伊勢神宮だけではない。応永10（1403）年には、足利義満が伊勢参宮に際して安濃津で逗留しており、その際、安濃津は「守護管領」で、神宮の訴えにより、神宮に返還された旨が記されている[38]。しかし、応永25（1418）年の『耕雲紀行』には「その夜はあの、津につきぬ。（中略）当国の守護土岐の世やすとかや、御もうけなといとなむ。」とあることや[39]、『満済准后日記』応永33（1426）年9月27日条に「於安濃津御一献等用意為云々、守護初歟」とあること[40]、さらに文正元（1466）年に参宮路の足利義政を「守護一色京兆」が安濃津で迎えていること[41]、などから、神宮返還後も、安濃津に関して土岐世保氏や一色氏などの室町期伊勢守護がかなり深く関与していたと考えられる。

室町期伊勢守護と安濃津との関連を想定できるのは、上記の史料程度である。しかし、少ない史料からも、安濃津に対して守護が何らかの関与をしていたことは充分推測された。全国的な趨勢からみて、当時の守護が、当該地域の重要な港町近隣に守護所を配置していたことが知られる。安濃津についても、上述のように守護による将軍接待の場として用いられているという事実とを関連させると、安濃津の近隣に当時の守護所が所在していた可能性も考慮してよいのではないかと考えられる。

室町期守護の在地支配力が実質的に低下する15世紀後半以降になると、当地の国人領主・長野氏が安濃津に関して大きな関わりを有していたようだ。

＜史料1＞

太神宮領伊勢国安濃津代官職事、早任奉書之旨、如元可被避渡祭主三位清忠代之由、被仰出候也、仍執達如件

長禄二(1458)

八月廿三日　　玄良　判

之親　判

工藤満寿丸殿(長野満高)[42]

神宮領「安濃津」とあることは、御厨という狭い範疇のみならず、安濃津そのものが神宮領と認識されていたことを示すようで興味深い。また、国人領主・長野氏によってその代官職が横領される事態が15世紀中葉に起こっていたことから、長野氏が安濃津へと触手を伸ばしていたことがわかる。つまり安濃津では、これ以前にも長野氏の多少の関与こそあれ、相対的な権限の大小はともかくとして神宮による支配がこの時期まで継続していたと見ることができる。なお、史料1との関連史料は、神宮側にもいくつか残されており、先述の稲本氏の論考中に詳しい。

さらに、長野氏との関係では、次の興味深い史料がある。

＜史料2＞

勢州安濃津観音寺之事

右恵日山観音寺者、津内為開発領主代々被致御祈祷精誠之間、所令諸役停止也、當方被官人等不可有其煩云云、雖然寺家若有猥子細者、可致敗者也、仍之状如件、

康正元年(1455)十一月三日　　教高[43]

教高とは、長野教高と考えられる[24]。18世紀に編纂された『三国地誌』に所収されているこの文書は、一部意味不明な部分があることと、事書の部分が「‥‥之事」で終わる点、さらに「開発領主」等の文言から、本来の事実を表しているのかどうかについては疑問もある。しかし、現在の津市大門に所在する恵日山観音寺は、寺伝では津市の津興地区から明応の大地震後に移転したとしていること[45]や、『草蔭冊子』に「明応の震災に波濤を避け今の地に移設せしと云ふ、因て一御厨観音の称あり、津興の耕地に観音堂の字あり旧址ならんか」とあること[46]から、観音寺と安濃津とは深く関連していたことは事実と

見てよいと考えられる。史料２が仮に偽文書であるとしても、安濃津に対して何らかの権益を有していた、あるいは有していたとすることを証明したいがためのもの、と考えれば、正文ではないからとはいえ一蹴できず、それ相応の意義を見出すことが可能かと考える。この前提に立てば、当該時期の安濃津が、実質的に長野氏の影響が増していたこと、さらに、長野氏が影響を強める以前に、神宮以外に観音寺という小規模な領主が関与していたことも考えることができる。

なお、ここで触れたこと以外にも、文明年間における海上警固役との関係での安濃津の関わりが見られる。この点については飯田良一氏の論考[27]があるため、ここでの検討は省略する。

以上のように中世の安濃津に関しては、伊勢神宮・室町期伊勢守護・国人領主長野氏・観音寺、といった大小の領主権力との関わりを想定することができる。これらの権力が、安濃津あるいはその住人等に対し、具体的にどのような関わりをもっていたのかは神宮以外は明確でない。しかし、このような諸権力が安濃津において複雑に絡み合うこと自体、当地の重要性を意味するものに他ならないのである。

b　近世初頭の安濃津

明応7(1498)年に勃発した大地震により、安濃津は壊滅的な打撃を受け、衰退したとされる。この点については、後述するが、稲本氏の研究により、明応の震災後にも安濃津はいくらかの復興がなされていることが判明している。安濃津にかかる地震災害は、すでに永長元（1096）年にも発生しているのであり、その後、復興していることはこれまでに見てきたとおりである。つまり、自然災害による被害は、港・港町の危機であることには違いないのであるが、それが直接港・港町の消滅につながるとは断定できないことは注意を要する。

明応の震災以降、安濃津の実態がどのようなものかはわからない。しかし、織豊期から江戸期にかけ、当地には安濃津城（津城）が築かれる。ここで安濃津は大きな転換期を迎えている。この時期の安濃津を窺う史料は極めて少ないが、まずはつぎの史料に注目しよう。

＜史料３＞

一　諸御公事十三ヶ年免許之事

一　召遣候人夫免許之上者、為始給人之陣人何方より人夫之儀申候共、許容有間敷之事

一　雖為誰々之家来、諸事地下なミ可申付事

元亀(1571)弐年二月吉日　　津三郷　　(織田信包)(花押)

同岩田[28]

書式が少々特異な点が若干気がかりであり、写しである点も考慮せねばならないが、内容的には問題ない。大枠として、安濃津城に入部していた織田信包がいくつかの特権を与えたものと見てよかろう。この史料に見える、「津三郷・同岩田」の表記から、この地が惣郷的な結合をなしていたであろうことが、大湊一帯に見られた「浜七郷」、あるいは、内宮付近の「宇治六郷」などの表記との比較において推測が可能である。

津三郷が、具体的にどの場所なのかはわからないが、岩田と併記されていることと、「津」三郷であることから想像すれば、かつての安濃津の範囲を含んでいると考えてよかろう。しかし、「三郷」という惣郷として表記されていることは、後章で述べる「あのつ八幡」の独立的分離と相俟って、この段階における中世都市・安濃津の解体開始を強く示唆する。

織田氏の後は、富田氏を経て、17世紀初頭には藤堂氏の入部を迎える。この段階では、もはや〝安濃津〟の文字が記された史料は管見に及ばない。

＜史料４＞

以上

津町中諸公事令免許候、但傳馬之儀ハ可相勤者也

六月十九日　　知信(富田知信)（花押）

平井清左衛門との

太田織部との[29]

＜史料５＞

以上

津町中諸役之儀申上候処、被成御許候、御折紙出申候間、以来迄相違不可在之候、仍為後日如件

太田織部

六月十九日　　（花押）

平井清左衛門

（花押）

錦屋

又五郎殿
年寄中[30]

史料４・５は、富田知信が安濃津城在城中の文禄・慶長年間(1590年代後半) 頃のものと考えられる。「津町」の表記から、安濃津周辺の状況であると考えてよかろう。内容的には、史料３とも関連し、津町にかけられた諸役が伝馬を除いて免許されている。この段階で、津町の奉行的な存在として平井・太田の２名が存在し、また、津町の有力者と考えられる錦屋又五郎や年寄中が存在することも分かり、ある程度の自治的な組織がこの段階にも継続していることが推測される。しかし、両史料の表記方法から、富田氏のかなり高圧的な態度が読み取れ、自治組織があるにしても、その権限はかなり弱いものであったと推察される。

安濃津城の築城、その後の藤堂氏による津城下町の整備により、安濃津の解体は決定的なものとなる。具体的には、後述する岩田川の流路変更によって、中世港湾都市・安濃津は終焉し、近世城下町・津へと変貌するのである。つまり、安濃津の終焉とは、自然災害ではなく、政治的な意味合いを多分に含んだ人為的なものと想定されるのである。そして、数少ない上記の史料から、近世城下町・津への移行は富田氏段階にはじまると推察されるのである。

4　安濃津周辺の遺跡について

今回発掘調査を行った安濃津遺跡群は、今回の調査に先立つ試掘調査によって確認された遺跡である。この周辺で遺跡として認識されていたのは、津実業高等学校の南東にあたる育生小学校校庭遺跡のみである。この遺跡は、古墳時代の遺跡として認識されていたものであったため、中世の遺跡としては今回はじめて確認されたというかたちになる。

しかし、この付近で中世安濃津を示すような文化財がこれまで全く見られなかったわけではない。大正13 (1922) 年には、津実業高等学校の南に隣接する市道（当時の柳山津興字松村1,266番地）の下水道工事中に、中世の埋蔵蓄銭が発見されている[31]。また、昭和６(1931) 年には、津高等女学校の校庭から、鎌倉時代を中心とした遺物が出土している[32]。津高等女学校とは津実業高校の前身であり、その校庭とはまさに今回の発掘調査地に相当するのである。

これ以外にもいくつかの遺跡と考えられる場所がある（fig.２)。今回の調査区の北方約250ｍには、西来寺跡とされる場所があり、現在ではそれを示す碑が建てられている。西来寺跡の西方約50mの、現在の真宗教会三重保育院の地も、地元では「ドウジョウ」があった場所とされている。さらに、調査区の南方約750ｍの場所には、かつての字で「浄安寺」と言われた場所があり[33]、中世まで遡る可能性の高いものである。

これらの中世以前と考えられる遺跡を、安濃津の空間内部としてどのように位置付けるのかが今後の課題である。

最後に、中世の安濃津との関連で注意を要する遺跡として、２つの遺跡を採り上げておく。

ひとつは、津市雲出長常町の宮間戸遺跡である。昭和57 (1983) 年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査され、鎌倉時代を中心とした集落跡が確認されている[34]。標高約1.5ｍ程度で、砂堆上ではないものの安濃津遺跡群の立地に類似し、安濃津とは、後述する藤潟をはさんでちょうど反対側となる。安濃津と宮間戸遺跡とは、近接した地域における都市と村落との対比を行ううえで、重要な遺跡である。

もうひとつは、一志郡三雲町星合の前田町屋遺跡である。雲出川河口右岸に位置し、標高約２ｍの地で、雲出川が形成した自然堤防上に相当する。ここから確認された中世遺跡は、安濃津遺跡群と同様、15世紀後半で終焉している[35]。安濃津を襲った大地震の被害が津波であると考えるならば、立地的にも類似するこの遺跡が終焉する原因も、その災害に関連している可能性がある。また、安濃津における土器の組成を考えていくうえでも、重要な対比資料となる遺跡である。

5　小結

以上、安濃津をとりまく環境について述べてきた。伊勢における港町のなかでも、安濃津の持つ重要性が際立っていることは認識されろう。そして、安濃津をとりまく歴史を検討するうえでは、日本列島に

おける位置付け以上に、東アジア的視点による検討が必要であることが注意される。

このような環境を考慮したうえで、次章以下で調査成果を検討していきたい。

註

(1) 稲本紀昭「伊勢・志摩の交通と交易」(『伊勢と熊野の海』小学館　1992)

(2) 綿貫友子「「武蔵国品河湊船帳」をめぐって－中世関東における隔地間取引の一側面－」(『史艸』第30号　1989)では、東国の物資流通における伊勢・志摩地域の重要性を指摘している。また、吉岡康暢『中世須恵器の研究』(吉川弘文館　1994)第四章註245（849ｐ）では、神宮神人が関東・東北方面の海運に従事していた可能性を示唆している。これらの各氏から導き出された結論は、それ自体は極めて重要であることは言うまでもないが、あくまでも伊勢・志摩という“起点”の考察ではなく、関東あるいは東北という“到達点”からの考察である。綿貫・吉岡両氏らのような研究が進展するためにも、伊勢・志摩という“起点”の考察が必要なのである。

(3) 桑名を扱った論文としては、網野善彦「中世の桑名について」(『名古屋大学文学部研究論集』25　1978)が、大湊に関しては、小島広次「伊勢大湊と織田政権」(『日本歴史』372号)、永原慶二「伊勢・紀伊の海賊商人と戦国大名」(『知多半島の歴史と現在』四日本福祉大学知多半島総合研究所　1992)などがある。

(4) 稲本氏註(1)文献

(5) 目崎茂和「「安濃津港」検証」(『津のほん』第29号　1989)

(6) 稲本紀昭『日本三津に関する史料の研究』(津市　1989)

(7) 『耕雲紀行』(『大神宮叢書神宮参拝記大成』所収神宮司庁　1976)

(8) 伊藤久嗣ほか『納所遺跡』(三重県教育委員会　1980)

(9) 三重大学歴史研究会原始古代史部会「三重県安芸郡明合古墳について」(『ふびと』23　1965)

(10) 浅生悦生「池の谷古墳」(『津市の文化財』津市教育委員会　1989)

(11) 穂積裕昌ほか「六大Ａ遺跡」(『一般国道２３号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』　三重県埋蔵文化財センター　1995)

(12) 小玉道明ほか『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』(鳥羽市教育委員会　1968)

(13) 村木一弥ほか「六大Ｂ遺跡」(『一般国道２３号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター　1992)ほか

(14) 稲本紀昭「栗真庄について」(『三重大学教育学部研究紀要』第３３巻人文科学　1982)

(15) 萱室康光「川北遺跡・川北城址調査概要」(『三重の古文化』52　1984)および萱室康光『川北城跡発掘調査概報』第１次調査（津市教育委員会　1981)

(16) 『中右記』永長元年12月9日条（稲本氏註（６）文献)

(17) 建久７（1196)年4月15日付、太神宮神主帖『神宮雑書』

(18) 『吉田家日次記』応永10年10月25日条（稲本氏註（６）文献)

(19) 『耕雲紀行』応永25年9月22日条（『大神宮叢書神宮参拝記大成』所収神宮司庁　1976)

(20) 『満済准后日記』(『続群書類従』補遺１)

(21) 『斎藤親基日記』(『群書類従』第23輯)

(22) 「幕府神宮奉行人連署奉書」(『成簀堂古文書』135)

(23) 『三国地誌』(上野市古文献刊行会復刻　1987)

(24) 稲本紀昭「伊勢国国人長野氏関係史料」上（『三重大学教育学部研究紀要』第35巻　1984)

(25) 『大日本國誌』伊勢國第３巻所収「恵日山観音寺」の項（ゆまに書房　1989年復刻)

(26) 『三重県の地名』p370「観音寺」の項（平凡社　1983)

(27) 飯田良一「文明年間における伊勢湾の警固と廻船」(『三重県史研究』第４号　1988)

(28) 「伊藤純太郎氏所蔵文書」(稲本氏註（６）文献および『津市史』第１巻　p31写真より)

(29) 『津市史』第１巻(1959)　p39　同じページの写真をもとに一部改変

(30) 『津市史』第１巻(1959)　p39同じページの写真をもとに一部改変

(31) 伊藤裕偉「三重県下の埋蔵蓄銭－中世を中心として－」(『摂河泉文化資料』第44号　1995)

(32) 鈴木敏雄「津市橋南地方の考古学」一・二（『安濃津郷土史会誌』第2･3号　1931･1932)

(33) 鈴木敏雄「三重縣津市考古誌考　藤水地区之部」(同氏著『三重県考古誌考』第24巻　1944年頃)

(34) 中村信裕「宮間戸遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1983)

(35) 平成８年度三重県埋蔵文化財センター調査

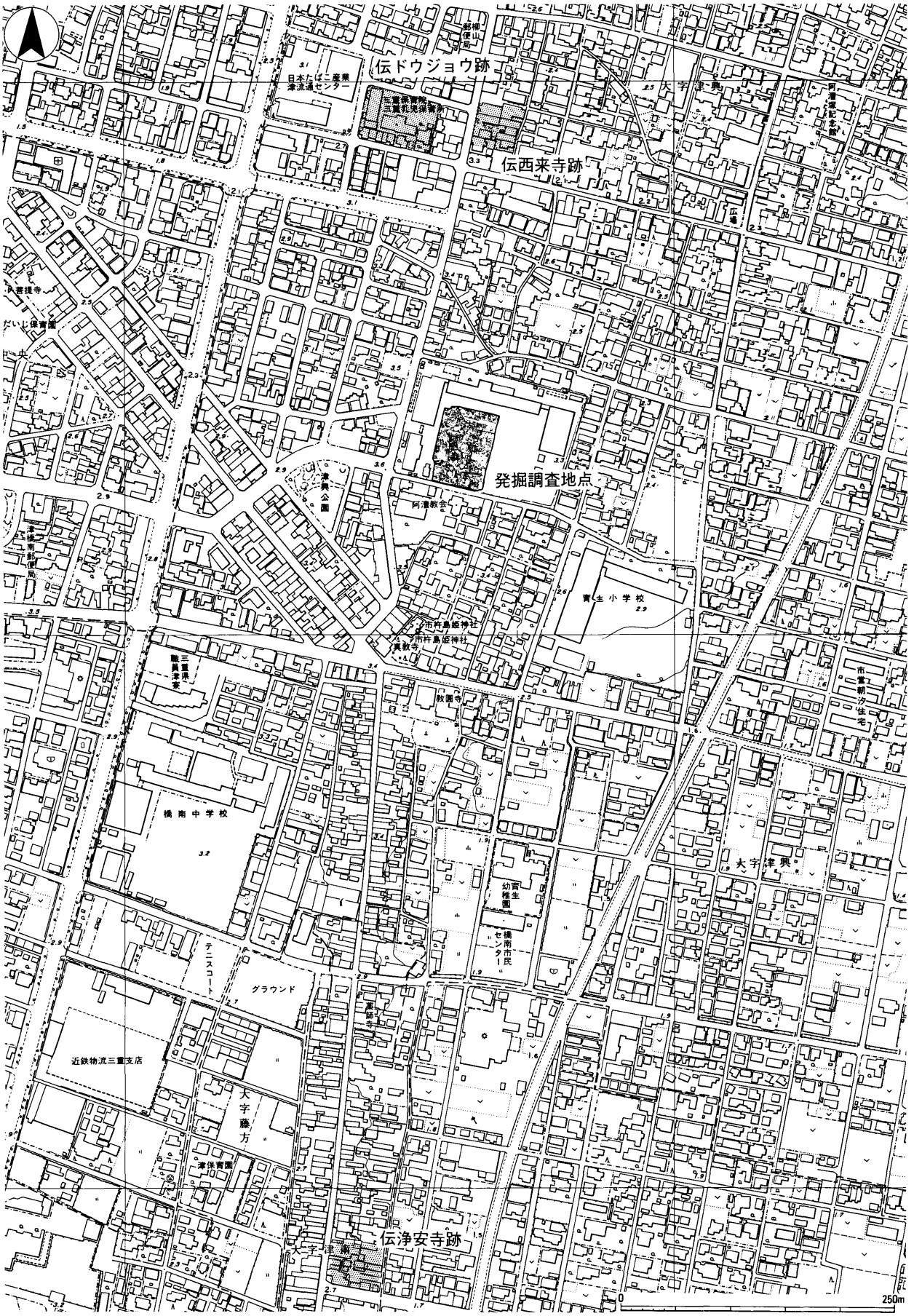


fig.2　調査区周辺現況図（1:5,000）

Ⅲ　調査の成果－層位と遺構－

1　調査区の地形と基本層位

a　地形

調査区は、津市街地の南東にあたり、海岸まで約500ｍの位置にある。調査前の標高は約2.7ｍで、伊勢湾沿岸流が形成した砂堆上にあたる。この砂堆は、海岸線に並行し、南北方向に３～４条ほどが形成されており、今回の調査地は海岸から２条目の、最も幅の広い砂堆にあたる。

この砂堆上には、今では住宅地が建ち並び、また埋め立ても進行している。そのため、砂堆の起伏は微地形として確認できるにとどまる。

b　層位

調査区内の遺構は、黄色系細砂層を基盤としている。この層は原則的には無遺物層と考えられ、砂堆形成時の堆積土と見なされる。検出面上面での砂質は、北西隅ではやや粗く、南東部ほど細かい。しかし、井戸断ち割り時に確認できたこの層は、細かな細分が可能な堆積状態を示しており、検出面での細粗がどの程度の意味があるのかは分からない。

黄色系細砂層の検出高は、区画溝ＳＤ170以東、ＳＤ254以北では深く、標高約1.4ｍほどである。ＳＤ254以南では標高約2.0ｍと高い。また、調査区東壁付近には段差が認められ、高い東側でも同じく標高約２.０ｍほどとなる。

黄色系細砂層の上部には黒褐色系砂・褐色系砂層が認められる。黄色系細砂層の検出高が低い部分を中心に堆積している。これらは中世の遺物包含層である。調査区中央部が最も深くなり、最大約0.6ｍほどの厚さがある。

褐色系砂層については、場所による厚みはさまざまながら、中世遺構面全体を覆っている。明応年間の震災に伴う土砂堆積があるとすれば、この層ではないかと思われる。

黒褐色系砂・褐色系砂の上部に、暗褐色系砂質土の堆積が認められる。調査区全域で約0.2ｍ程度の比較的均等な堆積状況を呈している。この層の上面が近世および近代の遺構面となっている。

暗褐色系砂質土の上部には、近代～現代にかけてのグランド整地土が約0.3ｍほどある。厳密には、近代整地土の上にさらに現代の整地土があり、近代整地土には、暗渠排水溝などが切り込まれていた。

今回の調査地における層序の概略は以上のとおりである。このことを総合すると、中世遺構面は標高約1.6～2.0ｍに、近世遺構面は標高約2.5ｍほどに認められる、とすることができる。中世と近世との間にかなりの堆積土が認められる、ということができる。

2　検出した遺構

今回の調査で確認された遺構は、大きくは古墳時代と鎌倉～戦国時代初期（以下、この時期を「中世」とする）、および近世～近代の３時期に区分される。古墳時代の遺構は１箇所のみで、中世遺構面と同一面で確認されたが、中世以前と近世～近代では層位的には明らかに異なっている。しかし、調査期間の制約により、近世以降の遺構面をそれとして確認したのはｈライン以南のみであり、それ以北は中世遺構面と同じ高さで確認せざるを得なかった。

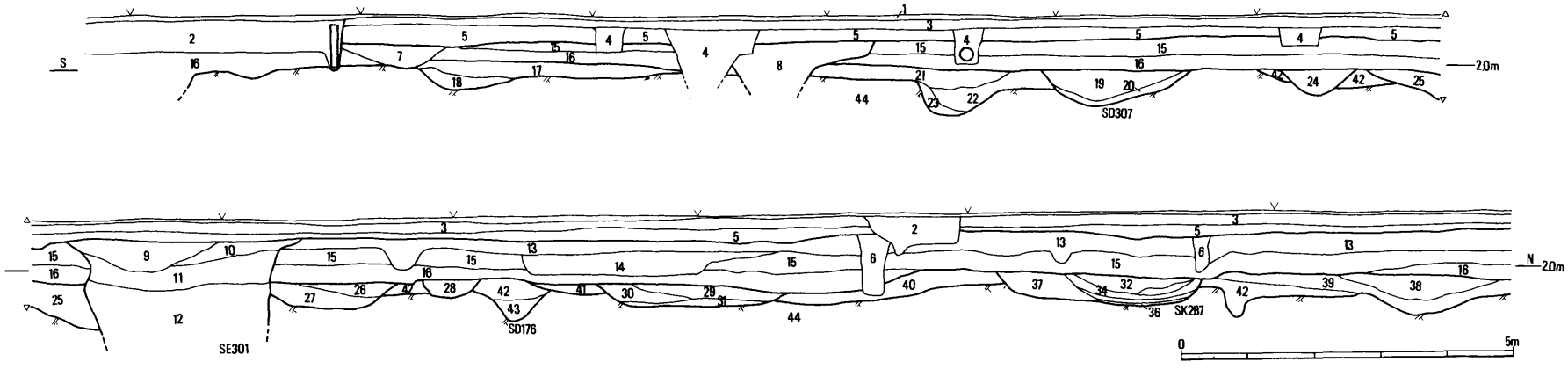
ここでは主な遺構についてのみ記述する。検出遺構の概略については遺構一覧表（tab.１～９）に示した。

a　古墳時代の遺構

古墳時代は、土師器・須恵器のほか、埴輪・銀環などが出土しており、調査区を含めた周辺に古墳が存在していた可能性が高い。しかし、遺構として確認できたのは、溝１条のみである。

溝ＳＤ345　調査区南部のq10グリットにて検出した溝である。深さ約0.2ｍ、幅約0.6ｍで、東西方向に約1.5ｍほどを確認したが、周囲を近代以降の攪乱土坑で破壊されているため、性格は不明である。

fig.3　調査区西壁南部　土層断面図（1:100）



1．表土（グランド整地土・砂）
2．現代の砂場
3．旧表土（グランド整地土）
4．近代化の攪乱（建物基礎、排水管など）
5．淡赤褐色土（グランド整地土）
6．攪乱坑
7．黒色粘土含む暗灰色砂
8．粘土粒含む暗灰褐色砂
9．炭まじり暗茶灰色砂
10．茶灰色砂
11．暗黄褐色砂
12．褐色粘質土まじり淡黄褐色砂
13．暗褐色砂（近世の基盤層）
14．暗灰褐色砂
15．黄味暗褐色砂
16．褐色砂（中世遺物若干含む包含層）
17．暗黄灰色砂
18．暗褐色砂
19．暗灰褐色砂
20．黄色まじり黒褐色砂
21．暗灰褐色砂
22．灰褐色砂
23．黄色まじり黒褐色砂
24．黄色まじり黒灰褐色砂
25．黒褐色砂
26．褐色まじり暗褐色砂
27．黄色まじり黒褐色砂
28．暗茶灰色砂
29．焼土まじり茶灰色砂
30．黒色まじり暗褐色砂
31．暗褐色砂
32．焼土まじり灰褐色砂
33．炭まじり黒褐色砂
34．淡茶灰色砂質土
35．灰層（淡灰色土）
36．茶灰色土
37．焼土粒まじり暗灰褐色土
38．暗灰褐色土
39．暗褐色土
40．焼土ブロック含む暗灰褐色土
41．暗褐色砂
42．黒褐色砂（中世前期包含層遺構）
43．暗黄灰砂
44．淡黄色砂（基盤層）

fig. 4　中世遺構面　平面図（1:300） ※遺構は、略号を省いた

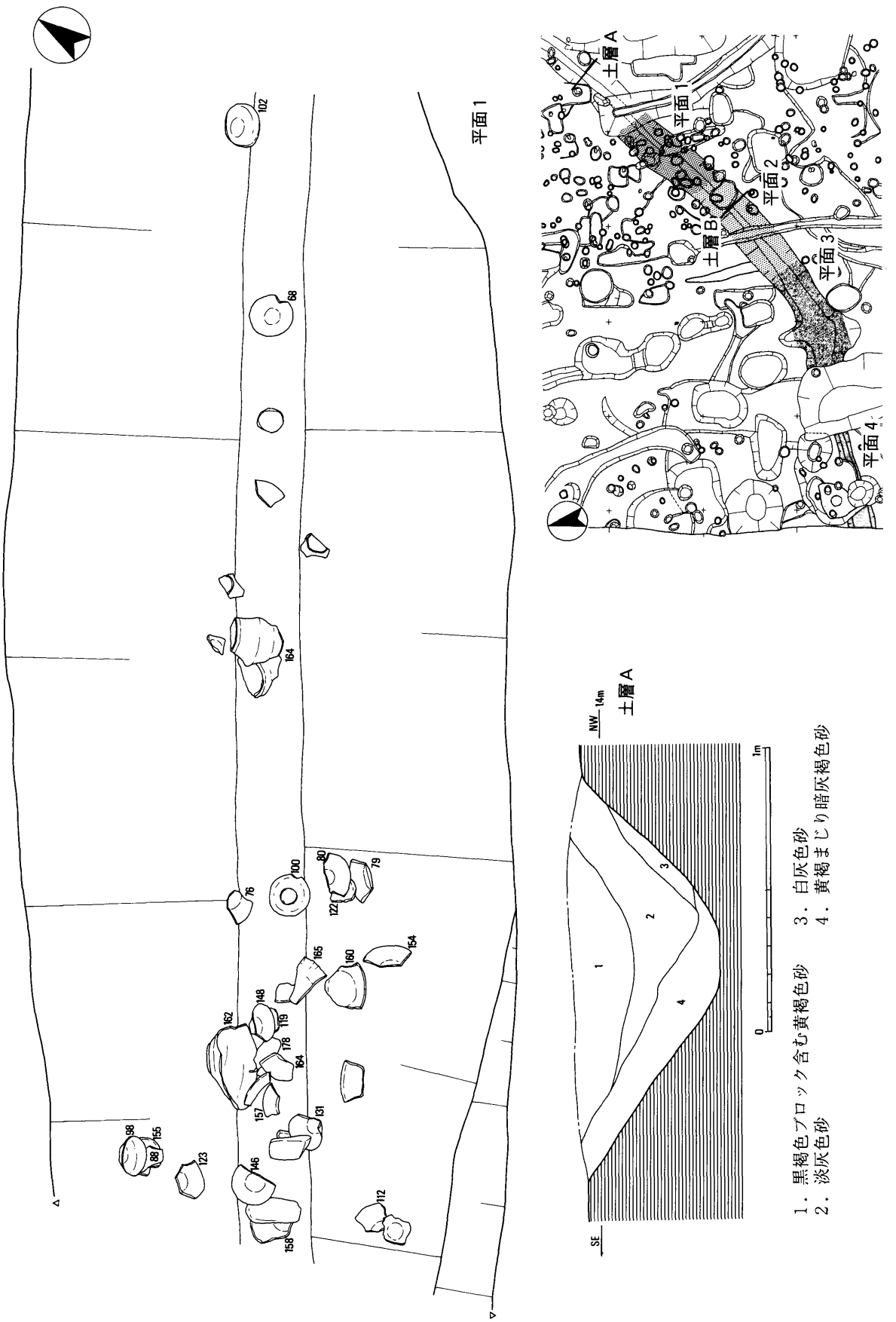
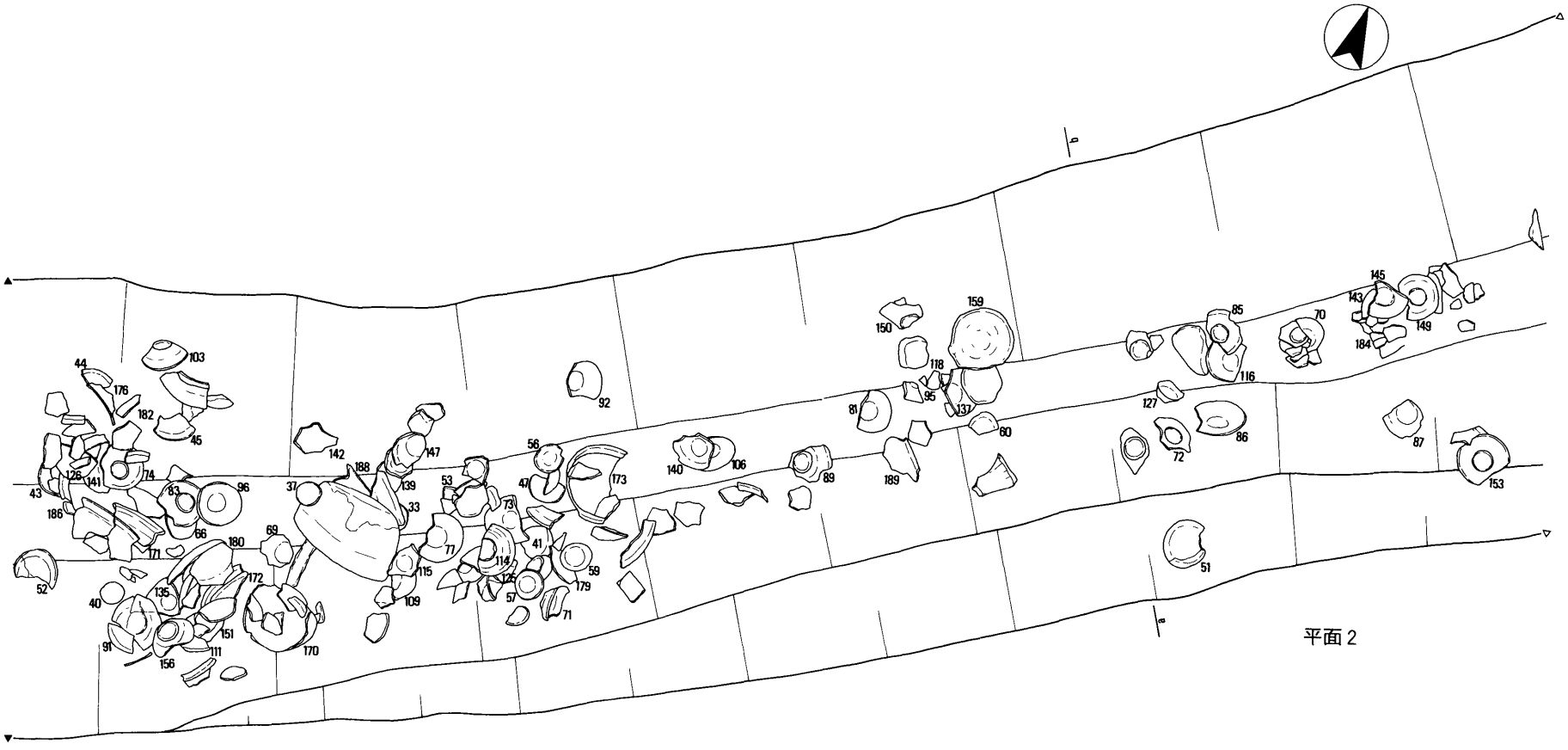


fig. 5　溝SD176関連実測図　その1（1:20）

fig. 6　溝 SD176 関連実測図　その 2 (1:20)



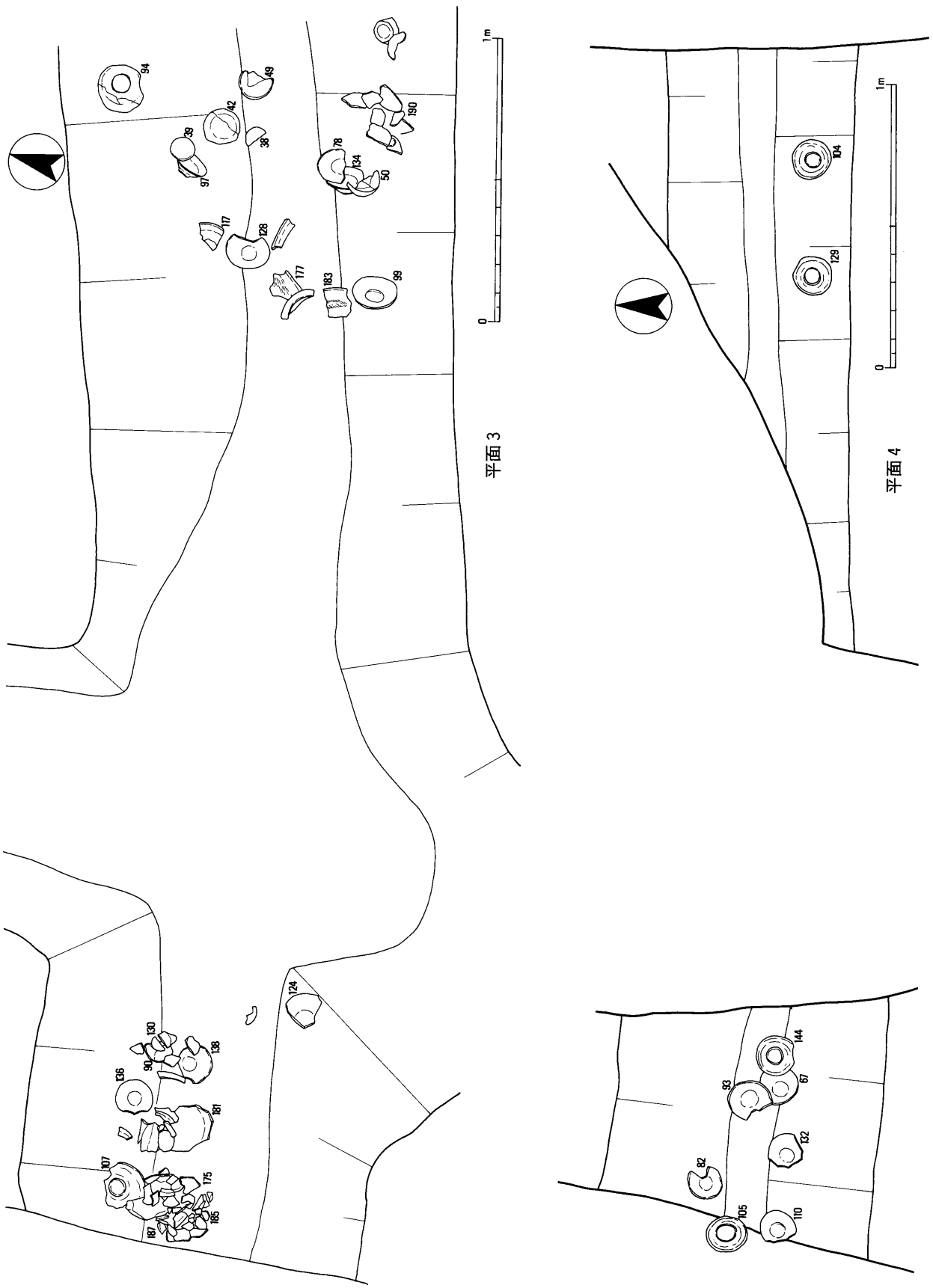


fig. 7　溝 SD176 関連実測図　その 3 （1:20）

埋土中から古墳時代前期初頭の壺が出土しており、あるいは古墳の周溝であった可能性も考えられる。

b　中世前期の遺構

中世前期の遺構には、溝・土坑・落ち込みなどがある。井戸は確認できなかった。また、掘立柱建物も数棟存在しているものと考えられるが、明らかに中世前期であると考えられるものを抽出することはできなかった。

溝

この時期を代表する遺構であるＳＤ176のほか、ＳＺ190も溝と考えられる。SD176・310、ＳＺ190などは、区画溝と考えられるものである。

溝SD176（fig. 5～7）　調査区北西部を北東から南西にかけて横切る溝である。hライン以北の調査段階ではSD76と呼称していたが、出土遺物の多いhライン以南の遺構名称SD176を用いることとする。

延長53ｍを確認した。北端は中世後期の大土坑ＳＺ５４で切られているが、さらに延長しているものと考えられる。南端は、調査区外に延びている。最も残りのよいｊ５グリット付近では、幅約1.7ｍ、深さ約0.6ｍである。溝の断面形は、ｊ５グリット付近ではＶ字形を、ｅ８グリット付近ではＵ字形を呈する。溝方向は直線的でなく、南東にやや膨らみ、全体として弧状を呈している。

埋土は、残りの良いｈ６グリット付近では４層に細分できる。全ての層中に遺物が認められるが、特に１～３層にかけての集中が激しい。

出土遺物は、特にｈライン以南に顕著である。埋土内には、完形品を含む多量の陶器椀（山茶椀）類、鍋を中心とした土師器鍋類が認められ、一括性の高いものである。最下層である４層には少量の遺物しか認められず、遺物廃棄に伴って溝を意図的に埋没させているものと考えられる。後に詳述するが、大量に出土した陶器椀類では未使用のものが圧倒的に多い。また、煤の付着したものが多く認められ、何らかの要因で使用に耐えなくなったものを、日常に用いていた鍋類とともに廃棄しているものと考えられる。

出土遺物は、藤澤良祐氏による山茶椀編年の第６型式から７型式までのものが認められる。土師器鍋は南伊勢系のもののみで、第２段階ｂ型式までのものが認められる。このことから、13世紀中葉でも後半に埋没時期を求めることができよう。

溝SD310（fig. 8）　調査区南西部のｍ２グリット付近で確認した溝である。南肩は中世後期の溝SD304で、北肩は同じく中世後期の土坑ＳＫ311で破壊されているため、溝の幅は不明である。また、溝の東端にはやはり中世後期の大土坑ＳＫ306があるため、延長がどこまで延びるのかも確実には分からない。

埋土中からは、先述のSD176と同様、未使用の山茶椀類が多く出土している。時期的にもSD176と同様、13世紀中葉と考えられる。

SD310と先述のSD176とは約6m隔てて並行関係

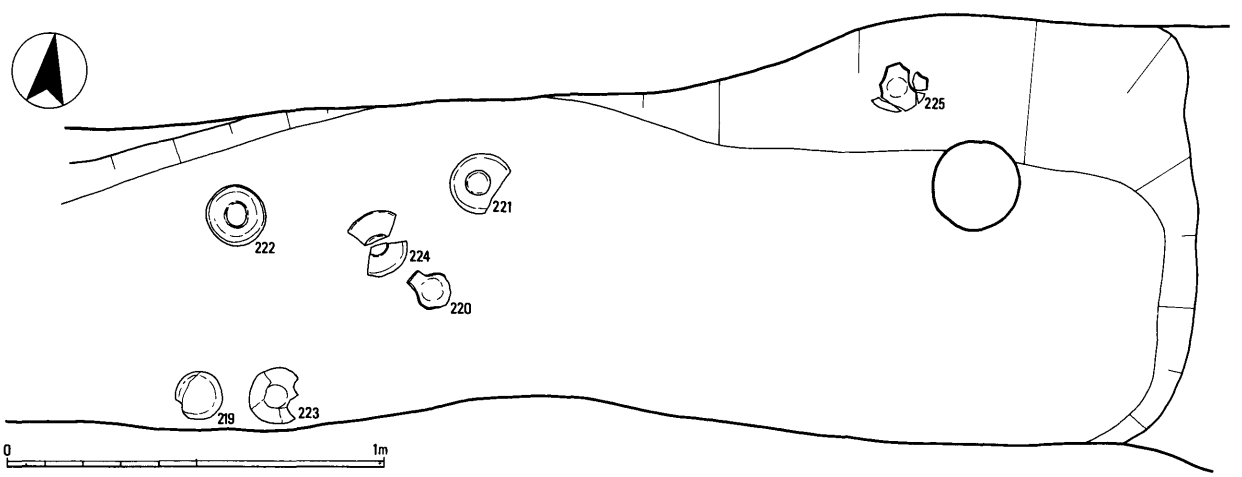


fig. 8　溝SD310遺物出土状況（1:20）

にあるようで、両者が共通の遺構である可能性は高い。また、調査時点でSZ190として認識していた落ち込みがやはりSD176と並行関係にあり、同じ間隔を持っていることから、SD310とSZ190とは一続きの遺構であったものと考えられる。

土坑

廃棄土坑のほか、墓の可能性のあるSK278などがある。

土坑SK278（fig.9）　調査区中央部のｋ10グリットで確認した遺構である。上部を、鎌倉時代の溝SD280が通る。長軸約0.7ｍ、短軸約0.5ｍの楕円形の小土坑内に、意図的に底を抜いた土師器鍋2個を重ねている。鍋の外面には煤が付着しており、煮炊きに使用されたものが使われている。下になった鍋内には、円礫が4～5個入っていた。鍋内には、骨などの有機物は見られなかったが、墓である可能性も捨てきれない。

鍋は南伊勢系のもので第2段階ａ～ｂ型式に相当し、13世紀中葉頃のものと考えられる。

c　中世後期の遺構

中世後期の遺構には、溝・井戸・大土坑・土坑・焼土坑・落ち込みのほか、埋甕・掘立柱建物がある。中世前期には明確ではなかったが、小規模な溝で区画を行った遺構群が確認されている。

溝

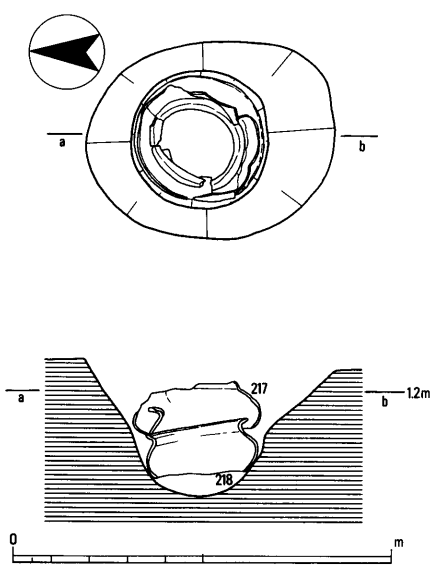


fig.9　土坑SK278　平面・断面図(1:20)

溝には、敷地を区画する目的のものと、大土坑に接続するものとがある。ここでは、主に区画溝に相当するものを記述する。

溝SD1　調査区北半部で確認された溝である。ｇ3グリット付近をコーナーとして、北および東へ延びる。ｅ3グリット付近の残りの良い部分で最大幅約1.0ｍ、深さ約0.4ｍで、断面Ｖ字形を呈する。南北方向のものは西側に膨らみ、やや弧状を呈する。北端は、調査区外へと延びる。東西方向のものは、大土坑SK90付近で途切れる。敷地を区画する溝と考えられる。

埋土中からは、南伊勢系の鍋第4段階ｂ型式頃のものが出土しており、15世紀後半頃の埋没と考えられる。

溝SD24　調査区北端部のａ6～8グリットで検出した遺構である。幅約0.8ｍ、深さ約0.3ｍである。西端は近世の井戸SE21に切られる。東端は大土坑SK69を切っているが、それ以東がどこまで続いていたのかは分からない。SD64と一連のものである可能性も考えられる。

埋土中には、古瀬戸後期の土器類を含み、15世紀後半頃の埋没と考えられる。

溝SD45　調査区北部西端で検出した遺構である。SD1と並行関係にある。幅約1.2ｍ、深さ約0.4ｍの溝で、上層には瓦・陶器類も含んだ集石が並べられていた。南端は、ｈ3グリットで近世の井戸SE282に切られ、その先は分からない。

埋土中や集石内の土器は、古瀬戸後期までのもので、15世紀後半頃のものと考えられる。

溝SD170・224・265　調査区南部で検出した遺構である。SD170は南北方向の溝でｎ5グリットで途切れるが、東西方向に延びるSD224・265と一連のものと考えてよかろう。SD170の北端はｈ4グリットで、同様の溝であるSD1とは接続しない。幅約0.4ｍ、深さ約0.2ｍの小規模なものである。SD265の東端はSK229とつながるが、前後関係は分からなかった。

埋土中から南伊勢系の鍋第4段階ｃ型式までの土器が見られ、15世紀後半には廃絶しているものと考えられる。

溝SD254・255（fig.25）　調査区南部東方

のo8グリットからn13グリットにかけて確認した遺構である。東端は、大土坑SK276に重なるが、前後関係は分からない。2条の溝は、土層の確認からはSD254の方が新しい。SD254は、幅約0.7m、深さ約0.3mで、断面U字形を呈する。SD255は、幅約0.7m、深さ約0.4mで、断面は緩いV字形である。

埋土中から出土した土器類は、南伊勢系の鍋第4段階b型式頃のもので、両溝ともに15世紀後半のものと考えられる。

溝SD307・313　調査区西部南寄りで検出した遺構である。両者は並行関係にある。SD307は、東側ほど浅くなっており、東端は近世の井戸SE152に切られる。それ以降の続きは確認できなかった。SD313も、n4グリットで終息するため、SD307も同様ではないかと考えられる。SD307では、確認した範囲の東部に集石が認められた。

埋土中から出土した土器類は、南伊勢系の鍋第4段階b型式頃のもので、両溝ともに15世紀後半の

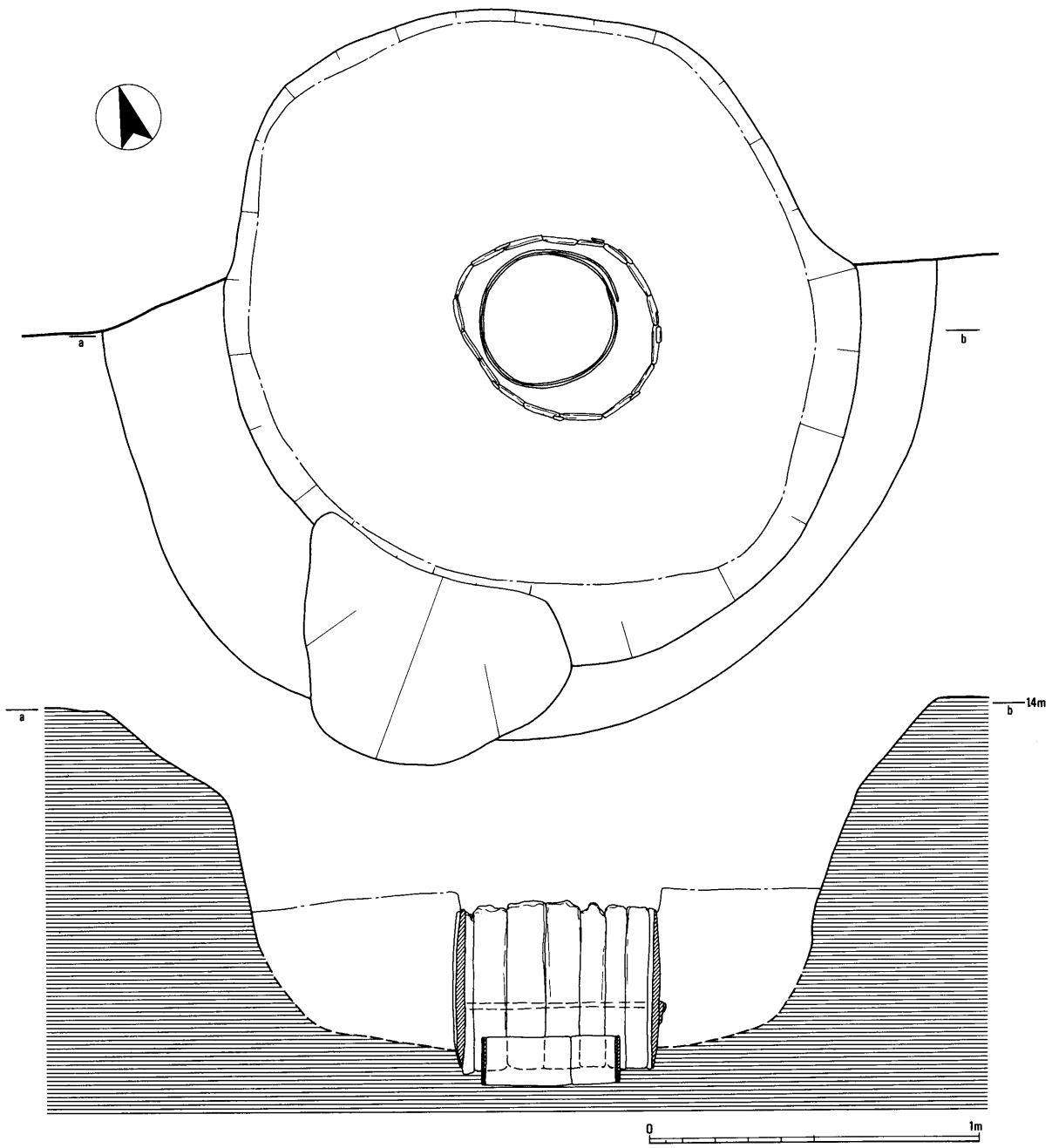
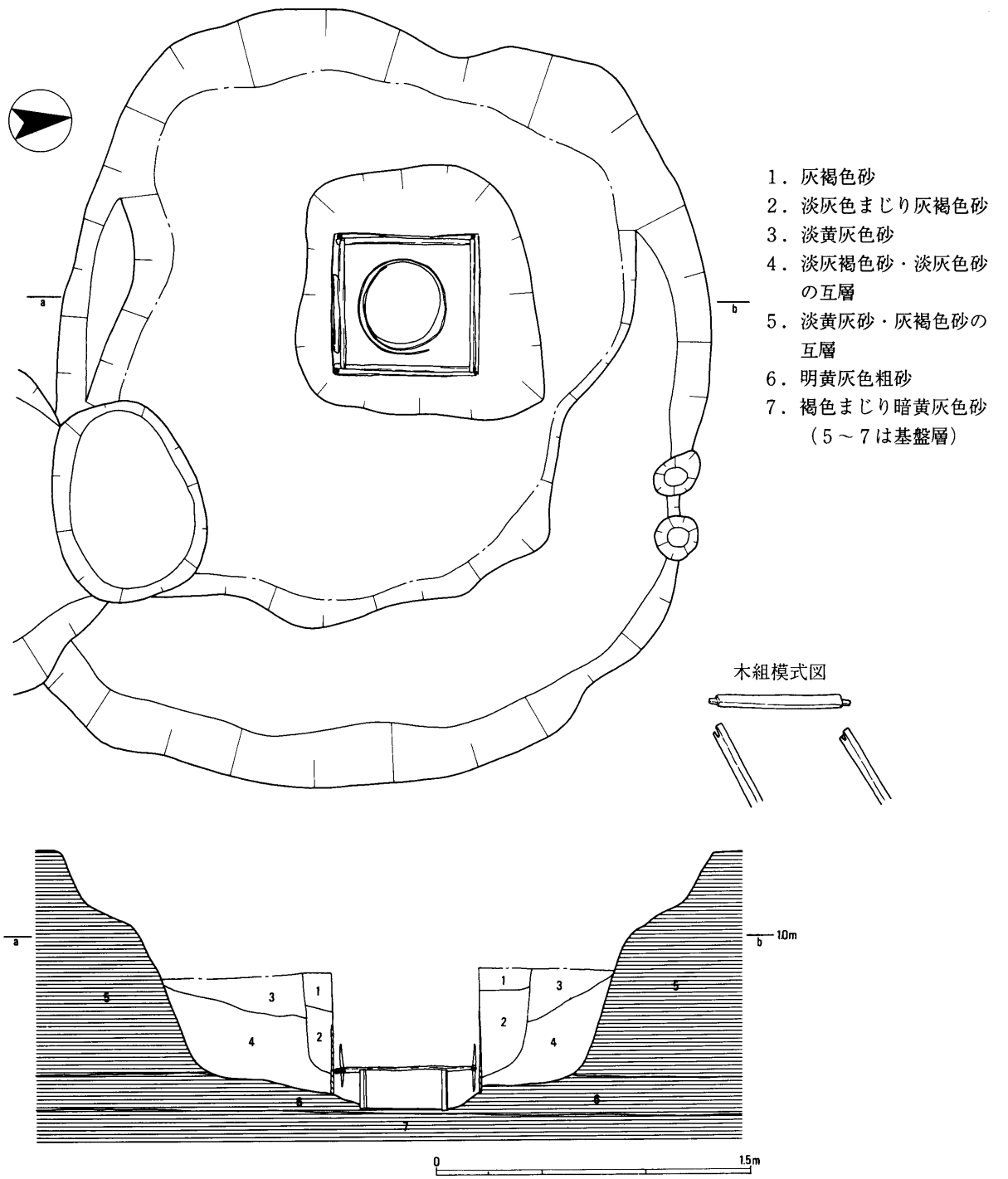


fig.10　井戸SE53　平面・断面図（1:20）

ものと考えられる。

井戸

この時期の井戸には、結桶が認められるもの、木組が認められるもののほか、明確な施設が確認できなかったものがある。しかし、砂地が基盤の当地で、何の施設も伴わない素掘りの井戸はあり得ない。確認できなかったものは、本来は木枠などがあり、その腐朽が進行していたため確認できないに過ぎないものと考えられる。なお、石組を持つ井戸は１基も確認されなかった。



fig．11　井戸SE78　平面・断面図（1:30）

井戸 SE53（fig.10） 調査区北半中央部のｃ・d11グリットで検出した遺構である。直径約2.5mの円形の掘形内に、17枚組の結桶を設置し、井戸の外枠としている。結桶の内部には直径41㎝の曲物を設置し、内枠としている。結桶・曲物の底で、標高約0.25mまで達している。今でも、真水が滾々と湧き出ていた。

結桶に用いられている個々の板は、底部側がやや鋭利に尖らせている。タガは1条のみ確認でき、竹製である。タガと桶枠との間には、木片が込められている部分があり、桶枠を固定するためのものと考えられる。

結桶と曲物の間から出土した土器は古瀬戸後期までのものであり、15世紀中頃には廃絶していると考えられる。

井戸 SE78（fig.11） 調査区北半中央部のｄ11グリットで検出した遺構である。長軸約3.7m、短軸約3.0mの不整方形の掘形内に、一辺約70㎝の正方形の木組を配置し外枠としている。木組内には、直径38㎝の曲物17枚組の結桶を設置し、内枠としている。結桶・曲物の底で、標高約0.25mまで達している。今でも、真水が滾々と湧き出ていた。

外枠となる木組は、四隅に縦杭を配置し、その外側には薄板が貼られている。縦杭の内側には厚さ3～4㎝の角材4本を組んだ枠が設置されている。木枠周囲には掘形埋土を切り込んだような土層が認められ、外枠設置に伴うものと考えられる。

掘形埋土内から出土した土器は南伊勢系の鍋第3段階b型式までのもので、この井戸の掘削時期は、15世紀前半以降と考えられる。

井戸 SE81（fig.12） 調査区北半中央部のｄ7グリットで検出した遺構である。直径約1.1mの円形の掘形内に、直径45㎝の木枠痕が認められた。この木枠は完全に朽ち果てているが、土層断面では50㎝以上の高さが認められることから、曲物というよりは結桶であろう。底の確認はできなかったが、標高約0.7m以下までは達しているものと考えられる。

出土した土器は少量で所属時期の判断が難しが、15世紀代のものと考えておく。

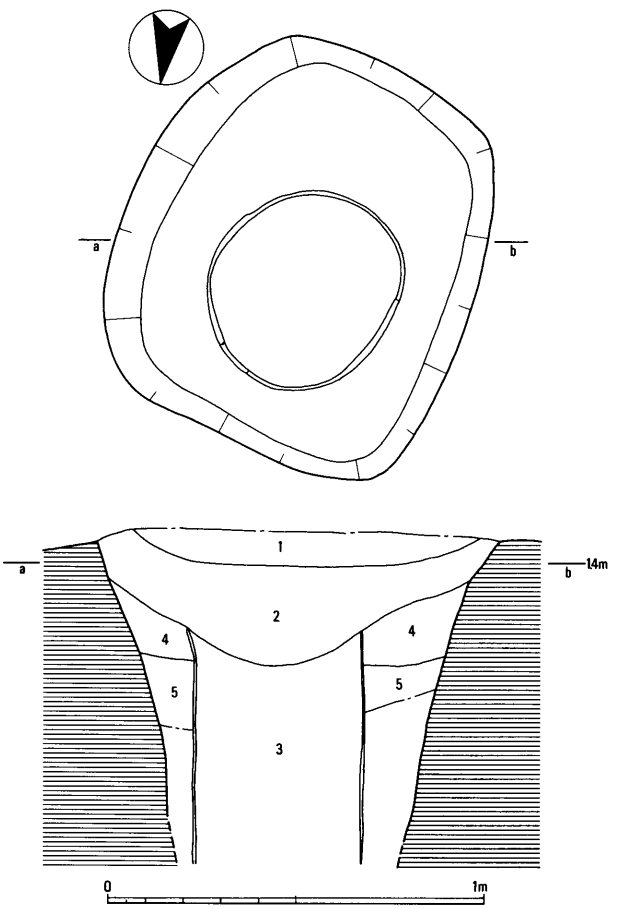
井戸 SE205（fig.13） 調査区南半南部のｐ・q5グリットで検出した遺構である。直径約2.4mの円形の掘形内に、直径60㎝の木枠痕が認められた。やはり、木枠は完全に朽ち果てていた。掘形の底は、標高約0.5mまで達している。

出土した土器は少量であるが、古瀬戸後期までのものがあり、15世紀後半代のものと考えられる。

井戸 SE212（fig.13） 調査区中央東部のi11グリットで検出した遺構である。直径約2.4mの円形の掘形内に、長軸60㎝、短軸50㎝の楕円形を呈した木枠痕が認められた。やはり、木枠は完全に朽ち果てていた。掘形の底は、標高約0.4mまで達している。

出土した土器は少量であるが、古瀬戸後期までのものであり、15世紀後半代のものと考えられる。

井戸 SE252 調査区中央部のｊ8・9グリットで検出した遺構である。直径約1.3mの円形の掘形のみ確認でき、木枠は見られなかった。掘形の底は、



1．褐色まじり灰褐色砂　4．灰黄色砂
2．灰褐色砂　5．灰色まじり黄色砂
3．暗灰褐色砂

fig.12 井戸 SE81 平面・土層断面図（1:20）

標高約0.9mまで確認したが、さらに深いものと考えられる。

出土した土器は少量であるが、古瀬戸後期までのものであり、15世紀後半代のものと考えられる。

井戸 SE253　調査区南半南部のｑ８・９グリットで検出した遺構である。直径約2.5mの円形の掘形のみ確認でき、木枠は見られなかった。遺構は、標高約0.7mまで確認したが、さらに深いものと推測される。

出土した土器は古瀬戸後期までのものであり、15世紀後半代のものと考えられる。

井戸 SE289（fig.14）　調査区西端中央部のｋ２グリットで検出した遺構である。この遺構埋没後には落ち込みSZ314やピットが多くあり、掘形の形状は判然としない。埋土上層部には円礫が多数投棄されていた。

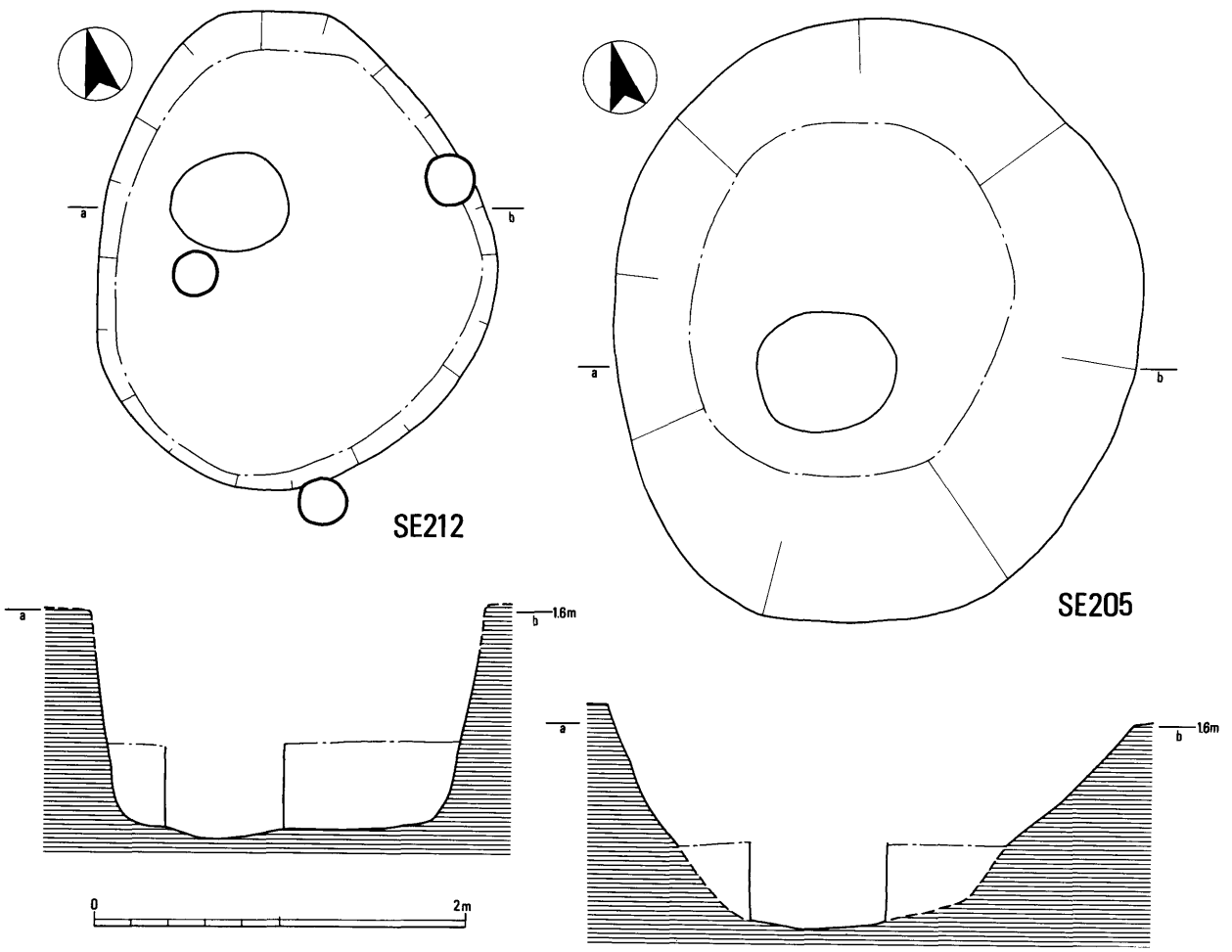
底は少し掘り窪められ、一辺45㎝の正方形の隅にあたる部分に縦杭が設置される。その内側には、板材８枚を用いて八角形の木枠を設置している。残存部分に限っては、八角枠の外にはタガは認められなかった。八角枠の底で、標高約0.25ｍまで達している。

なお、木枠検出前の平面観察で、八角枠外側の縦杭に対応するように、正方形の掘形が認められた。これは、先述のSE78のような、板材が縦杭の外に設置されていたことを示す痕跡と考えられる。

出土土器は少量であるが、木枠内出土土器は古瀬戸後期までのものであり、15世紀後半以前には埋没していたものと考えられる。

大土坑

ここでいう大土坑には、湧水点まで掘り込まれ、機能していた当時にも水が常時浸っていたと考えられるもののほか、焼土塊を多く含んだものがある。前者の土層は極めて特徴的で、上層部には褐色系砂が厚く堆積し、下層部には粘質土層と砂層とが互層になったような状態のものが多い。



ig. 13　井戸 SE205・212　平面・断面図（1:40）

大土坑SZ20（fig.15・16）　調査区北端のa10グリット付近で検出した遺構である。同様の大土坑SZ54が西にあり、それを切り込む。遺構北側は、調査区外へと続く。

SZ54側の遺構肩には、5本の木杭列が確認された。他の場所には見られないことから、おそらく、以前に掘削されて脆弱となっているSZ54側からの土砂崩落を止める目的かと考えられる。

出土遺物に南伊勢系の鍋第4段階c型式のものを含むため、15世紀後半のものと考えられる。

大土坑SZ54（fig.15）　調査区北端のa9グリット付近で検出した遺構である。同様の大土坑SZ20に切り込まれる。遺構北側は、調査区外へと続く。

出土遺物に南伊勢系の鍋第4段階c型式のものを含むため、15世紀後半の新しいには埋没しているものと考えられる。

大土坑SZ60（fig.17）調査区北半西部のg4グリット付近で検出した遺構である。隣接する大土坑SZ73とは切り合い関係を避けながらも、溝で接続されている。東西7.5m、南北4mで、長方形を呈している。底面では微妙な立ち上がりが認められるため、掘り上がりの形状からは2基の土坑であったように見える。しかし、土層図では明確な切り合い関係を有しないため、最初に掘られた土坑を拡大したものである可能性が高い。土坑の南西隅外側には、この土坑を取り巻くような小溝があり、さらにその外側を区画溝SD1がめぐっている。したがって、SZ60とSD1は、時期的に併存していたものと考えることができる。

埋土は、最下層である第7層に、粘質土と細砂の互層が見られる。上層にあたる第1･2層は灰褐～淡褐砂が厚く堆積し、遺物の含有は少ない。遺物は第3層以下に多く、完形に近い土師器羽釜も含む。この遺構から出土した土師器類は、中北勢系のものを中心とし、南伊勢系のものはほとんど含まないという傾向がる。

出土遺物には古瀬戸後期までのものを含んでいるため、15世紀後半の新しい時期には埋没していると考えられる。

大土坑SK69（fig.19）調査区北端のa7グリット付近で検出した遺構である。SD24が西部で切り込む。遺構北側は、調査区外へと続く。上層埋土は、東に接する大土坑SZ54に切られる。

遺構の底面には縦杭が認められた。しかし、この用途は分からない。

出土遺物は南伊勢系の鍋第3段階b型式までのものであり、14世紀後葉から15世紀前半には埋没

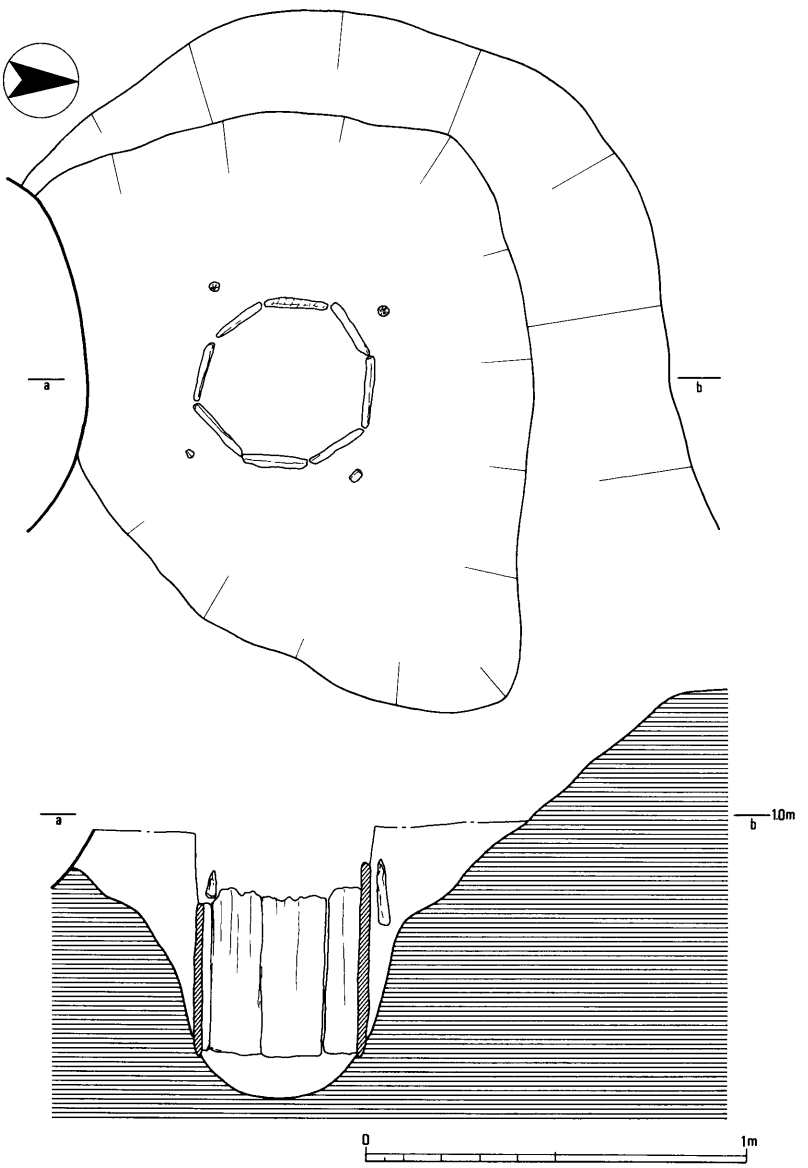


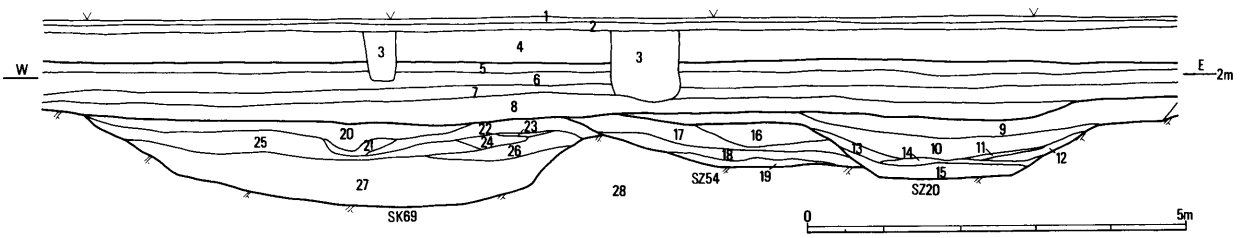
fig.14　井戸SE289　平面・断面図（1:20）

しているものと考えられる。

大土坑SZ73（fig.18） 調査区北半西部のｆ５グリット付近で検出した遺構である。隣接する大土坑SZ60とは切り合い関係を避けながらも、溝で接続されている。東西6.5m、南北5.5ｍの不整長方形を呈する。

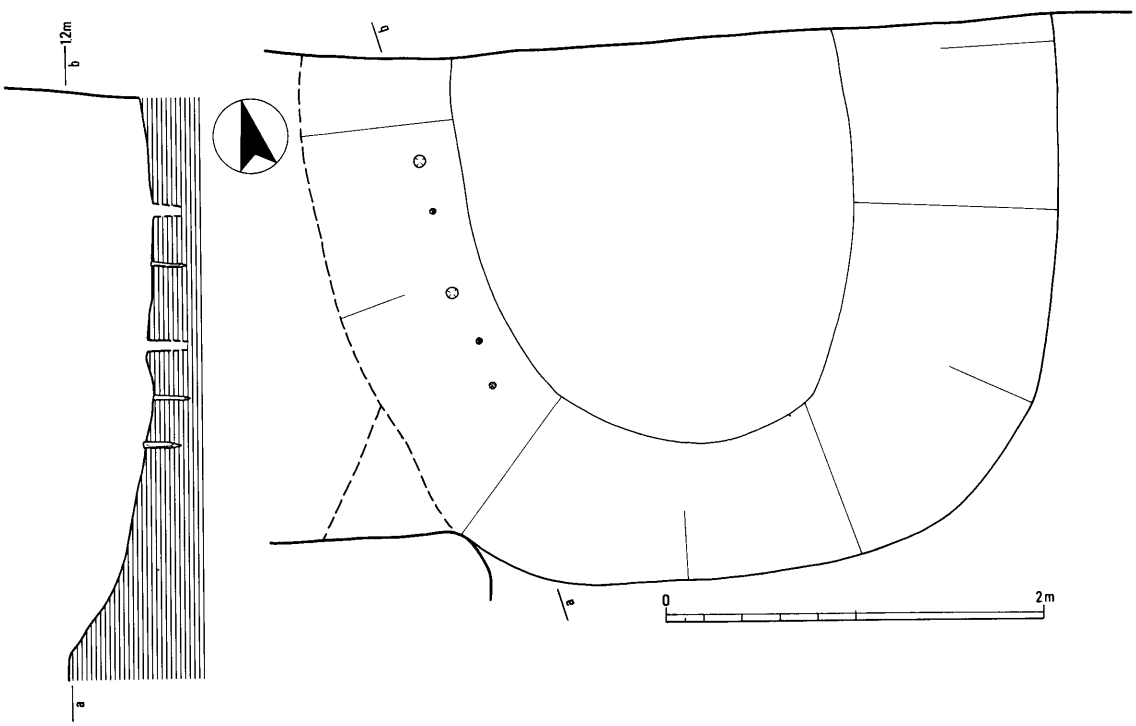
埋土は、第６層の灰褐色粘質土が非常に硬質であるが、遺構の北側のみに認められることから、遺構外北側からの流れ込みの埋土と考えられる。第９層は、その他の大土坑で見られるような砂層と粘質土層の互層が形成されている。遺構底面には柳類と考えられる自生植物根が見られ、遺構の機能時期から既に湿った環境にあったことが窺われる。

出土遺物には古瀬戸後期までのものを含んでいる

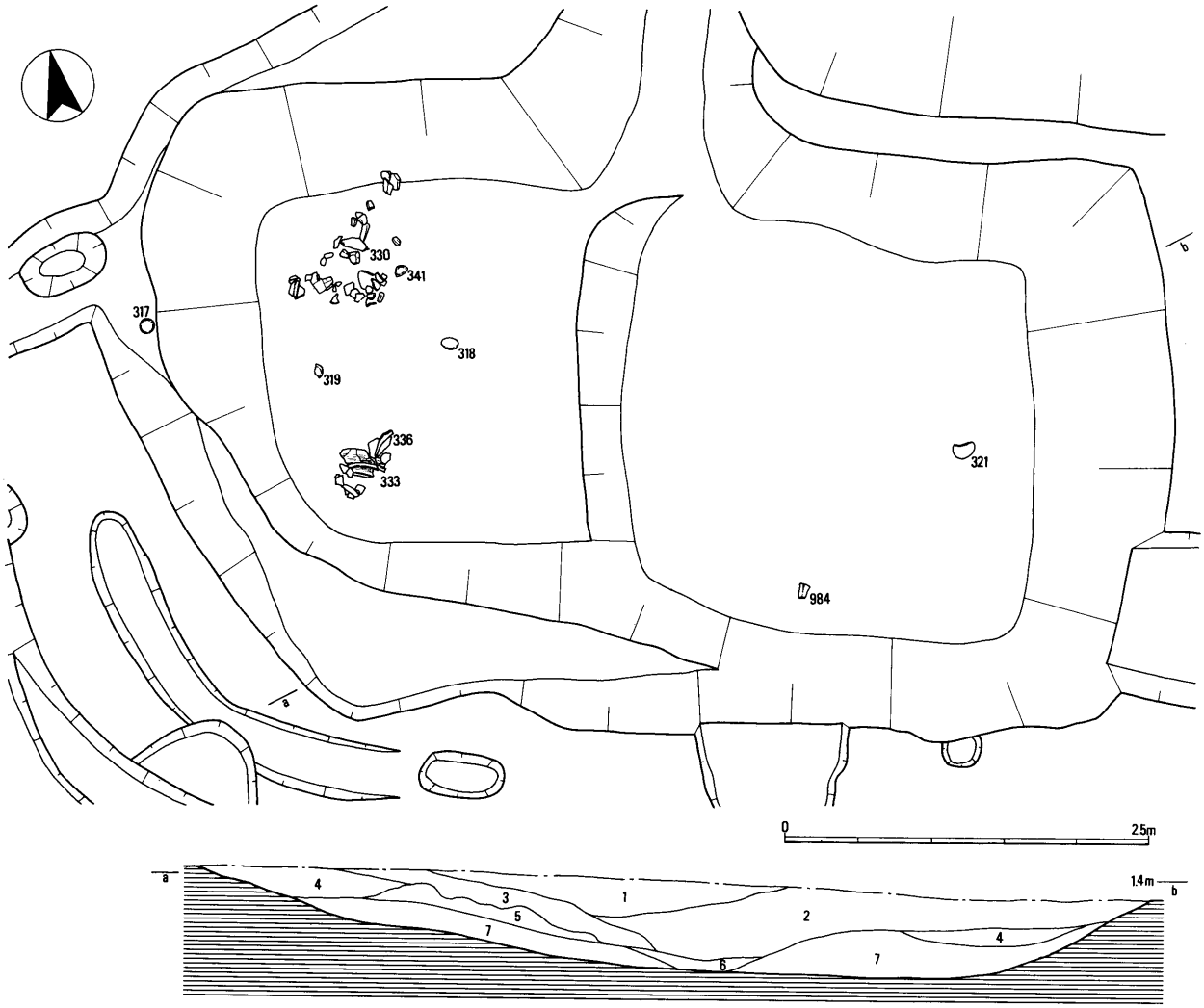


1．表土（グランド整地土）
2．整地土
3．攪乱
4．黄色小ブロック含む灰褐色砂
5．黄まじり灰褐色砂
6．褐灰色砂
7．褐色砂
8．灰褐色砂
9．黄色粒含む灰褐色砂
10．暗灰褐色砂
11．褐色砂
12．淡灰黄色砂
13．淡黄色まじり淡灰褐色砂
14．暗灰色砂
15．淡灰黄色砂と暗灰色砂の互層
16．黄灰色砂
17．淡黄灰色砂
18．灰色砂と黄灰色砂の互層
19．暗灰色砂
20．淡灰褐色砂
21．灰黄色砂
22．淡灰色砂
23．灰黄色砂
24．黒色まじり灰褐色砂
25．黄灰色砂
26．淡灰黄色砂
27．灰褐色砂と黄灰色砂の互層
28．明黄灰色砂（基盤層）

fig．15　大土坑SZ20・54・SK69　北壁土層断面図（1:100）



fig．16　大土坑SZ20　平面・杭列断面図（1:40）



1．淡褐色砂
2．灰褐色砂
3．暗灰褐色砂
4．褐色まじり灰褐砂
5．灰褐まじり淡黄灰色砂
6．暗灰褐色粘質土
7．灰色粘質土と淡黄灰砂の互層

fig．17　大土坑SZ60　遺物出土状況及び土層断面図（1:50）

ため、15世紀後半の新しい時期には埋没していると考えられる。

大土坑SK90（fig．18）　調査区北半中央部のｇ8グリット付近で検出した遺構である。直径約5.5mの不整円形を呈する。埋土下層にあたる第5層は、黄灰色砂と灰褐色砂の互層となる。土坑の底面には大礫が見られたが、特に意図的な配置があるわけではなかった。

出土遺物に瀬戸の大窯期のものを含んでいるため、15世紀後半でも新しい時期には埋没していると考えられる。

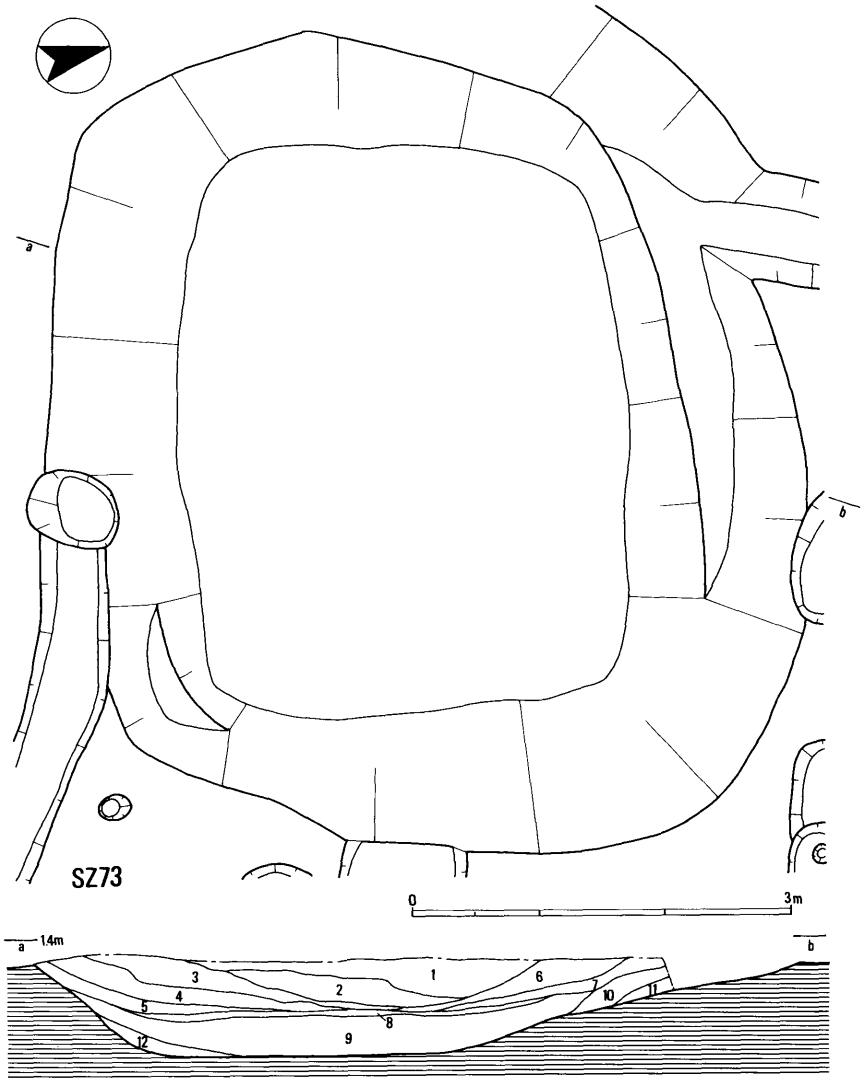
大土坑SZ137（fig．19）　調査区北半東部のｇ1 3グリット付近で検出した遺構である。直径約5.5mの不整円形を呈する。土坑の底面には芦・葦類と考えられる自生植物根が見られた。

出土遺物には古瀬戸後期までののものを含んでいるため、15世紀後半頃には埋没しているものと考えられる。

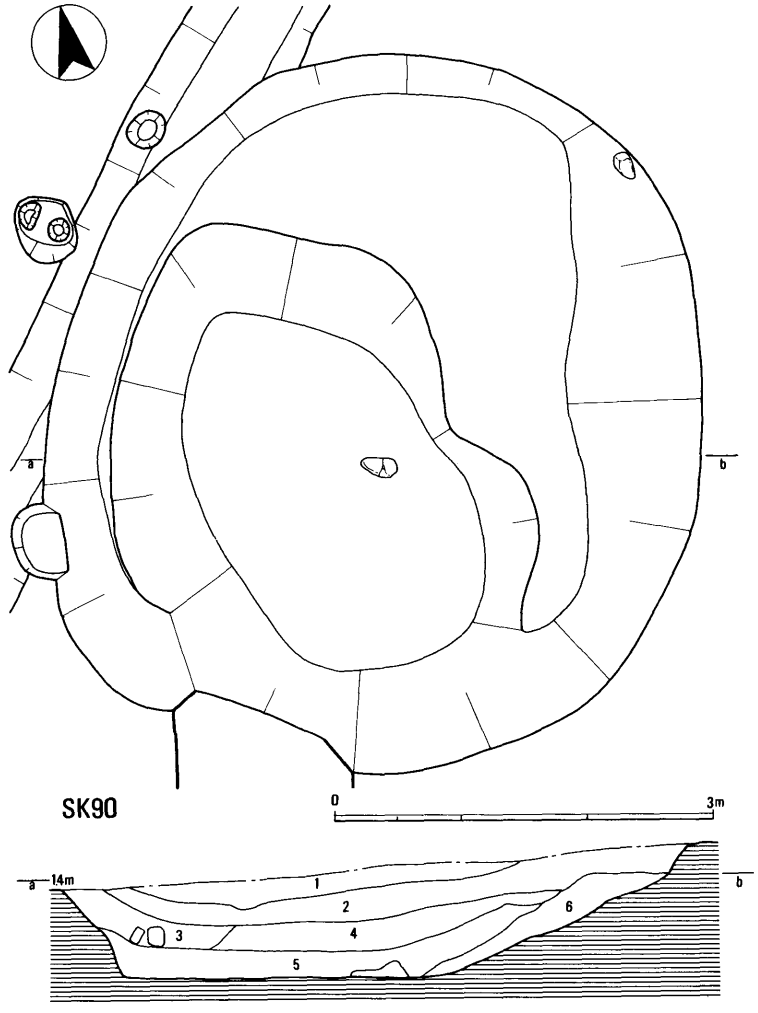
大土坑SZ139（fig．19）　調査区東端のｉ14グリット付近で検出した遺構である。遺構東部は調査区外へと続く。

遺構底には縦杭と横板を用いた木組が認められた東側のそれは、明らかに横板を杭で止めようとしている。井戸の可能性も考えたが、この木組にと一連

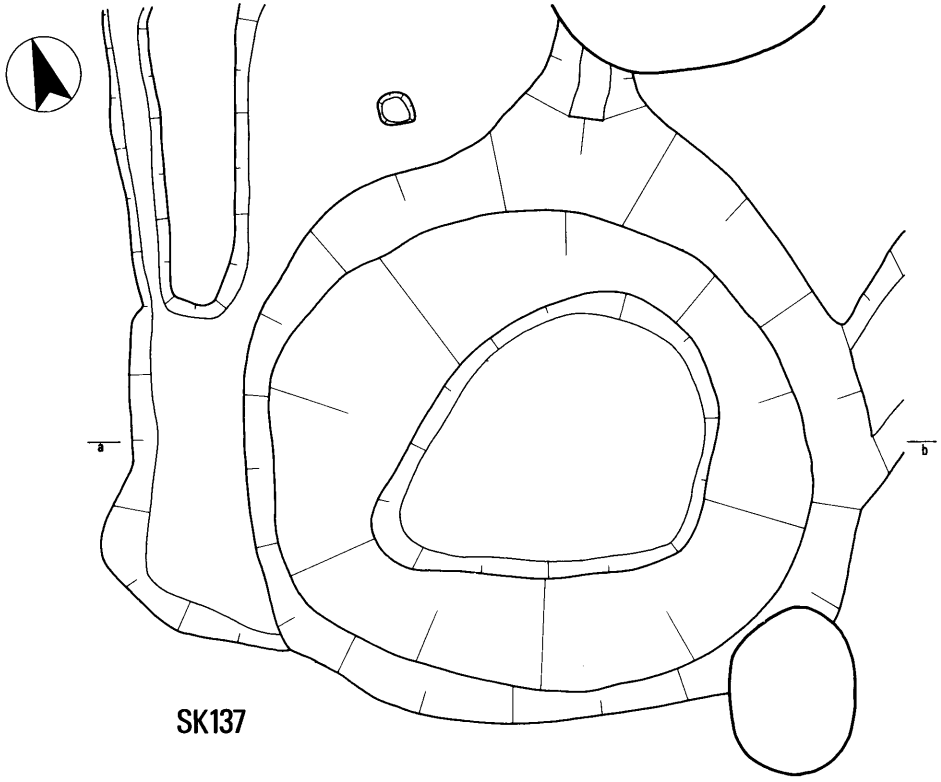
fig. 18　大土坑SZ73・SK90　平面・土層断面図（1:60）

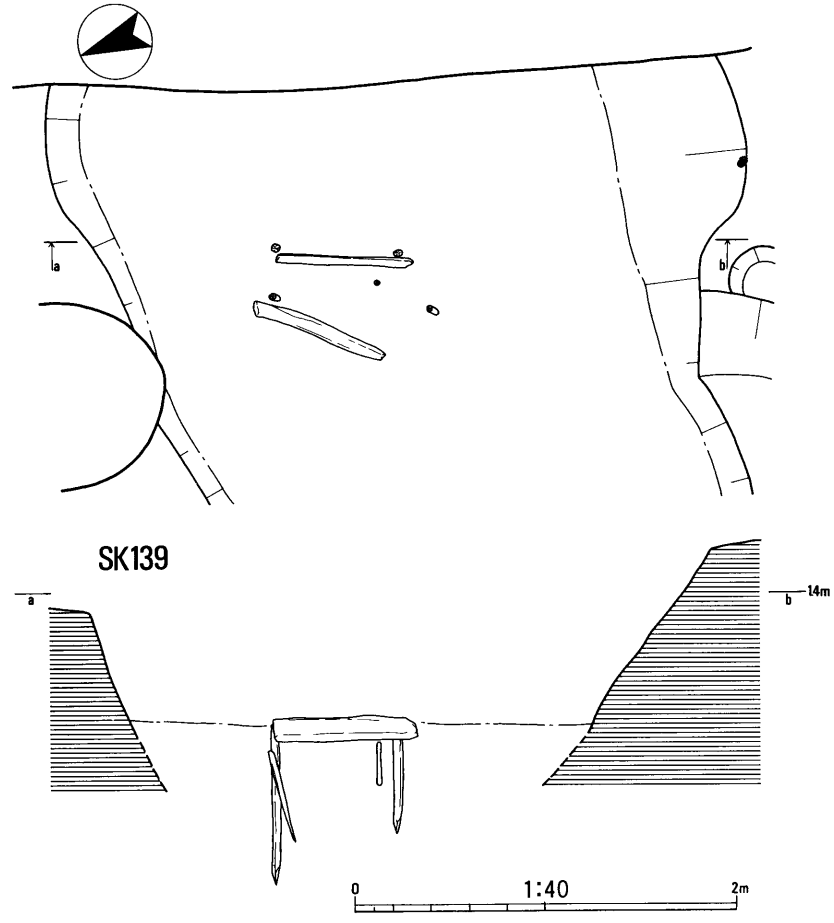


1．褐色・灰褐色小ブロック含む黄灰色砂
2．灰褐色砂
3．灰褐色ブロック含む黄灰色砂
4．黄灰色ブロック含む灰褐色砂
5．淡黄灰色砂
6．褐色ブロック含む灰褐色粘質土
7．灰褐色砂
8．暗灰色粘質土
9．暗灰色粘質土・灰褐色砂の互層、マーブル状、木質多い
10．明黄褐色砂
11．灰褐色砂
12．淡灰黄色砂



1．灰褐色砂
2．褐色小ブロック含む灰褐色砂
3．黒褐色ブロック含む暗灰褐色砂
4．灰褐色砂
5．黄灰色砂・灰褐色砂の互層
6．淡黄灰色砂





1．褐色砂
2．褐色ブロック含む灰褐色砂
3．暗灰褐ブロック含む黄灰褐色砂
4．暗灰褐色砂
5．灰黄褐色砂
6．炭混じり灰黄褐色砂
7．黄灰褐色砂
8．黄褐ブロック含む暗灰褐色砂

fig. 19　大土坑SK137・SK139　平面・断面・立面図

になるようなものは他になく、性格不明とせざるを得ない。

上部に近世遺物を含むが、下部は古瀬戸後期の遺物が見られるため、15世紀後半でも新しい時期のものと考えられる。

大土坑SK166　調査区南部のｑ10グリット付近で検出した遺構である。長軸約6.5m、短軸約5.0mの不整楕円形を呈する。

遺構の深さは検出面から約0.6mで、他の大土坑に比べて浅い。また、埋土も、焼土塊を中心としている点も特徴的である。

出土遺物は少ないが、銭貨類の出土が集中しているのが興味深い。古瀬戸後期の遺物を含み、15世紀後半頃には埋没しているものと考えられる。

大土坑SK175と溝SD237　調査区中央部のｉ7グリット付近で検出した遺構である。東側では、同様の大土坑SK184を切り込む。南にはこの土坑に伴う溝SD237が取り付く。SD237は、SD174に切られている。

出土遺物には古瀬戸後期までのものを含み、15世紀後半の新しい時期には埋没しているものと考えられる。

大土坑SK184　調査区中央部のｉ8グリット付近で検出した遺構である。西側は、同様の大土坑SK175によって切り込まれる。

埋土上層には小規模な集石があり、五輪塔が含まれていた。出土遺物には古瀬戸後期までのものを含み、15世紀後半の新しい時期には埋没しているものと考えられる。

大土坑SK229と溝SD174　SK229は、調査区南半中央部で検出した遺構である。西部にはSD265が取り付くが、前後関係は不明である。また、東側には同様の大土坑SK230がある。これとの前後関係も分からない。直径約5.0mの不整円形である。埋土中には、人骨かと思われるものも含まれていた。

SD174は、ｉ6グリット付近を起点とし、SK175を迂回してSK229に取り付く溝である。起点部分では完全に溝の掘削をとどめ、それ以北への延長は意図していない。遺構の幅は1.2mほどでやや強い角度で落ち、最深部は幅25cm程度で垂直に近く落としている。特にSK175に隣接する場所では、隣接側をかなり強い角度で落としている（fig.20）。

出土遺物は、南伊勢系の鍋第4段階ｃ型式までのものと、古瀬戸後期のものが見られることから、15世紀後半の新しい時期には埋没しているものと考えられる。SD174の出土遺物中には、陶器の燭台や、土師器皿の底部に数個所の焼成後穿孔を持つものなど、特徴的なものが含まれている。

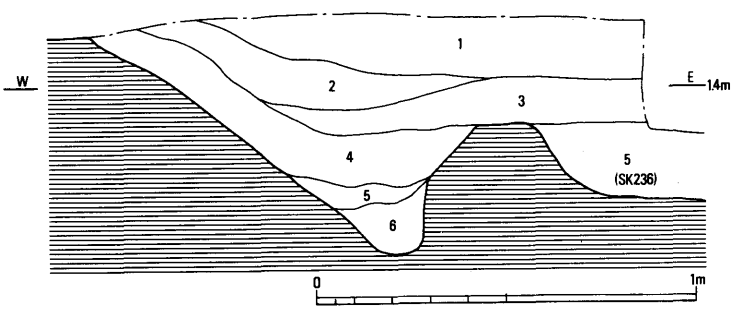
大土坑SK230　調査区南半中央部のｎ9グリット付近で検出した遺構である。東は溝SD243と接し、西は大土坑SK229と接する。

不整形な円形の微妙な窪みが2個所見られ、2基分の遺構があるものと考えられるが明確ではない。

出土遺物には南伊勢系の鍋第4段階ｂ型式を中心とし、古瀬戸後期までのものを含むことから、15世紀後半には埋没しているものと考えられる。

大土坑SK241（fig.21）　調査区東端のl13グリット付近で検出した遺構である。当初、不整形な大土坑かと考えたが、2基の土坑が重なっているものである。ここでは一括して把握しておくが、出土遺物は南側の大きい方から出土したものが大部分である。

埋土は、最下層のみ砂質シルトの単純な堆積があり、土坑機能時の堆積と考えられる。最上層である



1．褐色砂
2．黒褐色砂
3．褐色まじり黄褐砂
4．暗灰褐色砂
5．灰褐色砂（SK236埋土と同じ）
6．淡灰褐色砂

fig.20　溝SD174　ｉ6グリット　土層（1:20）

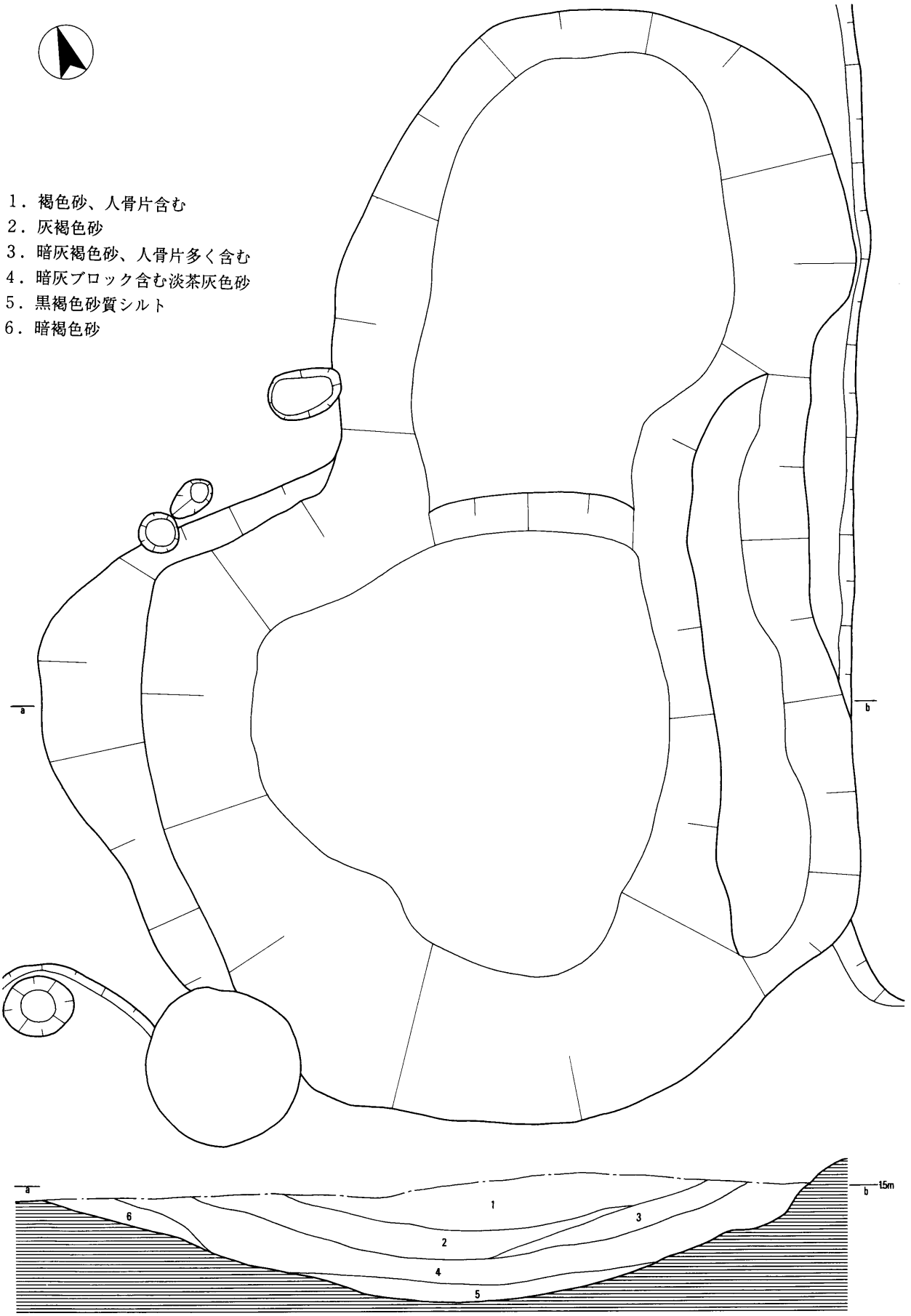


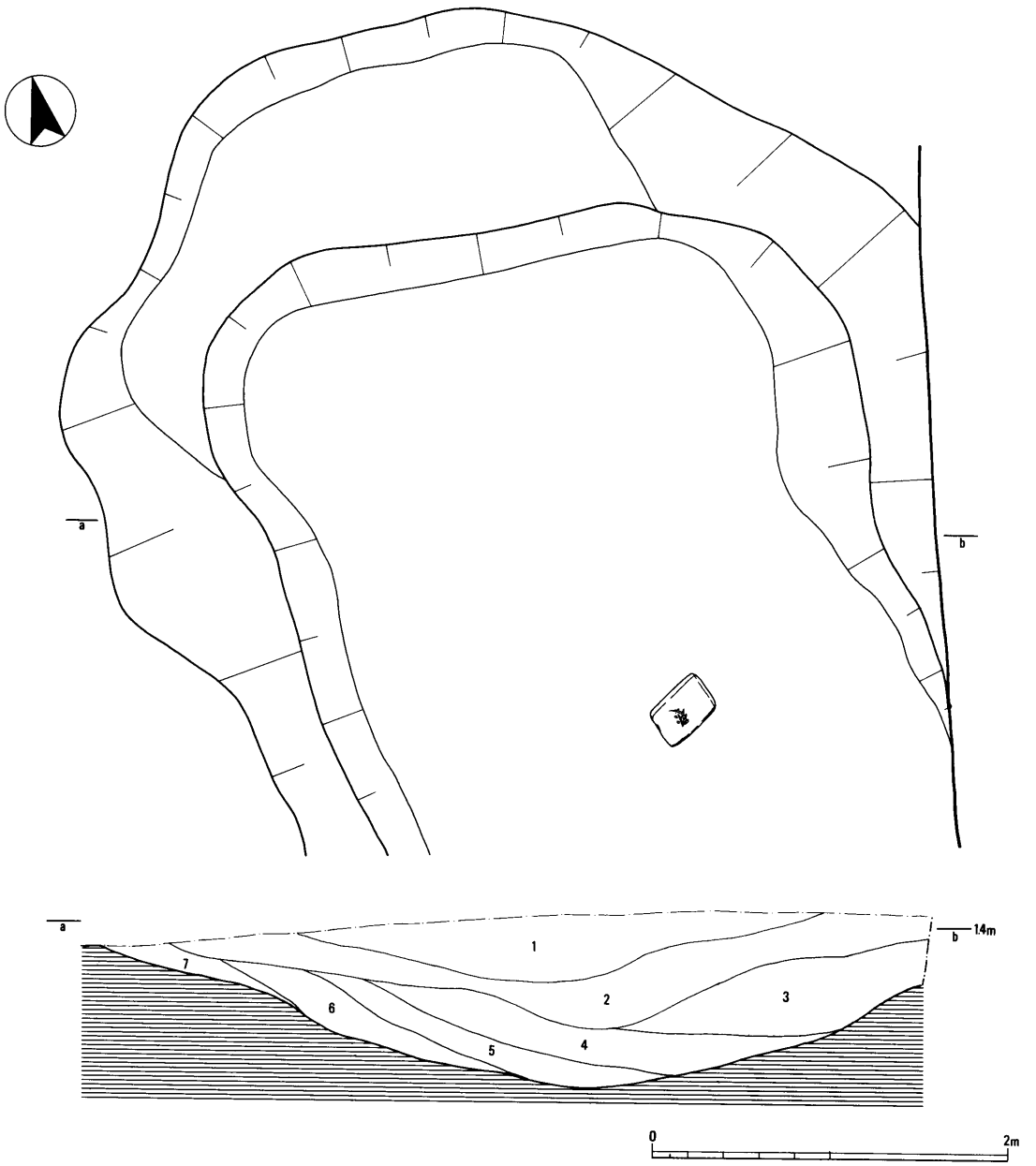
fig. 21　大土坑SK241　平面・土層断面図（1:40）

第1層と、中層に相当する第4層中には人骨片が認められる。とくに第4層中の人骨含有量は多く、多くの土器も伴っていた。しかし、これらの人骨・遺物は、この土坑に対して意識的に投棄されたものではなく、土層の埋没状況からは、調査区東側からの流れ込みと考えるのが妥当である。

出土遺物は、古瀬戸後期までの土器が見られ、15世紀後半には埋没しているものと考えられる。遺物中には五輪塔や、陶器香炉なども含んでおり、隣接する場所にあった中世墓群から流れ込んだ遺物が多くを占めている可能性が高い。

大土坑SK261（fig.22）　調査区東端のm 13グリット付近で検出した遺構である。南端は大土坑SK276と重なるが、両者の前後関係は不明である。

この土坑の埋土中にも、人骨片が多い。状況といては、SK241と同様であろう。埋土下層部からは梵



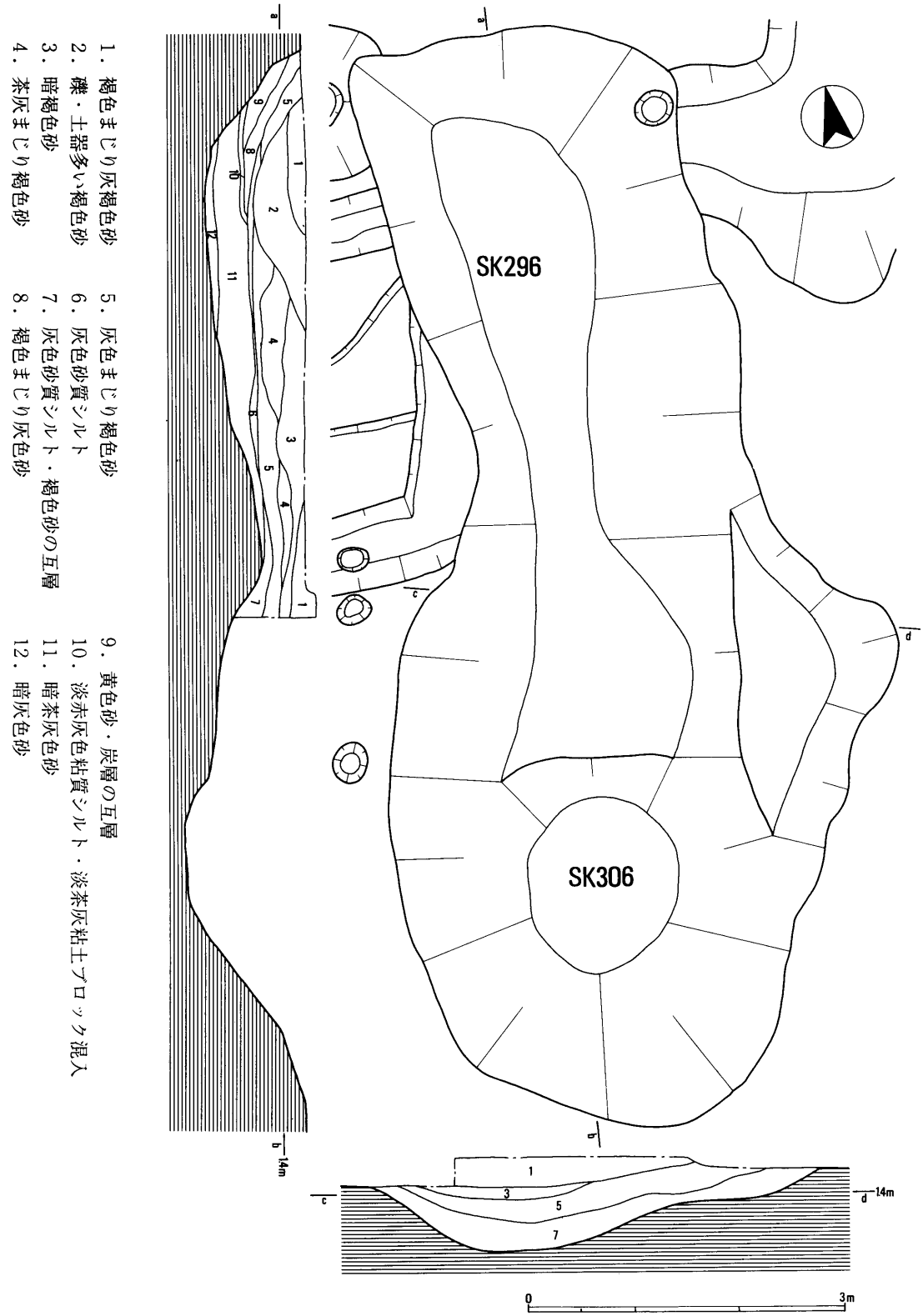
1．褐色砂
2．灰褐色砂
3．黄灰色砂
4．人骨・土器多い黒褐色砂質シルト
5．暗褐色砂
6．黄色粘土ブロック含む灰褐色砂
7．淡黄褐砂

fig.22　大土層SK261　平面・土層断面図（1:40）

字を刻んだ五輪塔が出土している点も、同様である。

出土遺物は、古瀬戸後期までの土器が見られ、15世紀後半には埋没しているものと考えられる。出土した瓦質土器の火鉢には破片単位で被熱しているものがある。

大土坑 SK262　調査区南半東部のｏ10グリット付近で検出した遺構である。SD254・255に切られる。長軸約4.0ｍ、短軸約3.5ｍの楕円形を呈す



fig．23　大土層SK296・306　平面・土層断面図（1:60）

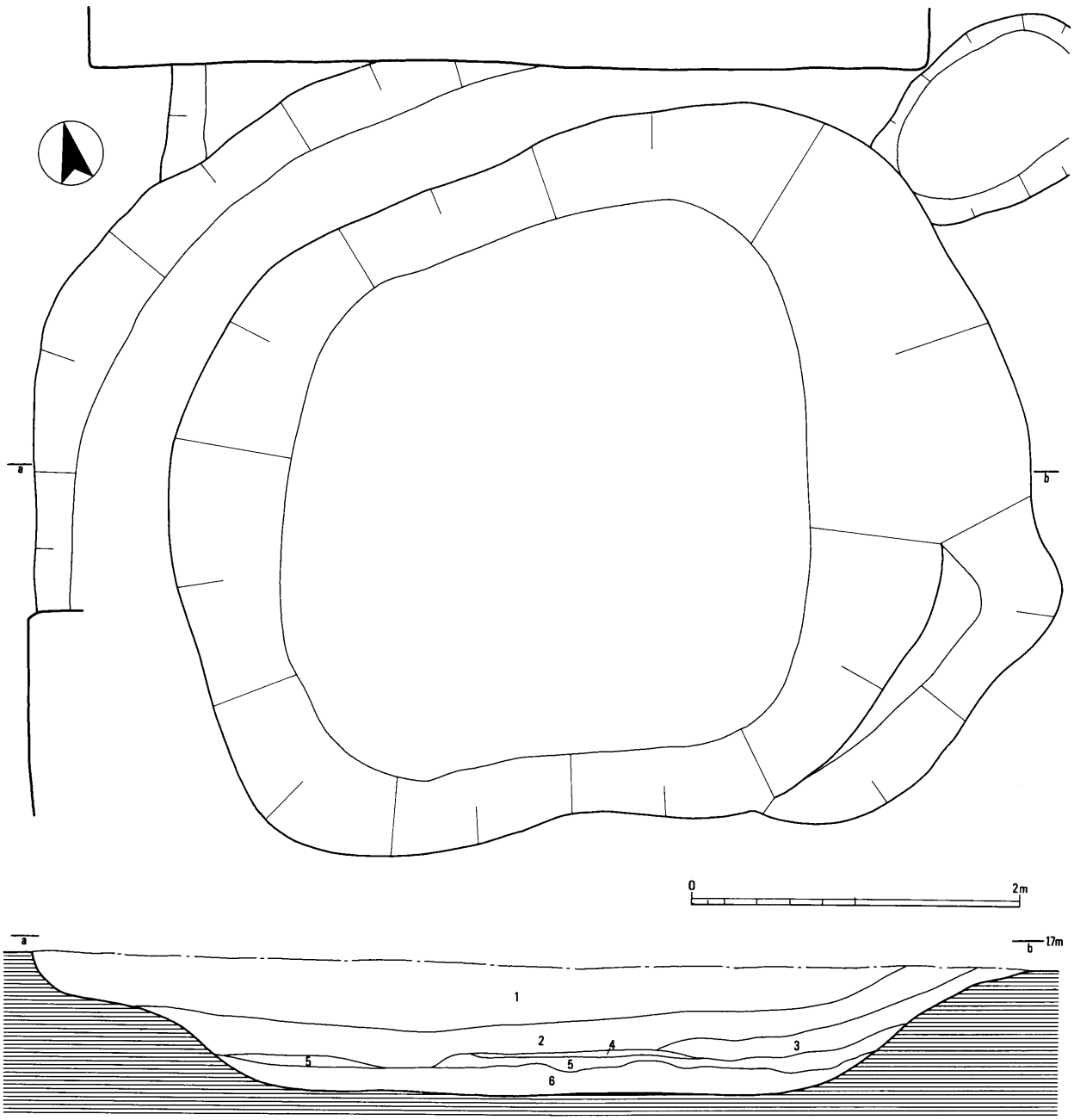
る。埋土上層は、焼土粒を含む固い埋土で、意図的に埋められたものと考えられる。おそらく、ＳＤ254・255の設置に伴ってなされたのであろう。

遺構下部からは、幅約20cm、長さ約92㎝、厚さ約3.0㎝の板が2枚立てられていた。この板の最深部は、標高0ｍに達するものである。井戸の可能性も考えられるが、これ以外には何の施設もなかった。

出土遺物には南伊勢系の鍋第3段階b型式のものと、古瀬戸後期のものとがあり、15世紀前半には埋められているものと考えられる。

大土坑SK276　調査区東端のｏ13グリット付近で検出した遺構である。南端は大土坑SK261と重なるが、両者の前後関係は不明である。

この土坑からも多くの人骨が出土したが、状況は



1．褐色砂
2．黄灰砂・褐色ブロック含む淡褐砂
3．炭まじり淡か褐砂
4．暗灰色砂淡シルト
5．炭まじり褐色砂
6．炭・砂まじり淡赤灰色粘質土

fig．24　大土坑SK 305　平面・土層断面図（1:40）

SK241と同様である。

出土遺物には、古瀬戸中期から後期にかけてのものが見られる。埋土中からは五輪塔のほか、外面に「念佛衆生」などの墨書がある陶器練鉢などが出土している。14世紀後葉から15世紀後半までの長い期間にわたる遺物が含まれている。SK241などと同様、やはり近接する中世墓群からの流れ込みの遺物が多いと考えられる。

大土坑SK296・306（fig.23）　調査区西部のｋ3グリット付近で検出した遺構である。北側で、SZ299を切り込む。また、中世前期の溝SD176も大きく破壊している。南に隣接するSK306とは一体化しており、土層図からも前後は不明である。

埋土の第9層は、炭と黄灰砂の互層で、近隣にカマド状のものが存在していたものと考えられる。

出土遺物には南伊勢系の鍋第4段階ｂ型式までのものと古瀬戸後期のものとを含むため、15世紀後半までには埋没しているものと考えられる。

大土坑SK305（fig.24）　調査区南西隅のｐ3グリット付近で検出した遺構である。東西6.6ｍ、南北5.5ｍの不整長方形状で、底面はやや丸くなる。

出土遺物には南伊勢系の鍋第4段階ｃ型式までのものと古瀬戸後期のものとを含むため、15世紀後半までには埋没しているものと考えられる。また、ここから出土した瓦質土器火鉢(703)は、SK181出土のものと接合している。

大土坑SK332　調査区南端のｒ11グリット付近で検出した遺構である。検出したのはごく一部と考えられ、大部分は調査区外へと続いている。

埋土は、SK166と同様、焼土塊を多く含むもので、他の第土坑とは異なっている。

出土遺物は微量であるが、南伊勢系第3段階ｂ型式までのものが見られるため、15世紀前半頃に埋没しているものと考えられる。

土坑

通常の遺跡調査で確認されるような土坑と同じである。機能的には廃棄土坑、墓などがあろうが、その区別は困難である。また、灰が多量に入り込んだ土坑についても、粘土塊がないという点からこの区分に含めている。

土坑SK115（fig.26）　調査区北半中央部のｆ9グリット付近で検出した遺構である。長さ約3.3ｍ、幅約0.8ｍの南北に長い溝状を呈するが、両端は完結しているため、土坑とするものである。

埋土内には土師器皿類を中心とした遺物があり、鍋類は小片しかなかった。藤澤良祐氏による山茶椀編年の第9型式に相当する椀を含む。時期的には15世紀前半のものと考えられる。

土坑SK192（fig.27）　調査区中央部のｋ6グリット付近で検出した遺構である。東西約3.2ｍ、南北約2.3ｍの不整形な土坑である。

埋土は6層に区分される。最下層である第6層の

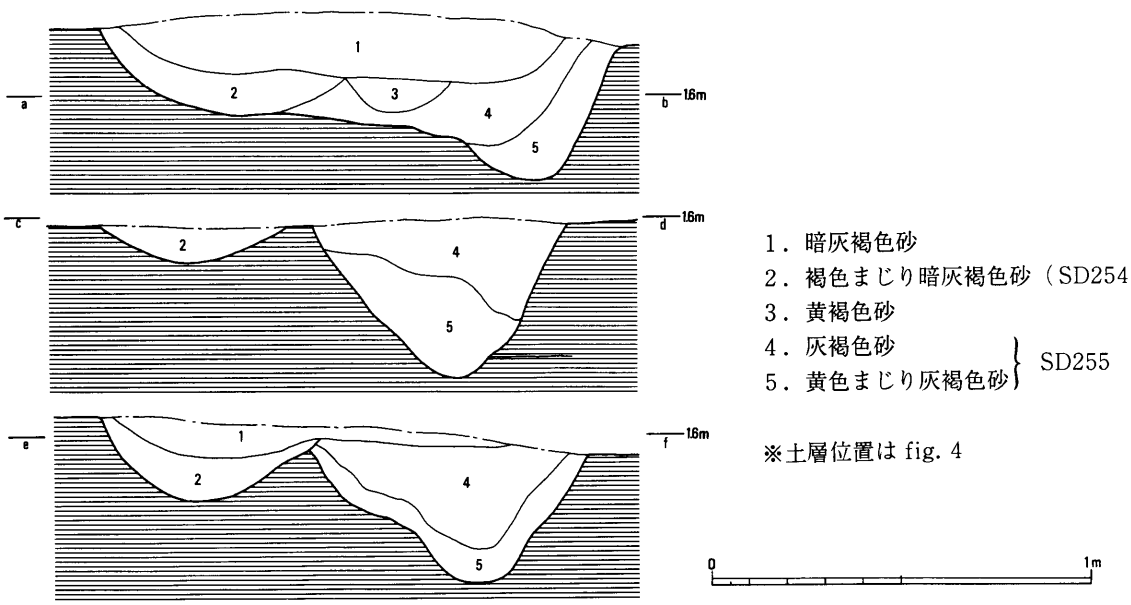


fig.25　溝SD254・255　土層断面図（1:20）

上面には、完形に近い土師器鍋・羽釜・茶釜・皿類が一括廃棄されていた。また、これら一括廃棄土器類を埋める第5層を切り込む第4層中には、二枚貝が多量に廃棄されていた。第5層中に廃棄されていた羽釜には、煮炊き使用後に意図的に底に穿孔したものがある。

出土した土器類は、南伊勢系鍋の第4段階b型式のもので、15世紀後半の古い時期のものと考えられる。

土坑SK200　調査区中央東部のh10グリット付近で検出した遺構である。直径約2.4mの不整円形を呈する土坑である。埋土は、焼土粒を多く含むものであった。

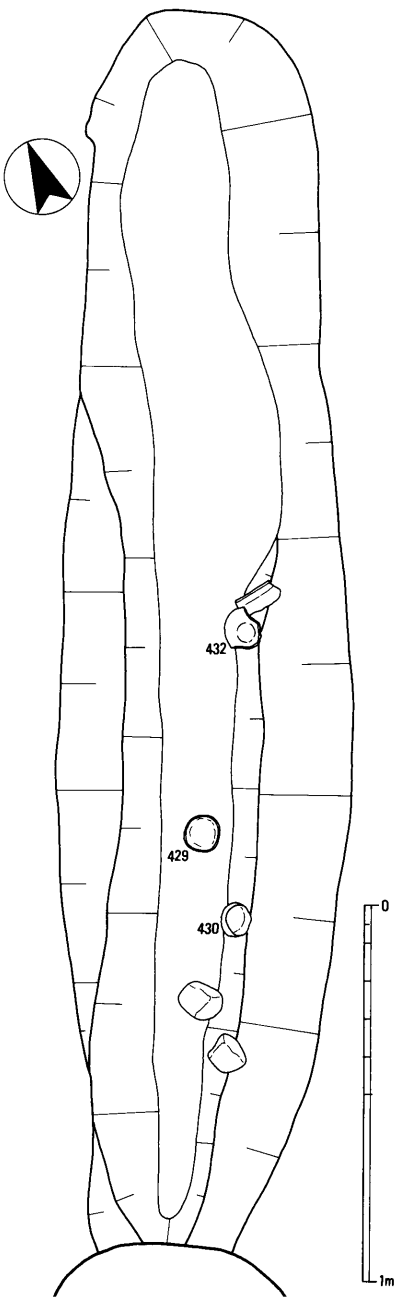


fig.26　土坑SK115遺物出土状況（1:20）

埋土内からは、土師器皿類・羽釜や陶器擂鉢が出土している。陶器擂鉢は瀬戸大窯期のもので、15世紀後半の新しい時期のものである。今回の調査区のなかで確認した中世遺構のなかでも、最新の部類に相当するものである。

土坑SK209（fig.28）　調査区中央部のm5グリット付近で検出した遺構である。長軸約3.0m、短軸約1.9mの楕円形を呈する土坑である。西端は、溝SD170に切られている。

土坑内には、土師器鍋・茶釜・皿類を中心とした土器類が一括廃棄されていた。SK192と同様、煮炊き使用後に意図的に底に穿孔したものが含まれている。

出土した土器類は、南伊勢系鍋の第3段階b型式から第4段階a型式までのものがあり、15世紀後半の古い時期のものと考えられる。

土坑SK287・291　調査区西端のi2グリット付近で検出した遺構である。埋土内には灰が充満していた。しかし、SF77のような被熱のある粘土塊はなく、隣接する調査区外から掻き出されたものと考えられる。

出土遺物は少ないが、ともに南伊勢系の鍋第4段階b～c型式のものを含むため、15世紀後半のものと考えられる。

焼土坑

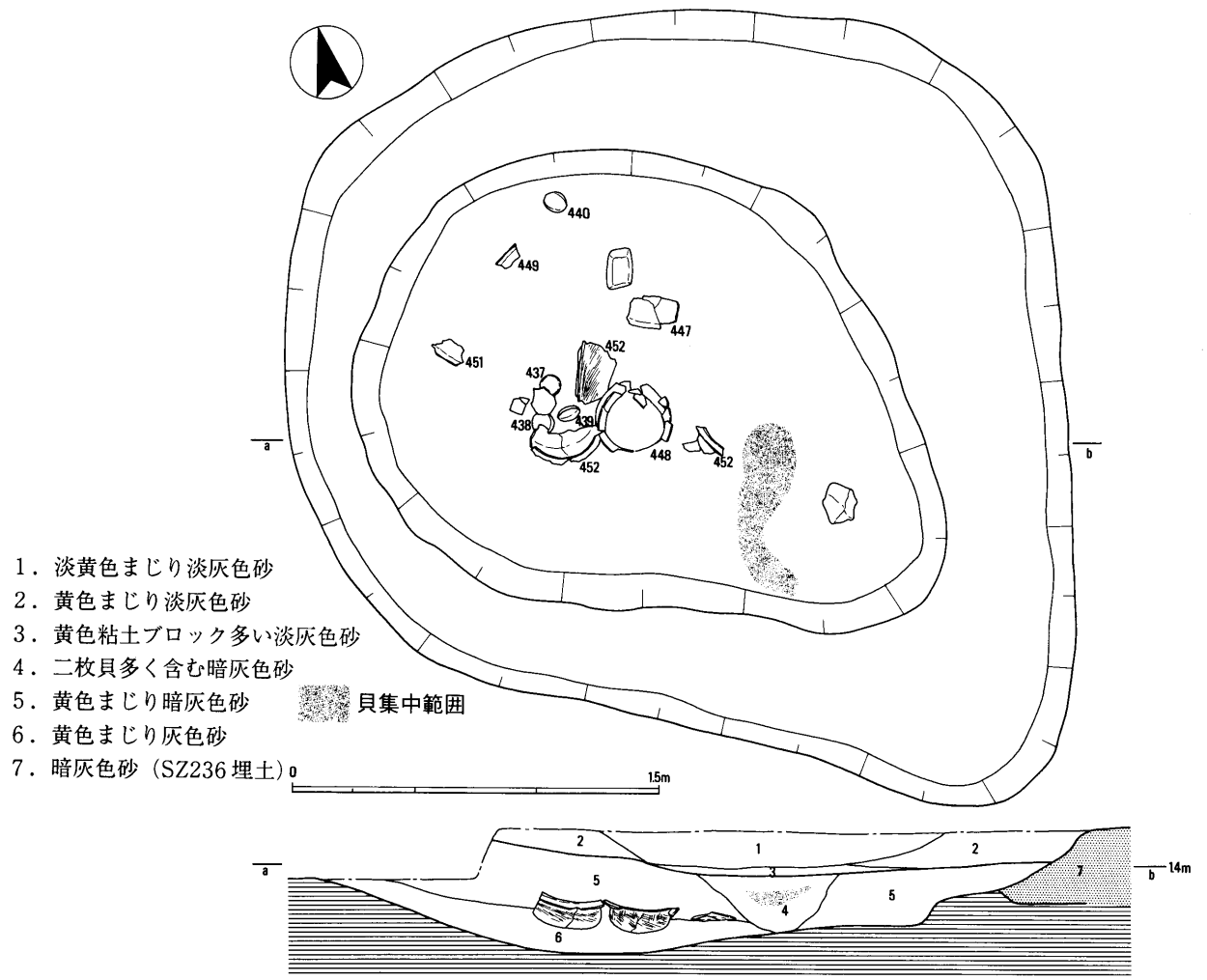
灰層とともに、焼けた粘土塊が埋土ではない状態で確認されたものである。カマドと考えられる遺構で、1基のみ確認された。

焼土坑SF77（fig.30）　調査区北半中央部のd7グリットで検出した遺構である。長軸約2.2m、短軸約2.0mの不整楕円形を呈する。上部には赤く焼けた粘土が認められ、下部には灰層が認められた。このことから、カマドの残骸と考えられるが、上部構造は不明である。

出土遺物は少なく、15世紀代のものと考えられるに止まる。

埋甕

土坑中に土器を配置した状態でその後も機能させる性格があることから、通常の土坑とは区別してお



fig．27　土坑SK192　平面・土層断面図（1:30）

いた。

埋甕SK263（fig．29）　調査区南東部のｏ11グリットで検出した遺構である。直径約0.7ｍの円形の掘形内に、口径約42㎝、器高約54㎝の大甕を埋設する。大甕は完形である。甕内埋土からは少量の土器片は出土したのみである。

土中に埋められていることから、水甕の類ではなく、何らかの物資の貯蔵を目的としたものと考えられる。大甕は常滑産のもので、15世紀後半のものであろう。

掘立柱建物

今回の調査区内では、無数のピットが確認されており、多くの掘立柱建物が存在していたものと考えられる。しかし、建物としてまとめようとすると、うまくいかない場合が多かった。ここでは、明らかに建物としてまとまったもののみを採り上げた。確認できた遺構は全て中世後期で、15世紀後半頃のものと考えられる。

掘立柱建物SB346（fig．31）　調査区中央東部のｇ10グリット付近で確認した遺構である。南北約8.4ｍ、東西2.1ｍ以上で、東側に広がっているものと考えられるが、確認できなかった。南北は3間分であるが、北部の2間が2.4ｍ、1.8ｍであるのに対し、南1間分が4.2ｍある。これは、南1間の中央にピットが確認できなかった結果である可能性が高い。西側列は全て根石を持っている。建物の南北軸は、Ｎ25°Ｅの方向である。

建物の西にある土坑SK115の方向と揃ってり、関連している遺構の可能性がある。

掘立柱建物SB347（fig．31）　調査区中央東部のｉ9グリット付近で確認した遺構である。南北2間（約4.5ｍ）、東西4間（約7.6ｍ）の東西棟

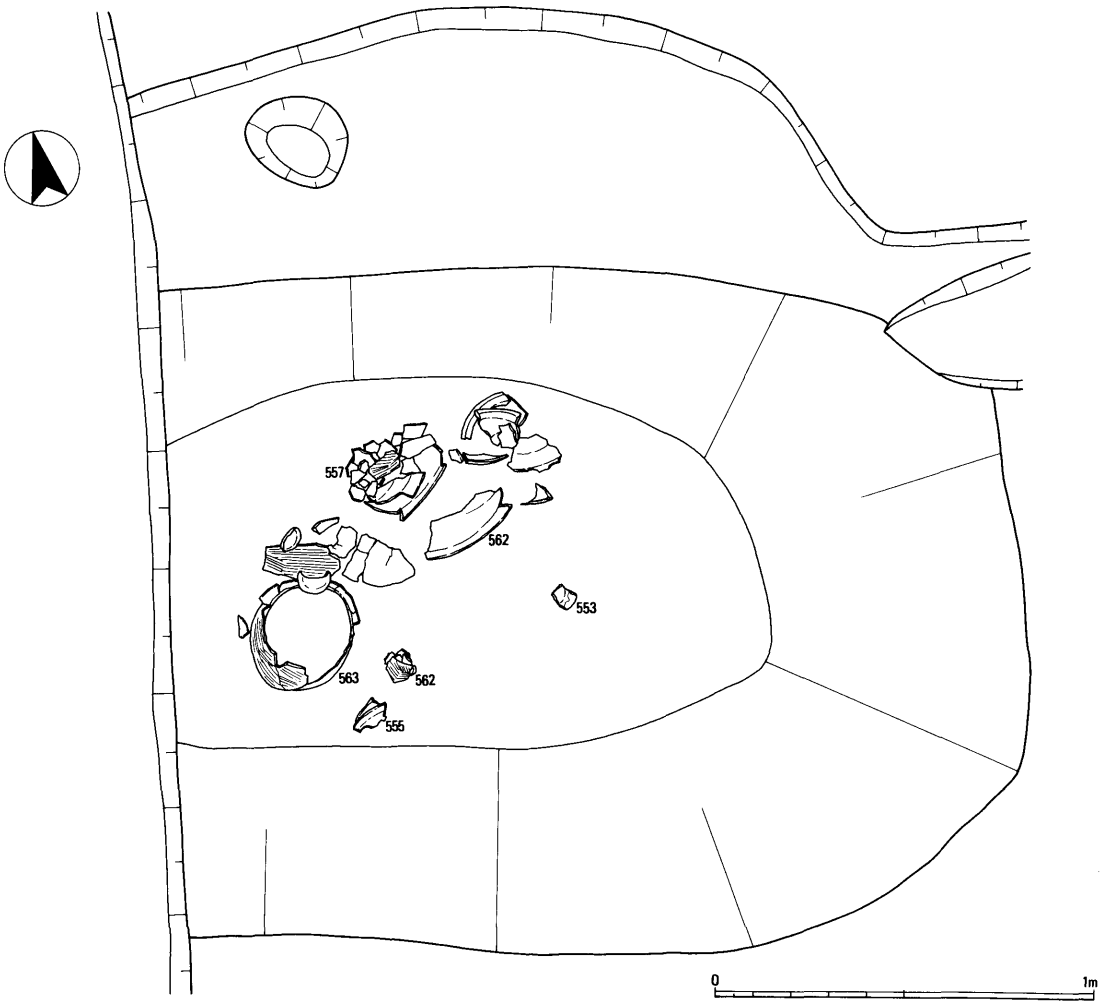


fig. 28　土坑SK209　遺物出土状況（1:20）

である。建物の南北軸は、N 8° Eの方向である。

掘立柱建物SB348（fig. 31）　調査区中央東部のｉ9グリット付近で確認した遺構である。南北2間（約3.6 m）、東西5間（約9.6 m）の東西棟である。建物の南北軸は、N 8° Eの方向である。

掘立柱建物SB347とほぼ同位置に同方向で建てられているため、占有による立て替えの関係なのであろう。

掘立柱建物SB349（fig. 32）　調査区南半西部のｍ6グリット付近で確認した遺構である。南北2間（約3.6 m）、東西5間（約8.8 m）の東西棟である。建物の南北軸はN 5° Eの方向である。部分的に根石が認められる。

区画溝SD170・224・265に囲まれているため、区画溝の時期に相当する遺構と考えられる。

柱列SA350（fig. 32）　調査区南半西部のｋ6グリット付近で確認した遺構である。4間分（約

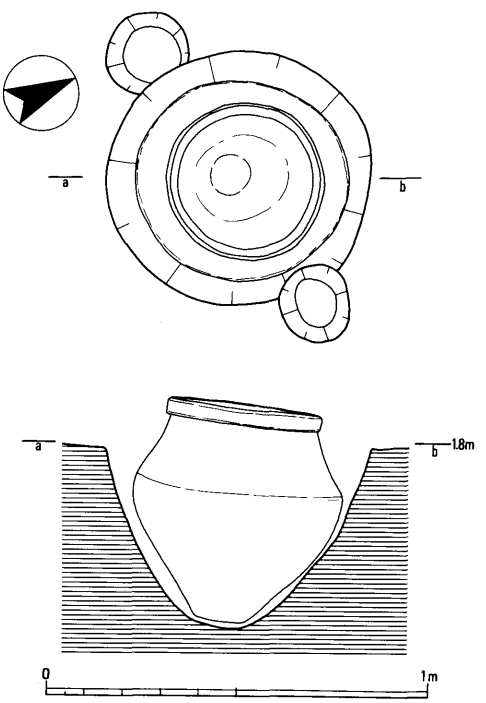
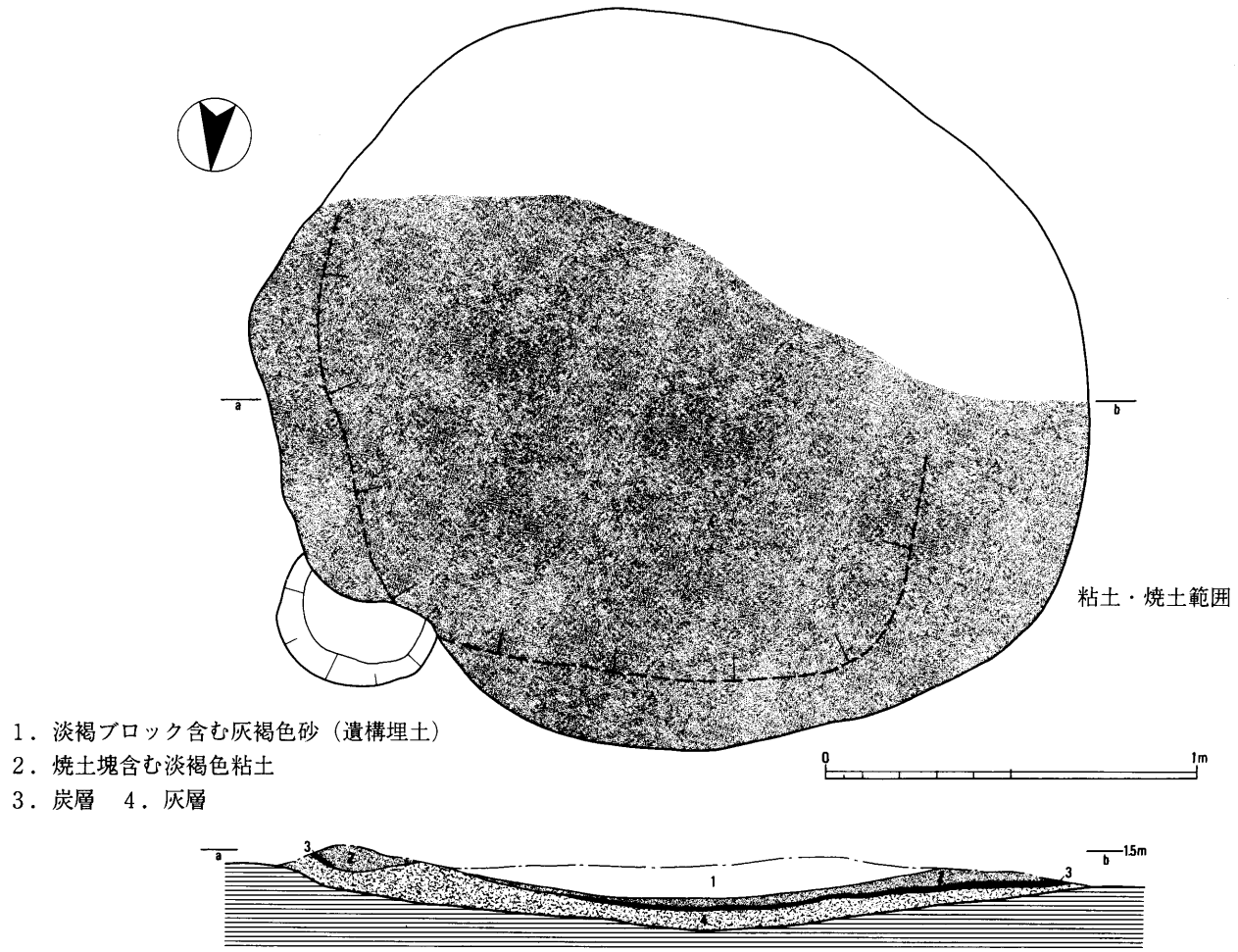


fig. 29　埋甕SK263　平面・立面図（1:20）



fig．30　焼土坑 SF77　平面・土層断面図（1:20）

7.6ｍ）を確認した。対応するピットが認識できないため柱列としたが、実際には掘立柱建物であろう。この柱列に直交する線は、Ｎ１０°Ｅである。

柱列 SA351（fig.32）　調査区南半西部の l6 グリット付近で確認した遺構である。3 間分（約 6.0ｍ）を確認した。対応するピットが認識できないため柱列としたが、実際には掘立柱建物であろう。ピットの底には、根石が認められる。この柱列に直交する線は、Ｎ６°Ｅである。

d　近世の遺構

近世の遺構には、溝・井戸・土坑がある。ピットもいくつか確認できており、建物が存在していたものと考えられるが、まとめることはできなかった。

近世の遺構のほとんどは１８世紀代と考えられるものである。

溝

区画溝と考えられるもののほか、小規模な溝もある。

溝 SD143　調査区西部のｉ４～ｎ５グリットにかけて認められる遺構である。ｋ４グリット付近から、２条となる。

このSD143は、中世後期の溝 SD170 とほぼ同じ場所に同じ方向で設置されているものである。両者の時間的な隔たりを越えた共通性は、注目できる。

井戸

近世の井戸は、結桶のみが見られるもの、陶器枠が伴うもの、などがある。

井戸 SE13（fig.34）　調査区北端のａ３グリット付近で検出した遺構である。長軸約2.1ｍ、短軸約1.8ｍの不整長方形の掘形内に、直径約60㎝の円形の穴が再度穿たれている。その中に、直径 53

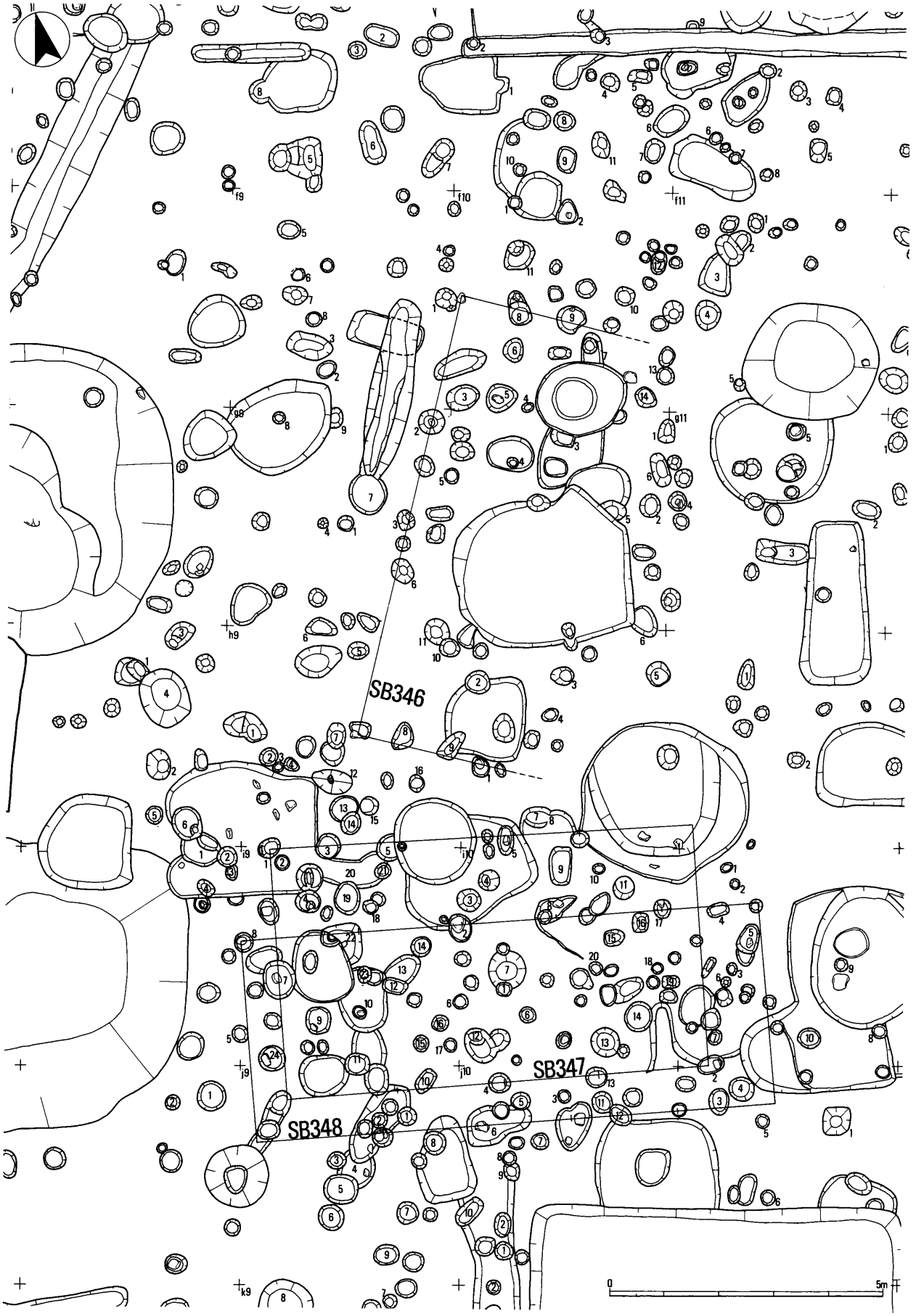
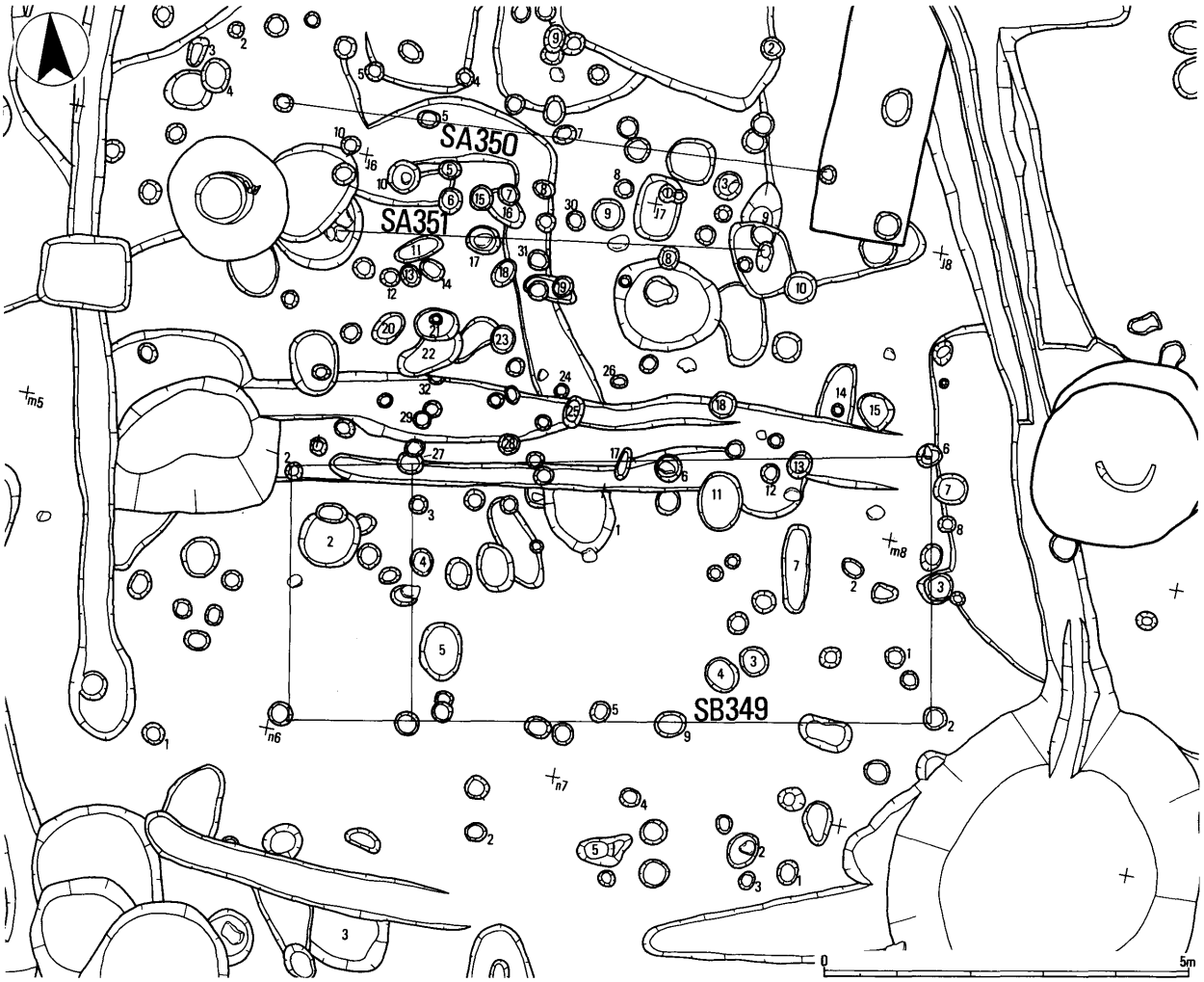


fig. 31　掘立柱建物SB346・347・348　付近実測図（1:100）単独数字はピット番号（グリット毎）



fig．32　掘立柱建物SB349付近実測図（1:100）単独数字はピット番号（グリット毎）

cm、高さ54cm、24枚組の結桶を設置する。さらに、その上縁外部には直径57cmの別の結桶が設置されている。下の結桶には、タガが認められなかった。そのためか、検出の段階にはすでに数枚の板が内側へ倒れ込んでいた。下部結桶の底部は、標高0.1mまで達している。

井戸SE21（fig.35）　調査区北端のa6グリット付近で検出した遺構である。直径約4.8mの不整円形の掘形内に、結桶を用いた井戸枠が3基確認された。

中央の井戸(枠a)は、この井戸の最終段階のものと考えられる。結桶で、直径69cm、残存高108cmである。板材は20枚組で2条のタガを持つ。底から54cm（標高約0.5m）の位置に水が流れ込むための円孔が対面で2個所開けられている。桶の底で標高約－0.2mである。桶内部には結桶の部材と考えられる板が数枚転落しており、この桶の上部にさらにもう一つ桶があったものと考えられる。この桶の周囲には、松の枝を中心とした木ぎれが込められていた。

枠aの東には枠bがある。結桶で、推定直径49cm、高さ59cmである。板材は9枚のみ残っていた。おそらく、桶a設置時に破壊されているものと考えられる。桶の底で標高約0mである。

枠bの東には枠cがある。やはり結桶で、腐朽が激しい。直径49cm、残存高約50cmで、タガが1条残っていた。桶の底で標高約0.5mである。

井戸SE48　調査区北半西部のe3グリットで検出した遺構である。長軸約1.3m、短軸約0.9mの楕円形の掘形内に、直径約45cmの結桶を配置する。この井戸は、近代の基礎近くで検出したため、完掘していない。

井戸SE79（fig.36）　調査区北半東部のe11

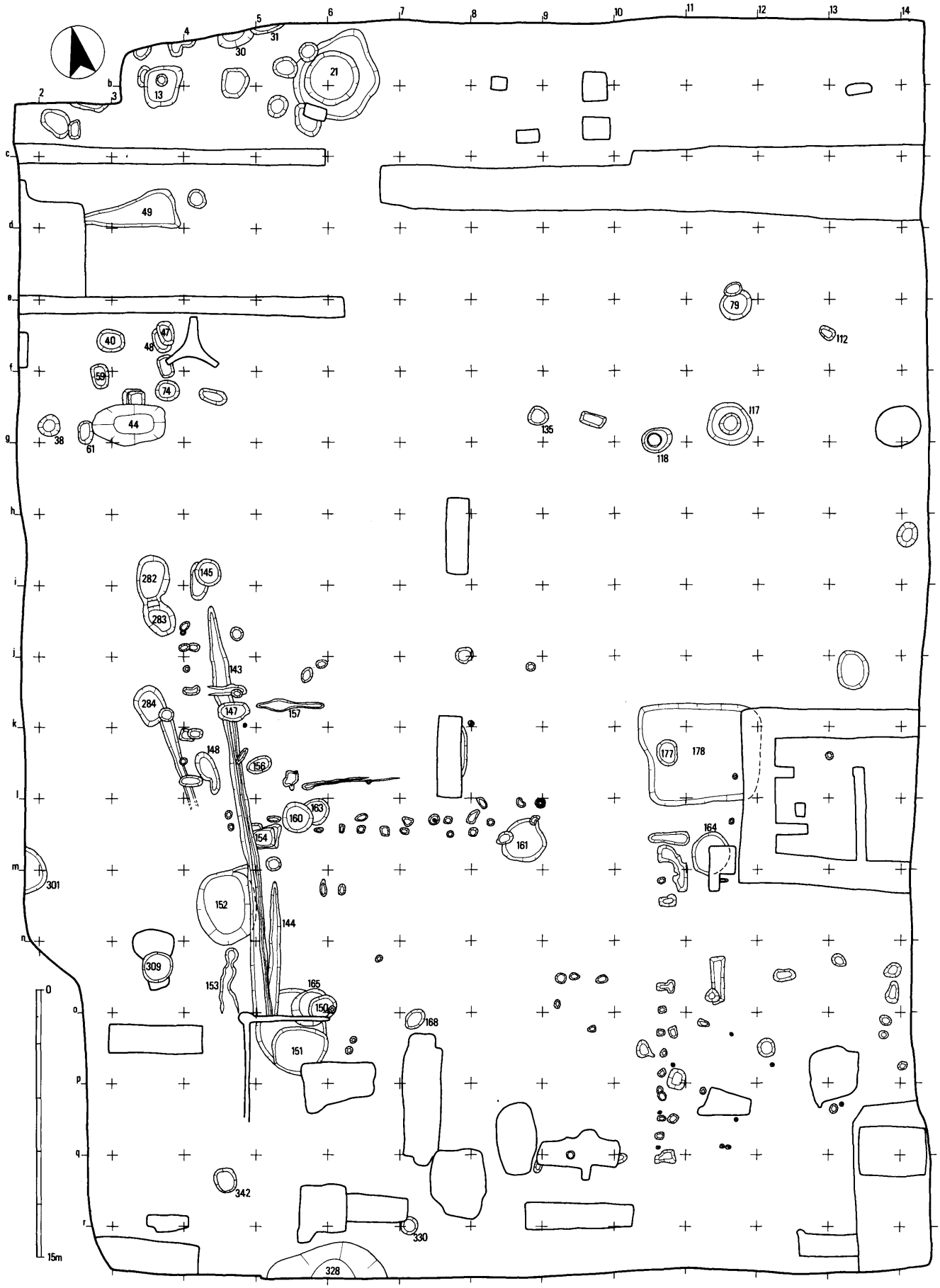


fig. 33　近世～近代遺構面　平面図（1:300）遺構は略号を省いた

グリット付近で検出した遺構である。直径約1.2mの円形の掘形内に、直径59cm、残存高約110cm、17枚組の結桶を配置する。タガは竹製で、3個所に認められる。桶の底で標高約－0.1mである。

井戸SE118　調査区北半東部のf10グリット付近で検出した遺構である。直径約1.7mの不整円形の掘形内に、地元で「タタキ」と呼んでいるセメント状の枠がある。この井戸も完掘していない。

井戸SE152（fig.37）　調査区南半西部のm4グリット付近で検出した遺構である。長軸約3.8m、

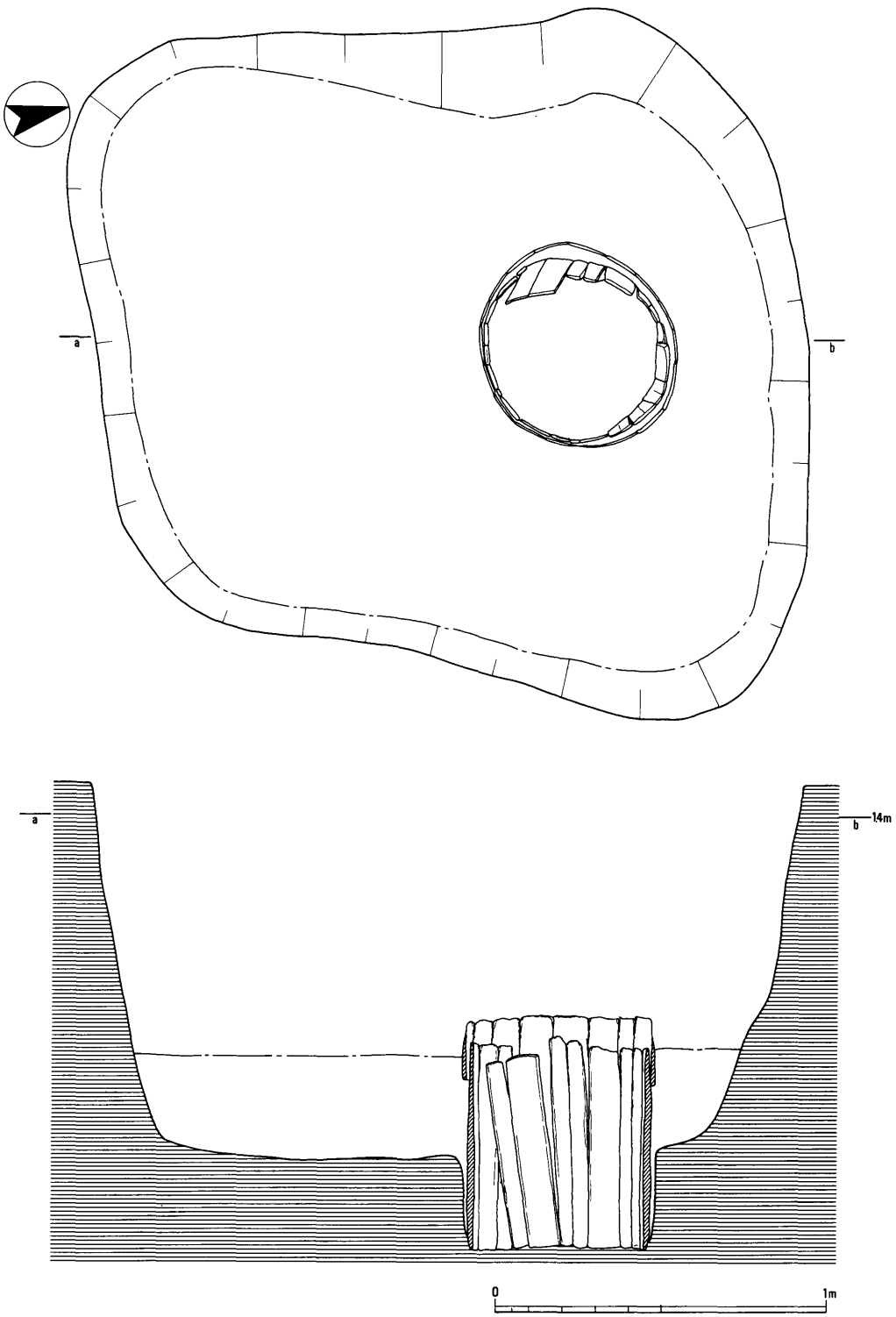
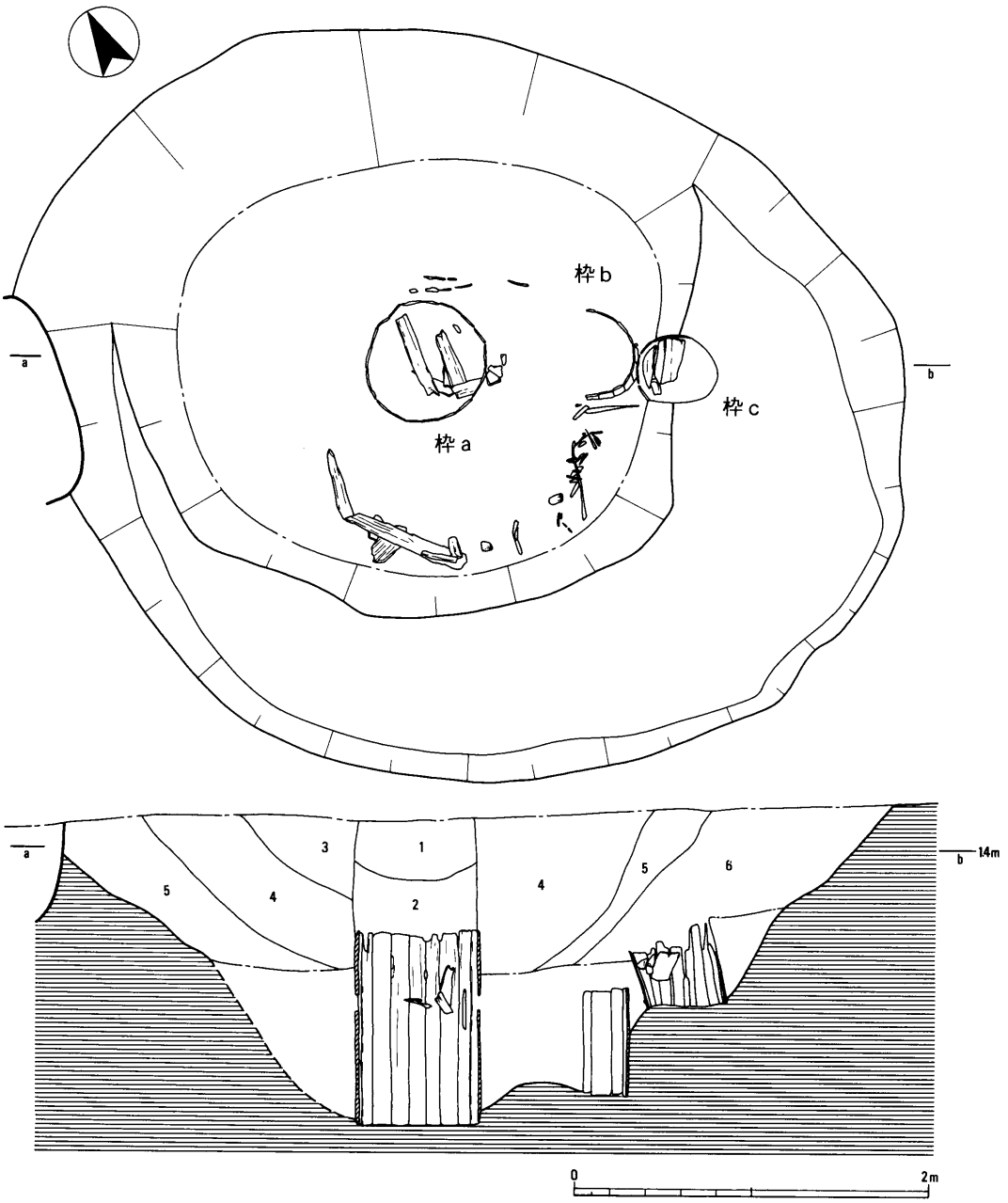


fig.34　井戸SE13　平面・断面図（1:20）

短軸約2.8ｍの楕円形の掘形内に、陶器製井戸枠２段、結桶３段の井戸（枠ａ）と、結桶のみが残存したもの（枠ｂ）が見られる。

枠ａは陶器枠と結桶とを組み合わせている。上段の陶器枠は、下段を正立、上段を倒立させている。下段の口縁部下にはタガを写した装飾がある。この外側には、破損した陶器枠を用いて補強している。

陶器枠下部の結桶は、３個が重ねられている。下のものから順に外側を覆う状態で重ねられる。上段桶は、直径57㎝、残存高約20㎝で、土層から確



１．淡褐色砂
２．灰褐色砂
３．炭まじり灰褐色砂
４．黄褐色砂
５．褐色砂
６．黄灰まじり褐色砂

fig．35　井戸SE21　平面・土層断面図（1:40）

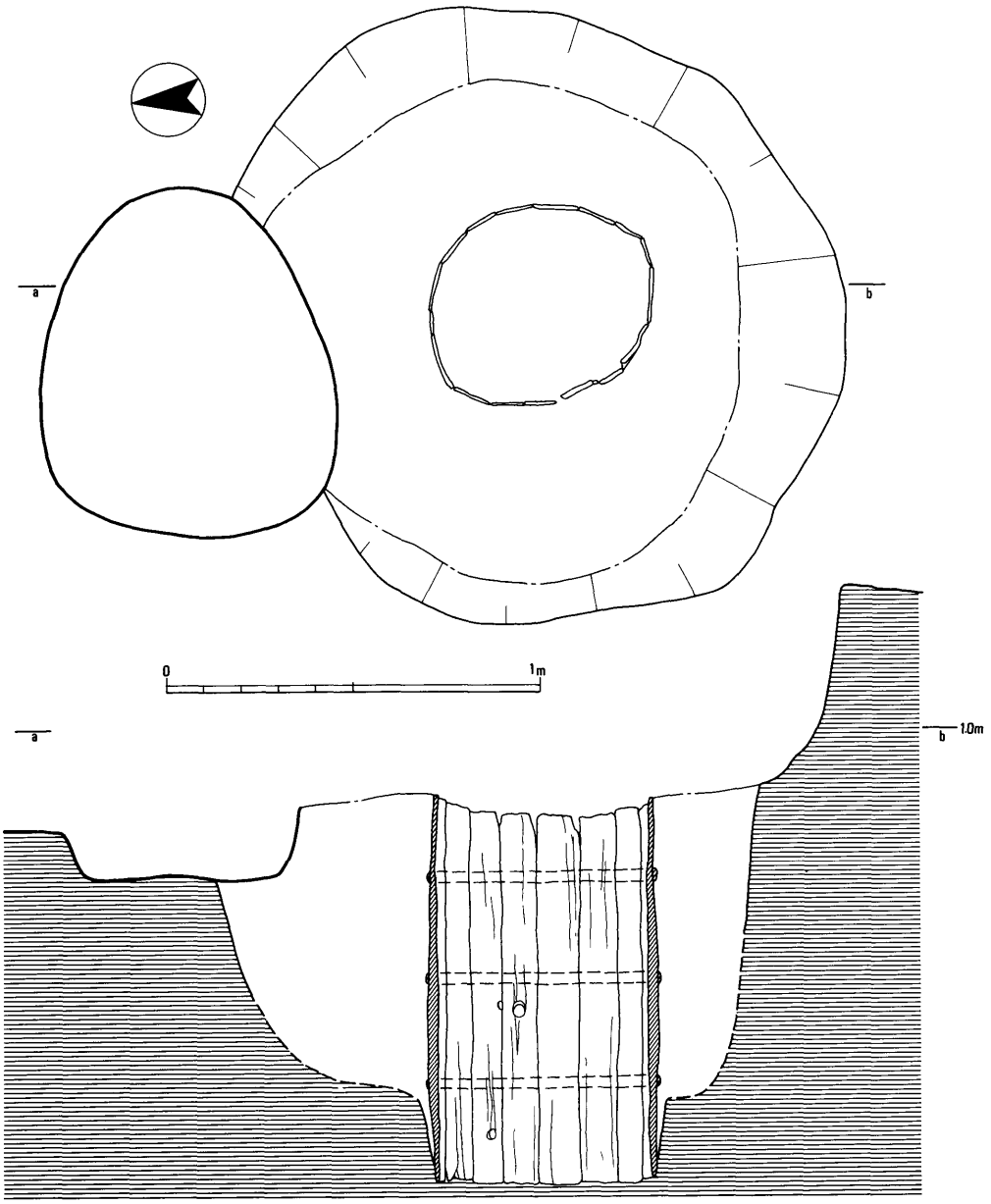


fig. 36　井戸 SE17　平面・断面図（1:20）

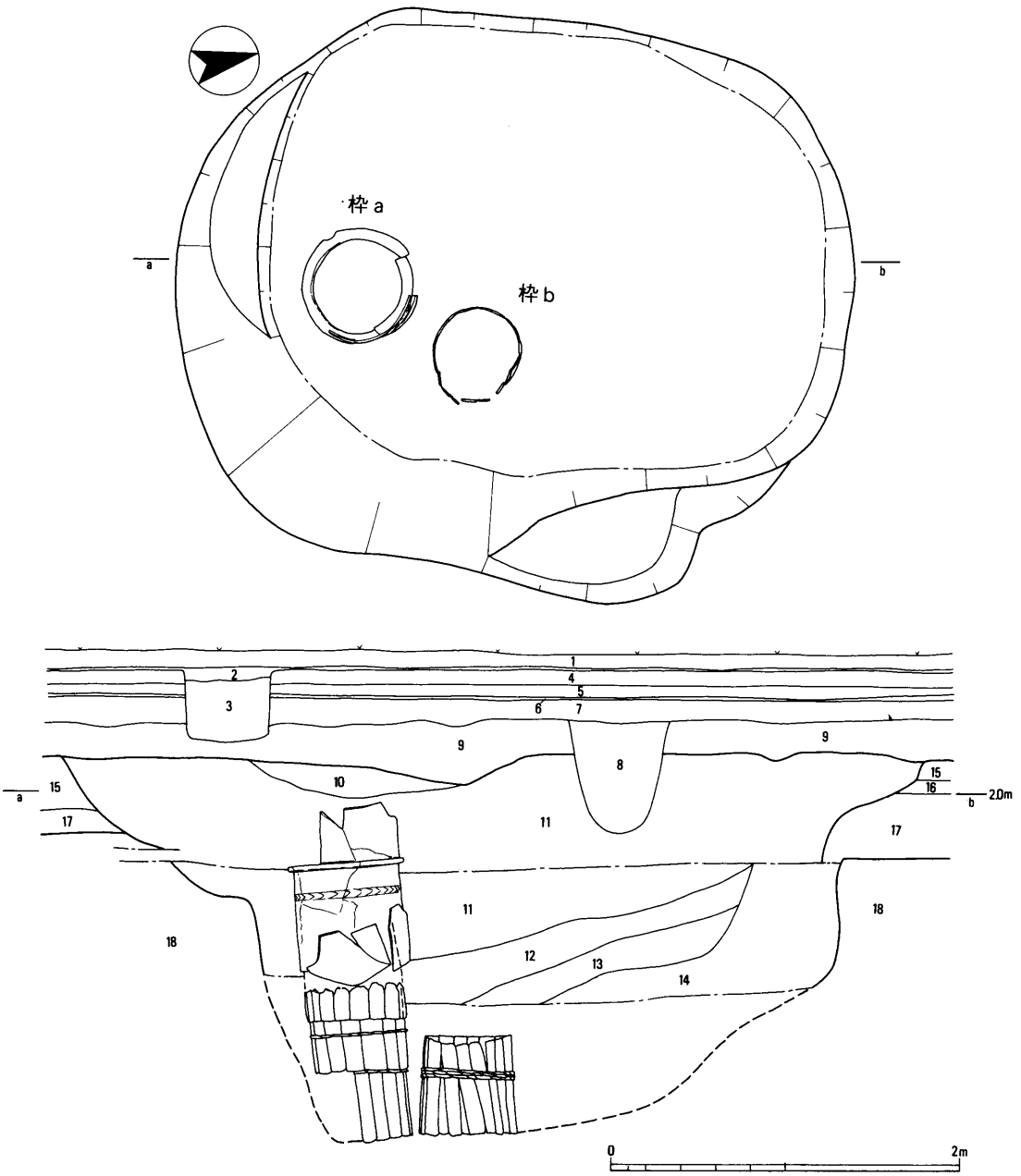
認できる木枠ラインは、下段陶器枠の内側に入り込んでいる。中段桶は直径 54 ㎝である。下段桶は南半部がなぜか存在していなかったが、直径約 52 ㎝のものと考えられる。桶の底で標高約 0 mである。

枠 b は、枠 a 以前のものと考えられる。結桶は直径51㎝、高さ48㎝で、外面には竹製のタガが 3 条ある。この 3 条のタガは一箇所に寄っているが、桶が崩れたためであろう。桶の底で標高約0mである。

井戸 SE160（fig. 38）　調査区南半西部の I5 グリット付近で検出した遺構である。直径約 1.7 m の円形の掘形内に、陶器製井戸枠と結桶とを組み合わせたものが設置される。桶の底で標高約－ 0.3 m である。

結桶は、直径 59 ㎝、高さ114㎝、19 枚組で、竹製のタガが 3 条認められる。上から 1 ・ 2 条目のタガ間の標高約 0.4 m の位置には、水が流れ込むための円孔が対面で 2 個所開けられている。結桶の周囲には、松の枝などがぎっしり詰められていた。

結桶の上部は直径約 78 ㎝、高さ約40㎝の「タタキ」が施される。さらに上部には、陶器製の枠が 2 段分認められる。上段陶器枠の上からは、検出時に破損したもの陶器枠があり、さらにもう 1 段分あっ



1．表土（グランド整地土）
2．暗褐色土
3．礫（基礎掘形）
4．黄橙色粘土
5．暗褐色土
6．黄橙色粘土
7．茶灰色砂
8．礫まじり褐色砂質土
9．淡茶灰砂
10．淡黄灰砂
11．淡灰褐色砂
12．淡灰黄色砂
13．淡灰色砂
14．淡灰砂と淡黄色砂の互層
15．褐色砂（近世遺構基盤）
16．明褐色砂
17．褐～黒褐色砂（中世包含層）
18．黄色砂（基盤層）

fig. 37　井戸 SE152　平面・土層断面図（1:40）

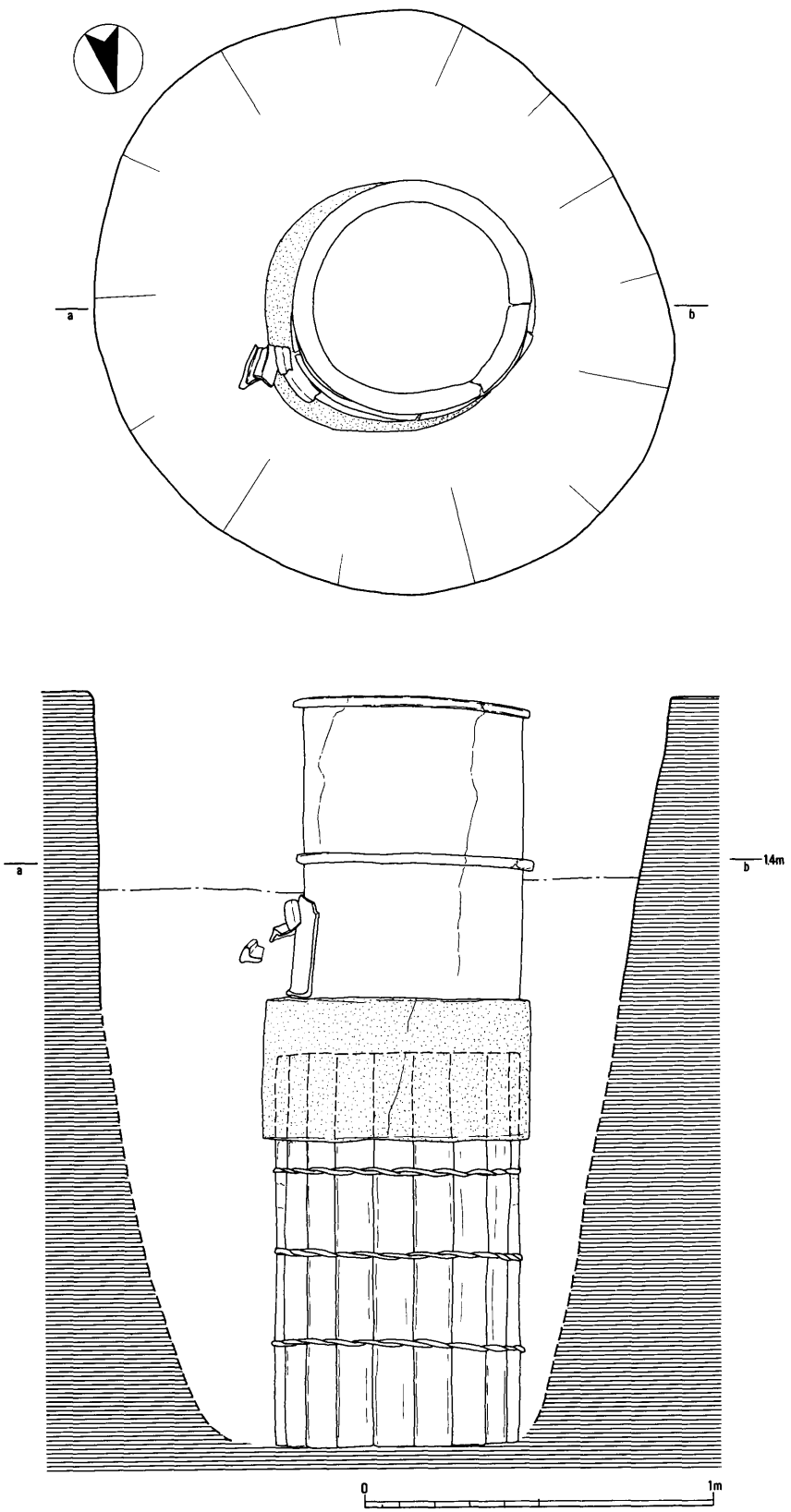


fig. 38　井戸SE160　平面・断面図（1:20）

たものと考えられる。この陶器枠は上下とも正立させている。下段陶器枠の周囲には、破損した陶器枠で補強されていた。

なお、SE160の東にある土坑SK163は、同様な掘形を持つものであるが、井戸枠はない。この土坑を掘り直したものがSE160ではないかと考えられる。

井戸SE161　調査区中央南部のl8グリットで検出した遺構である。中央部に「タタキ」の枠が認められ、意図的に埋められていた。この井戸も完掘していない。

井戸SE177・178　調査区中央東部のｋ11グリット付近で検出した遺構である。東西約6.2ｍ、南北約5.3ｍの不整長方形の巨大な掘形を持つ。しかし、SE177としたものにも枠は存在しなかった。

井戸SE282（fig.39）調査区西部のｈ3グリット付近で検出した遺構である。南に接する井戸SE283との前後関係は不明である。長軸約2.1m、短軸約1.7mの不整楕円形の掘形内北寄りに、二重の結桶を配置する。

外側の結桶は、直径55㎝、残存高62㎝、18枚組で、北東の一箇所の板材底部を切り込み、水が流れ込む施設とする。タガは竹製で、3条ある。内側の結桶は、直径46㎝、残存高52㎝、14枚組で、竹製のタガがやはり3条ある。結桶の底は、標高約0.2ｍまで達している。

井戸SE328（fig.40）調査区南端のｒ6グリット付近で検出した遺構である。大部分が調

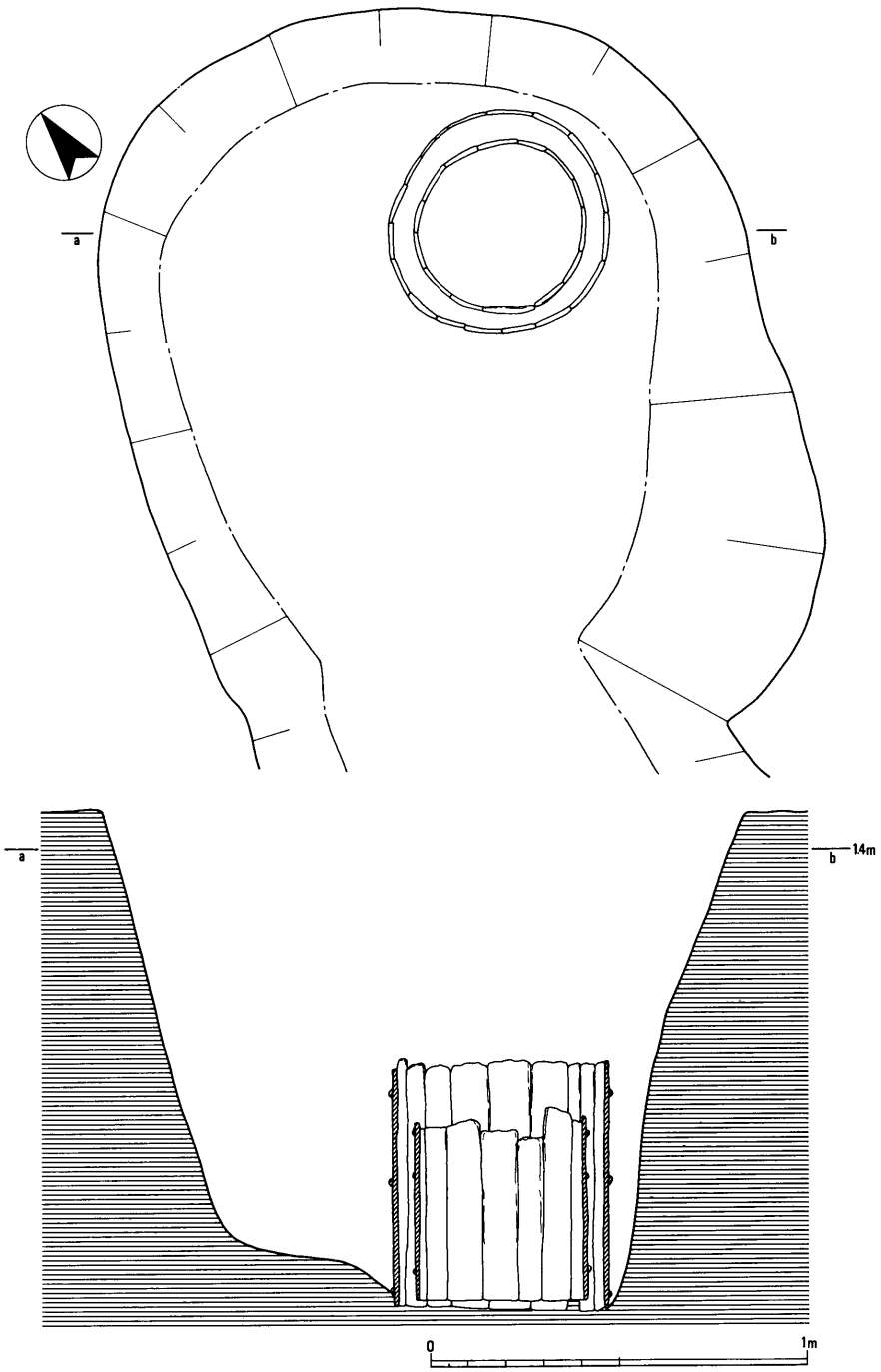


fig. 39　井戸SE282　平面・断面図（1:20）

査区外へと続いている。掘形は、直径5m以上の円形になるものと思われる。中央部に結桶が認められる。

結桶は、直径約60cmである。調査区の南端にあたるため、完掘は避けた。

土坑

近世の土坑は、廃棄土坑と考えられるもののみである。

土坑SK49　調査区北半西側のｃ３グリット付近で検出した遺構である。不整形な形態で、長い部分で約5.0mである。土坑内からは、塩焼壺や大甕などの土器類が多く出土した。

土坑SK44　調査区北半西側のｆ３グリット付近で検出した遺構である。東西約3.9m、南北約2.0mで、土坑底では長方形状を呈する。不整形な形態で、長い部分で約5.0mである。土坑内からは、磁器椀や陶器小皿などの土器類が多く出土した。

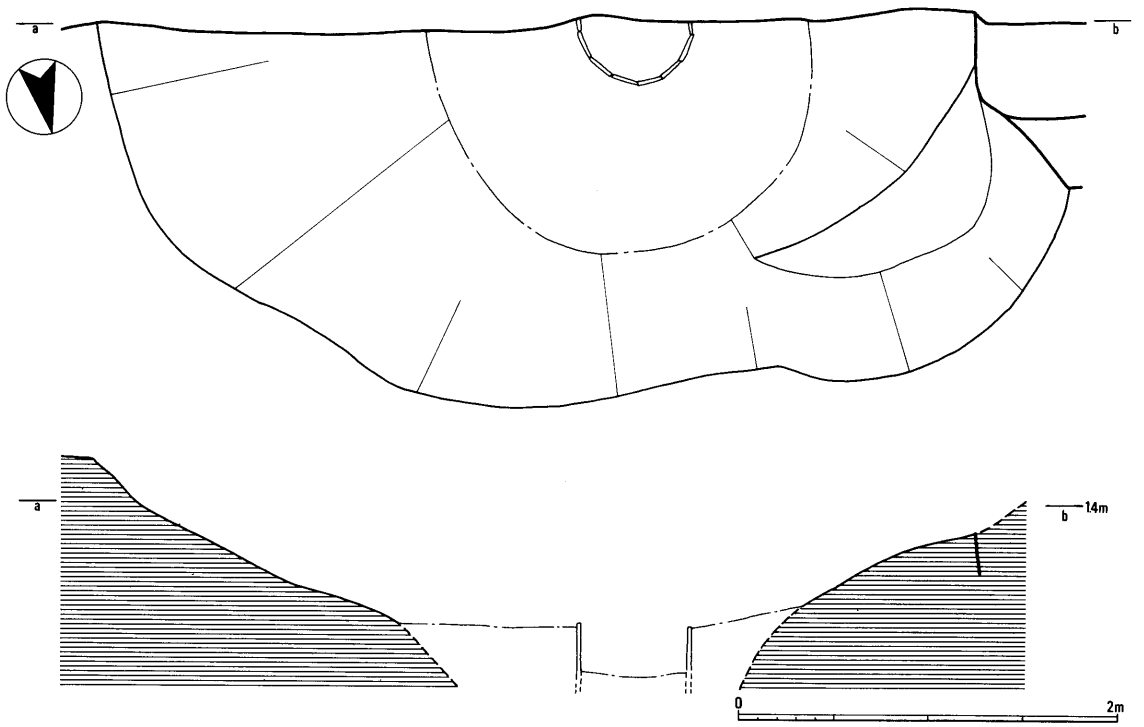


fig. 40　井戸 SE328　平面・断面図（1:20）

e　近代以降の遺構

近代以降の遺構には、井戸のほか、津高等女学校時代の建物基礎、ゴミ穴などがある。

井戸 SE164　調査区南半東部の l11 グリットで検出した遺構である。直径約2.5 mの円形の掘形である。埋土中には、ガラス片などに混じって七輪の完形品が２個体分出土した。

〈註〉

遺構の時期は、以下の文献を参照した。

- 藤澤良佑「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」（『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990）
- 藤澤良佑「中世瀬戸窯の動態」（『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996）
- 藤澤良佑「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V　1986）
- 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol. 1　1990）
- 伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）

※遺構一覧表について

検出した遺構の一覧を tab.1 ～ 9 に示した。

所属時期のうち、中世については。Ⅰ～Ⅳ期に区分した。この区分については、伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）における土師器皿を基準にした区分による。おおむねの時期として、Ⅰ期が11世紀末頃～12世紀末頃、Ⅱ期が13世紀初頭～14世紀初頭、Ⅲ期が14世紀前葉～ 15世紀前葉、Ⅳ期が 15世紀中葉～16世紀中葉に担当する。なお、Ⅲｂとの区分は今後検討を要し、Ⅳ期は中での区分が可能であるが、今回はできなかった。

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SD1	区画溝	Ⅳ	g 3	
SD2	溝	Ⅲb	a～b 13	
SZ3	落ち込み	Ⅱb	a～b 14	
SZ4	落ち込み	不　明	a～b 14	
SZ5	土　坑	不　明	a～b 13	
SZ6	落ち込み	Ⅳ	a 12	
SZ7	土　坑	Ⅳ	a～b 12	
SZ8	撹乱坑	近　代	b 13	
SK9	土　坑	不　明	b 13	
SK10	土　坑	Ⅲb～	b 12	
SK11	土　坑	Ⅲb～	b 12	
SZ12	土　坑	不明（中世）	b 13	
SE13	井　戸	近　世	a～b 3	結桶二重
SD14	溝	Ⅱb	b 1～2	
SZ15	落ち込み	Ⅳ	h 1～2	土器一括
SK16	土　坑	Ⅲb～	b 11	
SK17	土　坑	Ⅳ	a 11	
SK18	土　坑	Ⅲb～	a 11	
SK19	落ち込み	Ⅱb	b 11	
SZ20	落ち込み	Ⅳ	a 10	
SE21	井　戸	近　世	a・b 5～6	
SE22	井　戸	不　明	f 2	
SK23	土　坑	Ⅳ	b 2	
SD24	溝	Ⅳ	a 6～8	区画溝？
SK25	土　坑	Ⅱb	d 2	
SD26	溝	Ⅳ	b・c 2	
SD27	落ち込み	Ⅱb	b 3	
SK28	土　坑	近　世	a 3	
SK29	土　坑	不　明	a 4	
SK30	土　坑	近　世	a 4	
SK31	土　坑	近　世	a 5	
SK32	土　坑	不　明	e 2	
SK33	土　坑	不　明	e 2	
SK34	土　坑	Ⅱb	e 2	
SK35	土　坑	Ⅱb	f 1	
SK36	土　坑	Ⅱb	f 2	
SK37	土　坑	不　明	f 1～2	
SK38	井　戸	近　世	f 2	
SK39	土　坑	Ⅱb	g 1～2	
SK40	土　坑	近　世	e 2～3	

tab. 1　遺構一覧表（1）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SK41	土　坑	Ⅲb～	d 7～8	
SK42	土　坑	Ⅲb？	e 2	
SK43	土　坑	Ⅲb～	f 2	
SK44	土　坑	近　世	f 2～3	土器一括
SD45	区画溝	Ⅲb～	g・h 3	土層に集石
SD46	溝	Ⅲb～	g 3	
SK47	土　坑	近　世	e 3	
SE48	井　戸	近　世	e 3	結桶
SK49	土　坑	近　世	c 3	
SK50	土　坑	Ⅲb～	d 3	
SD51	溝	Ⅲb	d 3～	
SK52	土　坑	不　明	c 4	
SE53	井　戸	Ⅲb～	c・d 11	結桶・挙曲物
SZ54	大土坑	Ⅳ	a・b 8・9	ＳＺ 20 より古
SK55	土　坑	Ⅲb～	b 10	
SD56	溝	Ⅲb～	b 9～10	
SK57	土　坑	Ⅲb	e 3	
SK58	土　坑	Ⅲb～	e 2	
SE59	井　戸	近　世	e・f 2	
SZ60	大土坑	Ⅲb～Ⅳ	f・g 3～5	西部に土器多量　集石あり
SK61	土　坑	近　世	f 2	
SD62	溝	Ⅲb	f 2	
SD63	溝	Ⅳ	c・d 5	
SD64	溝	Ⅲb～	c・d 5	
SK65	土　坑	近　世	f 3	
SK66	土　坑	Ⅲb～	d 11	
SD67	溝	Ⅲb～	b 4	
SK68	土　坑	Ⅳ	b 9	
SK69	大土坑	Ⅲb～	a 7	
SK70	土　坑	Ⅲb～	b 7	
SK71	土　坑	Ⅳ	b 7	
SK72	土　坑	Ⅳ	b 6	
SZ73	大土坑	Ⅳ	e・f 4～6	
SE74	井　戸	近　世	f 3	
SE75	井　戸	近　世	f 3	
SD76				ＳＤ 176 に同じ
SF77	カマド	Ⅳ	d 7	焼土面、炭層
SE78	井　戸	Ⅲb～	d 11	方形木枠　曲物
SE79	井　戸	近　世	e 11	結桶
SK80	土　坑	Ⅲb～	h 3・4	ＳＤ１より古

tab. 2　遺構一覧表（2）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SE81	井　戸	Ⅲb～	b 7	
SK82	土　坑	Ⅲb	h 4	
SD83	溝	Ⅳ	g 5～7	
SK84	土　坑	Ⅱb	h 4	
SK85	土　坑	Ⅱb	h 1	
SZ86	落ち込み	Ⅲb	h・g 6・7	
SK87	土　坑	Ⅲb	d 8	
SK88	土　坑	Ⅲb	e 11	
SZ89	落ち込み	Ⅳ	d 10	
SK90	大土坑	Ⅳ	f～h 7・8	
SK91	土　坑	Ⅲb	d・e 6	
SK92	土　坑	Ⅲb	e 7	
SZ93	落ち込み	Ⅱb	c・d 10	
SK94	土　坑	Ⅳ	d 10	
SK95	土　坑	Ⅱb	d 10	
SK96	土　坑	Ⅲb	d 9	
SK97	土　坑	Ⅱb	d 9	
SK98	土　坑	Ⅱb	d 8	
SK99	土　坑	Ⅱb	d 8	
SK100	土　坑	Ⅲb～	d 8	
SK101	土　坑	Ⅱb	d・e 8	
SK102	土　坑	Ⅱb	e 8	
SK103	土　坑	Ⅳ	e 8	
SK104	土　坑	Ⅳ	e 8	
SK105	土　坑	Ⅳ	e 6	
SK106	土　坑	不　明	e 7	
SK107	土　坑	Ⅲb	e 9～10	
SK108	土　坑	Ⅲb	e 10～11	
SK109	土　坑	Ⅱb	e 11	
SK110	土　坑	不　明	e・f 11	
SD111	溝	不　明	e 10～13	
SK112	土　坑	近　世	e 12・13	
SK113	土　坑	Ⅲb～	e 13	
SK114	土　坑	Ⅲb～	d 13	
SK115	土　坑	Ⅳ	f・g 9	溝状、土器一括
SK116	土　坑	Ⅱb？	e・f 10	
SE117	井　戸	近　世	f 11	
SE118	井　戸	近　代	f・g 10	タタキの井戸枠
SK119	土　坑	Ⅳ	g・h 10	焼土含む
SD120	土　坑	Ⅱb	g・h 11	

tab. 3　遺構一覧表（3）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SK121	土　坑	Ⅳ	h 11・12	
SK122	土　坑	不　明	g 8	
SK123	土　坑	Ⅳ	f・g 9	
SK124	土　坑	Ⅱb	f 7	
SK125	土　坑	Ⅳ	e 6	
SK126	土　坑	Ⅳ	e 6	
SK127	土　坑	Ⅳ	b 8	
SK128	土　坑		a 7・8	
SK129	土　坑	Ⅲb～	h 7	
SD130	溝	Ⅱb	f・g 6	
SK131	土　坑	Ⅲb～	h 9・10	
SK132	土　坑	Ⅲb～	h 9	
SK133	土　坑	Ⅲb～	f 12	
SK134	土　坑	Ⅳ	d 11	
SK135	土　坑	近　世	f 8・9	
SK136	土　坑	Ⅳ	h 2	
SZ137	大土坑	Ⅳ	g 13	
SD138	溝	近　世	e 13・14	
SZ139	大土坑	Ⅳ	h 13・14	
SZ140	落ち込み	不　明	g 10	
SD141	溝	Ⅲb～	f・g 12	
SK142	土　坑	Ⅱb	b 8	
SD143	溝	近　世	i～o 4・5	
SD144	溝	近　世	m・n 5	
SK145	井　戸	近　世	h・i 4	
SK146	土　坑	Ⅳ	i 4	
SK147	土　坑	近　世	j 4	
SK148	不　明	不　明	不明	
SK149	土　坑	Ⅳ	m 5	
SK150	土　坑	近　世	n・o 5	
SE151	井　戸	近　世	n・o 5	
SE152	井　戸	近　世	m 4	土器枠・結桶
SK153	土　坑	近　世	n 4	
SK154	土　坑	近　世	l 5	
SK155	土　坑	近　世	l 5	
SK156	土　坑	近　世	k 4・5	
SK157	土　坑	近　代	k 5	
SK158	土　坑	近　世	j 5	
SK159	土　坑	近　世	j 5	
SE160	井　戸	近　世	l 5	土器枠・結桶、タタキ

tab. 4　遺構一覧表（4）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SE161	井　戸	近　世	18	
SD162	溝	近　世	k 5 ・ 6	
SK163	土　坑	近　世	15	井戸の未完成品？
SE164	井　戸	近　代	111	七輪２個体分
SE165	井　戸	近　世	n ・ o 5	結桶
SK166	大土坑	Ⅳ	p ・ q 11 ～ 12	焼土多量
SK167	土　坑	Ⅲb	o 10	石製スタンプ
SK168	土　坑	Ⅳ	n ・ o 7	
SK169	土　坑	Ⅲb～	i 4	
SD170	区画溝	Ⅳ	i 4 ～ n 5	
SK171	土　坑	不　明	h 4	
SK172	土　坑	Ⅱb～	h 4	
SK173	土　坑	Ⅱb	i 5	瓦器片あり
SD174	溝	Ⅳ	i 6 ～ m 8	ＳＫ 229 に接続　五輪塔　ＳＤ 237より新
SK175	大土坑	Ⅳ	i 7	ＳＫ 184 より新
SD176	溝	Ⅱb	c 9 ～ k 2	区画溝？土器多量　未使用製品含む
SE177	井　戸	近　世	k 10	
SE178	井　戸	近　世	k 10 ～ 11	
SK179	土　坑	Ⅲb	i 4 ・ 5	
SK180	土　坑	Ⅲb？	j 5	ＳＤ 176 の遺物含む？
SK181	土　坑	Ⅳ	p 6	
SK182		Ⅳ	j ・ k 7	ＳＫ 192 の上部埋土
SK183	土　坑	Ⅳ	h ・ i 8	
SK184	大土坑	Ⅳ	i 7	ＳＫ 175 より古　五輪塔
SK185	土　坑	Ⅳ	h ・ i 8 ～ 9	
SK186	土　坑	Ⅳ	h ・ i 9	
SK187	土　坑	Ⅲb	i 9 ・ 10	
SK188	土　坑	Ⅳ	o 4	
SD189	溝	Ⅳ	0 4	
SZ190	溝	Ⅱb	k 6 ～	上層にはⅣ期の包層
SK191	土　坑	Ⅲb？	k 5	ＳＤ 176 の遺物多く含む
SK192	土　坑	Ⅳ	k 6 ・ 7	土器一括、二枚具多い
SK193	土　坑	Ⅲb～	i ・ j 11	
SK194	土　坑	Ⅱb	k 5	
SZ195	溝	Ⅱb	j ・ k 4 ～ 5	上層にはⅣ期の包含層
SK196	土　坑	不　明	j 6	
SK197	土　坑	Ⅳ	17	
SK198	土　坑	Ⅲb	17	
SK199	土　坑	Ⅲb	17	
SK200	土　坑	Ⅳ	h ・ i 10 ～ 11	焼土含む、土器一括、大窯期

tab. 5　遺構一覧表（5）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SZ201	落ち込み	Ⅳ	i 10	
SK202	落ち込み	Ⅳ	i 10～11	
SZ203	落ち込み	Ⅲb～	i・j 5	
SK204	土　坑	Ⅳ	o・p 5	
SE205	井　戸	Ⅳ	p・q 6～7	曲物枠か？
SD206	溝	Ⅳ	1・m 5～8	区画溝？　2条分
SD207	溝	Ⅲb？	k・16	
SK208	土　坑	Ⅲb～	15	
SK209	土　坑	Ⅳ	15	SD 170より古　土器一括
SK210	土　坑	Ⅳ	i 11～12	
SD211	溝	不　明	m 6	
SE212	井　戸	Ⅲb～	i 11～12	曲物枠か？
SD213	溝	不　明	c・d 10	
SD214	溝	Ⅳ	j 6～m 8	SD 174に同じ
SK215	土　坑	Ⅲb～	o 7	
SK216	土　坑	Ⅲb～	o 8	
SK217	土　坑	Ⅳ	j 13	
SK218	土　坑	Ⅲb～	j 12	
SK219	土　坑	Ⅳ	i・j 13	
SZ220	落ち込み	Ⅳ	i 13	
SD221	溝	Ⅳ	j 13	
SZ222	落ち込み	Ⅱb？	j 12	
SK223	土　坑	Ⅲb～	i 12	
SD224	区画溝	Ⅱb？	n 5～6	SD 170と一連
SD225	溝	Ⅲb～	n 5	
SK226	土　坑	Ⅳ	i 6	
SZ227	落ち込み	Ⅲb	1・m 8	
SD228	溝	Ⅳ	1 9～10	
SK229	大土坑	Ⅳ	m・n 8～9	SD 174が接続　SD 265との前後不明
SK230	大土坑	Ⅳ	m 10	SK 229との前後不明
SD231	溝	Ⅳ	m 9	
SK232	土　坑	Ⅳ	m 9	
SK233	土　坑	Ⅳ	m 10	
SD234	溝	Ⅲb	1・m 10	
SK235	土　坑	Ⅲb～b	p 11	
SZ236	落ち込み	Ⅳ	k 7	
SD237	溝	Ⅲb	j・k 7	SD 174より古　SK 175に接続
SK238	土　坑	Ⅲb	j 6	
SK239	土　坑	Ⅲa	j 6	
SK240	土　坑	Ⅱb	j 6	

tab. 6　遺構一覧表（6）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SK241	大土坑	Ⅳ	k・l 12～13	2基分、人骨多　五輪塔　古瀬戸中期遺物
SK242	土　坑	Ⅳ	n 10	
SD243	溝	Ⅳ	n 11～12	SK 261との前後不明
SE244	井　戸	Ⅳ	l 12	
SZ245	落ち込み	Ⅲb	o・p 7	
SK246	土　坑	Ⅳ	p 7	
SD247	溝	Ⅳ	m 12	
SD248	溝	Ⅲb～	m 11	
SK249				不明
SK250	土　坑	Ⅲb～	p 9	
SK251	土　坑	Ⅲb～	l 11	
SE252	井　戸	Ⅳ	j 8	
SE253	井　戸	Ⅲb	q 8～9	
SD254	区画溝	Ⅳ	o 8～n 13	SK 262より新、SK 276との前後不明
SD255	区画溝	Ⅳ	o 8～12	SK 262より新
SK256	土　坑	Ⅳ	l・m 12	
SK257	土　坑	Ⅳ	p・q 12	
SK258	土　坑	Ⅲb	p 11	
SK259	土　坑	Ⅳ	l 10	
SK260	土　坑	Ⅲb～	j 9	
SK261	大土坑	Ⅲb～	k・l 13～14	五輪塔、人骨片多　上部に集石
SK262	大土坑	Ⅲb	o 10～11	SD 254・255より古、下部に立木木材有
SK263	埋　甕	Ⅳ	o 11	常滑大甕の埋設遺構
SK264				不明
SD265	区画溝	Ⅳ	n 7	SD 224と一連
SD266	溝	Ⅱb	k 4	
SK267	土　坑	Ⅱb	l 4	
SZ268	溝	Ⅱb	k 5	SZ 195に同じ
SK269	土　坑	Ⅲb	n 10	
SD270	溝	Ⅲb	p・q 1	
SK271	土　坑	Ⅲb	o 12	
SD272	溝	Ⅳ	j 13	SZ 241出土練鉢と接合
SK273	土　坑	Ⅲb	n 5	
SK274	土　坑	Ⅲb～	p 4	
SK275	土　坑	Ⅲb	o 1 3	
SK276	大土坑	Ⅳ	n・o 13～14	SK 261との前後不明　上部に集石
SK277	土　坑	Ⅲb～	q 11	
SK278	小土坑	Ⅱb	k 10	底を抜いた鍋を2個体重ねて、中に円礫
SK279	土　坑	Ⅲb～	n 11	
SD280	溝	Ⅱb	k～m 9～10	

tab. 7　遺構一覧表（7）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SD281	溝	近　世	l・k 3	
SE282	井　戸	近　世	h・i 3	結桶２重
SE283	井　戸	近　世	15	
SK284	土　坑	近　世	13	
SD285	溝	Ⅳ	h・i 1～2	瓦質香炉
SD286	溝	Ⅲb～	i 1～2	
SK287	土　坑	Ⅳ	i 2	焼土・灰層あり・カマド？
SK288	土　坑	Ⅳ	j 1～2	
SE289	井　戸	Ⅲb～	k 2	方形木枠内に八角形に組んだ木枠、上部に集石
SK290	井　戸	Ⅲb～	k 1～2	
SK291	土　坑	Ⅲb～	i・j 1～2	灰層
SE292				ＳＥ 282 に同じ
SE293				ＳＥ 283 に同じ
SK294	土　坑	bⅢ～	i・j 4	
SK295	土　坑	不　明	j 4	
SK296	大土坑	Ⅳ	k 2～3	ＳＺ 299・ＳＫ 303 により新
SK297				ＳＫ 284 に同じ
SK298	土　坑	Ⅳ	i 3	
SZ299	土　坑		j・k 2～3	
SE300	井　戸	近　世	k 4	
SE301	井　戸	近　世	l・m 2	
SD302	溝	Ⅳ	l 2～3	
SK303	土　坑	Ⅲb	j 3	ＳＺ 299 下
SD304	溝	Ⅲb～	m 1～3	ＳＤ 310 の土器多く含む
SK305	大土坑	Ⅳ	o・p 3～4	方形のプラン？
SK306	大土坑	Ⅳ	m 3	ＳＫ 296 と一連？
SD307	区画溝	Ⅳ	n 2～m 4	礫群あり　ＳＤ 313 と並行
SK308	土　坑	bⅢ～	l・m 2	
SE309	井　戸	近　世	n 3	
SD310	溝	Ⅱb	m 1～2	土器一括　ＳＺ 190 と一連？　ＳＤ 176 に並行
SK311	落ち込み	Ⅳ	m 2	
SD312	溝	Ⅳ	q・r 3～4	
SD313	区画溝	Ⅳ	o 2～n 4	ＳＤ 307 と並行
SZ314	落ち込み	Ⅳ	k 1～2	ＳＤ 176 の遺物混入
SE315	井　戸	Ⅳ	k 2	枠確認できず　曲物枠か？
SK316	土　坑	Ⅲb～	q 3	
SK317	土　坑	Ⅲb	r 5	ＳＤ 312 より古
SK318	土　坑	不　明	q 4	
SK319	土　坑	不　明	q 4	
SK320	土　坑	Ⅱb	r 4	瓦質羽釜

tab. 8　遺構一覧表（8）

遺構番号	性　格	時　期	小　地　区	特徴・形状・計測数値など
SK321	土　坑	Ⅲa	r 4	
SK322	土　坑	不　明	r 4	
SK323	土　坑	Ⅳ	o 3～4	ＳＤ313より古
SK324	土　坑	Ⅲb～	r 8	
SK325	土　坑	Ⅱb	r 8	青磁皿
SK326	土　坑	Ⅲb～	r 9	
SK327	土　坑	Ⅱb	r 9	
SE328	井　戸	近　世	r 5～6	結桶枠
SK329	土　坑	Ⅲb～	q 12	
SK330	撹乱坑	近　代	q・r 7	中世の土器混入
SK331	土　坑	Ⅲb～	r 10	
SK332	大土坑	Ⅲb～	r 11	焼土塊多量
SK333	土　坑	Ⅳ	r 11	
SK334	土　坑	不　明	r 11	
SK335	土　坑	Ⅳ	p 13	
SK336	土　坑	Ⅳ	q 12～13	
SK337	土　坑	Ⅱb	q 13	
SK338	土　坑	Ⅳ	q 13	
SK339	土　坑	Ⅳ	r 13	
SK340	土　坑	不　明	q 5～6	
SE341	井　戸	Ⅲb～	q 4～5	井戸枠確認できず
SE342	井　戸	近　世	q 4	
SK343	土　坑	不　明	p 4	ＳＫ188下
SE344	井　戸	Ⅲb～	k 2	
SD345	溝	古墳初頭	q 9～10	土師器壺
SB346	掘立柱建物	Ⅲb～	f 9～h 10	3間？×1間以上
SB347	掘立柱建物	Ⅲb～	i 9～j 10	2間×4間
SB348	掘立柱建物	Ⅲb～	i 9～j 11	2間×5間
SB349	掘立柱建物	Ⅲb～	m 5～8	2間×5間
SA350	柱　列	Ⅲb～	k 5～7	4間分
SA351	柱　列	Ⅲb～	l 5～7	3間分

tab. 9　遺構一覧表（9）

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～

出土した遺物は、整理箱に換算して約485箱である。弥生・古墳時代から近代までのものがある。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表（別冊tab.1～44）も参照されたい。

なお、木製品については、中世後期では結桶・曲物・板材・杭が、近世のものでは結桶がある。しかし、曲物は図示できないほど崩壊しており、結桶はタガの腐朽が激しいため、板状になって残しているに過ぎない。板材にしても、とくに重要と思われるような加工があるわけではない。これらのことから、木製品については、ここでは図示せず、遺構写真を参照していただきたい。

1　中世以前の遺物（fig.44）

包含層から出土したものが大部分で、遺構出土のものは壺(3)のみである。

a　弥生時代以前

弥生時代のものとして、明確なのは石鏃(1)のみである。サヌカイト製である。甑(6)は、弥生時代後期から古墳時代前期までの時期のものであろう。2は口縁部片で、縄文時代後期頃の深鉢の可能性もあるが、小片のため、断定できない。

b　古墳時代

前期から後期のものがある。3はSD345から出土したもので、唯一の遺構出土のものである。口縁部内外面と体部外面に丁寧なヘラミガキを施しており、前期初頭のものであろう。

古墳時代前期に相当する遺物には、他に壺（4・5）、高杯(7～10、13・14)、台付甕(16)がある。12の高杯は、中期のものであろう。

古墳時代後期の遺物には、土師器・須恵器・埴輪および銀環がある。

須恵器には、甕・壺(17～20)、杯類(21～23)がある。17の甕は田辺昭三氏による陶邑編年[1]のTK23型式頃のものと考えられ、5世紀後葉頃のものであろう。23の杯身は、田辺編年のTK217型式頃のものであろう。

土師器には、甕(26)のほか、図示していないが、甑の把手が数点出土している。

埴輪には、土師質のもの(24)と須恵質のもの(25)とがある。

銀環(27)は、全体の1／3程度が残っている。素地は、外面に緑錆が見られることから、銅かあるいは銅を含んだ合金と考えられる。

c　奈良・平安時代

奈良時代の遺物には、土師器高杯(28)が、平安時代の遺物には灰釉陶器(31･32)がある。29も灰釉陶器で瓶子かと考えられる。30は、柱状高台を持ついわゆるロクロ土師器である。

2　中世の土器（fig.45～76）

今回の調査で最も多く確認されたのが、中世の遺物である。便宜的に、14世紀中葉を境として中世前期と後期とに分けて記述する。土器としては、東海系無釉陶器椀（山茶椀、以下、便宜的に椀を山茶椀、皿を山皿と呼称）の藤澤良祐氏による編年（以下、「藤澤山茶椀編年」と呼称）[2]の第8型式以前、南伊勢系土師器の鍋[3]では、第2段階以前を中世前期とする。

a　中世前期（fig.45～51）

中世前期の土器は、SD176に良好なものがある。主立った遺構の出土土器を見ておく。

溝SD176出土土器（33～190）

中世前期の土器のなかで、最もまとまった資料である。

土師器小皿　口径が8.0cm前後、器高が1.0cm前後、重さが25～35gのものである。ロクロあるいは回転台を用いない、いわゆる「手づくね」のものである。出土したものは、全て南伊勢系のものである。

土師器皿　口径が12～13cm、器高が2.5～3.0cm前後、重さが70～90gのものである。小皿と同様、いわゆる「手づくね」で、図示したものは全て南伊勢系のもので、それ以外はごく少量しかない。口縁部外面にはわずかながらヨコナデの痕跡が見ら

れるもので、岩出遺跡群での分類（以下、岩出分類と呼称）[4]によるⅡb期古段階に相当する。

陶器小皿　山皿である。後述する山茶椀と異なり、点数も少なく、また、未使用製品も少ない。

陶器椀　山茶椀である。94点を図示したが、出土個体数は、重量による計算で135点、口縁部計測で118点となることから、破損したものが相当量含まれている筈なので、実質はおそらく200点を越えるものと思われる。藤澤山茶椀編年では、尾張型第6型式を中心に、第7型式まで及んでいる。ただし、出土状況としては、これらはほぼ同時廃棄と思われる様相であった。

産地としては、瀬戸北部のもの(62)を含みながらも、圧倒的大部分は瀬戸南部から猿投・知多のもので、そのなかでも猿投から知多にかけてのものが中心である。渥美産と考えられるものは含まれていない。

出土遺物のなかには、煤を被っているものが多く見られた。煤の付着に一定の法則があるようではない。134は、破断面にも煤が付着している。これらは、例えば火災に遭ったような、無意識のうちに付着したものと考えられる。

これらの山茶椀類は、未使用製品を中心としている。未使用か否かの判断は、内面に磨耗が認められるかどうかによって判断した図示した94点のうち、内面に磨耗痕のあるものは65·137のみであった。

未使用のものには、a；焼成時に上に重ねられた椀の高台が内面見込みに付着した状態で出土したもの（70）、b；重ね焼き時に用いた、灰になった籾殻が付着しているもの(72·76·80·91·154など多数)、c；焼成時に焼け歪んだり、混和していた小石が溶解して穴が空くなどし、とても使用に耐えないもの(68·73·88·91·104·110·114·129·146)、d；底部に意図的な穿孔のあるもの(71)、e；焼成前に内面見込みにヘラで記号を記したもの(61)、などがある。aのうち、とくに70は自然釉で密着しているわけではなく、難なく剥離可能な程度の状態である。とくにa～c・eの要素は、これらの椀が使用後に廃棄されたものではなく、生産元から移動（購入・集積）されたままの状態であることを示す雄弁な事柄である。

椀類のなかには、墨書されたものも数点見られる。66～69がそれである。全て高台内面に墨書がある。66は、1文字目は「丁」で、2文字目は「問」「綱」あるいは「阿」と考えられる。したがって、「丁問」「丁綱」あるいは「丁阿」と書かれているものと考えられる。67は、かなり不鮮明であるが、「录」ではないかと考えている。68は墨書があるが、何か全く分からない。69は、何かの墨書を意図的に消しているものと考えられ、黒く塗りつぶされているものである。

これらの墨書は、67が焼成時に破損しているものであることが示すように、個体としての使用を目的として書かれたものではないといえる。

陶器壺　小形、あるいはミニチュアと呼べそうなものが1点ある（54）。東海系無釉陶器類の胎土と変わりない。

陶器練鉢　東海系無釉陶器の練鉢である。片口を持つ。知多産あるいは猿投産と考えられるものがほとんどであるが、瀬戸産と考えられるものも1点出土している(157)。内面に使用を示す磨耗が、あるものも無いものもある。

陶器甕　図示していないが、知多産と考えられる甕の体部片が2点出土している。

土師器羽釜　1点のみ出土している(166)。鍔が短く、体部から口縁部にかけて直口状に開き、口縁端部は内面に若干突出する。産地は明らかでないが、南伊勢系の範疇に含められるものと考えられる。金属器を直接あるいは間接的に模倣したものと考えられる。

土師器鍋　24個体を図示した。全て南伊勢系のものであり、それ以外のものは含まれない。口径が24cmまでの小形のもの(170～181)と、口径が30cm内外となる中形のもの、そして金属器を模倣したもの(167)がある。口縁端部が丸く、外面調整にハケメを施さない第1段階に相当するものと、口縁端部に面をなすようなヨコナデを施し、外面調整にハケメのあるものも含む第2段階のものとがあるが、中心は第2段階b型式と見なされる。外面に煤の付着が見られるものが多く、山茶椀類とは異なり、使用されたものが廃棄されていると考えられる。

土坑SK278出土土器　(217·218)

土師器鍋が2個体重ねられた状態で出土している。2個体とも南伊勢系の鍋で、第2段階a型式に相当する。218は図示した部分が完存しており、217も同様であっただろう。煮炊きに使用していた土器の底を意図的に打ち欠いている。

溝SD310出土土器　(219～227)

土師器皿・山茶椀・土師器鍋が出土している。土師器類は、南伊勢系のもののみが確認された。山茶椀は、SD176出土のものと同様、未使用品で構成されている。山茶椀は、藤澤山茶椀編年の尾張型第6～7型式を中心としている点も、SD176と同様である。

包含層、その他の土器　(228～258)

調査区内各地から出土している山茶椀類も、未使用製品がよく見られる。古瀬戸の瓶子(229)や、小壺(230)などもある。墨書土器として、山茶椀の見込みに「上」、底部に「○」を書いたものや、高台内面に「いし」と書いたものなどがある。「いし」は、同じ安濃川流域の津市・六大A遺跡[6]にもあり、関連が注意される。

なお、遺構に伴わない遺物として、瓦器椀片もあるが、今回の調査区内からはわずかに1点認識できたのみである。

b　中世後期　(fig.52～76)

中世後期の遺物は、前期以上に充実し、数多く出土している。

落ち込みＳＺ１５出土土器　(259～275)

土器群として認められたもので、一括性は高い。15世紀後半でも新しい段階の資料である。

土師器皿類　中北勢系[6]のもので、口径10㎝前後、器高2.5㎝前後である。いわゆる「手づくね」である。

土師器鍋　南伊勢系のものである。小形(265)、中形(272・273)、半球形(266)のほか、半球形体部に「く」の字形に開く口縁部を持つもの(267・268)がある。266は、南伊勢系に定着して間もない頃の半球形のものである。267は、素地の状態が南伊勢系のものと少し異なり、中北勢で模倣したものである可能性もある。272・273は、南伊勢系の第4段階b～c型式に相当する。

土師器羽釜　中北勢系のものである(275)。

土師器茶釜　肩部に両耳を持つもの(270)と鍔を持つもの(271)とがある。ともに南伊勢系のものである。耳は、痕跡器官と評価でき、実用には全く耐えない。

瓦質土器茶釜　269は両耳を持ち、鍔を有する。耳には円棒状具による円孔がある。鍔が破損した後にも使用しているようで、鍔破断面にも煤が付着している。大和産と考えられる。

陶器壺　274は、常滑産と考えられる壺である。

大土坑SZ60出土土器　(317～342)

一括性は高くないが、15世紀後半でも新しい時期の良好な資料である。

土師器皿類　中北勢系のものばかりである。この土坑中からの南伊勢系の皿類は極めて少ない。317は、南伊勢系B系統皿に類似する。320･321は内面に段を持つ一群である。322･323は、内面に段を持つ一群のなかでも、器高の高いもので、椀状を呈するものである。

陶器椀類　324は藤澤山茶椀編年の第9型式に相当するもの。ただし、混入の可能性もある。326は天目茶碗で、藤澤良祐氏による古瀬戸編年(以下、古瀬戸はこれに準拠)[7]の古瀬戸後Ⅳ期に相当する。

磁器類　325は高台下端を抉り込む明代の白磁。327は青磁椀で、内面見込みに菊花状のスタンプ文がある。

土師器羽釜　328は南伊勢系、329～336は中北勢系のものである。中北勢系のものは2個一対の焼成前穿孔を口縁下部に穿つ例が多いが、336にはそれがない。336はかなり大形のもので、あまり確認例のないものである。

土師器茶釜　337は中北勢系のものである。

陶器壺・甕類　338～339は、常滑産のものである。341は瀬戸産の四耳壺の底部と考えられる。

瓦質土器類　342は火鉢の口縁部片。外面に2条の凸帯を貼り付け、その間に梅形のスタンプを押す。

大土坑SK69出土土器(343～361)

破片資料が中心で、一括性はない。しかし、時期的にはほぼまとまっていると考えられる。14世紀後葉から15世紀前半の資料である。

土師器皿類　中北勢系のもの(343)と南伊勢系

のもの（344～348）がある。南伊勢系のものはB系統で、岩出分類のⅢb期に相当する。

陶器椀類　瀬戸産の平椀(350~352)がある。351は貼り付け高台で、古瀬戸藤澤編年の後Ⅰ期に相当しよう。

陶器大皿類　353は瀬戸産の折縁深皿で、古瀬戸後Ⅱ期頃に相当しよう。

土師器鍋　54～356は南伊勢系の鍋である。第3段階b型式から第4段階a型式に相当する。

土師器羽釜　南伊勢系のもの(357·360）と、中北勢系のもの(358·359)のものがある。357の口縁部下部には焼成後の穿孔がある。なお、伊勢において南伊勢系の鍋・釜類に焼成後穿孔の例が見つかったのは、今回が初めてである。

土師器茶釜　中北勢系のもの(361)が出土している。

大土坑 SZ73 出土土器　(397～414)

大土坑SZ60と同様、一括性はない。しかし、時期的にはよくまとまっていると考えられる。15世紀後半でも新しい段階の資料である。

土師器皿類　南伊勢系のもの(397)と中北勢系のもの(398～400)がある。南伊勢系の皿は、口径が8.0㎝前後まで小形化しており、岩出分類のⅢb期以降である。

陶器椀類　瀬戸産の丸椀(404)と天目茶碗（405）がある。古瀬戸後Ⅳ期新から大窯Ⅰ期[8]にかけてのものである。

磁器椀類　青磁椀がある(406)。内面に陰刻文がある。混入の可能性が高い。

陶器瓶類　407は、瀬戸産の花瓶と考えられる。

土師器鍋　413·414は南伊勢系のものである。第4段階c型式に相当する。

土師器羽釜　南伊勢系のもの(412)と中北勢系のもの(411)がある。

陶器鉢類　練鉢と擂鉢がある。408は中世前期のものと考えられ、混入品であろう。409は常滑産のもので、内面には焼成前に書かれたヘラ記号がある。410は信楽産のものである。

大土坑 SZ137 出土土器（415～420）

一括性はないが、時期的にはある程度まとまっていると考えられる。15世紀後半頃に相当すると考えられる。

土師器皿類　南伊勢系のもの(416)と中北勢系のもの(415)がある。416は南伊勢系C系統皿[9]と考えられる。415の内面には墨痕があり、筆の穂先を揃えるために撫で書きされたような跡が見える。

磁器椀類　白磁の椀がある(417)。混入であろう。

土師器鍋　420は南伊勢系のものである。外面のハケメがあまり施されないもので、少し異質である。第4段階c型式に相当しよう。

土師器羽釜　419は中北勢系のものである。口縁部が直線的に開く。

瓦質土器茶釜　418は口縁部片である。

土坑 SK115出土土器　(429～432)

土師器皿類を中心に出土した土坑で、一括性の高いものである。土師器皿類と新しい段階の山茶椀との共伴例として重要である。15世紀前半頃の資料と考えられる。

土師器皿類　南伊勢系のみが出土した。429·430はB系統皿で、岩出分類のⅢb期以降に相当する。431はD系統皿で、D系統の初現的なものである。

陶器椀類　432は山茶椀で、藤澤山茶椀編年の第9型式に相当すると考えられる。

土坑 SK192出土土器　(437～452)

土師器類は完形に近いものを含み、一括性が極めて高い資料である。陶器類は破片のため、参考程度に止めるべきか。15世紀後半の良好な資料である。

土師器皿類　南伊勢系のもののみが出土している。437～440はB系統皿で、岩出分類のⅢb期以降に相当する。441はD系統皿である。

陶器大皿類　442は瀬戸産の大皿で、古瀬戸後期頃のものか。

陶器壺類　443は瀬戸産の四耳壺の底部と考えられる。

土師器鍋　南伊勢系のものが出土している。外面に4本／㎝ほどの粗いハケメを施し、さらに縦方向のハケメを施すものを中心とする。第4段階b型式に相当する一群である。

土師器羽釜　南伊勢系のもののみである。451·452ともに、鍔部は体部最大径に近い。とくに451は両径がほぼ同じで、鍔の機能は全く果たせそうにな

い。452は使用後、体部下方に意図的な穿孔がある。

土師器茶釜　446は南伊勢系のものである耳・鍔を持たないもので、茶釜とするよりは土瓶と言うべきかも知れない。体部下半に明瞭な屈曲を持つ。調整手法そのものは、南伊勢系の鍋類と同じである。

陶器鉢類　444・445は常滑産の練鉢である。

大土坑SK184出土土器（453～482）

一括性は乏しいが、まとまった資料である。15世紀後半の新しい段階の資料である。

土師器皿類　南伊勢系のもの（453・454）と中北勢系のもの(455～466)がある。南伊勢系のものは、岩出分類のⅢｂ期よりも新しい段階ものである。中北勢系のものには、口径8.0㎝前後で断面弧状を呈するもの、口径10.0㎝前後で口縁部にヨコナデを施すもの、口径13.0㎝前後でヨコナデを施すもの、口径13～14㎝前後で内面に段を有するもの、がある。それぞれ、形態的には南伊勢系のＡ～Ｄ系統に相当する形態と考えられる。

陶器椀・皿類　瀬戸産陶器である。467は平椀で、古瀬戸後Ⅳ期頃か。469は山皿で、混入品であろう。

陶器花瓶　468は瀬戸産の花瓶である。

土師器鍋　471～475は南伊勢系のものである。代３段階ｂ型式のもの(471)を含むが、最新は第４段階ｃ型式（475)である。

土師器羽釜　南伊勢系のもの（479・482）と、中北勢系のもの(480)がある。478と481は、南伊勢系と同様の手法であるが、南伊勢系と断定できるものではない。

陶器壺・甕類　常滑産と考えられる壺（476)と甕(477)がある。476は、あまり類例を見ないものである。

瓦質土器類　470は火鉢の口縁部と考えられる。

大土坑SK175出土土器（483～495）

一括性は乏しい。しかし、遺構同士の切り合い関係から、SK184よりも古いと考えられる一群である。15世紀後半でも新しい段階の資料と考えられる。

土師器皿類　中北勢系のもののみである。483は、口縁部に油煙痕が見られる。

陶器椀類　瀬戸産の天目茶碗である。大窯期のものと考えられる。

陶器花瓶　489は瀬戸産の花瓶の底部である。

土師器鍋　494は南伊勢系のもので、第４段階ｂ型式に相当する。

土師器羽釜　南伊勢系のもの(495)と中北勢系のもの(491)がある。491は、中北勢系のもののなかでも薄く仕上げられたもので、あまり類例がない。

陶器甕　493は常滑産の甕と考えられる。

溝SD174出土土器　（522～537）

大土坑SK229へと接続する遺構である。大土坑SK175を意識的に避けているため、SK175と並行する時期か、やや新しい時期とすることができる。15世紀後半でも新しい段階の資料である。

土師器皿類　525は南伊勢系、522～524・526・527は中北勢系のものである。525は岩出分類のⅢｂ期以降に相当する。522には、焼成後の穿孔が底部に数ヶ所認められる。523は灯明皿に用いられたもので、灯心を出すためか、口縁部に意図的な打ち欠きが見られる。

陶器大皿・鉢類　530・531は、いずれも瀬戸産のものである。530は古瀬戸後Ⅱ期に、531は古瀬戸後Ⅳ期古に相当しよう。

陶器花瓶・燭台　528は瀬戸産の尊式花瓶、529は燭台である。古瀬戸後Ⅳ期に相当する。

土師器鍋　532～537は南伊勢系のものである。外面に斜め方向のハケメを施し、縦方向のハケメを後に付加する。第４段階ｂ～ｃ型式に相当する。

土坑SK209出土土器（548～565）

土師器類が中心であるが、一括性の高い資料である。15世紀後半でも、古い段階の資料である。

土師器皿類　南伊勢系のもののみが出土し、中北勢系のものはない。548はＡ系統、549～551はＢ系統、552はＤ系統である。岩出分類のⅢｂ期以降の資料である。

陶器皿類　553は、瀬戸産の縁釉小皿で、釉は鉄釉である。古瀬戸後Ⅳ期古に相当する。

土師器鍋　555～563は南伊勢系のものである。第３段階ｂ型式から第４段階ｂ型式にかけてのものが見られる。体部外面のハケメは４本／㎝程度の粗いものであるが、この遺構出土の一群には縦方向のハケメがほとんど施されない。

土師器茶釜　564・565ともに南伊勢系のものである。564には、頸部に焼成前の穿孔が見られる。

2個1対で、対面に同様のものがあると考えられる。なお、南伊勢系の土器で焼成前穿孔があるものは少ない。

瓦質土器類　554は風炉の口縁部と考えられる。2条の凸帯間に斜格子のスタンプ文が押されている。

大土坑SK230出土土器　(566～585)

大土坑SK229と並列している土坑である。一括性は乏しいが、まとまった資料である。15世紀後半の資料と考えられる。

土師器皿類　566～569は、全て中北勢系のものである。568・569は、内面に段を持つものである。

陶器椀・皿類　570は瀬戸産の縁釉皿、571は瀬戸産の平椀である。570は古瀬戸後Ⅳ期に相当しよう。572は瀬戸産の折縁中皿で古瀬戸後Ⅱ期、583･585は古瀬戸後Ⅳ期古の大皿である。584は古瀬戸後Ⅳ期の擂鉢で、錆釉である。582は常滑産の練鉢である。

土師器鍋類　573～581は全て南伊勢系のものである。半球形体部のもの(576)も含む。第4段階b型式を中心としている。

大土坑SZ241出土土器　(586～599)

調査区外の東方からの流れ込みによって多くの土器が入っている土坑であり、時期的なばらつきが大きい。蔵骨器や墓に伴うと考えられる土器がいくつか含まれている。

陶器香炉　589は瀬戸産である。古瀬戸中Ⅱ期に相当すると思われる。

土師器羽釜　南伊勢系のもの(590)と中北勢系のもの(591～594)がある。593は、円孔に紐を通していたようで、円孔から斜め方向に煤の付着がない部分が見られる。

陶器甕　595と597は常滑産と考えられる甕である。597の内面には「善　　」「(梵字)　　」、外面にもなにがしかの墨書がある。墓に伴う土器であろう。

大土坑SK276出土土器　(616～628)

この土坑埋土中には人骨片が多く、出土した土器類も墓に伴ったものが含まれていると考えられる。出土土器に、時期的なまとまりはない。

土師器茶釜　621は中北勢系のものである。鍔と両耳を持つ。両耳には、焼成前に円棒状具による穿孔がある。

陶器鉢　623は瀬戸産の練鉢と考えられ、中Ⅳ期に相当すると考えられる。内面に使用痕はない。外面には「念佛衆生」「至□□□」「□□□證」の墨書が到立させた状態で書かれており、蔵骨器の蓋として用いられたものと考えられる。

埋甕SK263出土土器　(642･643)

埋甕として利用されていた642は、完形の常滑産甕である。中野晴久氏の分類による9型式[10]に相当する。安濃津の状況を考慮すれば、この土器の所属時期は、15世紀後半代に収めるべきであろう。

土坑SK256出土土器　(655～657)

土器群としてのまとまりもあり、一括性も高い資料である。15世紀後半でも新しい段階の資料である。

土師器羽釜　655・656ともに中北勢系のものである。口縁端部の凹線状の窪みが消失し、面をなしている。口縁部は直線的で、やや内彎するものである。

陶器鉢類　657は瀬戸産の擂鉢である。大窯Ⅰ期に相当しよう。

土坑SK200出土土器　(658～661)

土器群としてのまとまりが良く、一括性もそこそこあると考えられる。15世紀後半でも新しい段階の資料である。

土師器皿類　658・659ともに中北勢系のものである。

土師器羽釜　660は中北勢系のものである。穿孔に紐を通していたようで、穿孔から斜め方向に煤の付着のない部分が見られる。

陶器鉢　661は瀬戸産の擂鉢である。大窯Ⅰ期に相当する。

大土坑SK305出土土器　(693～703)

出土量はあまり多くないが、時期的にはまとまっていると考えられる。15世紀後半でも新しい時期の資料である。

土師器皿類　693・694は南伊勢系、695～697は中北勢系、698は京都系である。南伊勢系のものはB系統で、口径8.0㎝前後と極めて小型化しているものである。695の口縁部には油煙痕が付着し、灯明皿として利用されたものと考えられる。

磁器椀類　699は青磁で、加工円盤として再利用されているものである。

陶器皿　700は瀬戸の縁釉小皿で、後Ⅳ期古のものであろう。

陶器合子　701は瀬戸の合子で、外面には花文の押印とヘラ描文がある。外面には暗黄褐色の釉が見られる。古瀬戸中Ⅲ期のものであろうか。

陶器甕　702は信楽産の甕である。

瓦質土器類　703は平面形が長方形になる火鉢である。外面には唐草文のスタンプが連続押印されている。SK181およびo7グリットpit 2から出土したものと同一個体である。

中世後期の土器類傾向

ここでは、その他の遺構、および包含層出土土器をも含め、各土器群の傾向をみておく。

南伊勢系土師器類　鍋では、第3段階a型式のものはほとんど出土していない。b型式のものはいくつか存在するが、あまり多くはない。最も多いのは第4段階b型式のもので、c型式がそれに続く。

皿類は、これまでに調査された資料と大差ないが、器高の高い747の資料は、あまり類例のないものである。

茶釜類では、鍋の第4段階a・b型式に並行する一群が確実に存在することが知れた。鍋の第4段階c型式並行以降は、270のような耳のつくものが多いのであるが、271のような鍔を有するものがこの時期には存在していると考えられる。また、446のような小形のものが15世紀後半の古い時期にまで遡ることが判明している。

南伊勢系に類似する土器群　884～894の羽釜は、調整手法および素地も、南伊勢系に極めて類似する。しかし、南伊勢系の典型的な羽釜は、372のように口縁端部が外側に折り返されるものであり、この一群のように口縁端部の断面形が方形で面をなすものは、まとまって出土していない。

尾張地方では、14世紀までの資料にこの一群のあることから、尾張産のものとする考えがある。しかし、今回の安濃津の調査区からは、15世紀後半の遺構に確実に伴う事例が存在し（545など）、尾張産とするには躊躇せざるを得ない。今のところ、産地は特定せずにおく。

中北勢系土師器類　SK69の資料が今回の調査区内の古い段階の一群である。

大土坑SK20出土の278は、口縁部形態は同系統の羽釜と同じであるが、鍔部の幅が厚く、また方形かと思われる透かし窓が取り付くものである。これまでに類例がない。

大和系土師器類　677・895の羽釜は、口縁端部が外側に折り返され、玉縁状を呈する。また、鍔も短い。この一群の土器は伊勢ではほとんど目にしないものである。奈良市・古市城跡出土の羽釜[11]などと形態的に類似しており、大和地域からの搬入品と考えられる。

京都系土師器類　698の土師器皿は、いわゆる京都系[12]のものである。当遺跡の資料中ではあまり目にしない。伊勢では、美杉村の多気遺跡群[13]で比較的まとまった資料がある。

瀬戸産陶器類　平椀・天目茶碗・丸椀・折縁小皿・縁釉皿・卸皿・合子・合子蓋・筒形香炉・袴腰形香炉・仏餉具・瓶子・四耳壺・尊式花瓶・仏花瓶・燭台・折縁深皿・直縁大皿・擂鉢などがあり、大方の製品は揃っているといえる。

701・720は合子、810は合子の蓋である。720は外面八方に縦方向の棒状浮文を付加し、キザミ目を入れている。827は古瀬戸後Ⅳ期に相当する折縁深皿である。伊勢では珍しく、大形の破片である。519の桶、あるいは814～818の尊式花瓶・仏花瓶も、伊勢ではあまり出土していない製品である。

瀬戸産陶器類は、大窯Ⅰ期を境として出土がほとんど見られなくなっている。

常滑産陶器類　壺・甕・練鉢などがある。瀬戸産陶器類と同様、中世としては15世紀末の段階で出土が見られなくなる。

甕の肩部に見られる押印文のうち、848は飯南町粥見小林遺跡[14]出土のものと同笵と考えられ、常滑産陶器の流通を考えるうえで興味深い。

信楽産陶器類　擂鉢・甕がある。出土数は少ない。山田猛氏による編年[15]のⅡa型式からⅢa型式までのものがあり、Ⅲb型式以降のものは管見におよばなかった。

瓦質土器類　火鉢・風炉・茶釜といった器種のほか、特殊なものとして蓋？(838)・花瓶(840・841)・香炉（839）がある。大和を中心とした地域からの

搬入品であろう。839は、近世のものかも知れない。

貿易陶磁器類　椀・皿類が中心である。なかでも、龍泉窯系の青磁が中心で、白磁・青白磁がわずかにある。また、天目茶碗（922）合子(912)などもある。青白磁には、小壺？(721)、水滴（934）などがある。940は青磁の大皿で、伊勢での出土は珍しい。

貿易陶磁器類は、調査区全体では破片数にして185点の出土がある。そして、これらはfig．41のような分布を示す。大きく見ると、g 3·4グリット付近、k 5グリット付近、m4グリット付近、n10グリット付近の4ヶ所ほどに集中部がある。しかし、遺構との対応関係で見るならば、この傾向にとくに際だった特徴は見出せない。

3　中世の土製品（941～944·1033～1108ほか）

土製品には、犬形土製品（943·944）、三又形土

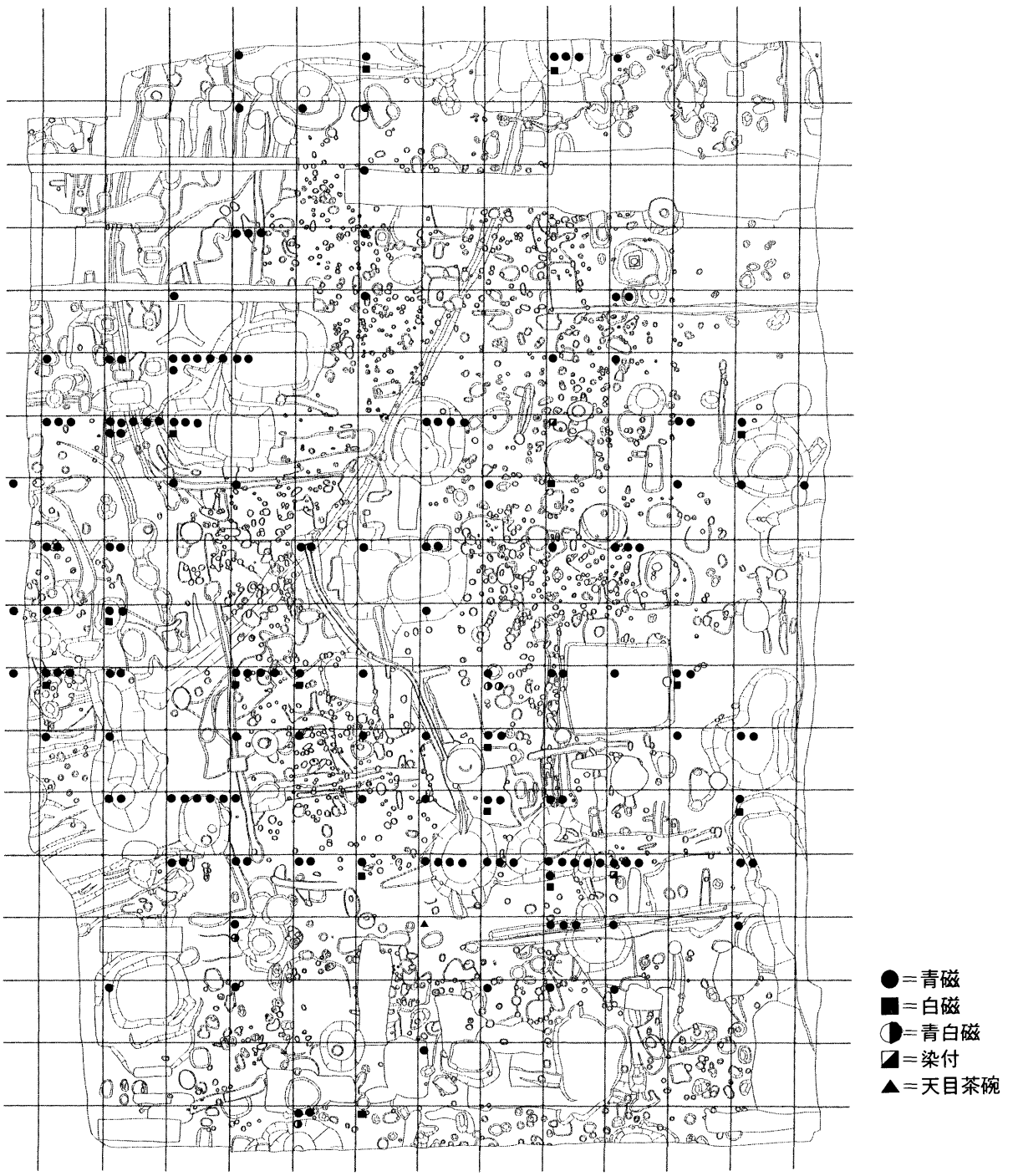


fig. 41　貿易陶磁器類の分布（1:400）グリッド単位、1片につき1点とする。重機掘削中出土のものを除く。

製品(942)・土錘(1033～1108)がある。また、土製品とするべきでないかも知れないが、陶丸（290・941）もある。

図示していないが、この他に鞴の羽口や、土壁の破片かと思われるものがある。

犬形土製品　2個体出土している。いずれも土師質で、頭・胴・足を一塊の素地からひねり出して整形する。耳と尾は、別に素地粒を付加して貼り付けている。目は、先端の尖った棒状具による刺突である。2個体とも足を欠損しており、意図的な打ち欠きの可能性もある。

三又形土製品　942は、大土坑SZ60から出土している。外面は二次的な被熱により、赤く変色している。県内では、上野市・火山遺跡[10]に類例があり、鋳造関連遺物と考えられる。

土錘　全て土師質で、円柱ないしは球形をなすものである。中世前期の遺構に伴うものはなく、中世後期の遺構ないしは包含層中から出土している。また、一部近世のものを含んでいる可能性もある。

形態で見ると、a；長さが直径の3倍ほどある細長いもので、孔径が直径の半分以下のもの（1033～1076）、b；長さが直径の2～3倍程度で、孔径が直径の半分程度のもの（1077～1096）、c；長さが直径の2倍以下で、孔径が直径の半分以上あるもの（1097～1102）、d；球形をなすもの（1103～1108）に大きく区分できる。a類はさらに、a1；小形のもの（1033～1076、1054～1069）と、a2；大形のもの（1048～1053、1070～1076）に区分できる。これらは、原則的には用途の違いと考えられるが、具体的には分からない。

4　中世の石製品（945～1017）

中世を通じての石製品を一括した。スタンプ（945～948）・火打ち石（952～955）・石鍋（956）・硯(959～962)・砥石(963～1013)・五輪塔（1014～1017）のほか、用途不明の石製品（949～951）、縄文時代の叩石状のもの(957)、同じく凹石状のもの(958)がある。叩石状・凹石状は、便宜的にこの項目に入れておくが、中世であるという確証はない。

石製スタンプ　945は滑石製である。長方形の基材に、水鳥と思われる鳥を縦に三羽以上陽刻している。ＳＫ１６７出土で、南伊勢系の鍋第3段階b型式のものと共伴しているため、15世紀前半代前後のものと考えられる。

946は泥岩製である。小口部に2種類の花文を陽刻、側面に綾杉状の模様を陰刻する。文様のある反対側は欠損しているが、欠損部に円形の穴が残っている。また、その穴よりも小口側には、貫通しない穴がある。図示した上下面に相当する部分は、砥石として利用されているが、これがスタンプを刻んだ後なのか先なのかは分からない。

947は滑石製である。長六角形の文様を陽刻する。側面には円孔が穿たれている。

948は泥岩製である。残存する最も広い面には格子文、その側辺にあたる部分には中央に点を配した斜格子文と並行線に弧状を呈する輪郭を付けた文様が配置されている。なお、格子文部分と斜格子文部分には、それ以前に付けられた弱い線刻が見られる。

用途不明の石製品　949～951は滑石製である。949は石鍋の体部片を用い、破断面が研磨されている。石鍋の段階に外面であった側には方形に区画し、その区画内に刺突を加えた文様が陰刻されている。950は元々直方体であったものを改変し、中央に穿孔している。951は原形不明で、分銅状に加工されているように見える。

火打ち石　952～955は、チャート系の石材である。剥離を加え、刃状になった部分に、人工的な敲打痕が見られるものである。

石鍋　956は石鍋の口縁部である。時期的には中世前期のものであろう。

叩石状石製品　957は、結晶片岩を素材とする。両端部に敲打痕がある。

凹石状石製品　958は砂岩製である。両面に敲打による窪みが見られる。

石硯　4点ある。961は小形のもので、外面は砥石としても利用されている。

砥石　50点を図示したが、出土点数は80点ほどある。泥岩・砂岩・凝灰岩などが見られる。形状でみると、a；断面が正方形あるいは正方形に近く、柱状のもの（963～973）、b；断面が長方形で、板状を呈し、中央が最もすり減るもの（974～996）、c；断面が多角形を呈する柱状のもの（997～

1001)、d；板状であるが、両端部を中心にすり減るもの（1002～1005)、e；大きい素材を用いており、砥石の方を固定して研ぐと考えられるもの(1006·1007·1009)、f；石材に溝状の研磨部の見られるもの(1010～1013)、g；その他（999・1008）に区分できる。これらa～g類は、それぞれが目的・使用方法の異なるものと考えられる。特定することは困難であるが、f類は細い鉄製品、例えば錐や彫刻具などの製品を研いだものと考えられる。

五輪塔　1014は風輪で、上部は空輪が外れたものと考えられる。4方向に「カ・カー・カン・カク」の梵字を刻む。砂岩製である。1015は水輪。砂岩製である。1016は一石五輪の地輪で砂岩製。1017は地輪で、4方向に「ア・アー・アン・アク」の梵字を刻む。花崗岩製である。

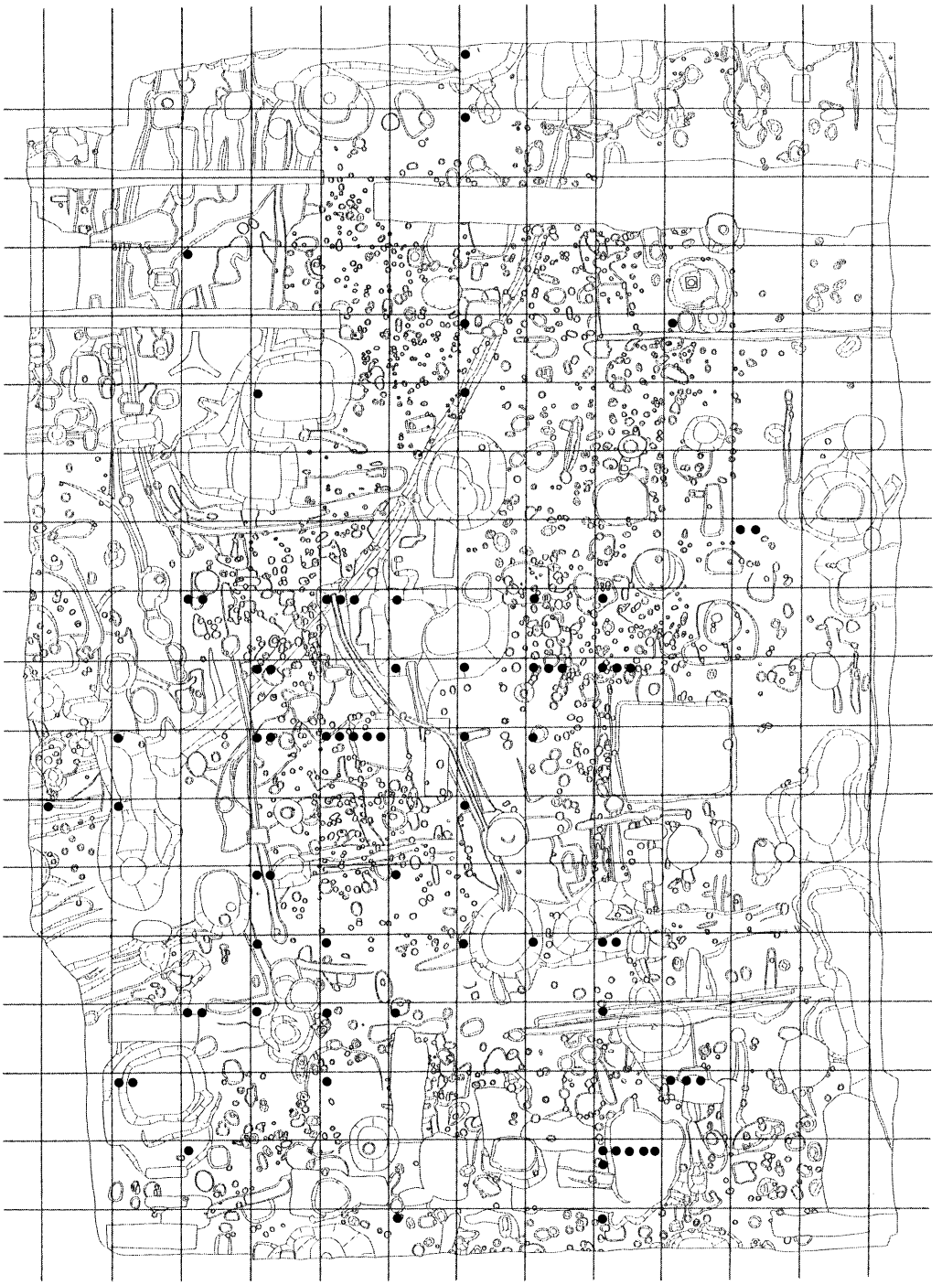


fig. 42 中世銭貨の分布（1:400）グリッド単位　●＝銭貨1点

5　中世の瓦類

数量的には多くないが、調査区全体で30点ほど出土している。

螺髪？　1018は、渦巻き状のものが四連見られる。螺髪の可能性がある。しかし、瓦製の仏像の実態を筆者は知らず、そのように見えるという程度の報告にしておく。

鬼瓦？　1019は鬼瓦の一部かと考えられる。左目と鼻の部分ではなかろうか。外面にはベンガラと考えられる赤彩が見られる。なお、内面には剥離の痕跡があり、また、鼻の右横にもそれがある。したがって、この瓦が顔を表現としたものとするにしても、一体どのような瓦の一部なのかは検討もつかない。

1020も鬼瓦の一種と考えられる。下棟の途中に付けられる類のものであろうか。全体的な形態は、正面形で「山」の字形状になるかと思われる。中央には、円形の押圧文が付加されている。外面の中央部にはベンガラと思われる赤彩がある。

軒丸瓦類　出土した軒丸瓦類は、全て巴文のあるものである。1021は尾が長く、鎌倉時代頃のものの可能性が高い。1022は通常の軒丸瓦のように丸瓦部と瓦当面とが垂直に接続されておらず、斜めに取り付けられている。隅瓦あるいは鳥衾瓦かと考えられる。瓦当面の凸部には、1019と同様、ベンガラと考えられる赤彩が見られる。

平瓦　1026·1027は平瓦である。1025の凹面には布目痕が残る。

丸瓦　外面に縄叩き痕、内面に布目圧痕と吊紐痕およびコビキ痕の見られるものがある。

6　中世の金属製品

今回の調査区からは、整理箱にして2箱程度の金属製品類がある。砂質土壌でしかも水分が多いためか、錆に砂粒が激しく付着するものが多く、全体的な形状を知り得ないものが多い。

銅製品（1109～1116）　ほとんどが用途不明であるが、1111は刀装具で、切羽である。

鉄製品（1117～1128）釘類を中心に、小刀類や火打金（1124·1125）もある。また、環状の用途不明品(1117·1118)もある。1123は釣針状を呈する。

銭貨（1129～1195）　調査区内からばらばらと出土したもので、総計は70点に及ぶ。いわゆる渡来銭で、1192のみ模鋳銭の可能性がある。最古銭は中国前漢の五銖（初鋳はB．C．118年)で、最新銭は李氏朝鮮の朝鮮通寶（初鋳は1423年）である。数量的に多いのは北宋銭で、個体数として多いのは中国明の永楽通寶（初鋳は1408年）である。

銭貨は、fig.42のような状況で出土している。k6グリット付近、j9グリット付近などのピットが多く検出されている場所からの確認例が多いといえそうである。また、q10グリット付近にも集中箇所があるが、これは土坑SK166から多く確認されたことによるものである。

7　加工円盤

調査区内から数多く出土している。中世を中心とした時期のものを462点（1196～1661)、確実に近世と言えるものを4点（1662～1666）を図示したが、中世としたものの中に近世のものを幾分含んでいる可能性がある。破損したものなどを掲載していないため、調査区内からの総出土量は、500点を越えるものと考えられる。

土器片を利用し、円形を意識して整形するものである。全て、被熱などの影響によって自然に生成されたものとは考えられない。[117] 利用箇所は、体部・高台部・口縁部などさまざまであるが、体部片を利用したものが圧倒的に多い。素材となる土器は、陶器の甕が最も多いが、中には土師器鍋・皿、磁器椀、瓦などの製品もある。

製作にかかる手法によって分類すると、a；敲打によって整形するもの（1196～1622）と、b；敲打の後、調整部を研磨するもの（1623～1661)、さらに、C；高台をそのまま利用するものに、分類できる。そして、大きさ（直径）からは大きく6類に分類できるが、この点については第Ⅵ章5で触れる。

利用している土器には、中世前期の土師器鍋や山茶椀類も含まれているため、中世前期から継続的に製作されているものと考えられる。

8　人骨

調査区内の東部を中心に出土している（fig.43）。全て火葬人骨片である。埋葬された状態ではなく、

流れ込みによるものである。東部が中心であることから、調査区東部に中世墓あるいは寺院が存在していたものと考えられる。

9　近世～近代の遺物

井戸や土坑中から比較的多く出土している。主立った遺構のみ記述する。

土坑ＳＫ４４出土土器（1667～1676）

国産陶磁器類と瓦質土器がある。1667･1668は広東椀の蓋である。肥前系であろうか。1648は瓦質の鍋で、口縁上部に吊紐を付けるための耳が付加されている。1676は瓦質土器の焙烙で、中世後期の中北勢系の羽釜との関連が考えられる。三重県では、安濃川・鈴鹿川流域からの出土が知られている。

土坑SK49出土土器（1655～1661）

国産陶磁器類と塩焼壺がある。1655は塩焼壺の

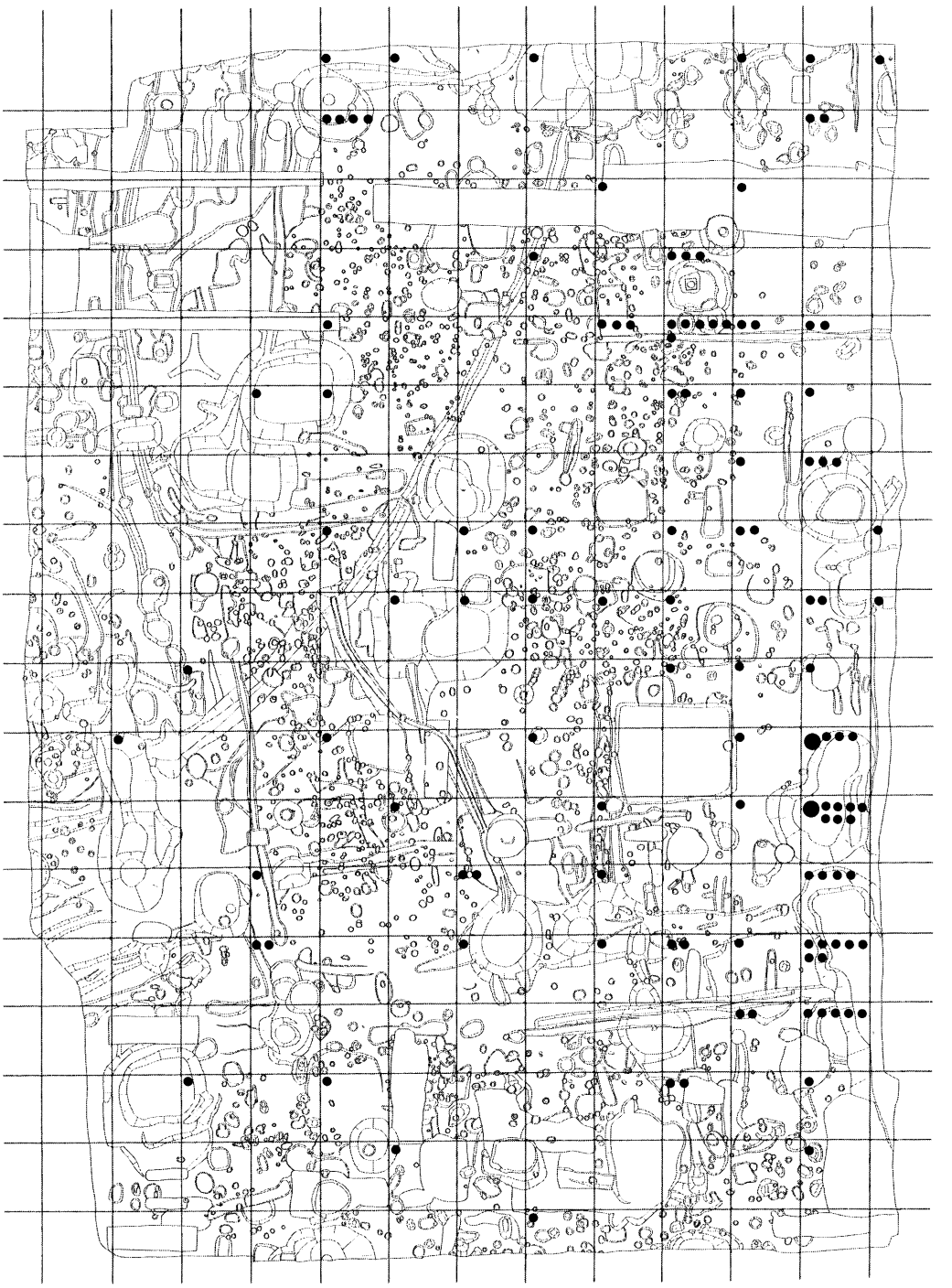


fig. 43　人骨の分布（1:400）　グリッド単位、１片につき１点とする

蓋で、「奈ん者ん七度本やき志本」の刻印がある。

その他

土師器皿・焙烙、陶器灯明皿、国産陶磁器類などがある。その他の遺物のなかで、注目される遺物について見ていく。

焙烙　南伊勢系のもの(1698･1711)と、尾張・三河地域のもの(1731)がある。1731は、金子健一氏の分類によるL類[18]に相当すると考えられ、19世紀後半代以降かと考えられる。

汽車土瓶（1730）1731の焙烙と伴出したものである。外面に、「かめやま」「伊藤」と書かれている。ＪＲ亀山駅前に今もある「伊藤食堂」がかつて販売していたものという。

土器枠（井筒）（1751～1755）井戸枠の専用として製作されたものである。焼成の状態、および口縁部形態からみて、常滑産と考えてよかろう。

今回の調査区で確認されたのは、体部が直線的で、口縁部外面が横方向に拡張あるいは引き出されるものである。底部は当然ながら底抜けである。口径はおしなべて70㎝弱である。

出土したものには、1；頸部付近にヘラによるキザミ目文を有するもの（1751･1753）、2；文様のないもの（1752･1754･1755）がある。1753を見ると、a類の文様はタガを模倣したものであることは明らかである。

土製品（1733･1734）　玩具とされているものである。1733は鳩と考えられる。中実で、笛にはならない。1734は人物で、右頬に小槌の表現があるため、「大黒様」であろう。

石製品（1736･1737）　硯である。ともに小形で、1736は方形、1737は小判形を呈する。

金属製品（1735･1741～1746）1735は銅製品で笄である。1741～1746は銭貨で、全て寛永通寶である。

瓦（1738～1740）軒丸瓦を3点図示した。全て巴文で、外区の珠文との間には圏線の認められないものである。

近代磁器（1732）　表土掘削中に出土したものである。磁器の鉢で、内面には青色の星形文が染付押印されている軍用食器である。三重県では、第2次大戦中まで陸軍第一気象連隊が存在していた鈴鹿市石薬師東遺跡(現三重県消防学校)から出土している。[19]

註

(1)　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ（平安学園考古学クラブ　1966）および同氏『須恵器大成』（角川書店　1981）

(2)　藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」(『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990）ほか

(3)　伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol.1　1990）

(4)　伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）

(5)　穂積裕昌ほか「六大Ａ遺跡」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅶ　三重県埋蔵文化財センター　1995）

(6)　ここでいう中北勢系とは、南伊勢系の一群とは明確に分離できるものの、中勢（旧安濃郡・奄芸郡あたり）か北勢（旧川曲郡・鈴鹿郡以北）かの所属が明確でない一群を指す。あるいは、中勢・北勢が一連の動きのなかで、まさに「中北勢」という状態を呈する可能性も含んでいる。中北勢系の土器群については、後述する。

(7)　藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」(『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996）

(8)　藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986）

(9)　南伊勢系の土師器皿については、Ａ～Ｄの系統に分類している。伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

(10)　中野晴久「生産地における編年について」(『常滑焼と中世社会』小学館　1995）

(11)　森下恵介ほか「古市城跡発掘調査報告」(『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度　奈良市教育委員会　1981）

(12)　鋤柄俊夫「平安京出土土師器の諸問題」(『平安京出土土器の研究』古代學研究所　1994）

(13)　越賀弘幸・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』Ⅱ（三重県埋蔵文化財センター　1996）

(14)　平成8年度三重県埋蔵文化財センター調査。

(15)　山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」(『Miehistory』vol.1　1990）

(16)　船越重伸「火山遺跡」(『火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1996）

(17)　東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第2分冊（1990）p699に、「陶磁器が被熱すると、(陶磁器片を2次加工したような‥‥筆者註)同様な割れ方を呈するらしく、その旨も考慮したうえでの判断も必要かと思われる」とある。

(18)　金子健一「尾張出土のホウロクについて」(『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯　1996）

(19)　服部芳人ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第4次）発掘調査概報』(三重県埋蔵文化財センター　1996）

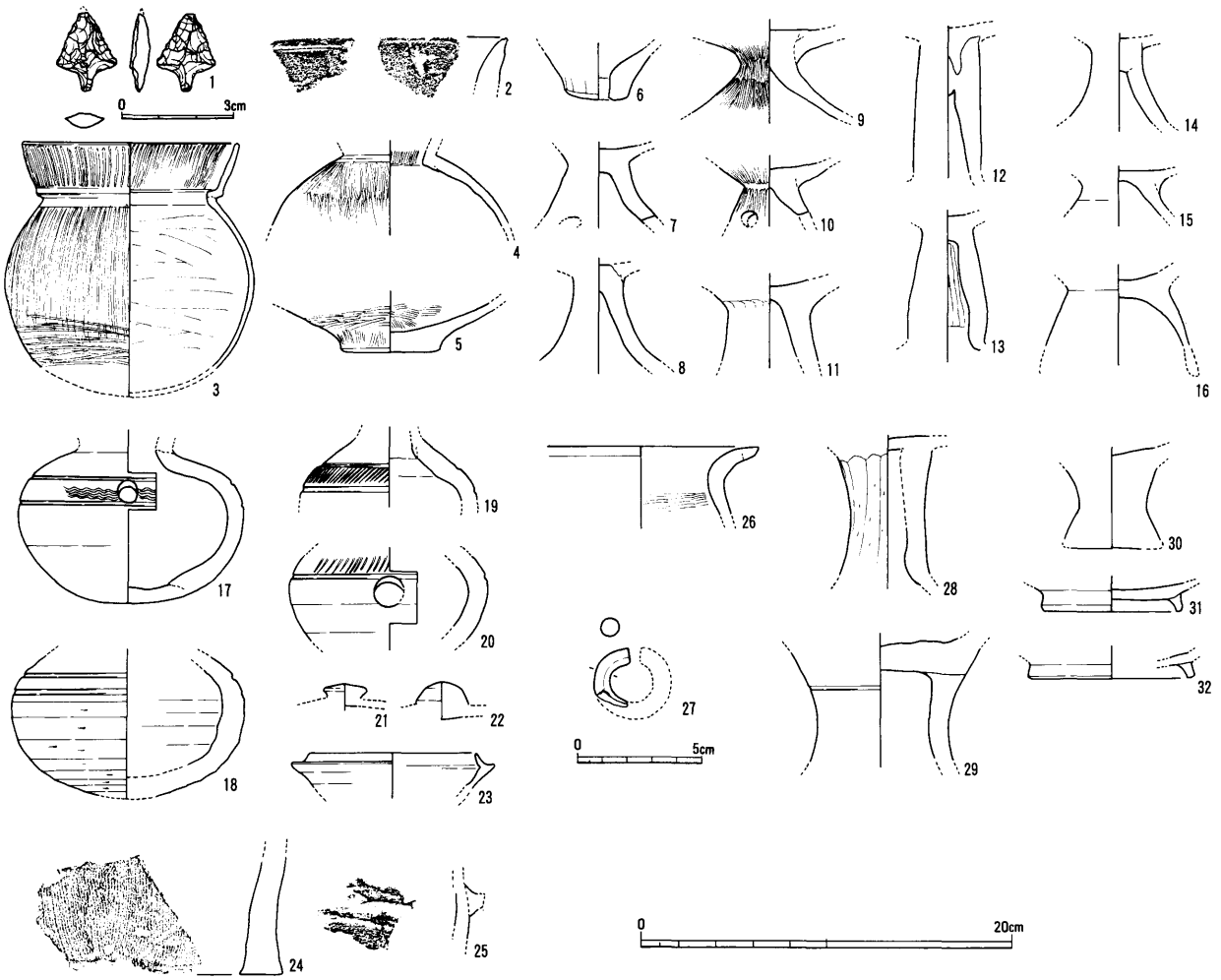


fig. 44　古代以前の遺物（1 は 1:2 、 27 は 1:3 、他は 1:4 ）

SD176 (33～94)

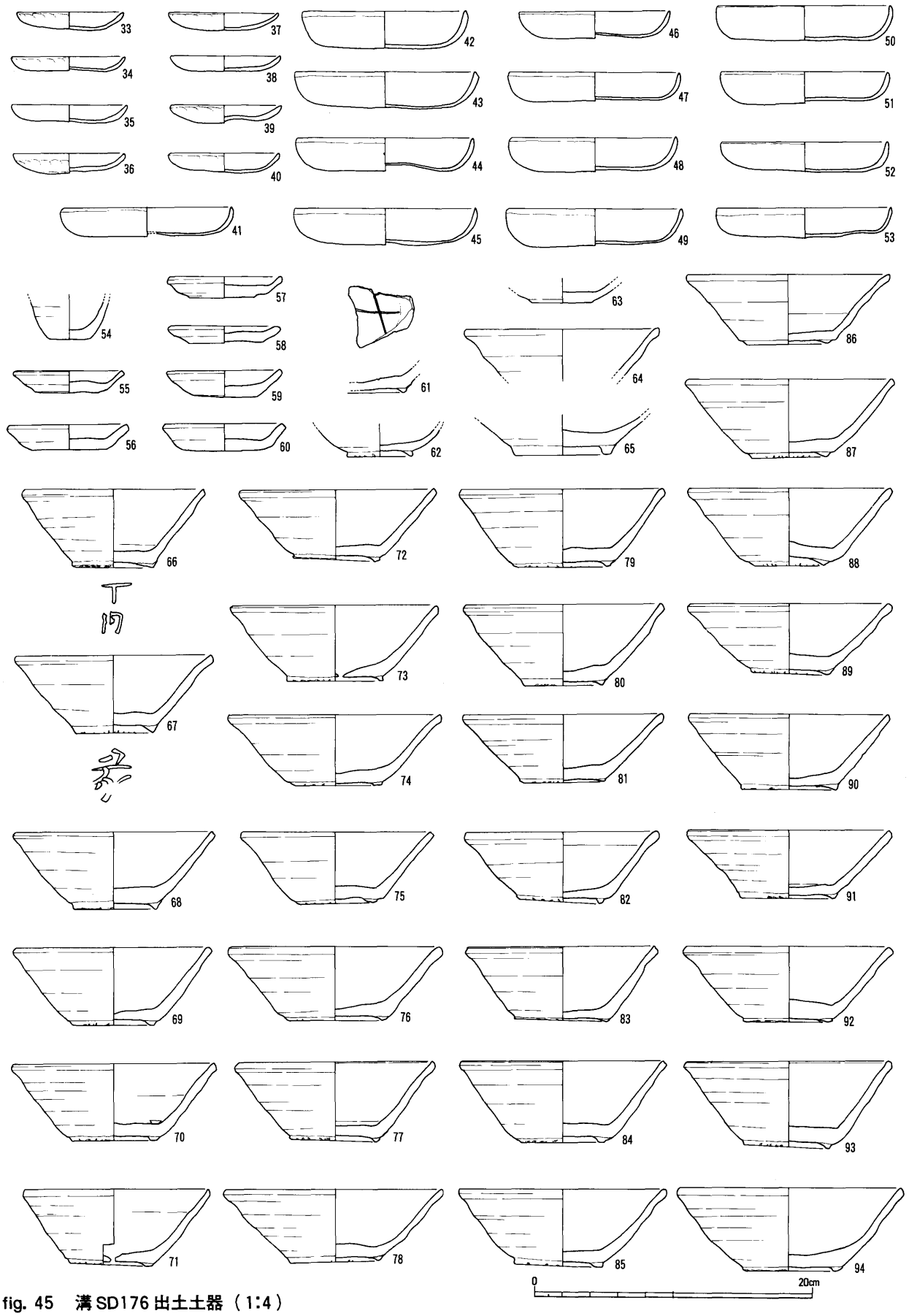


fig. 45　溝SD176出土土器（1:4）

SD176 (95～138)

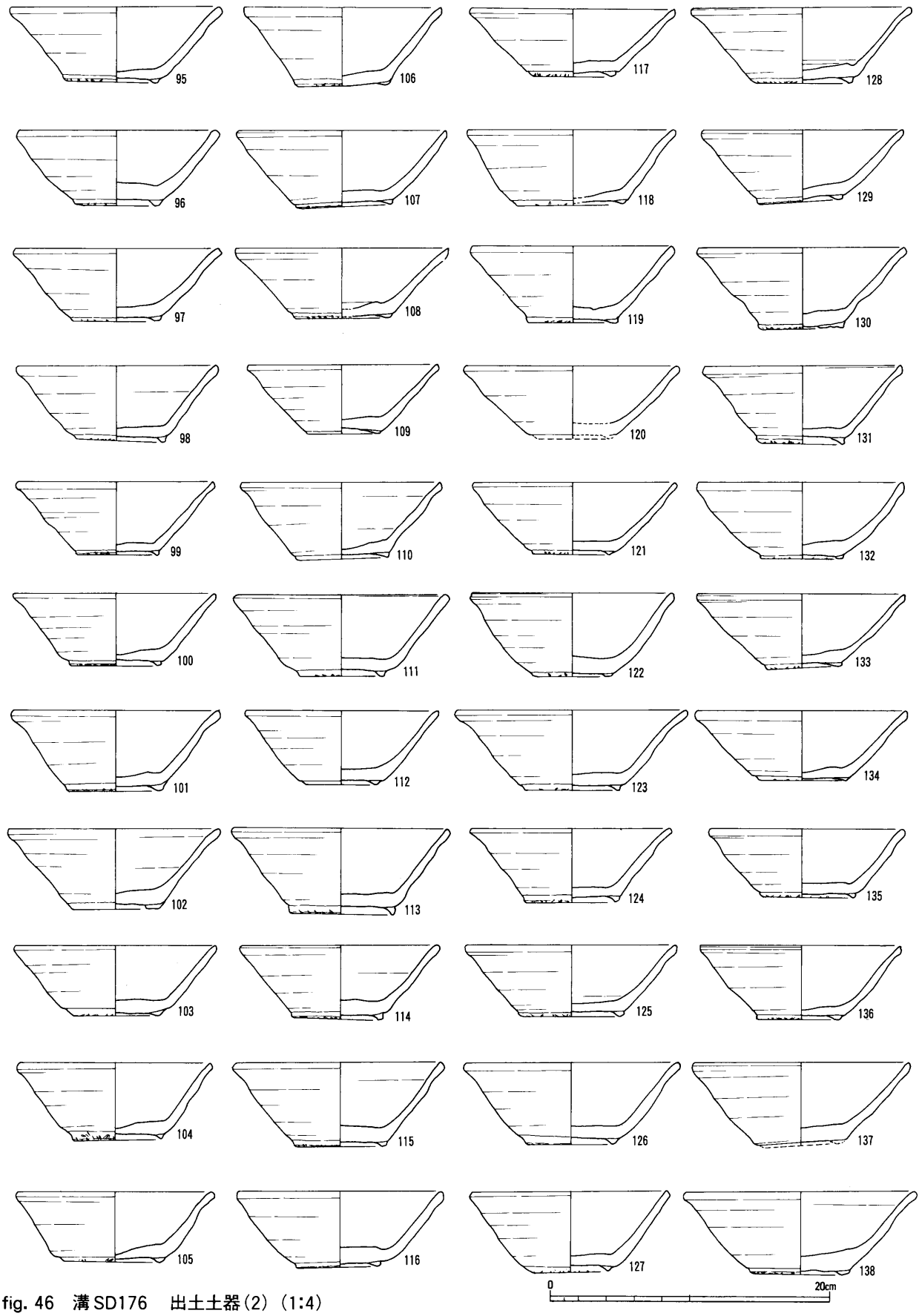


fig. 46　溝SD176　出土土器(2) (1:4)

SD176 (139~165)

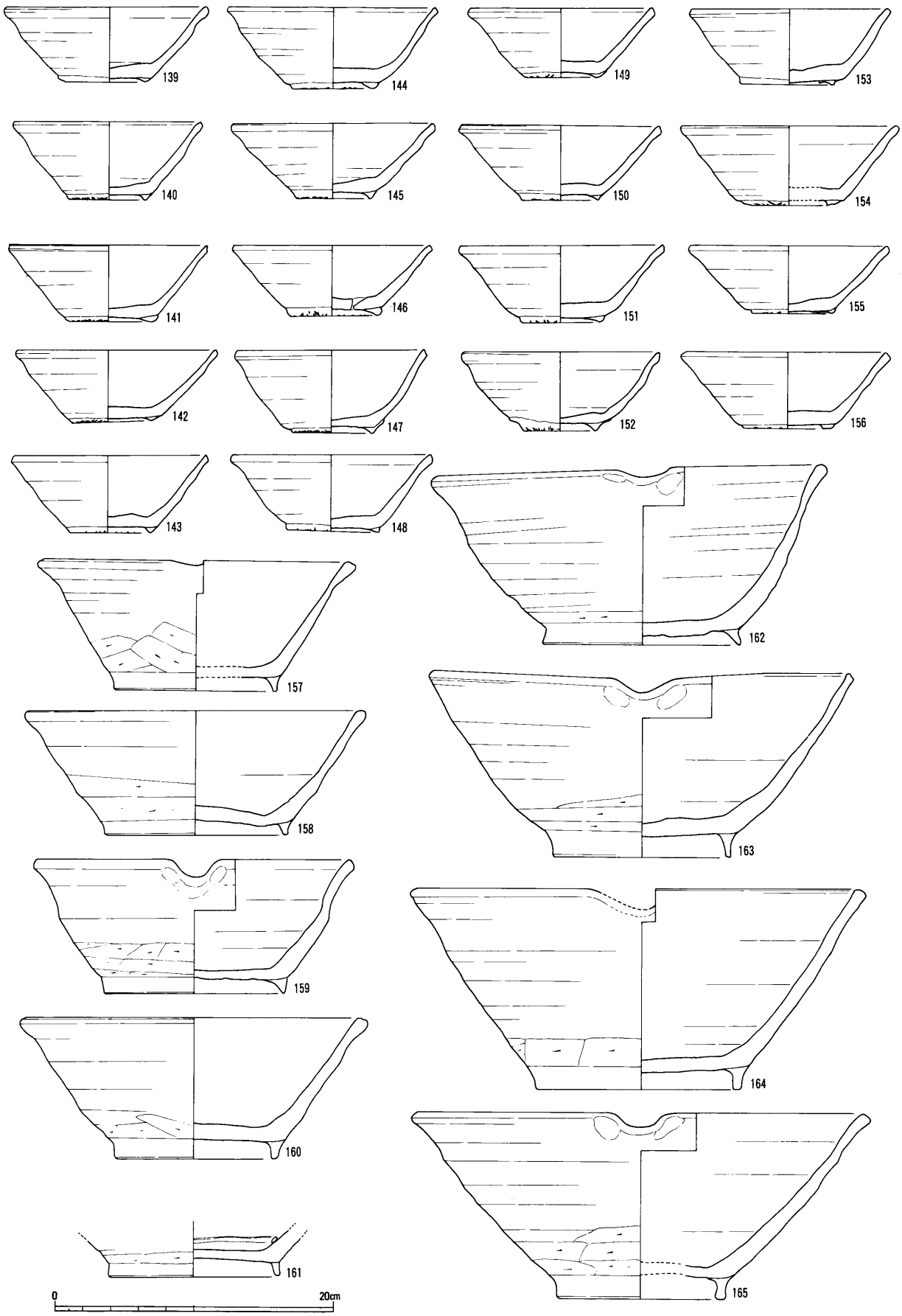


fig. 47　溝 SD176 出土土器 (3) (1:4)

SD176 （166～180）

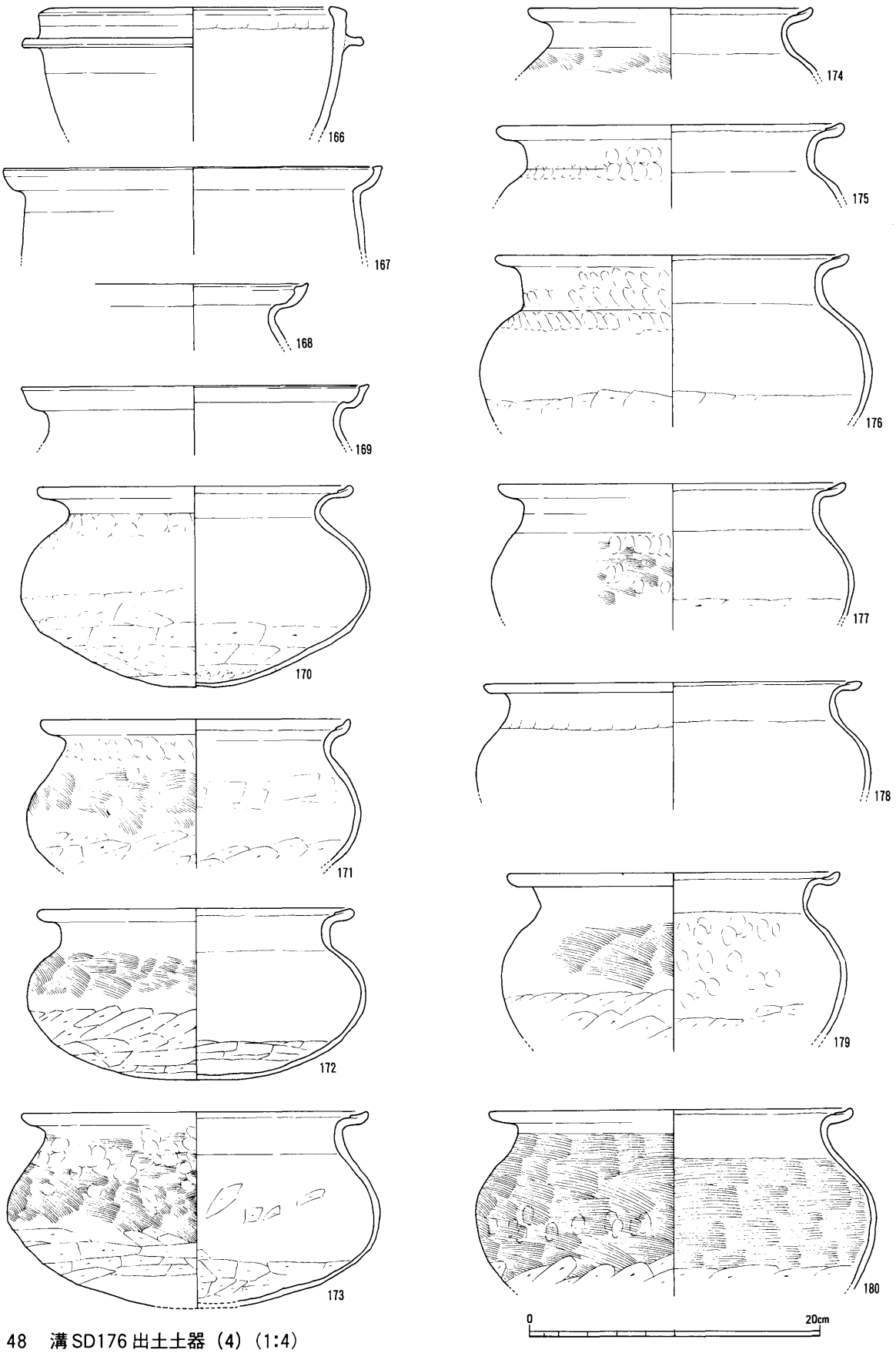


fig. 48　溝SD176出土土器（4）（1:4）

SD176 （181～190）

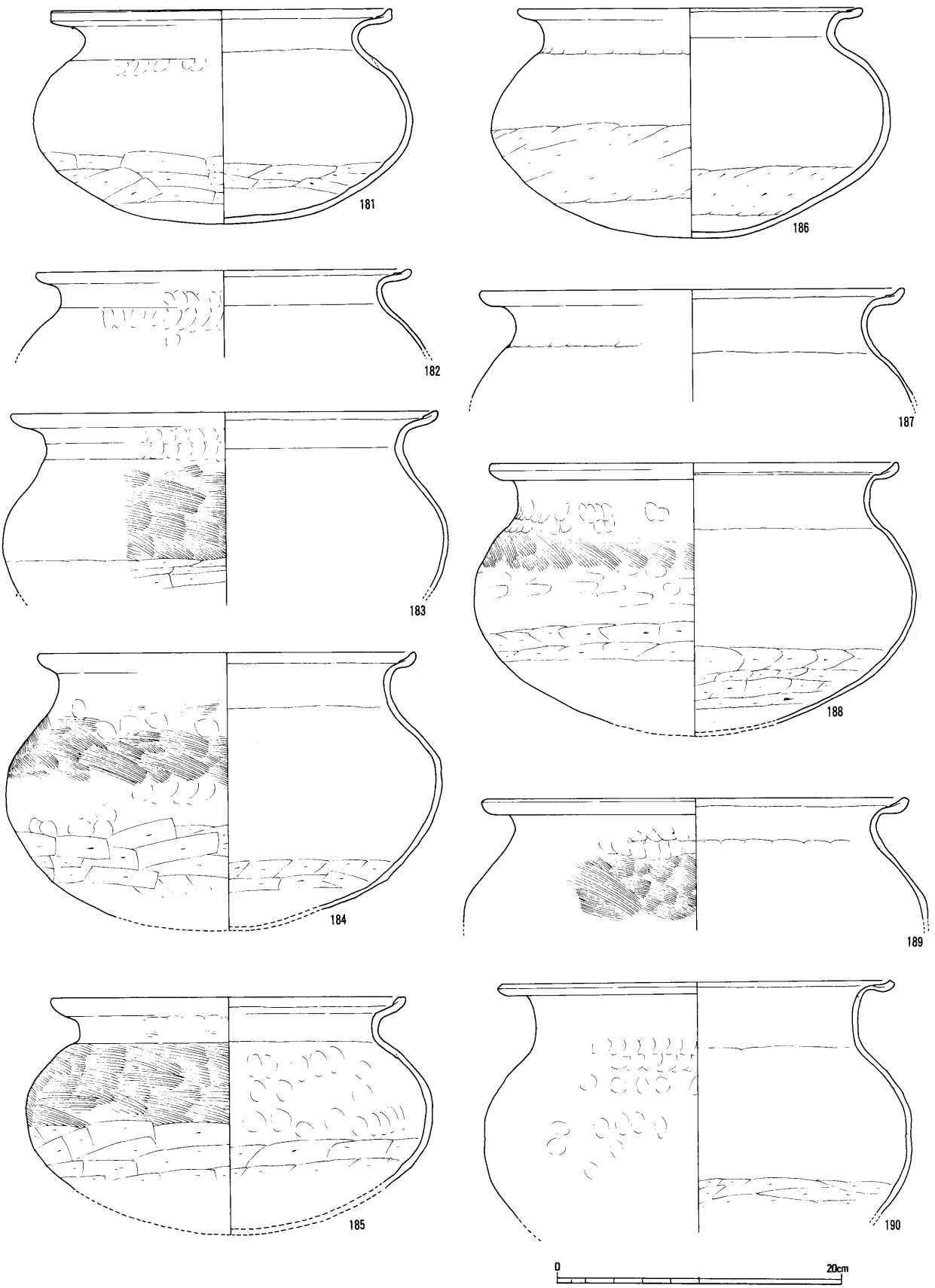


fig. 49　溝SD176出土土器（5）（1:4）

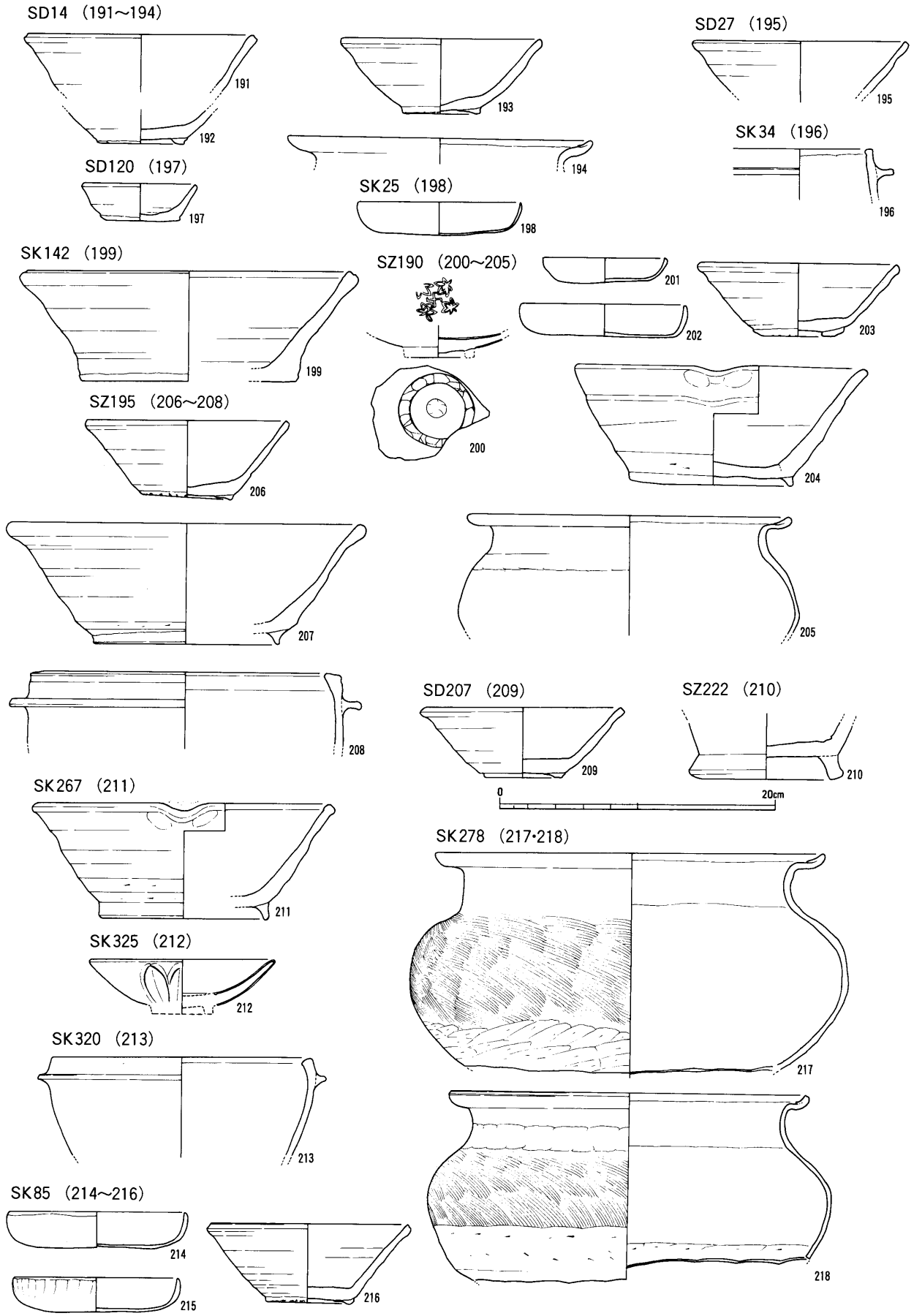


fig. 50　小土坑 SK278 他　出土土器 (1:4)

SD310 (219~227)

包含層他 (228~258)

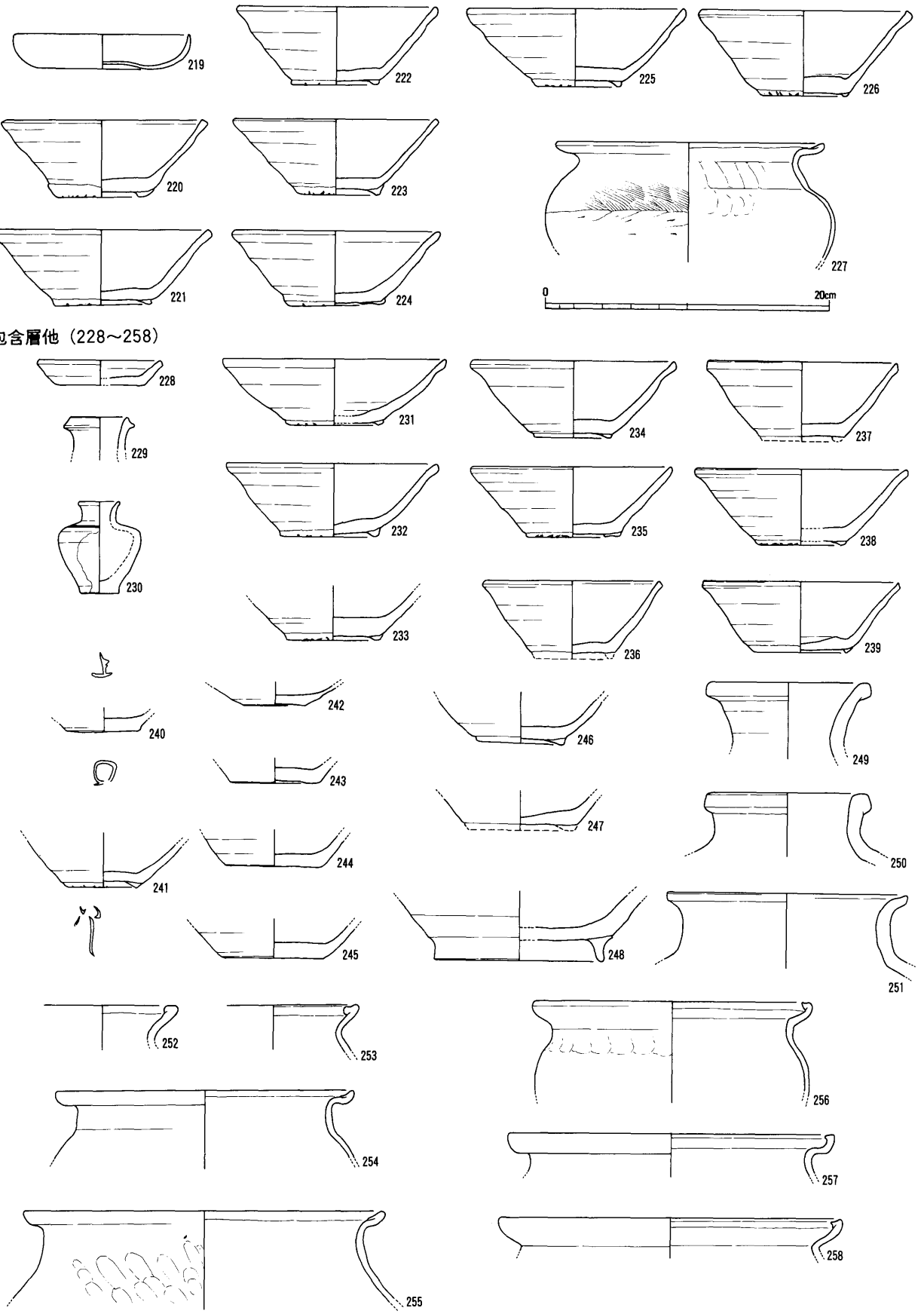


fig. 51 溝SD310他出土土器 (1:4)

SZ15 (259～275)

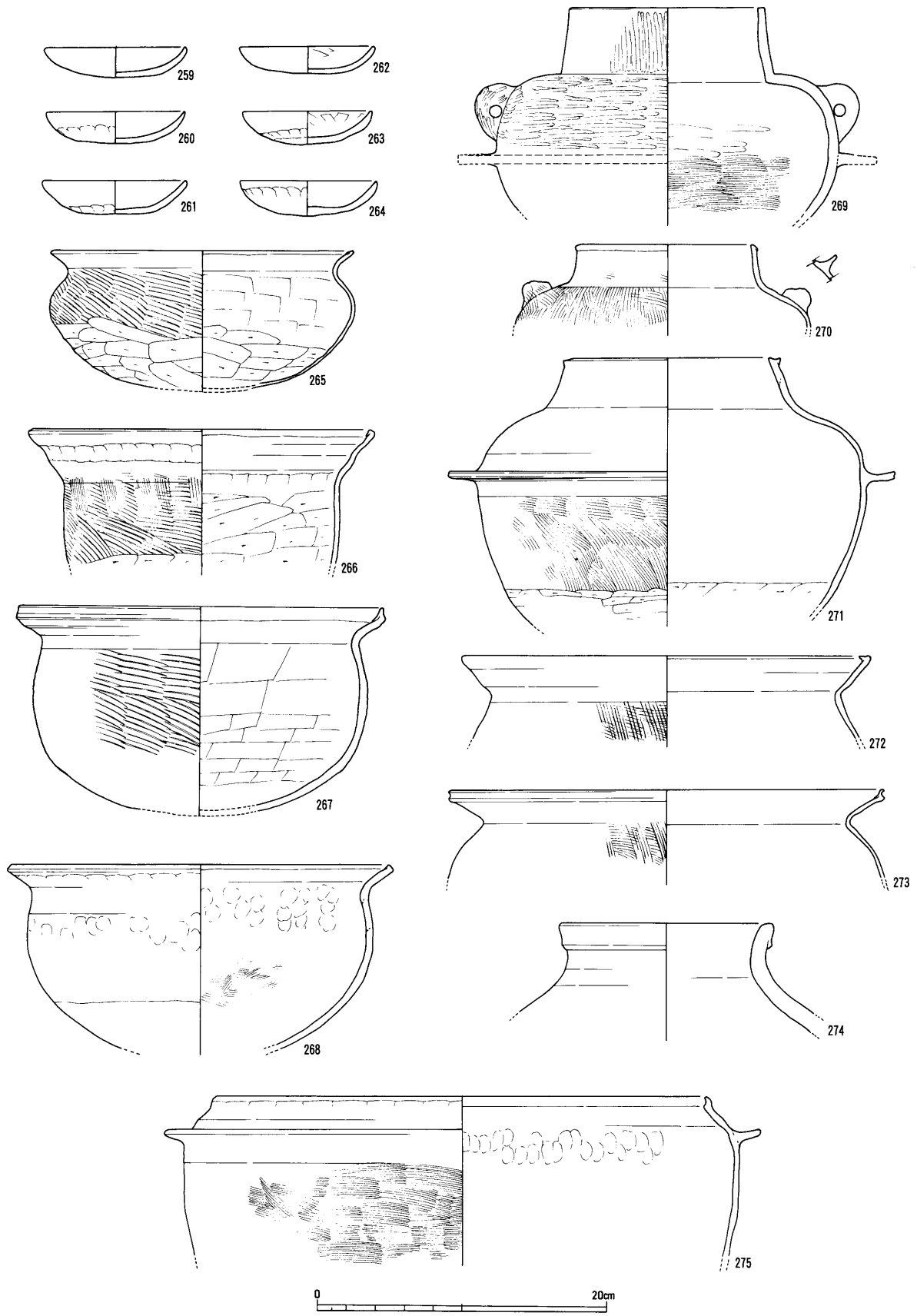


fig. 52 落ち込みSZ15他　出土土器 (1:4)

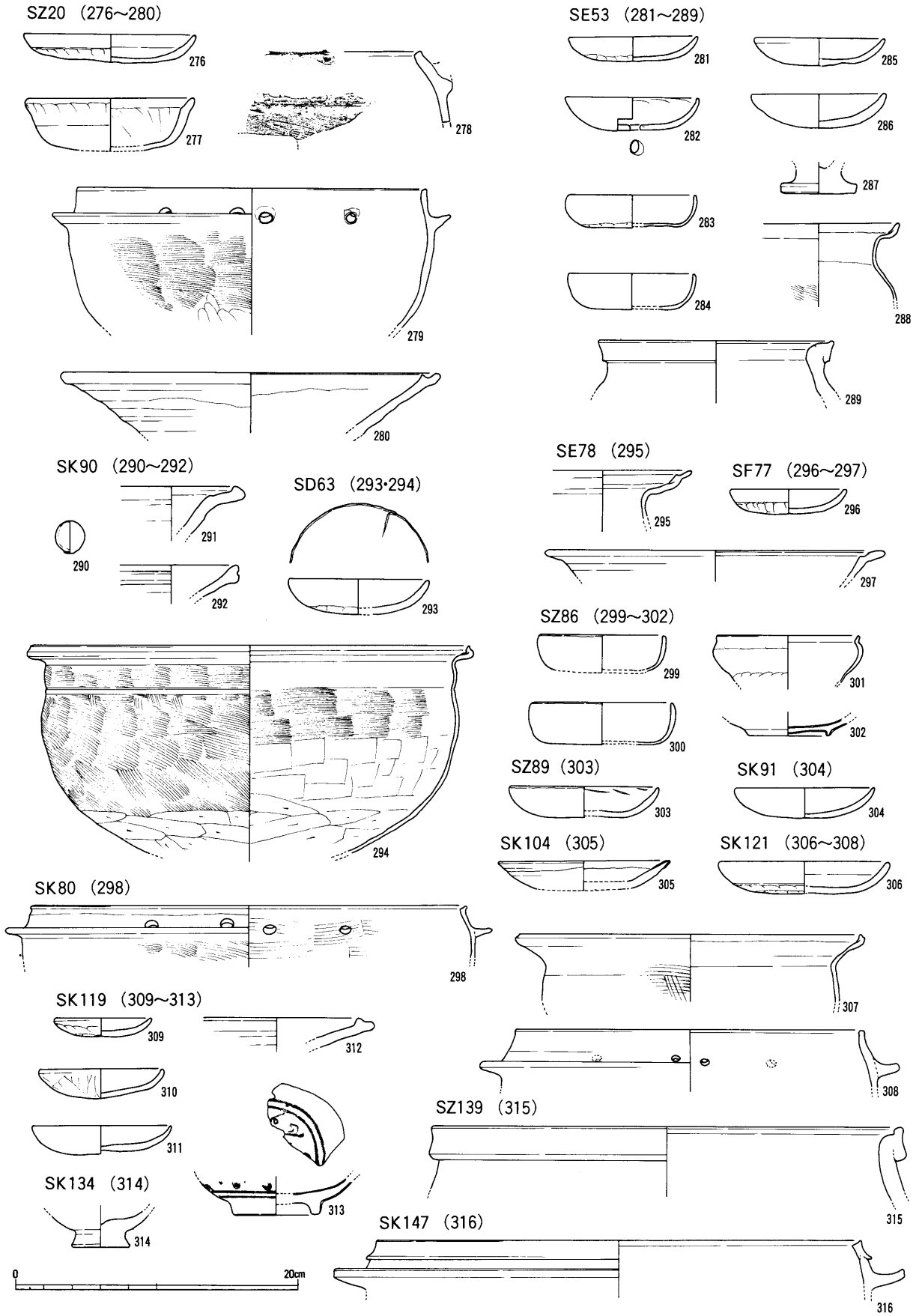


fig. 53 大土坑SZ20他　出土土器（1:4）

SZ60 (317~342)

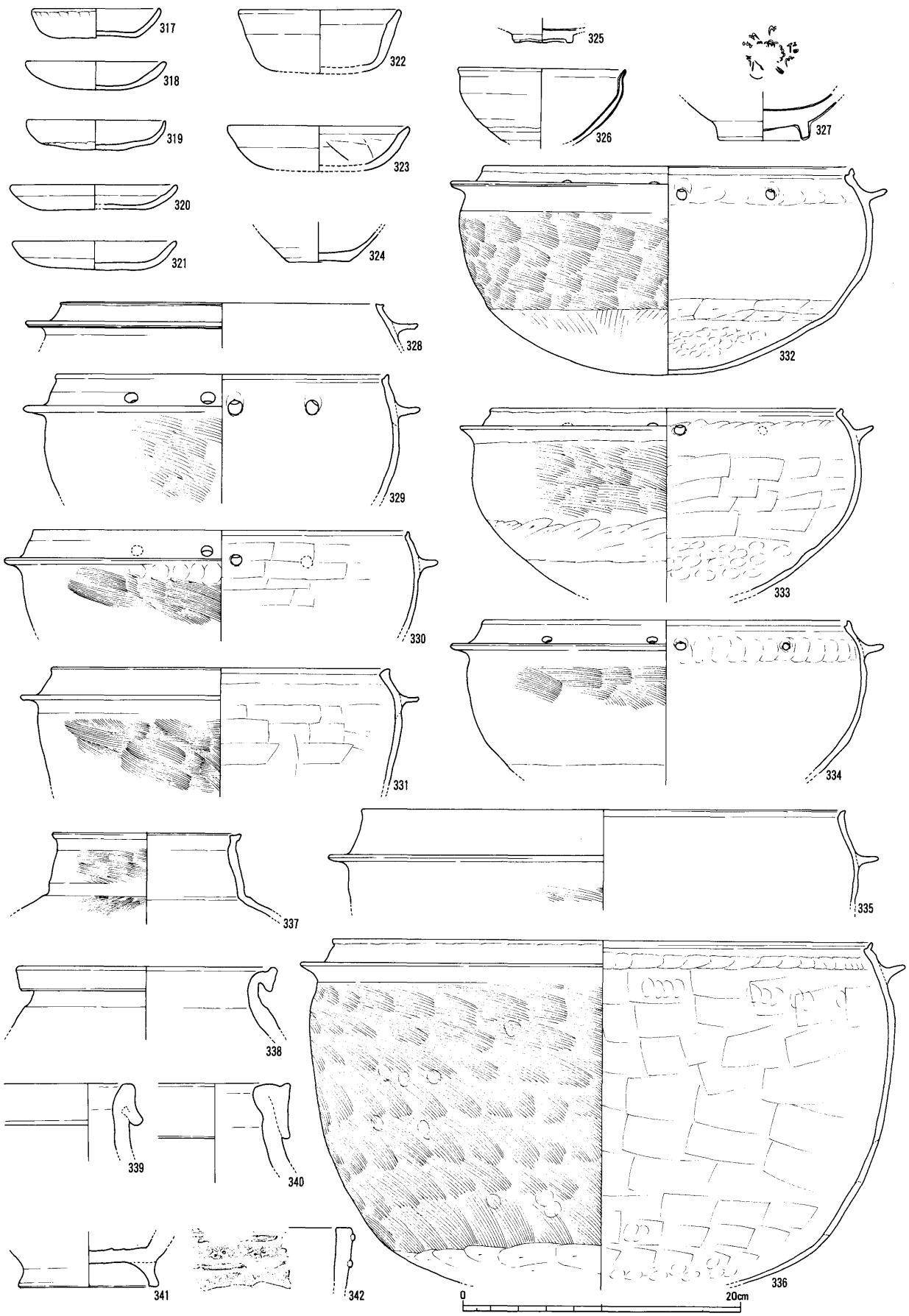


fig. 54 大土坑SZ60　出土土器 (1:4)

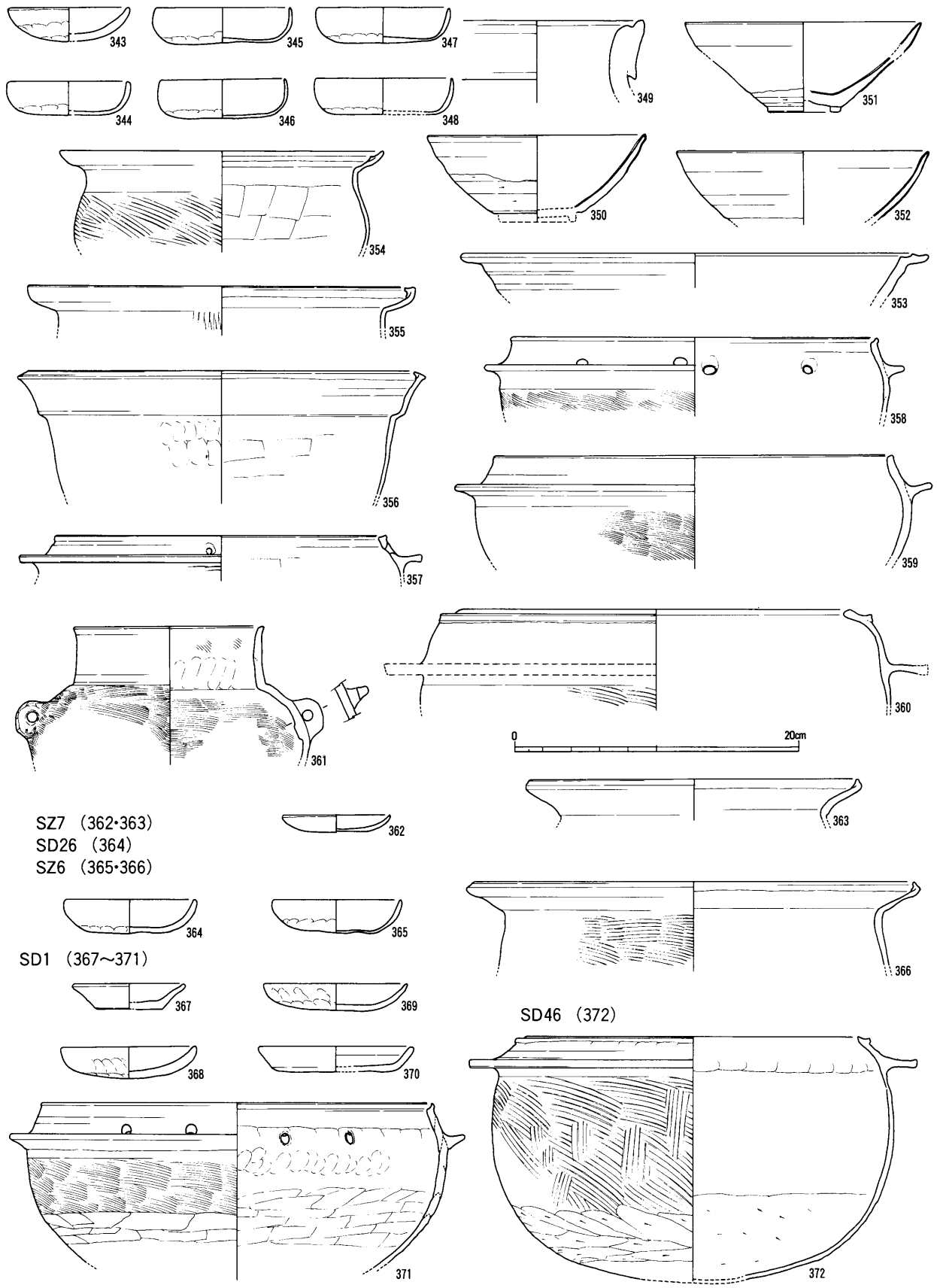


fig. 55 大土坑SK69他　出土土器 (1:4)

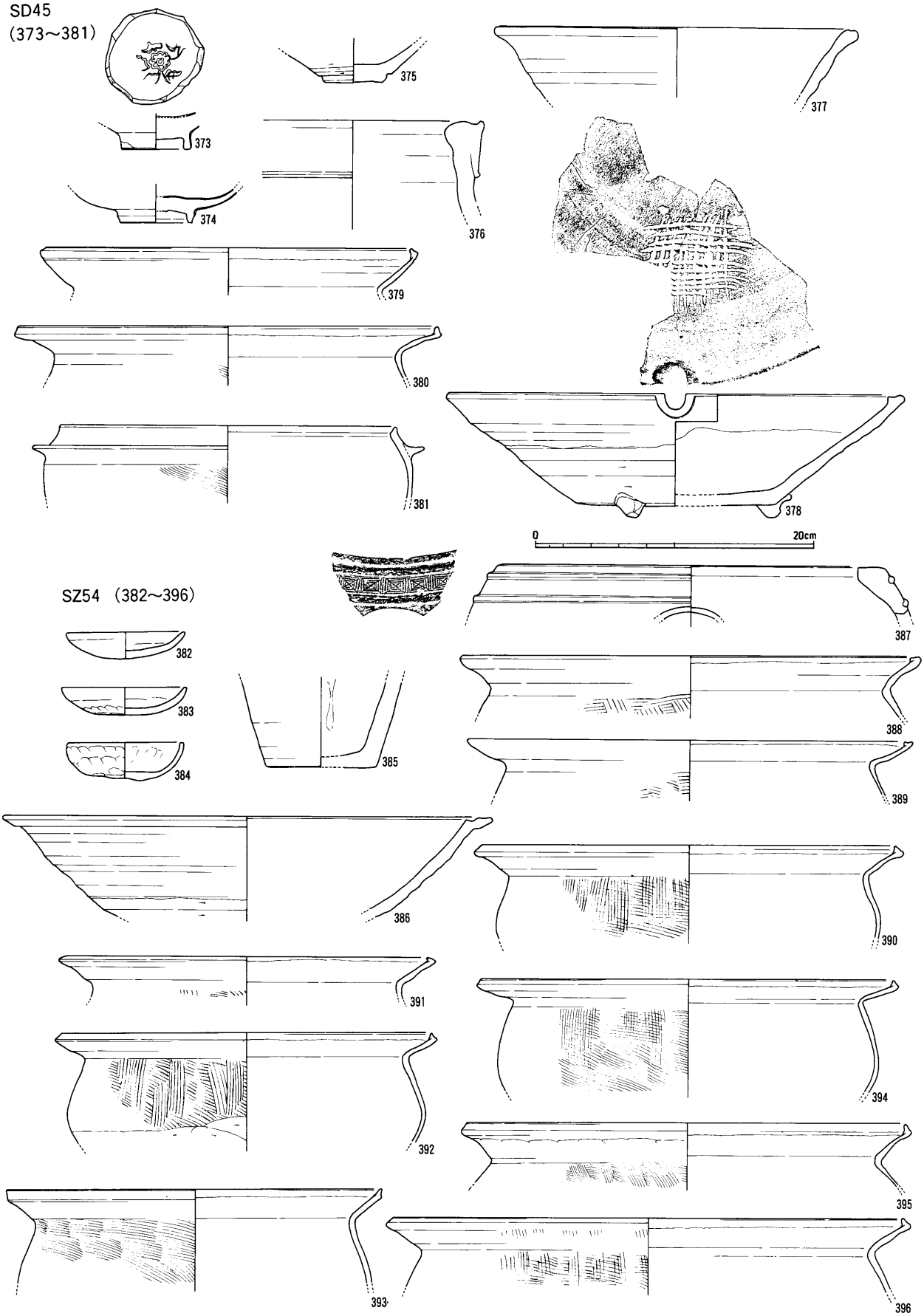


fig. 56　溝SD45他　出土土器（1:4）

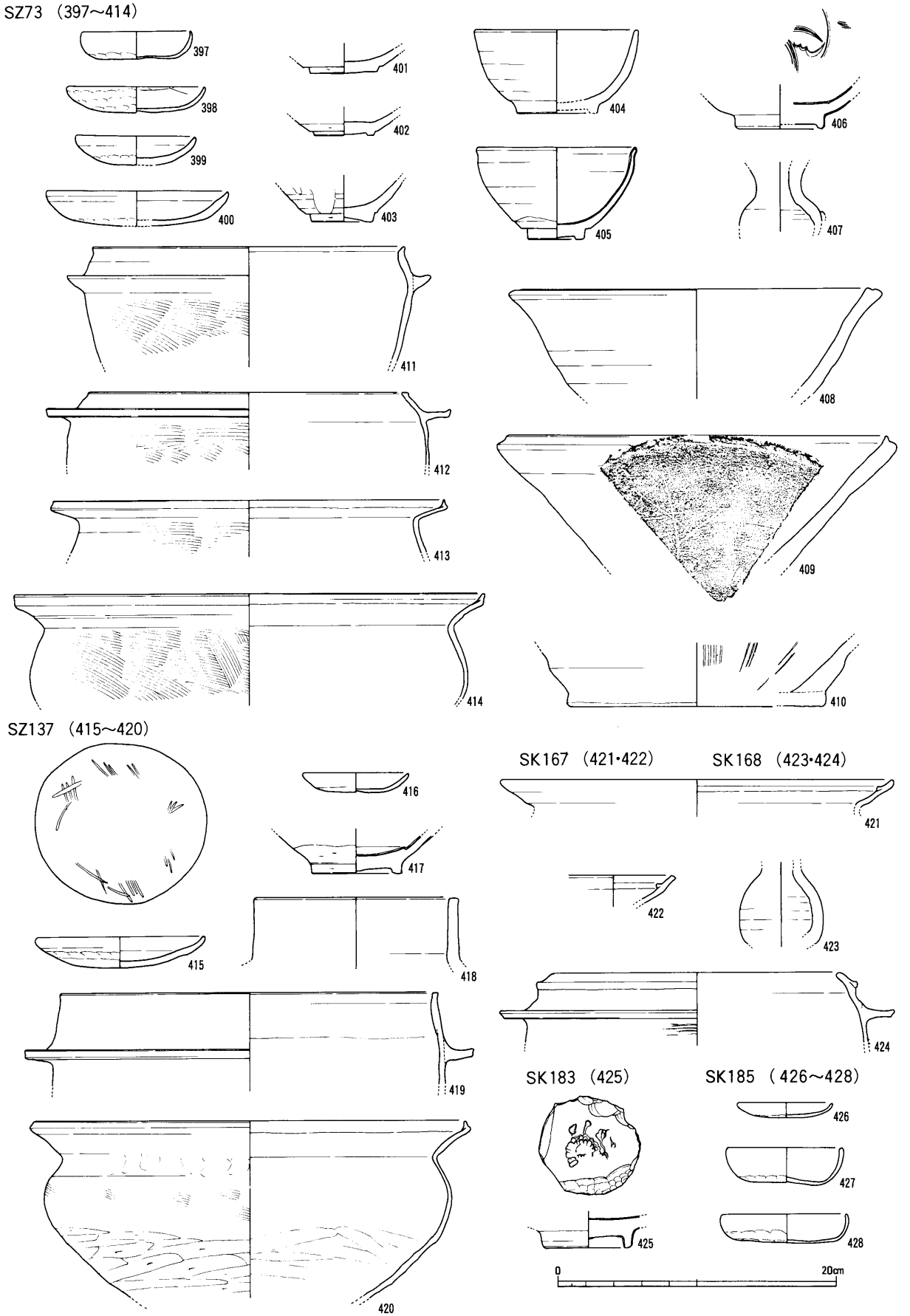


fig. 57 大土坑SZ73他　出土土器 (1:4)

SK115 (429～432)

SK181 (433～436)

SK192 (437～452)

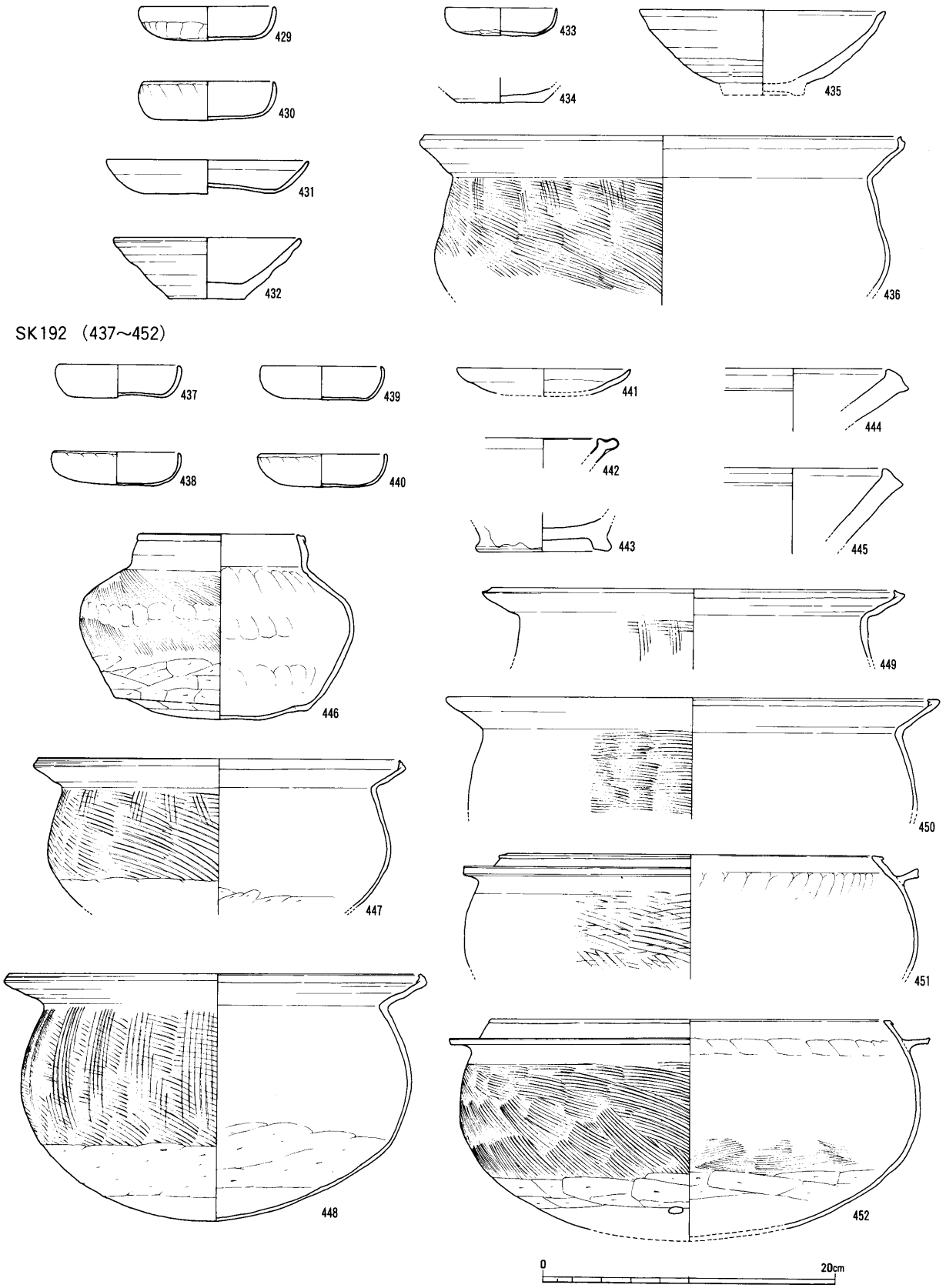


fig. 58 土坑SK192他　出土土器 (1:4)

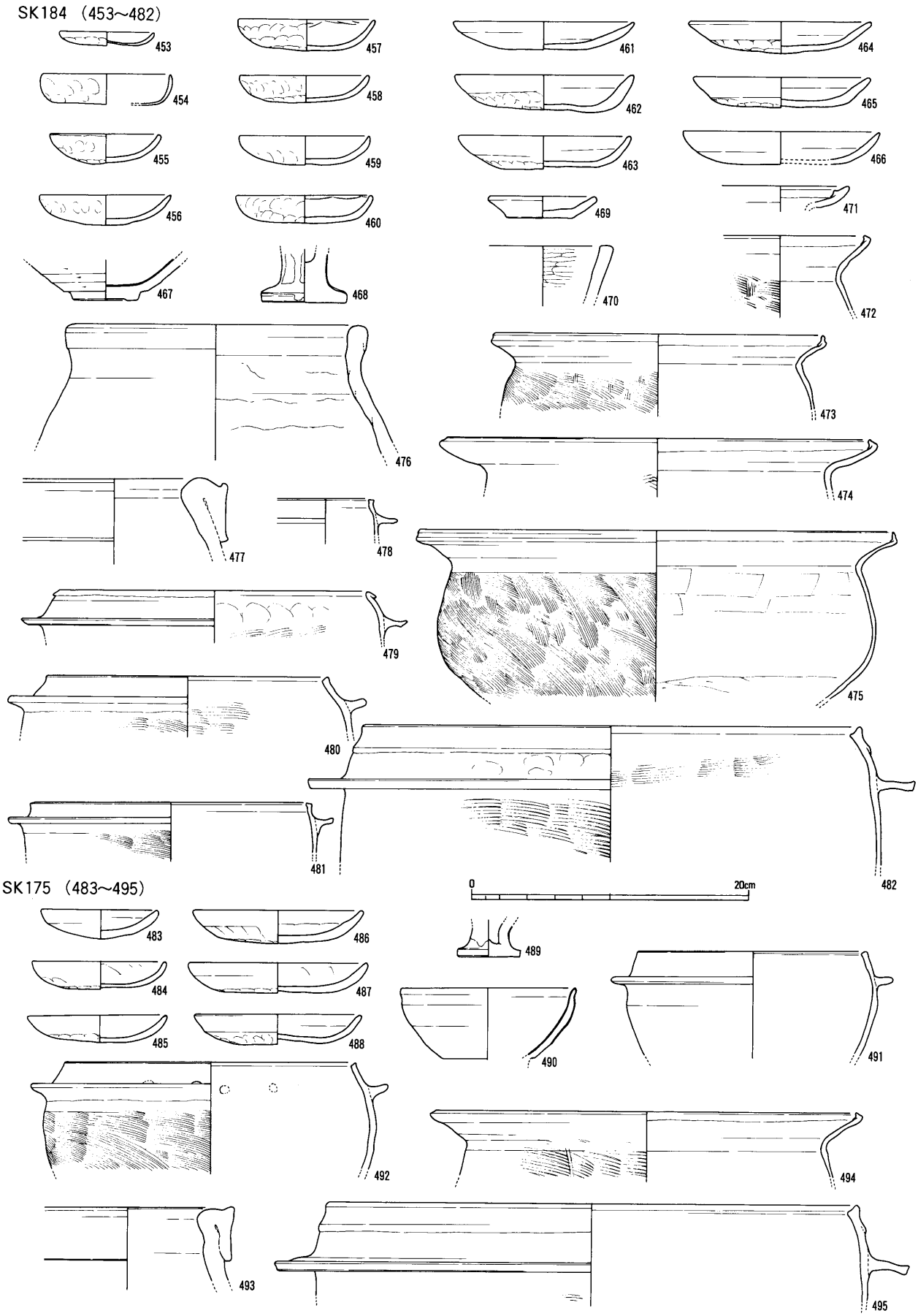


fig. 59　大土坑SK184・175他　出土土器（1:4）

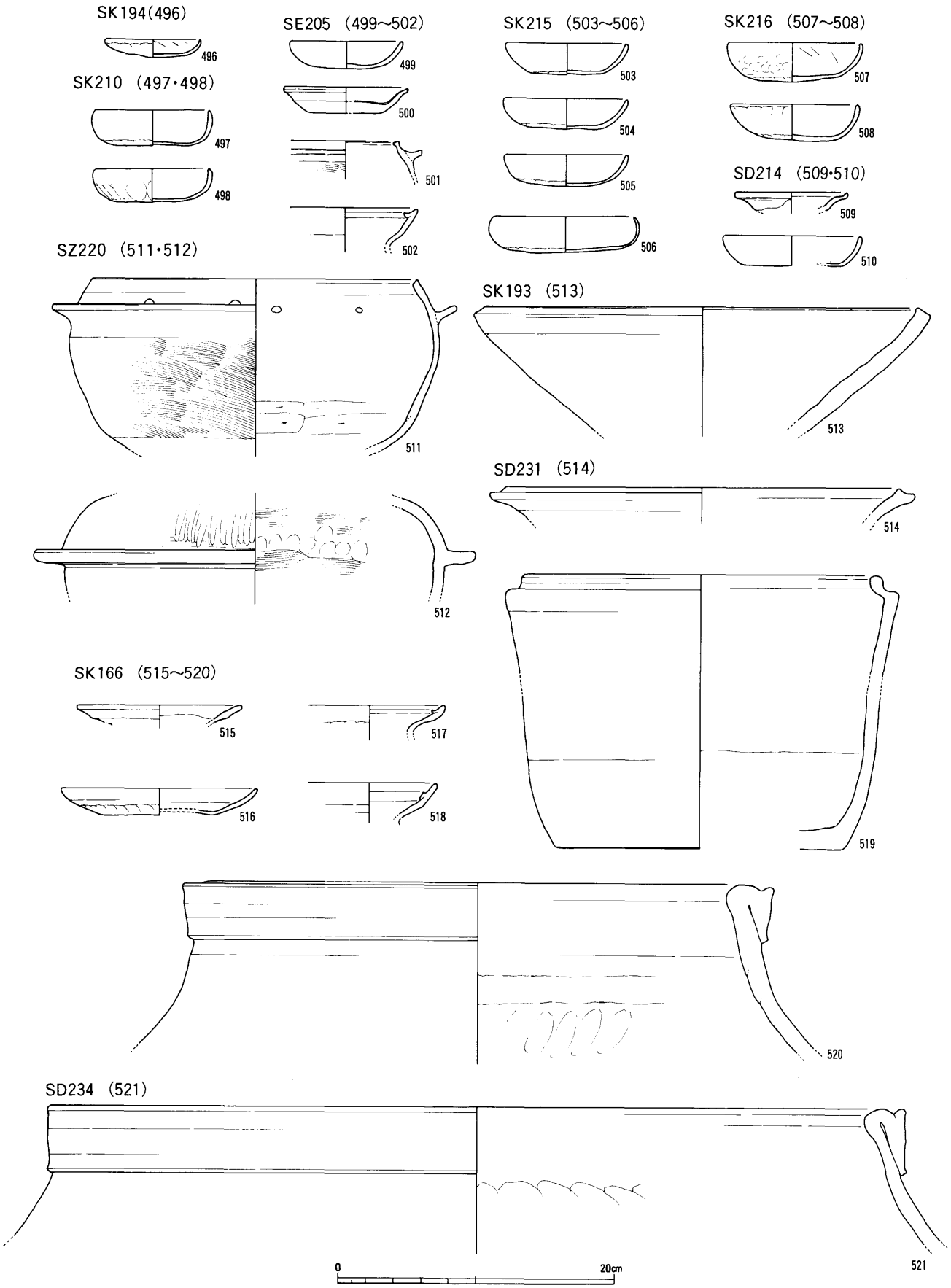


fig. 60 大土坑SK166他　出土土器（1:4）

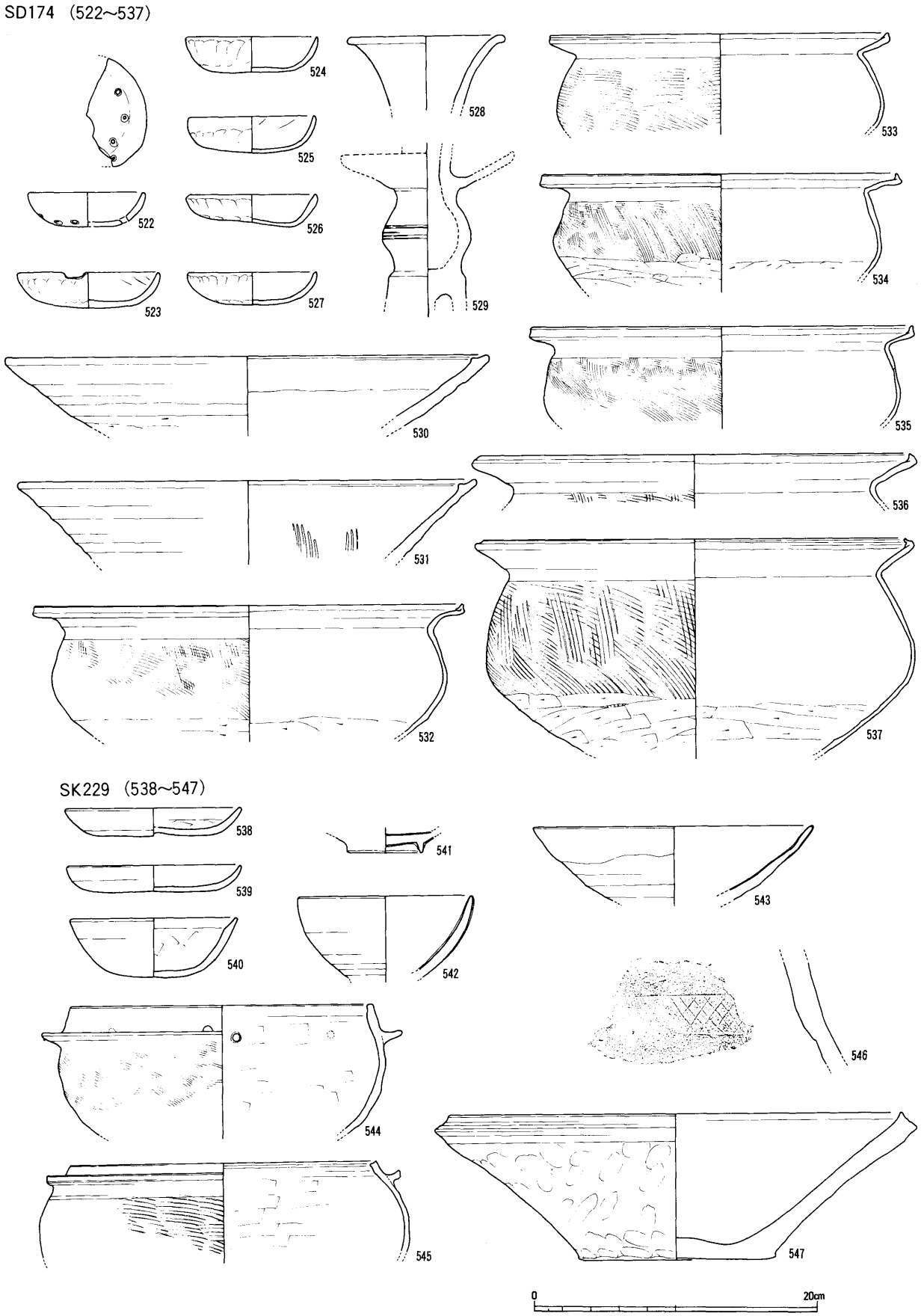


fig. 61 溝SD174・大土坑SK229　出土土器 (1:4)

SK209 (548~565)

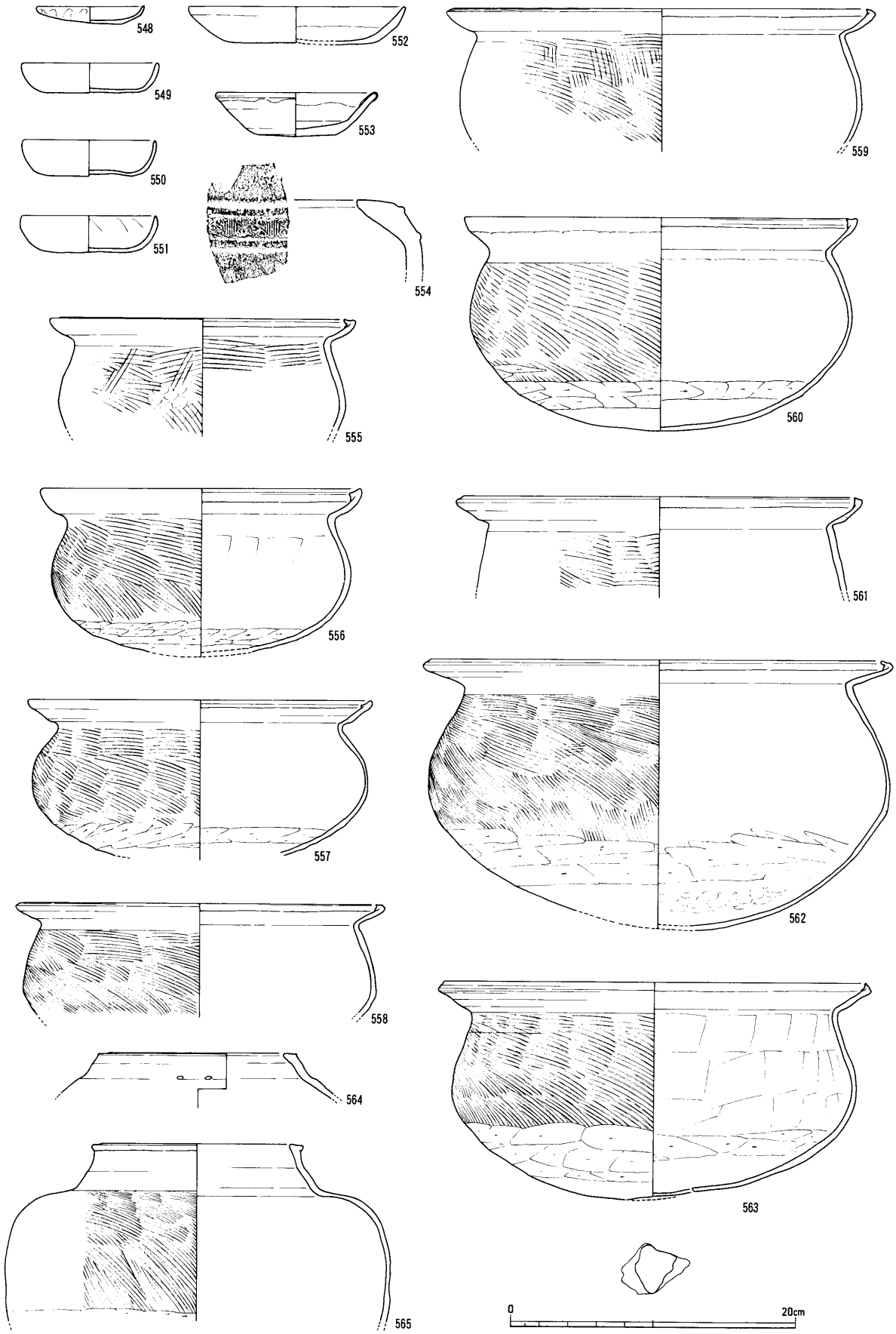


fig. 62 土坑SK209　出土土器 (1:4)

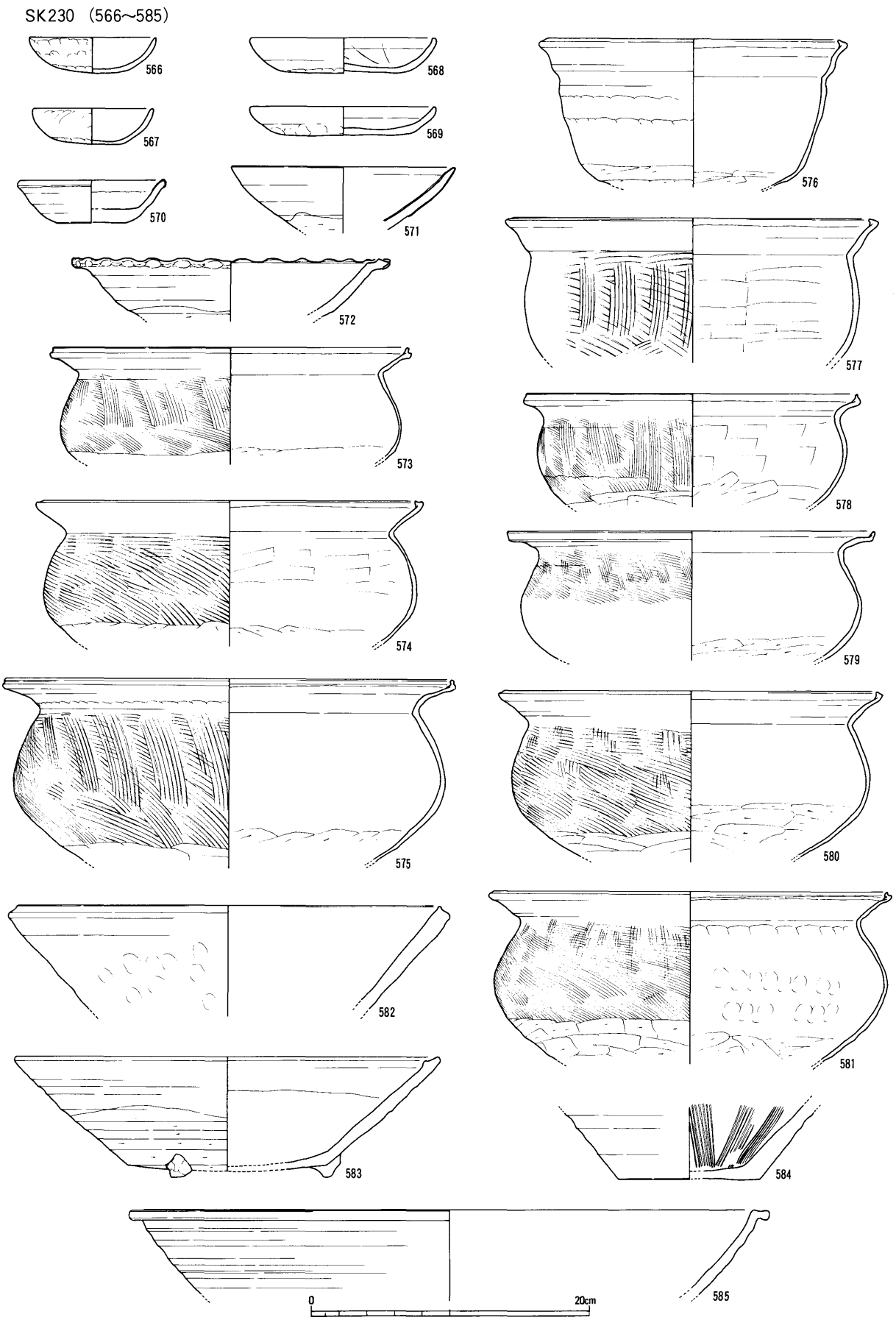


fig. 63 大土坑SK230　出土土器 (1:4)

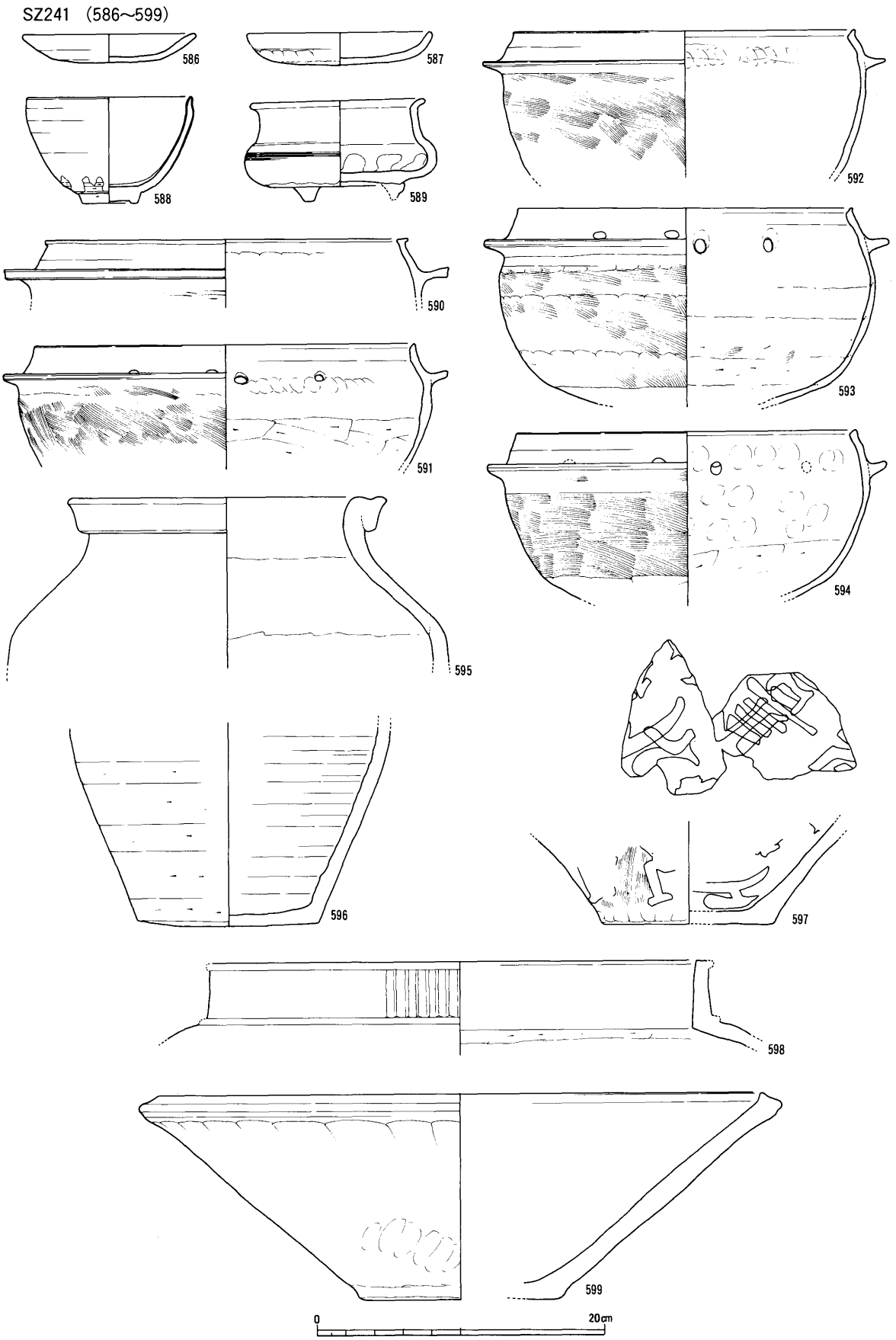


fig. 64 大土坑SZ 241　出土土器 (1:4)

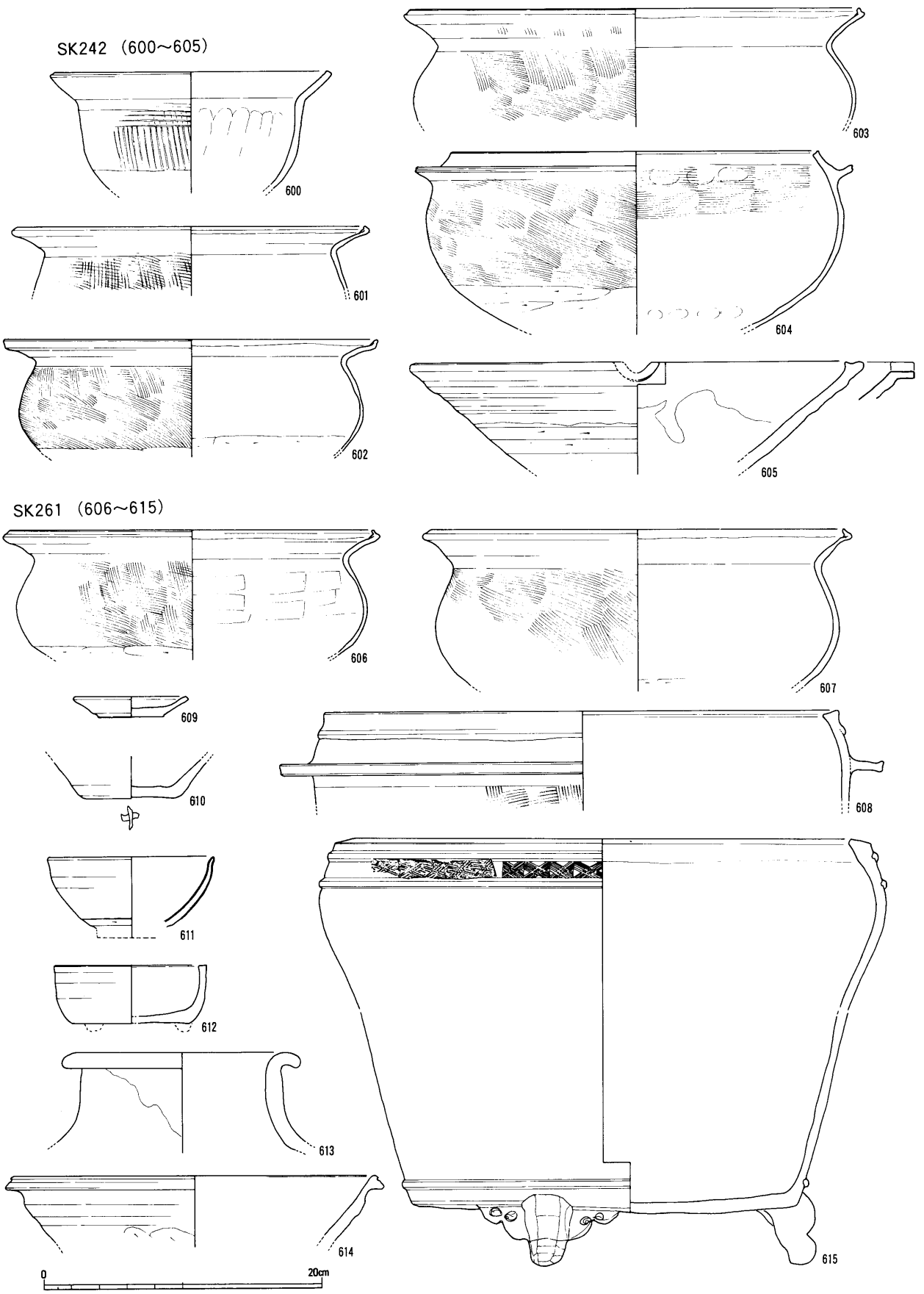


fig. 65　大土坑SK261他　出土土器（1:4）

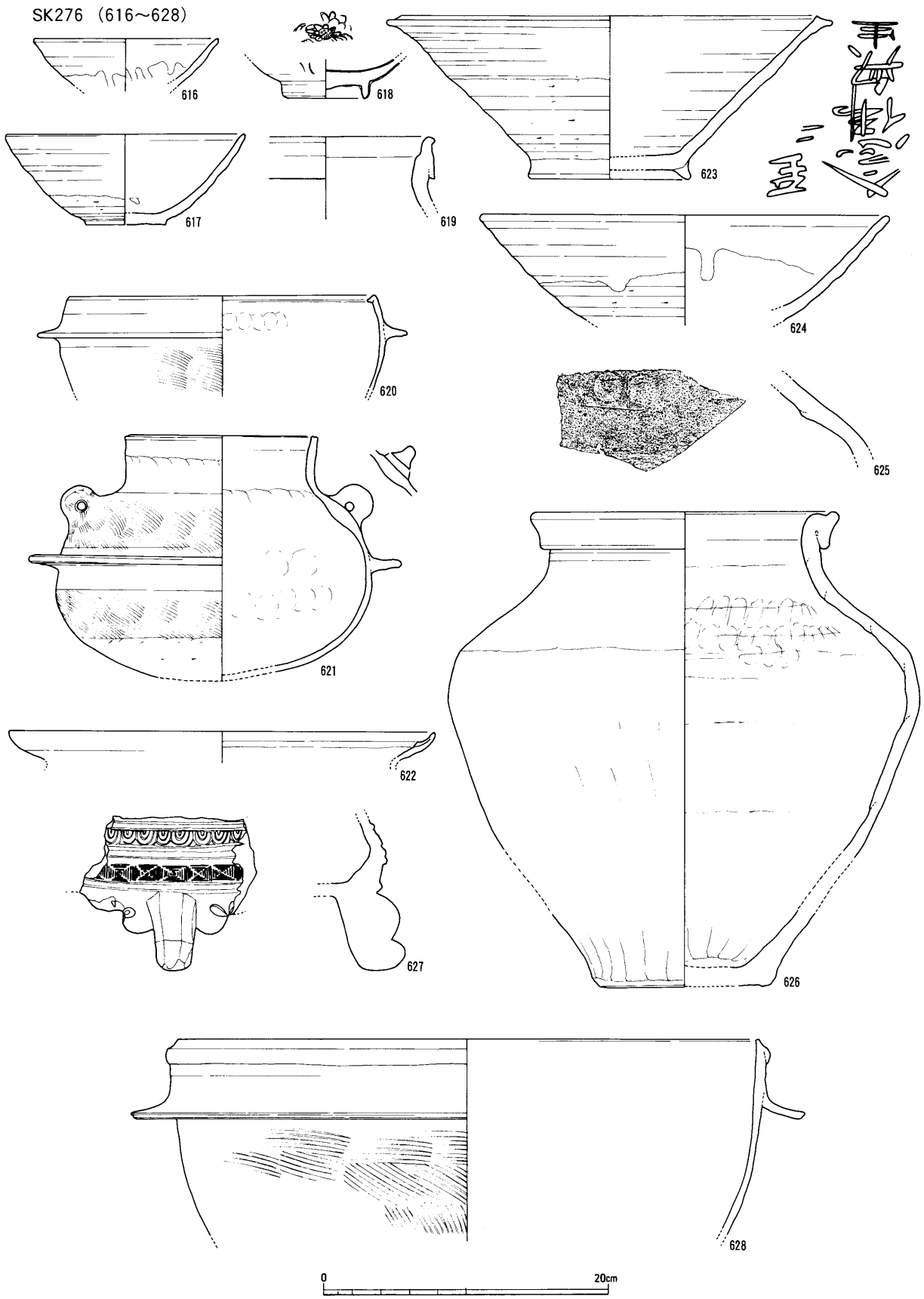


fig. 66 大土坑SK276他　出土土器（1:4）

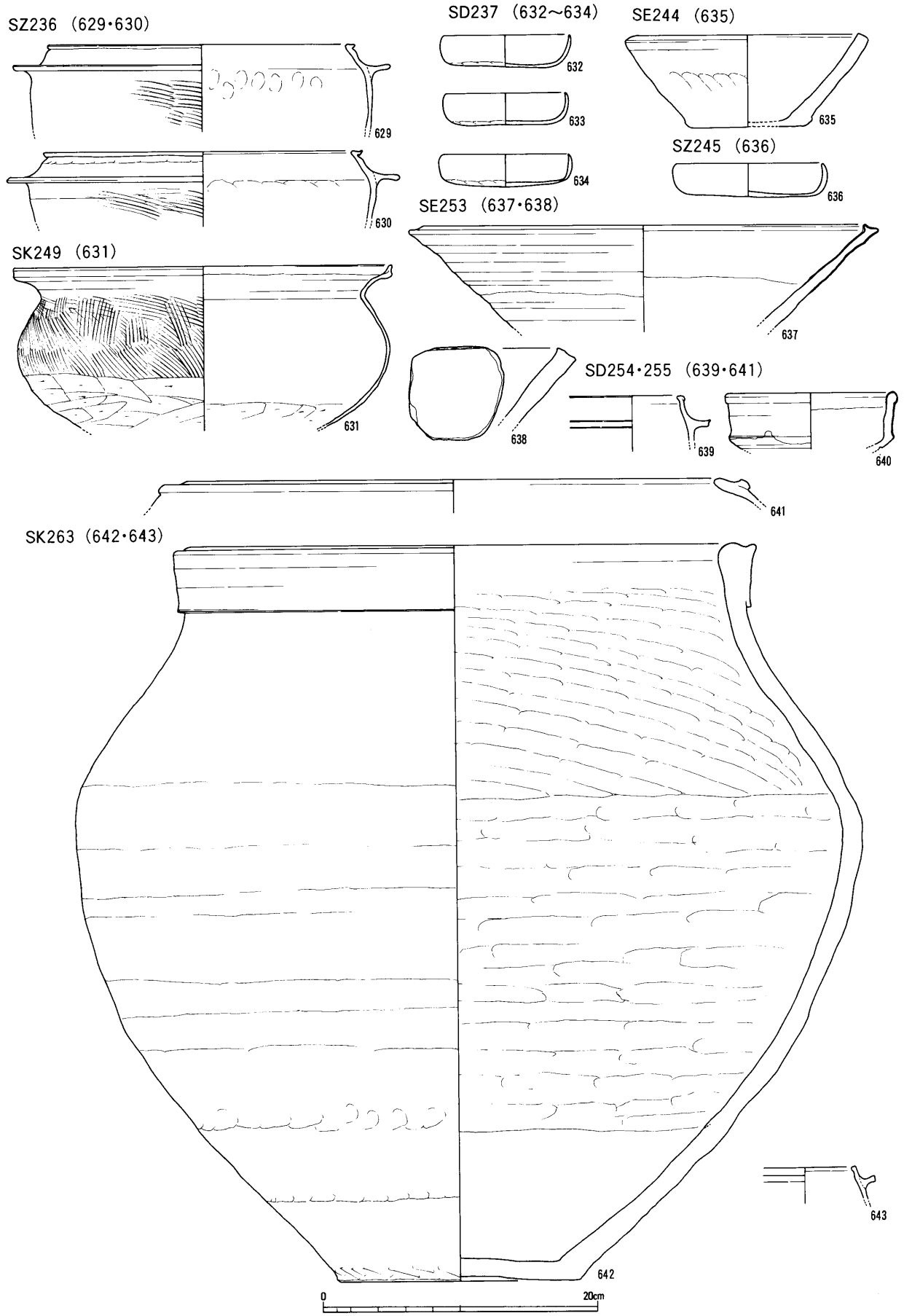


fig. 67　埋甕SK263他　出土土器（1:4）

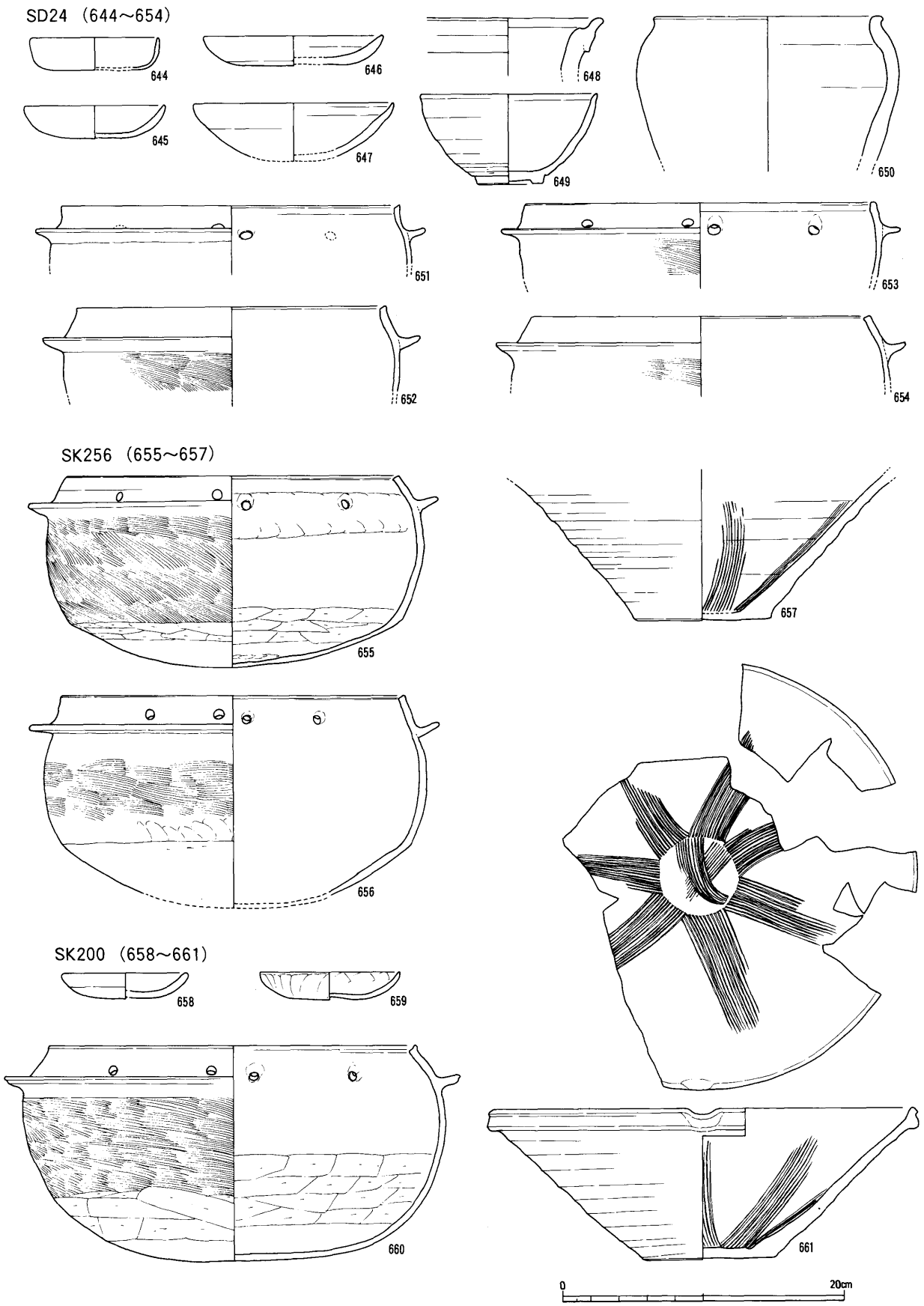


fig. 48　土坑SK200他　出土土器（1:4）

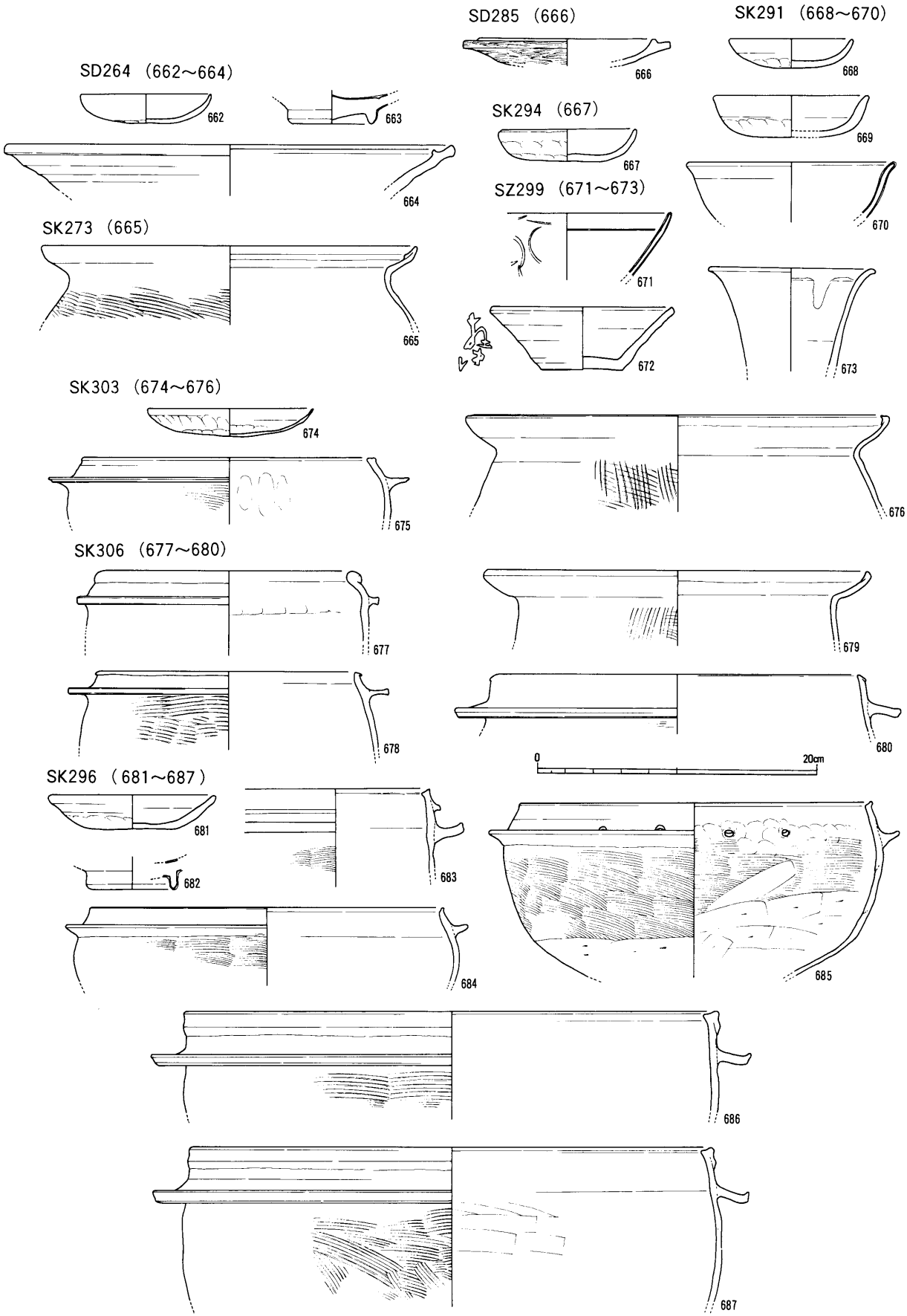


fig 69　大土坑SK296他　出土土器（1:4）

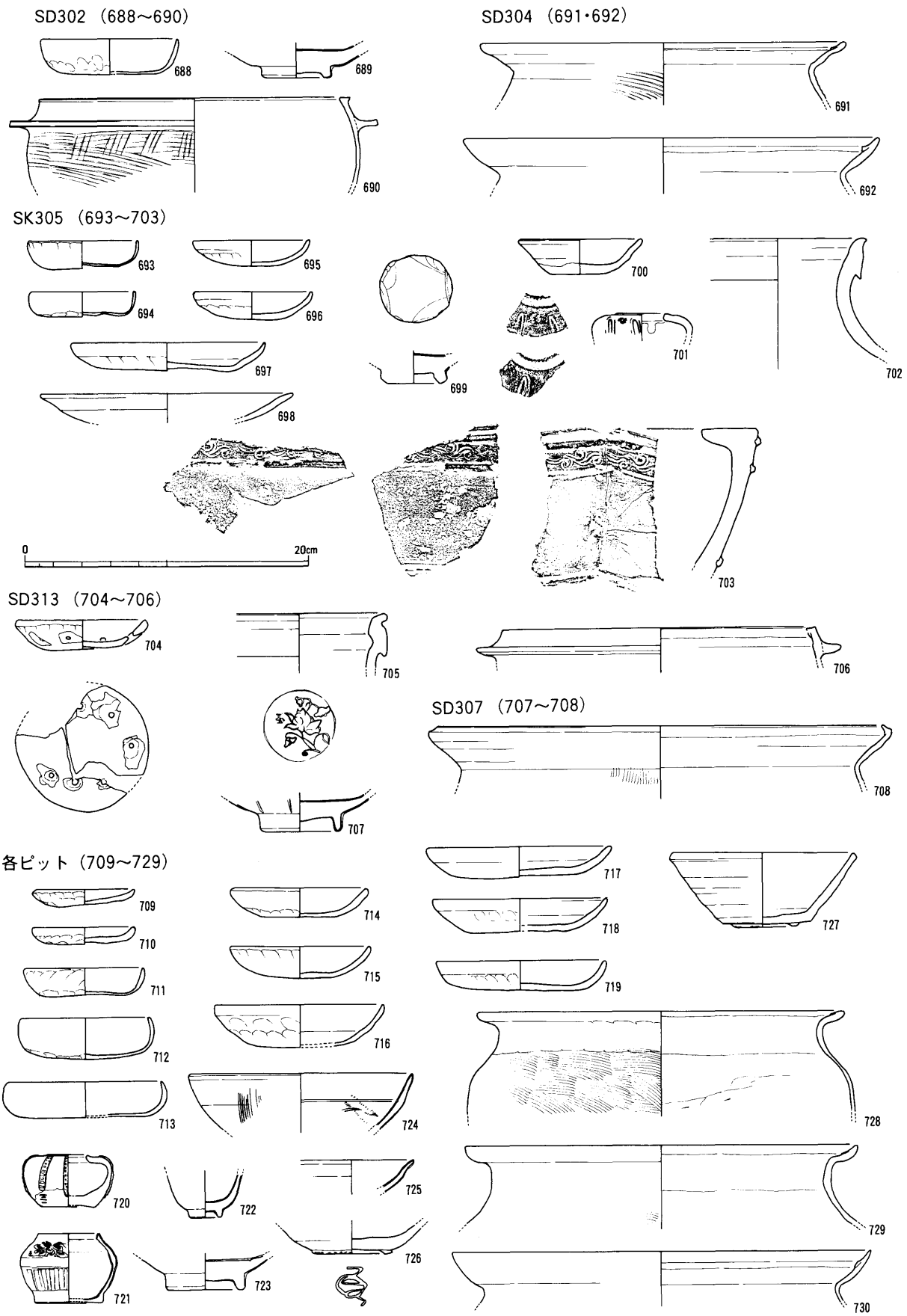


fig. 70 大土坑SK305、各地区ピット他 出土土器 (1:4)

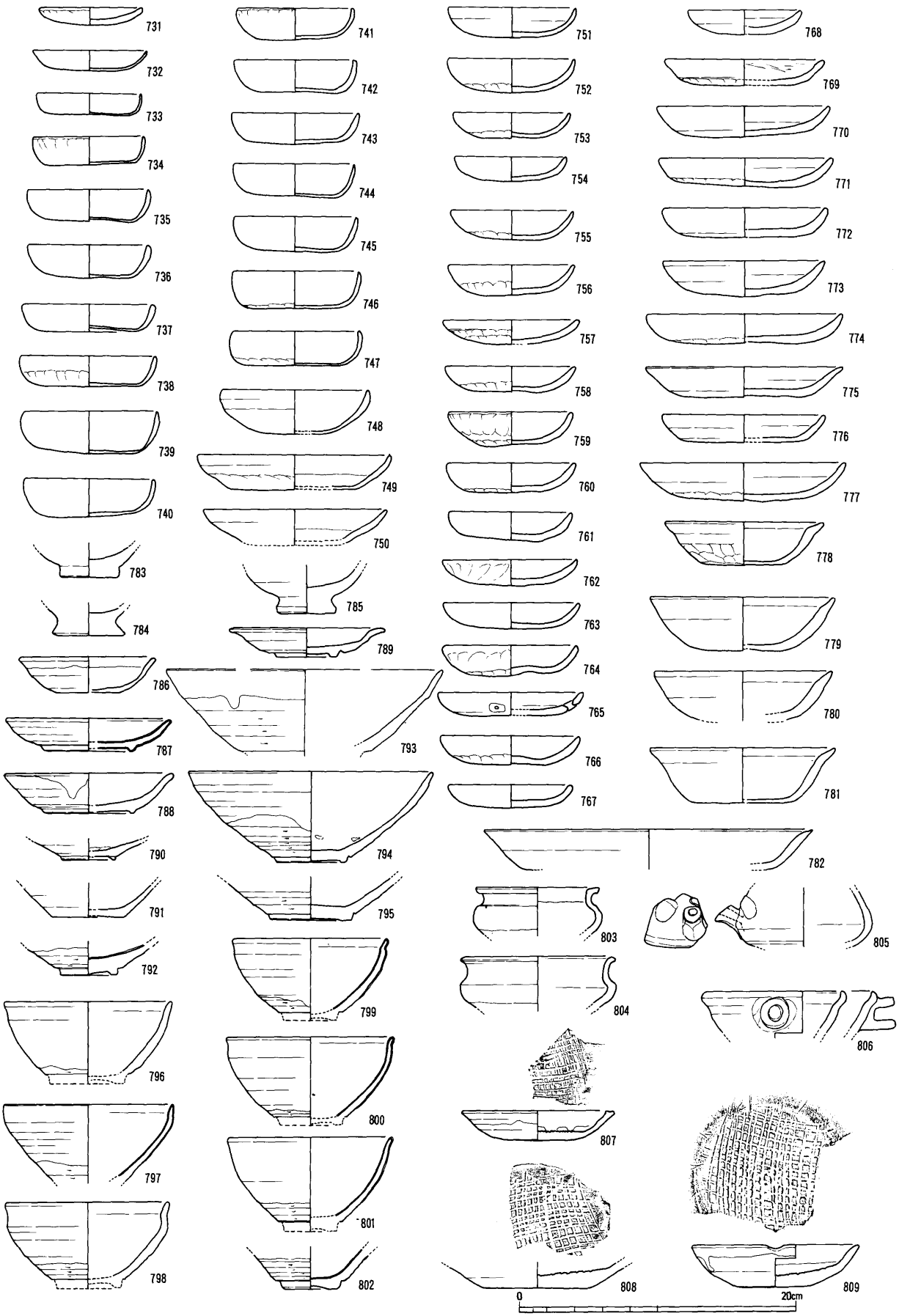


fig. 71 各地区出土土器　土師器・陶器（1:4）

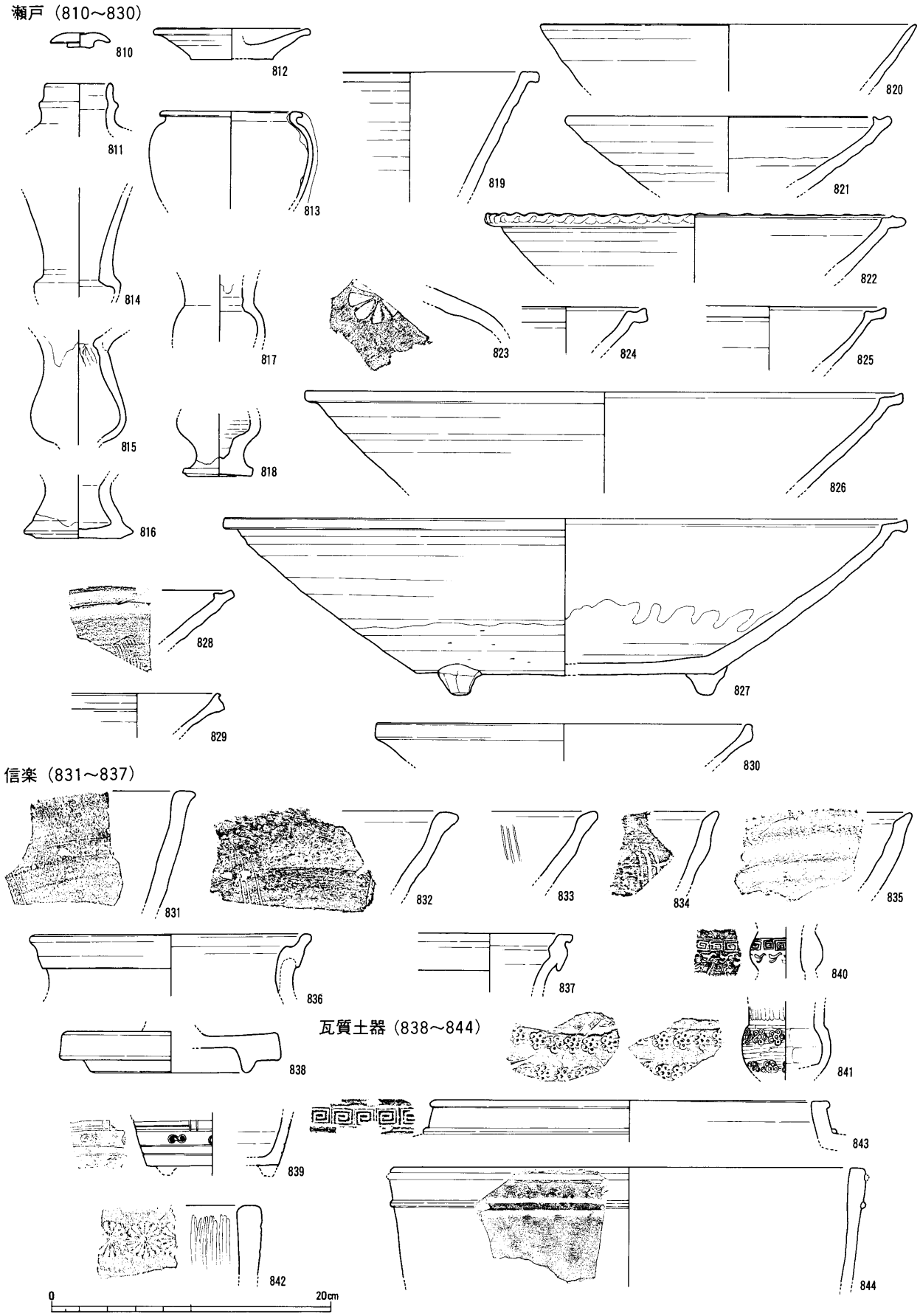


fig. 72 各地区出土土器　瀬戸・信楽・瓦質土器（1:4）

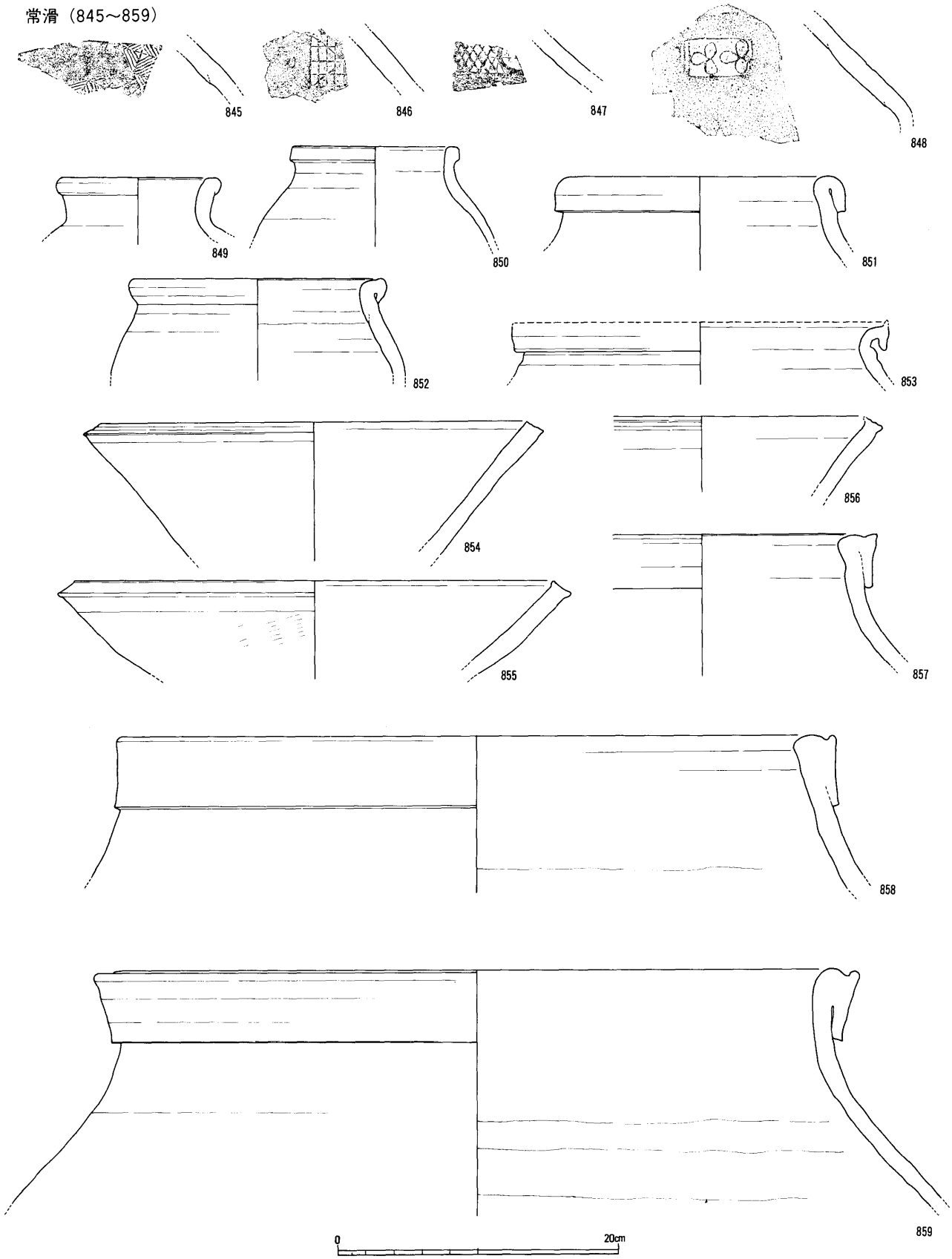


fig. 73　各地区出土土器　常滑（1:4）

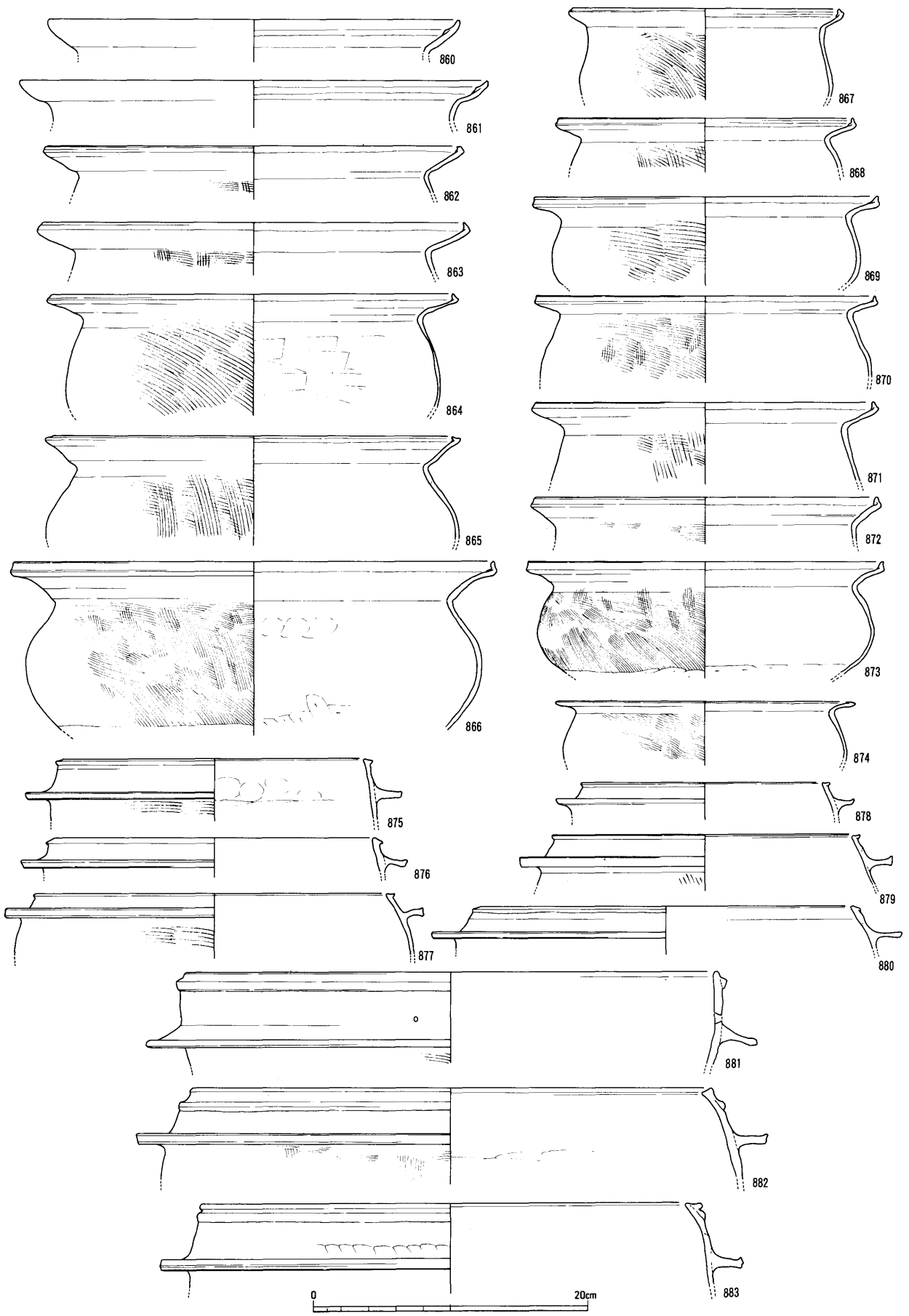


fig. 74　各地区出土土器　土師器鍋・羽釜（1:4）

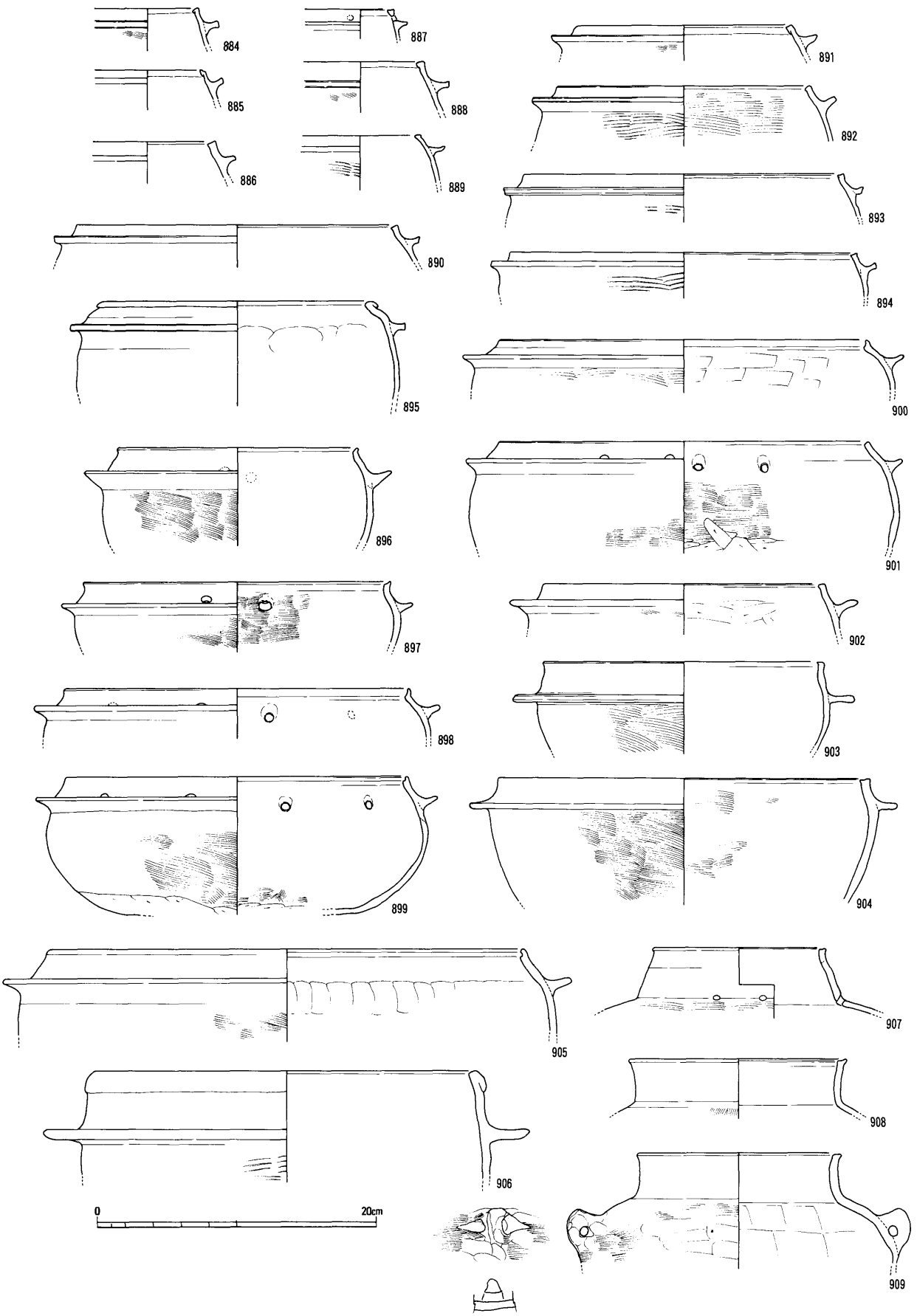


fig. 75 各地区出土土器　土師器羽釜・茶釜（1:4）

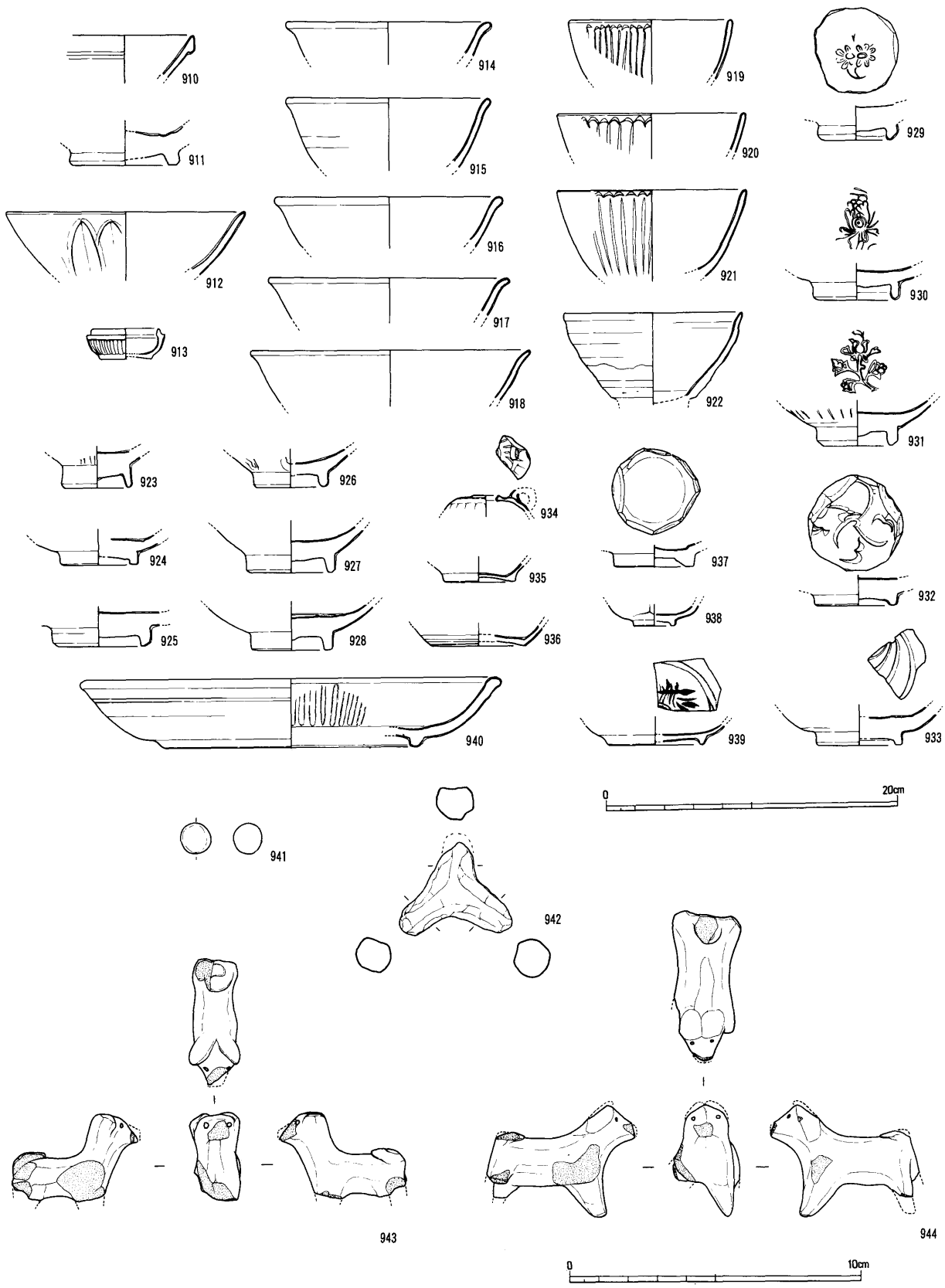


fig. 76 各地区出土土器　貿易陶磁器・犬形土製品ほか（943・944は1:2、他は1:4）

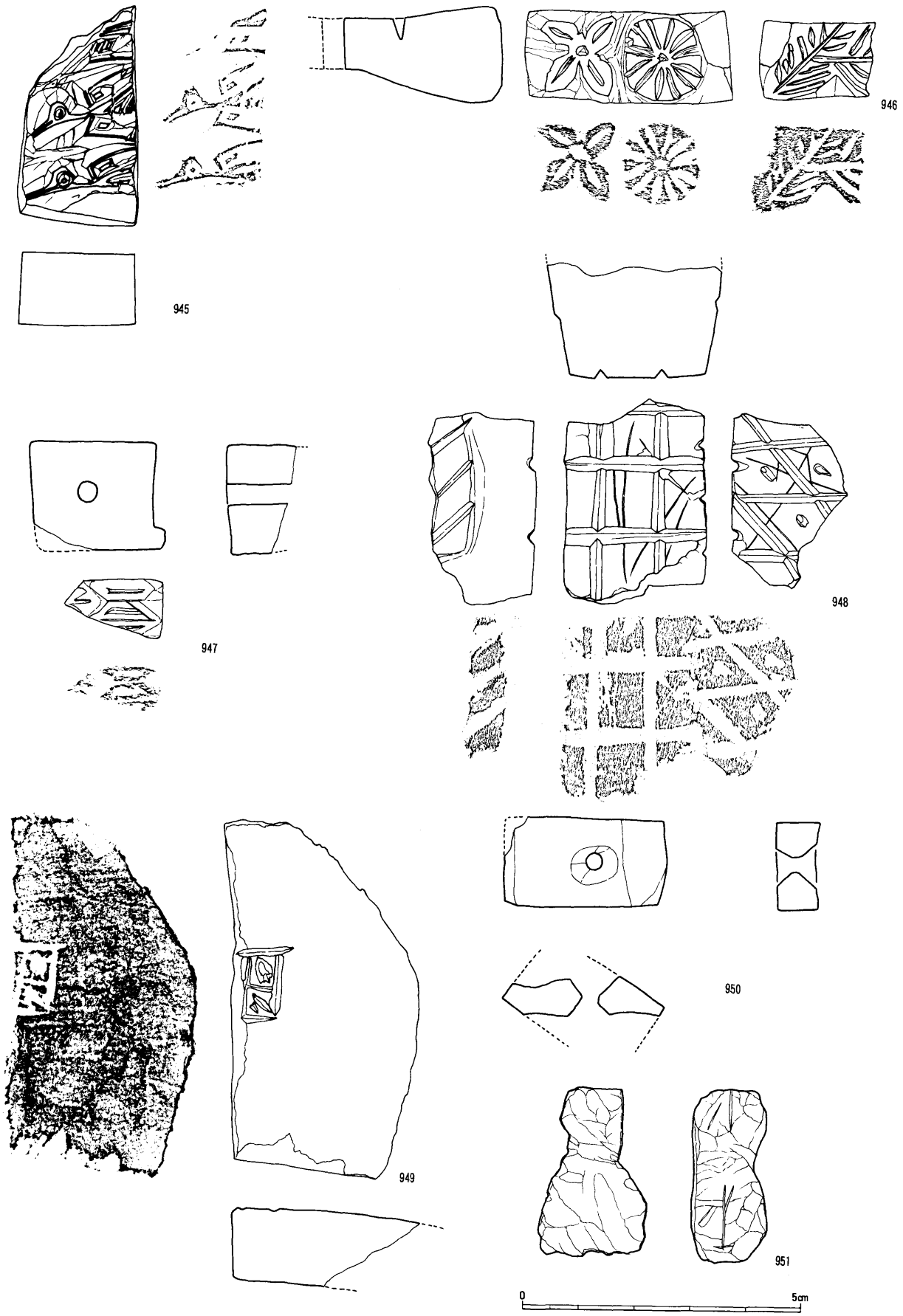


fig. 77　出土石製品(1)　スタンプ類ほか（1:1）

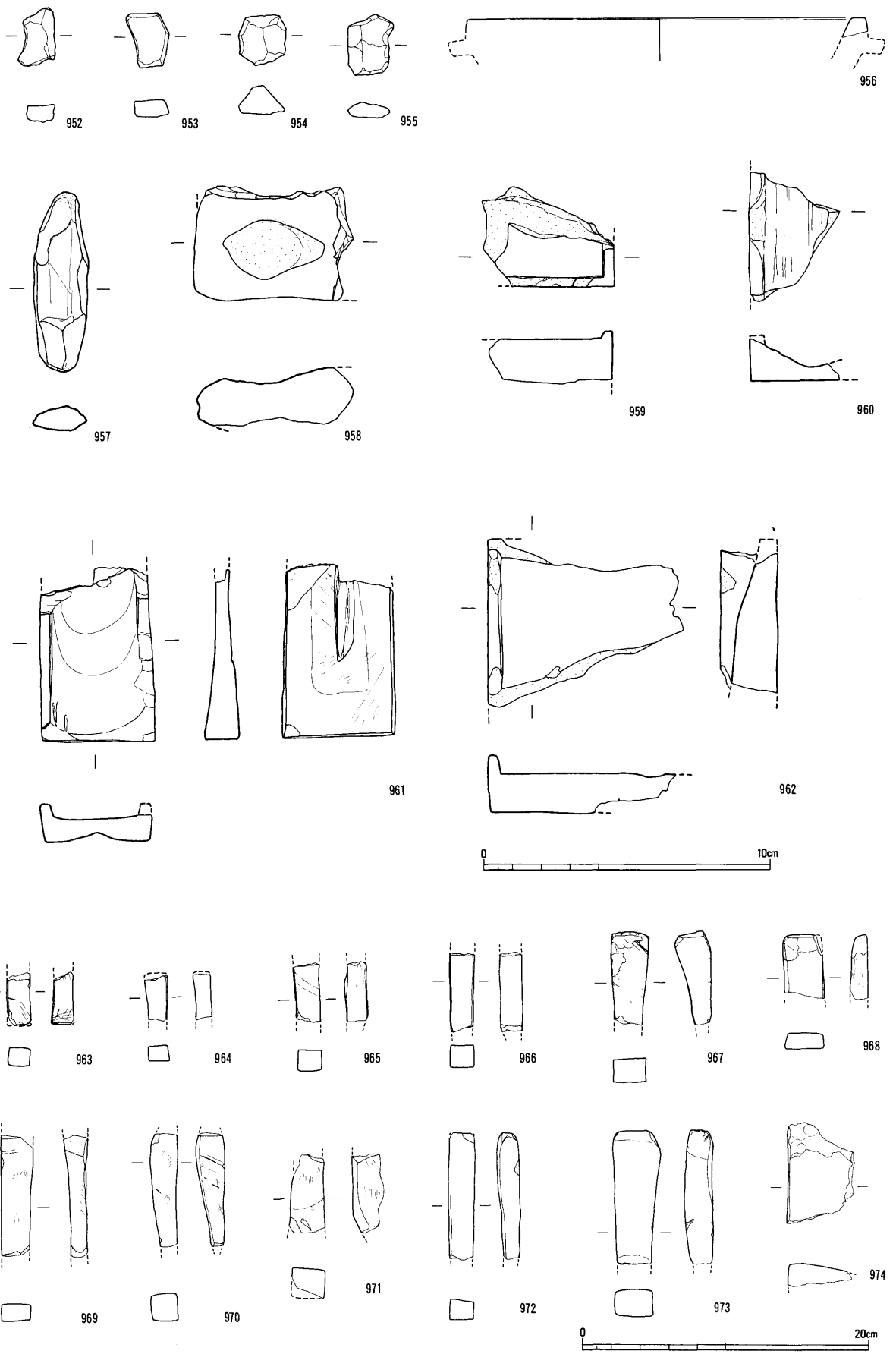


fig. 78　出土石製品(2)　硯・砥石ほか（959～962は1:2、他は1:4）

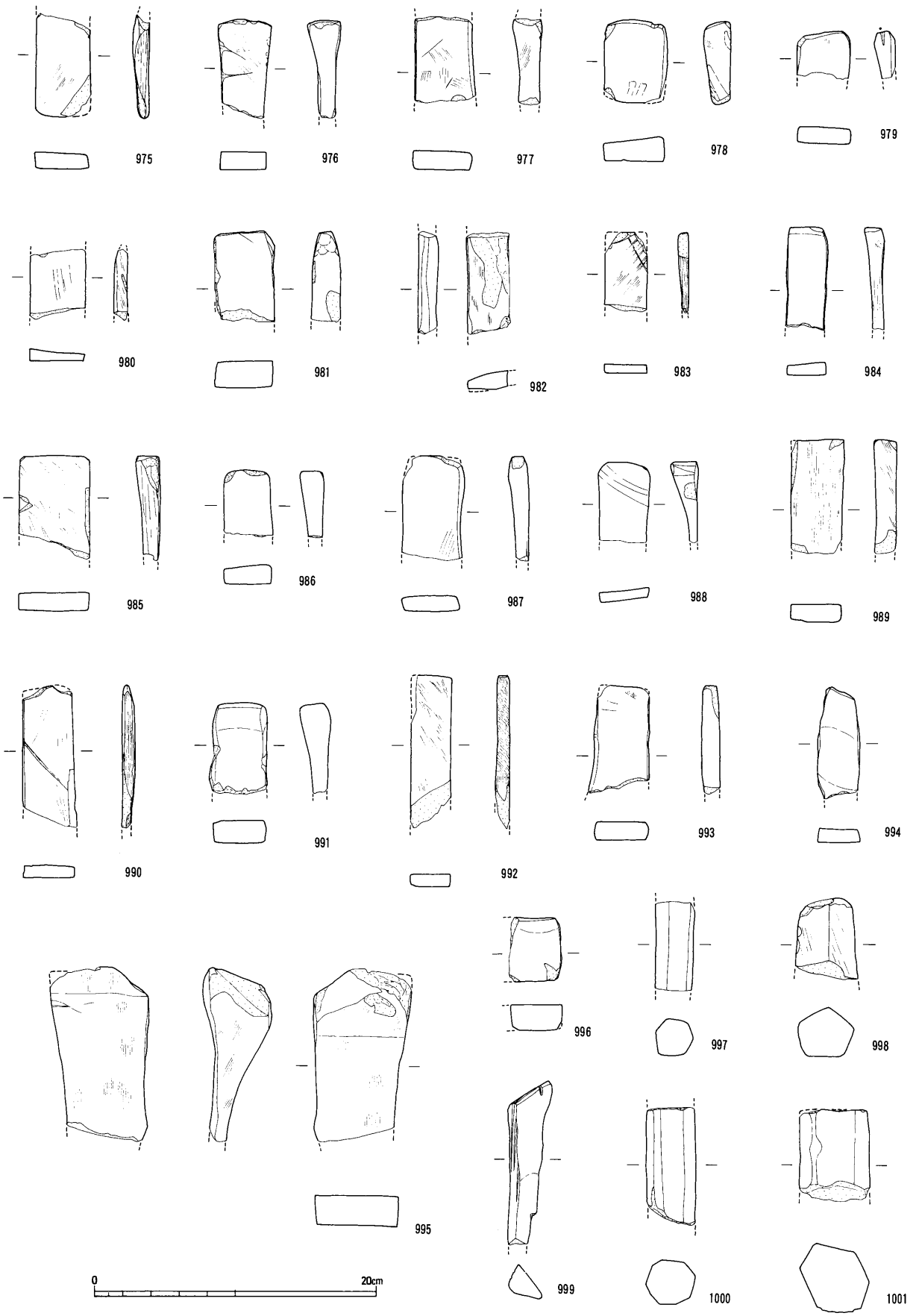


fig. 79　出土石製品(3) 砥石 (1:4)

fig. 80 出土石製品(4) 砥石 (1:4)

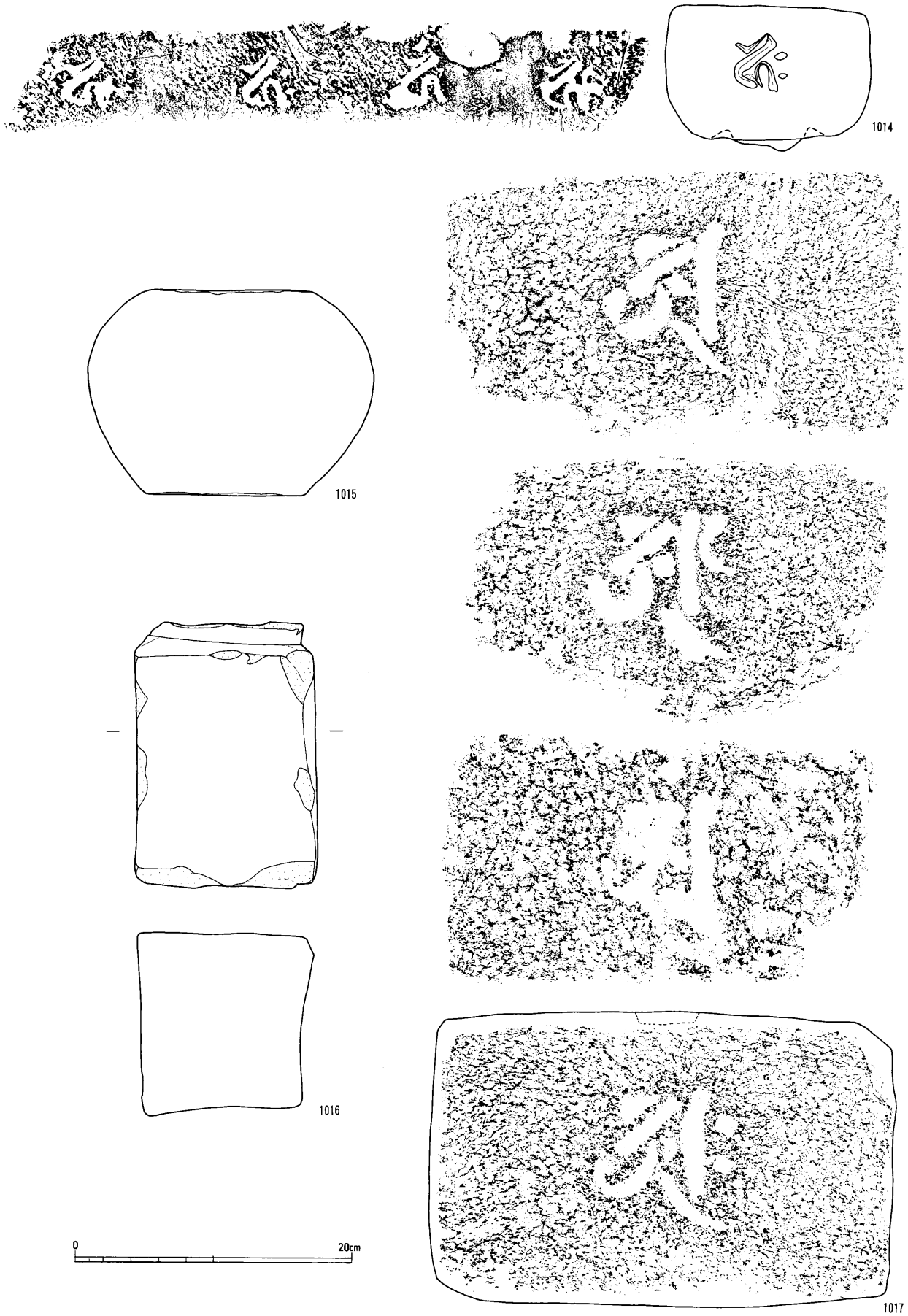


fig. 81　出土石製品(5)　五輪塔　(1:4)

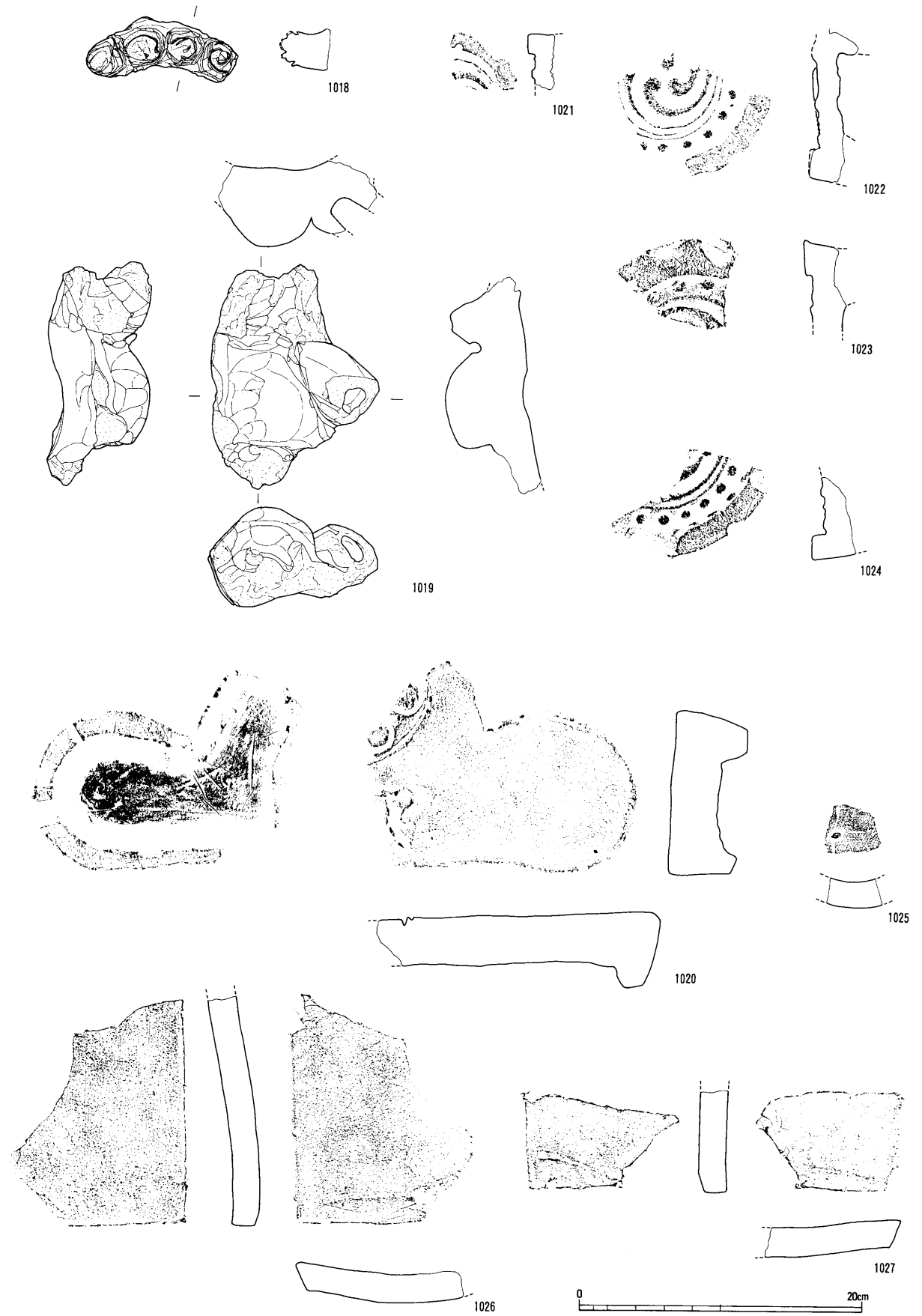


fig. 82　出土瓦(1)（1:4）

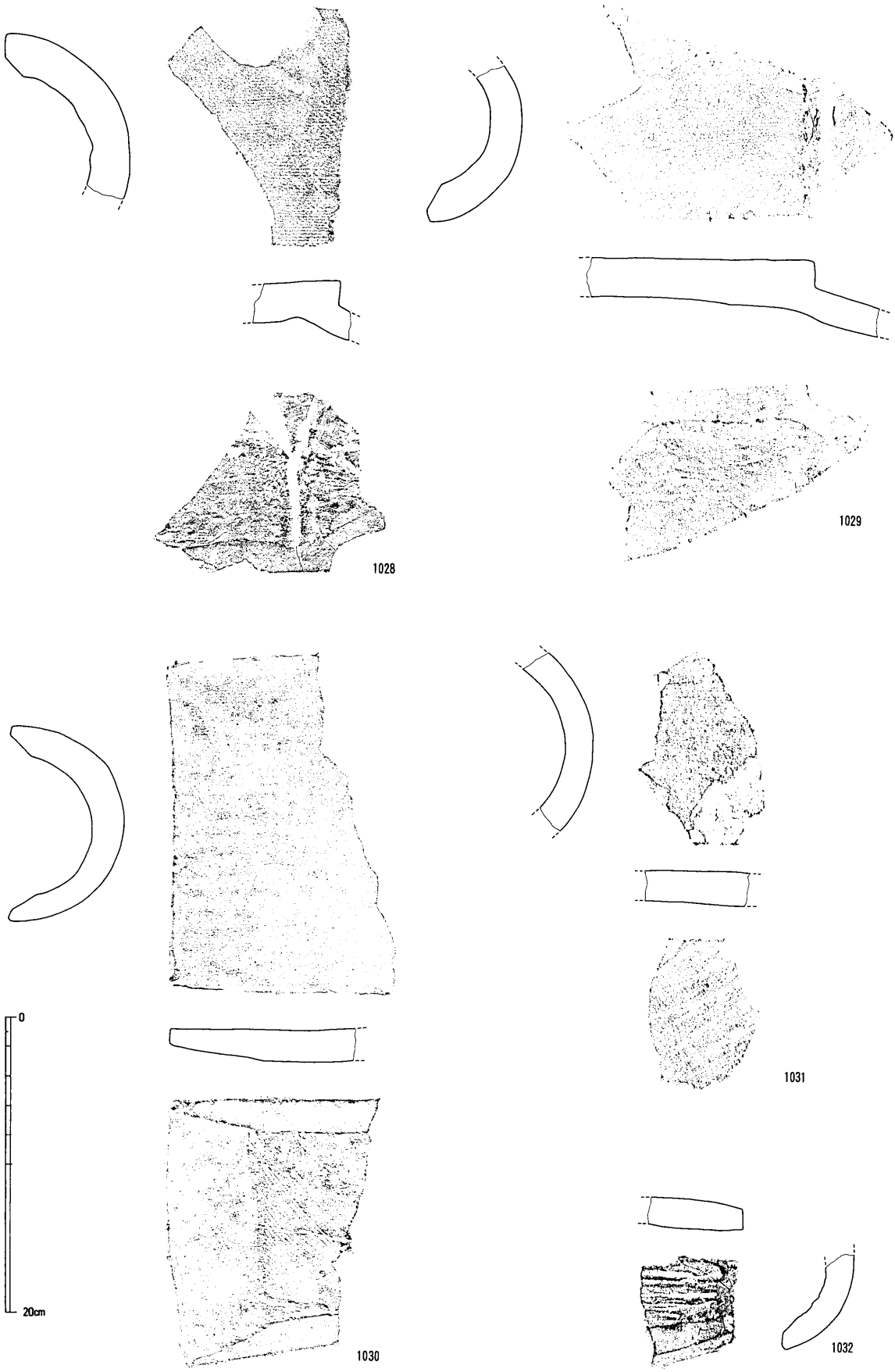


fig. 83　出土瓦（2）（1:4）

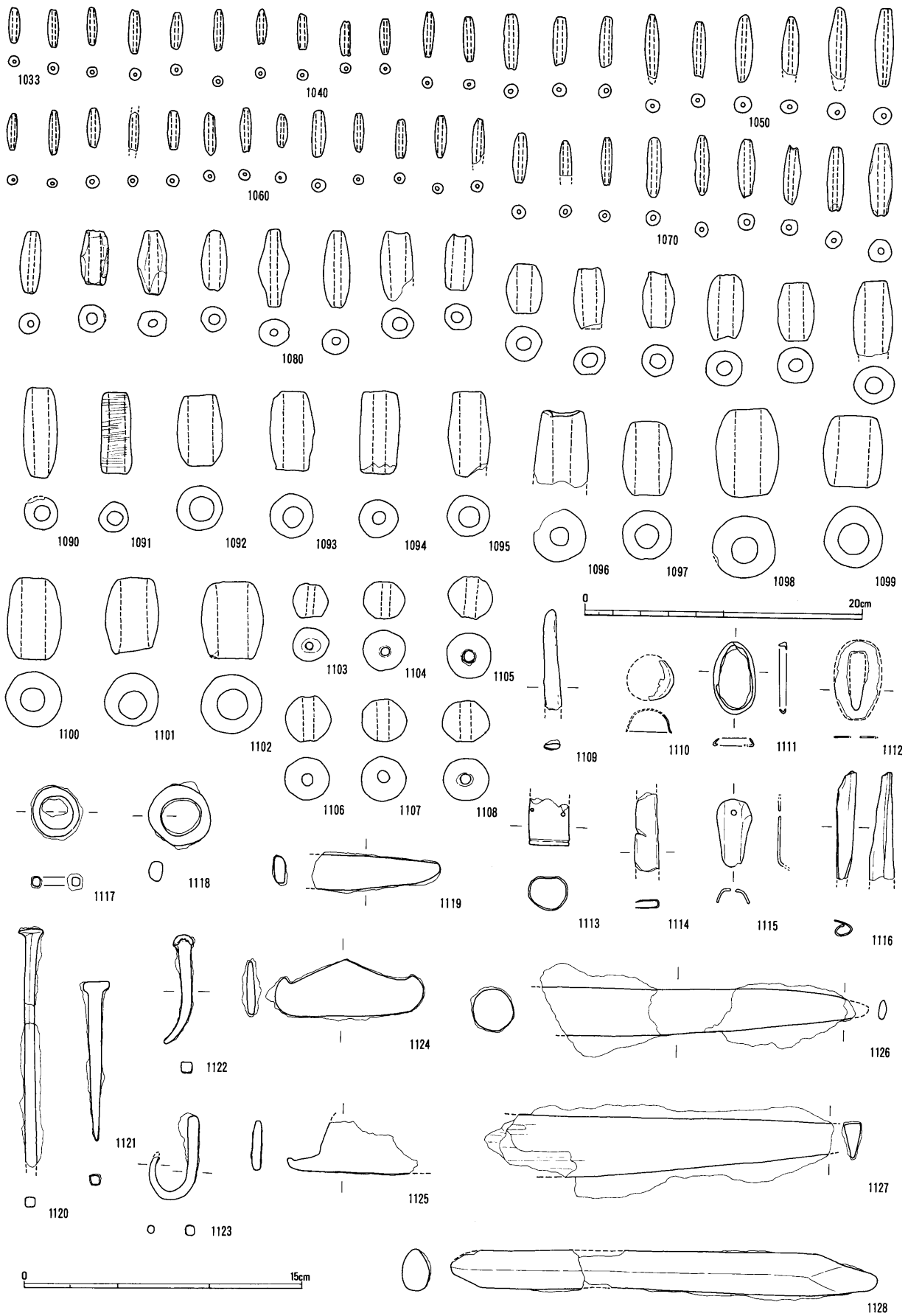


fig. 84　出土土鐘・金属製品（1033～1108は1:4、1109～1128は1:3）

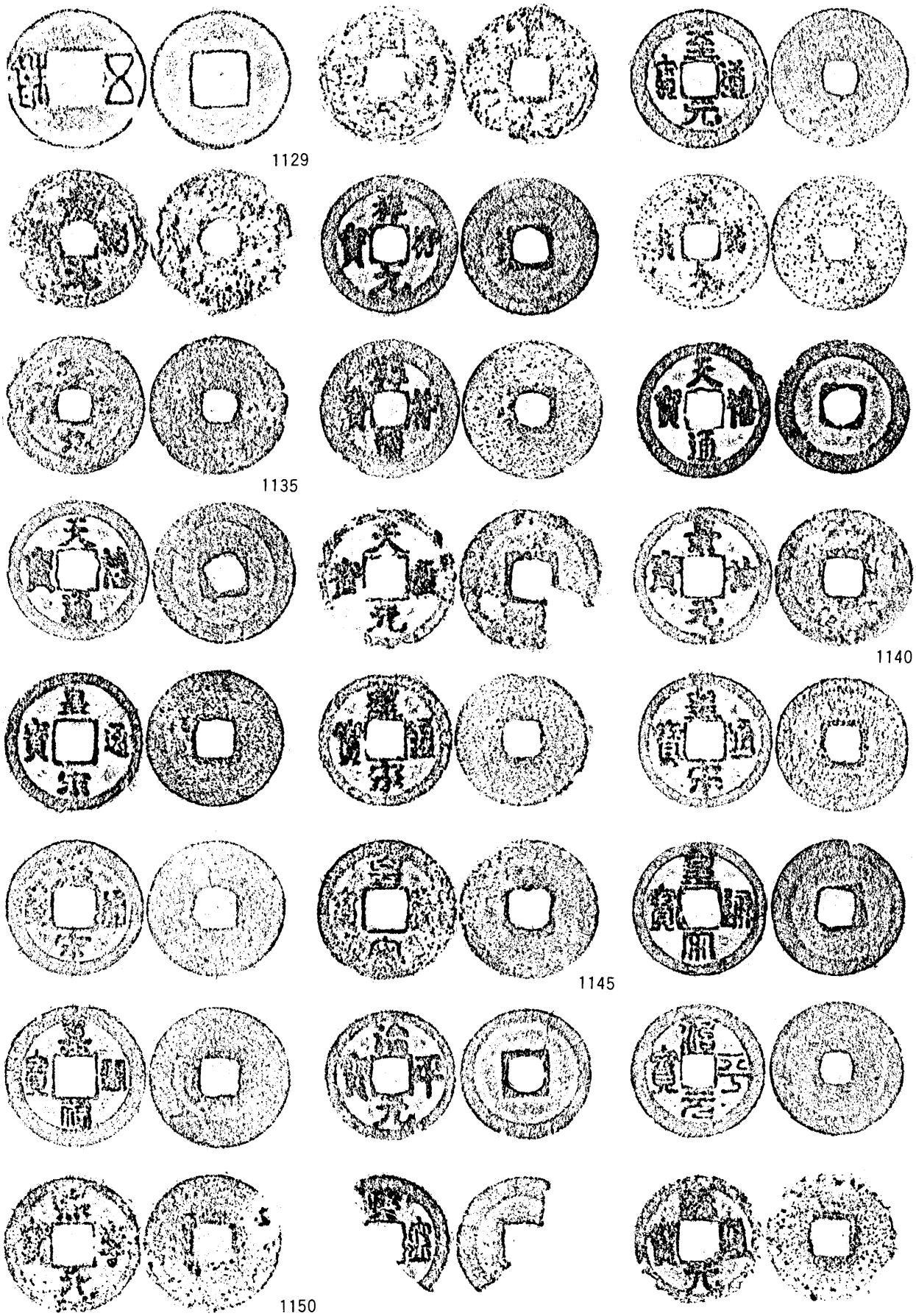


fig. 85　出土銭貨(1)（1:1）

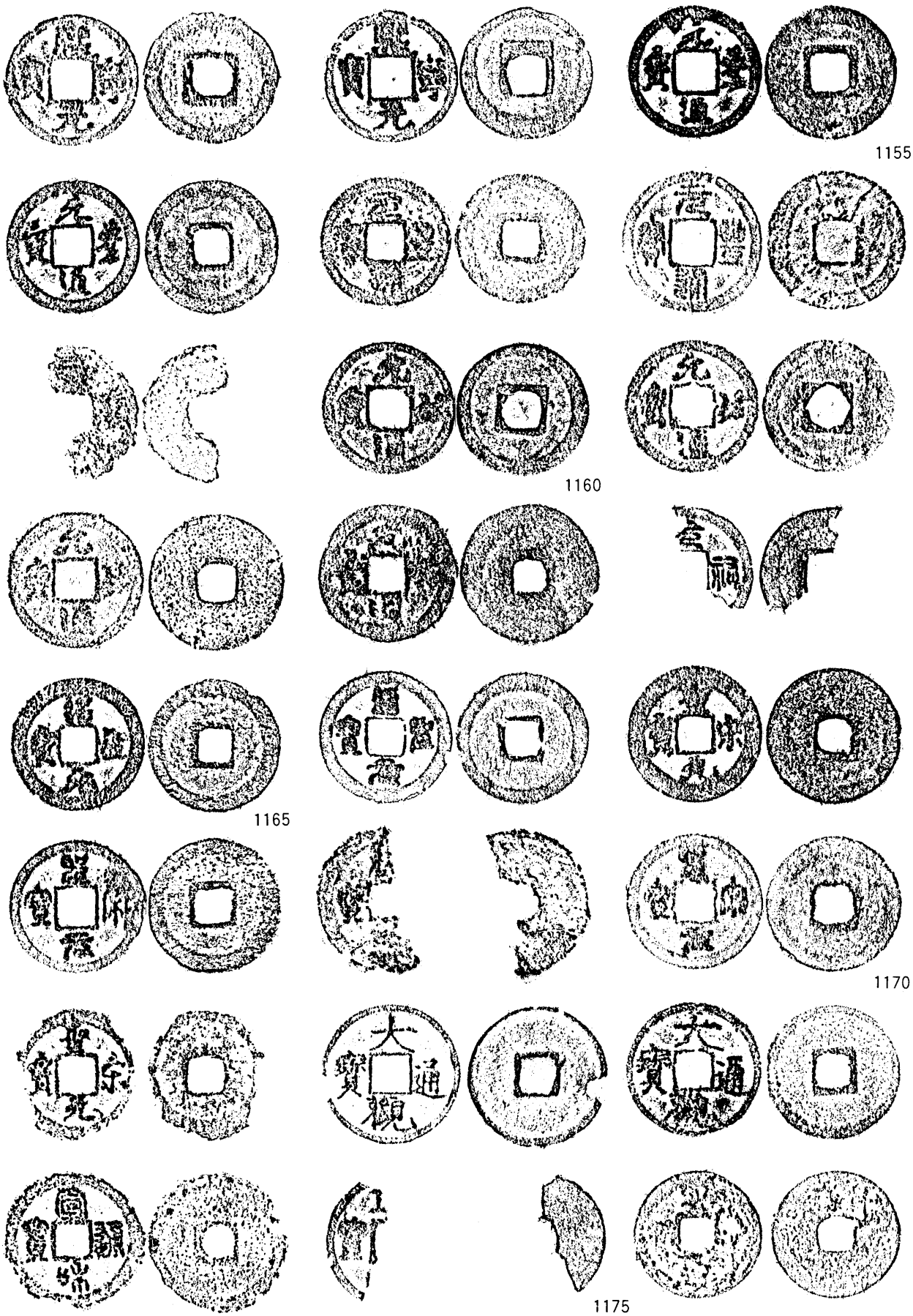


fig. 86　出土銭貨(2)（1:1）

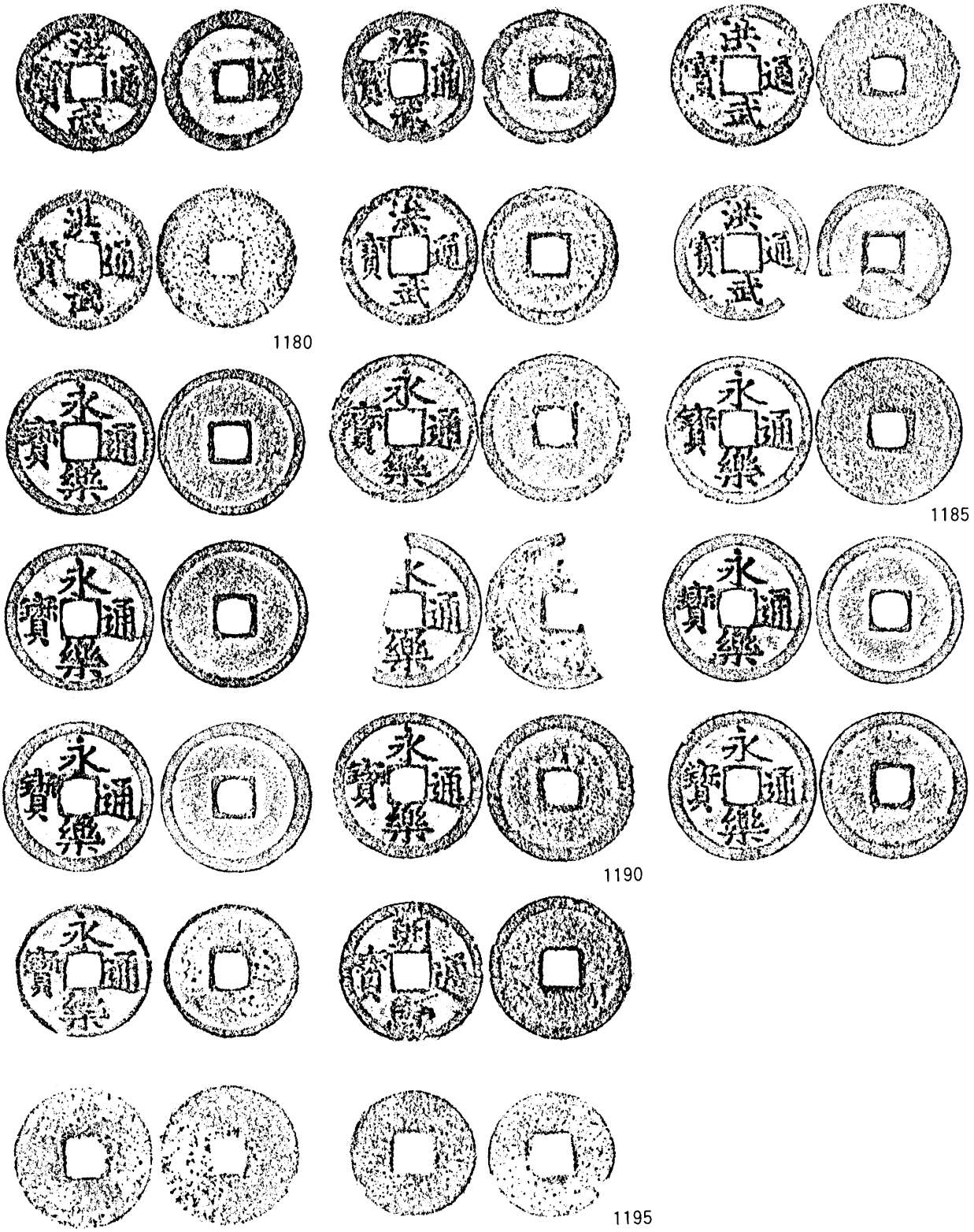


fig. 87　出土銭貨(3)（1:1）

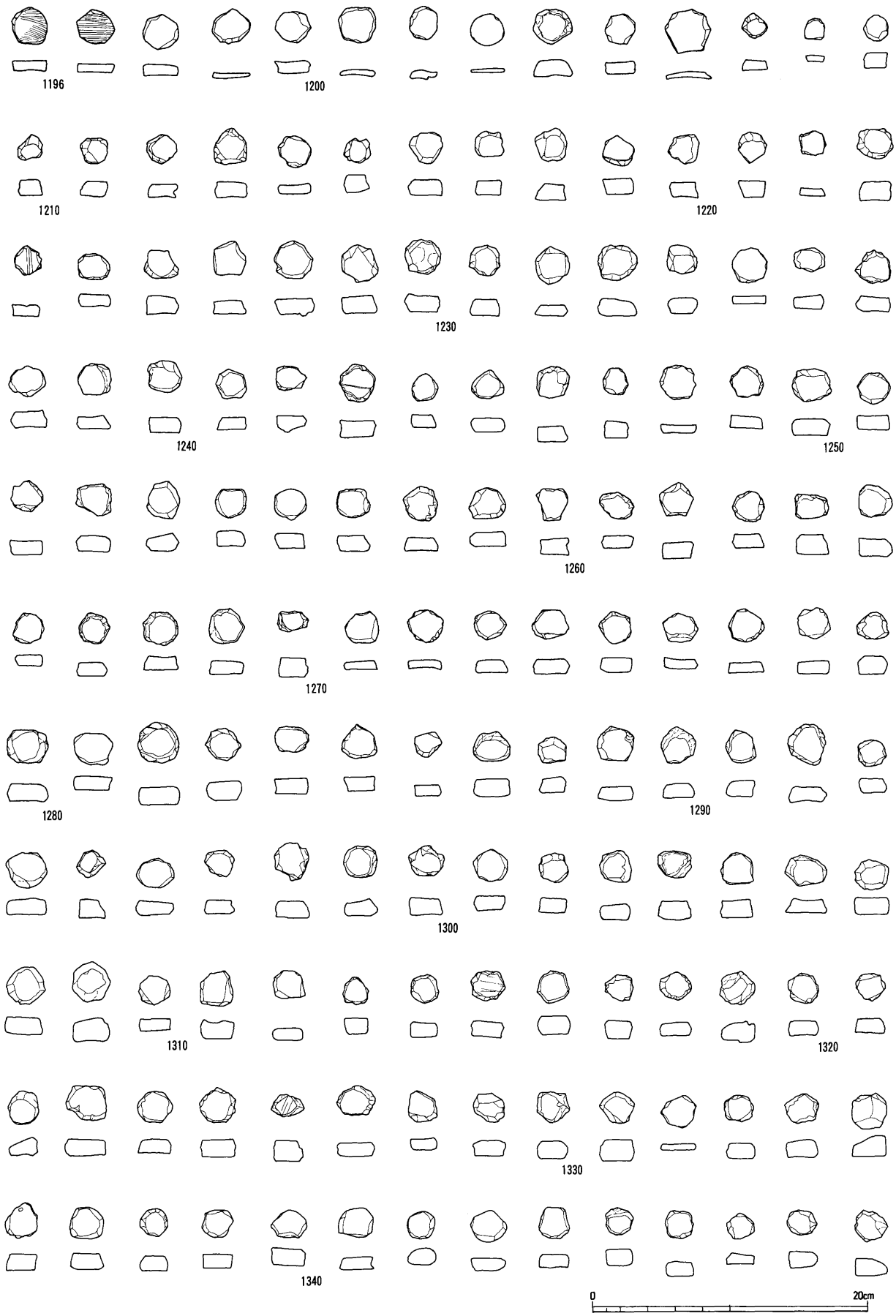


fig. 88　出土加工円盤（1）（1:4）

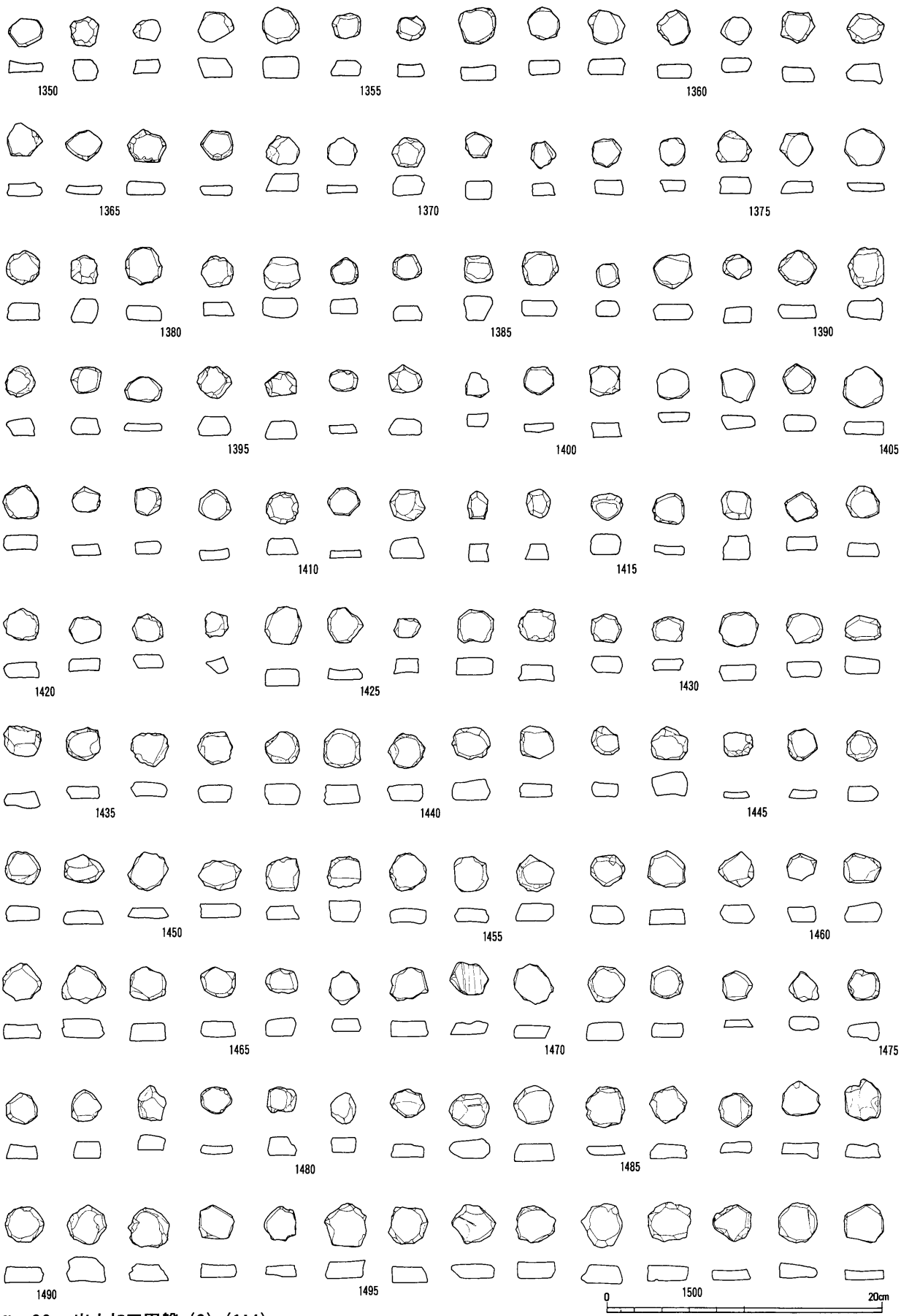


fig. 89　出土加工円盤（2）（1:4）

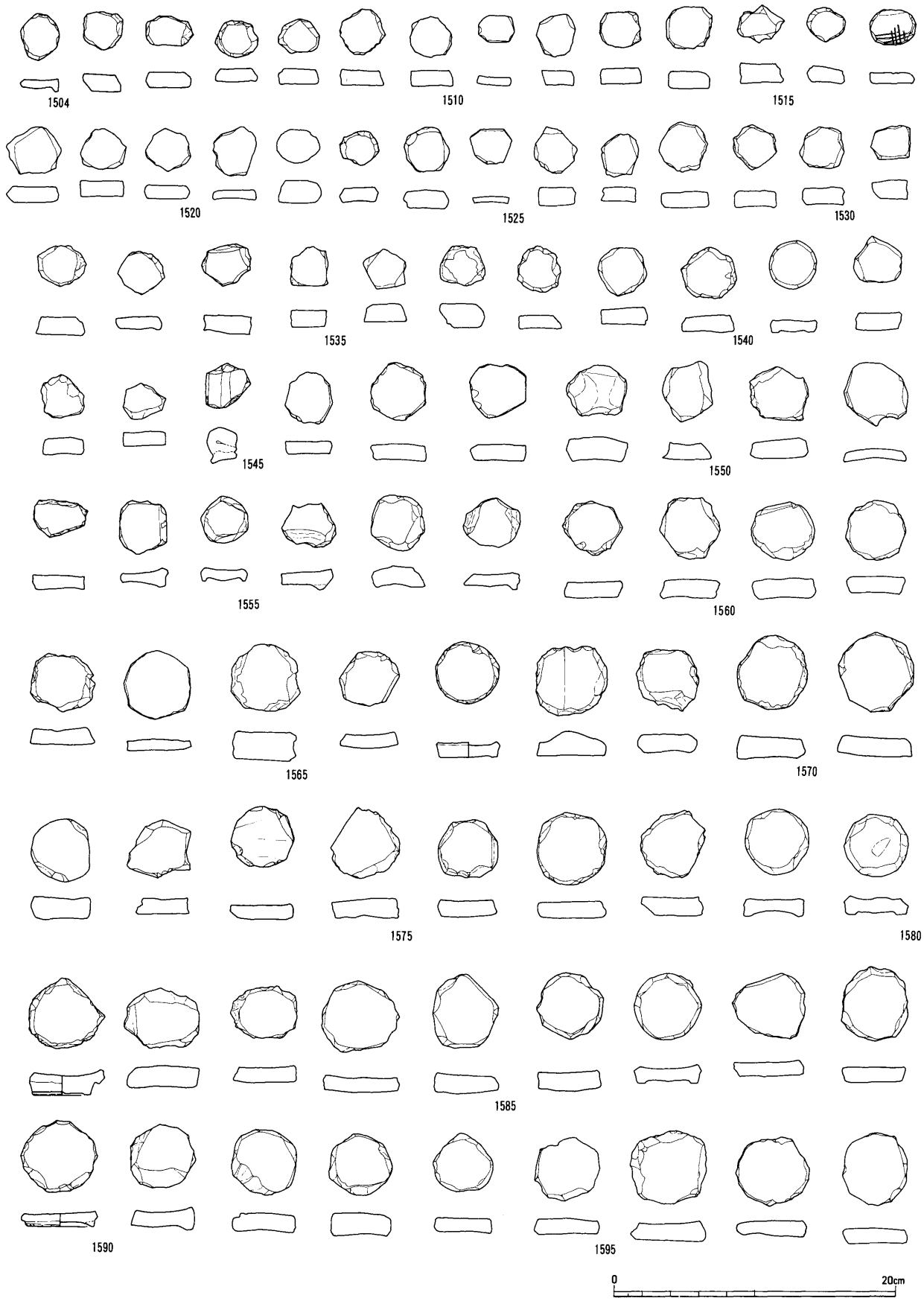
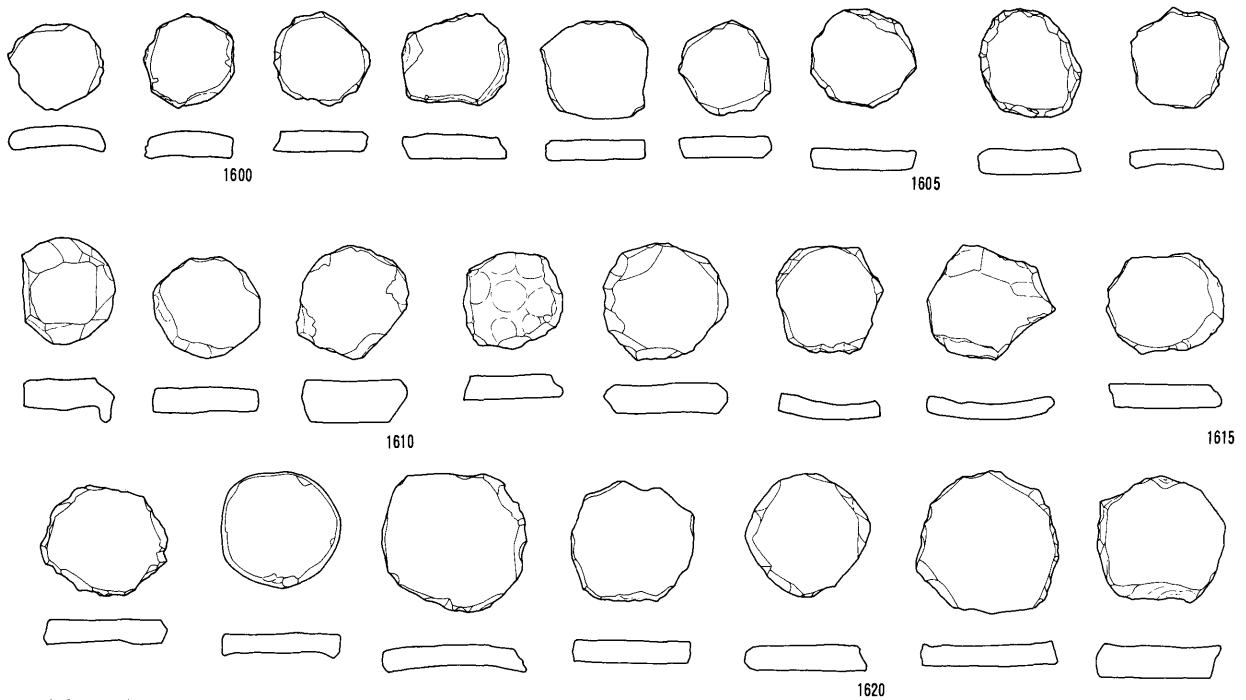


fig. 90　出土加工円盤（3）（1:4）



研磨加工（1623～1661）

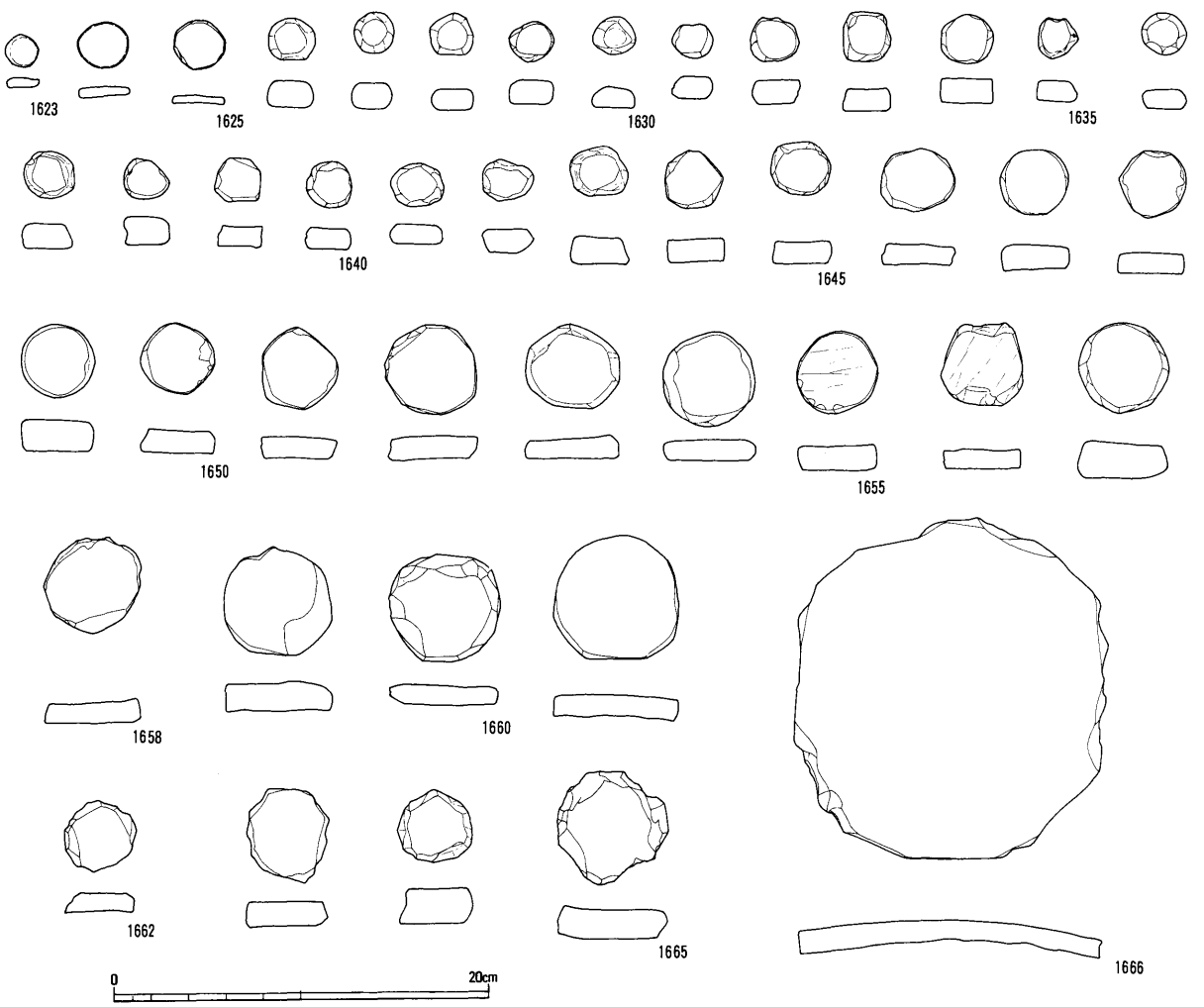


fig. 91　出土加工円盤（4）（1:4）

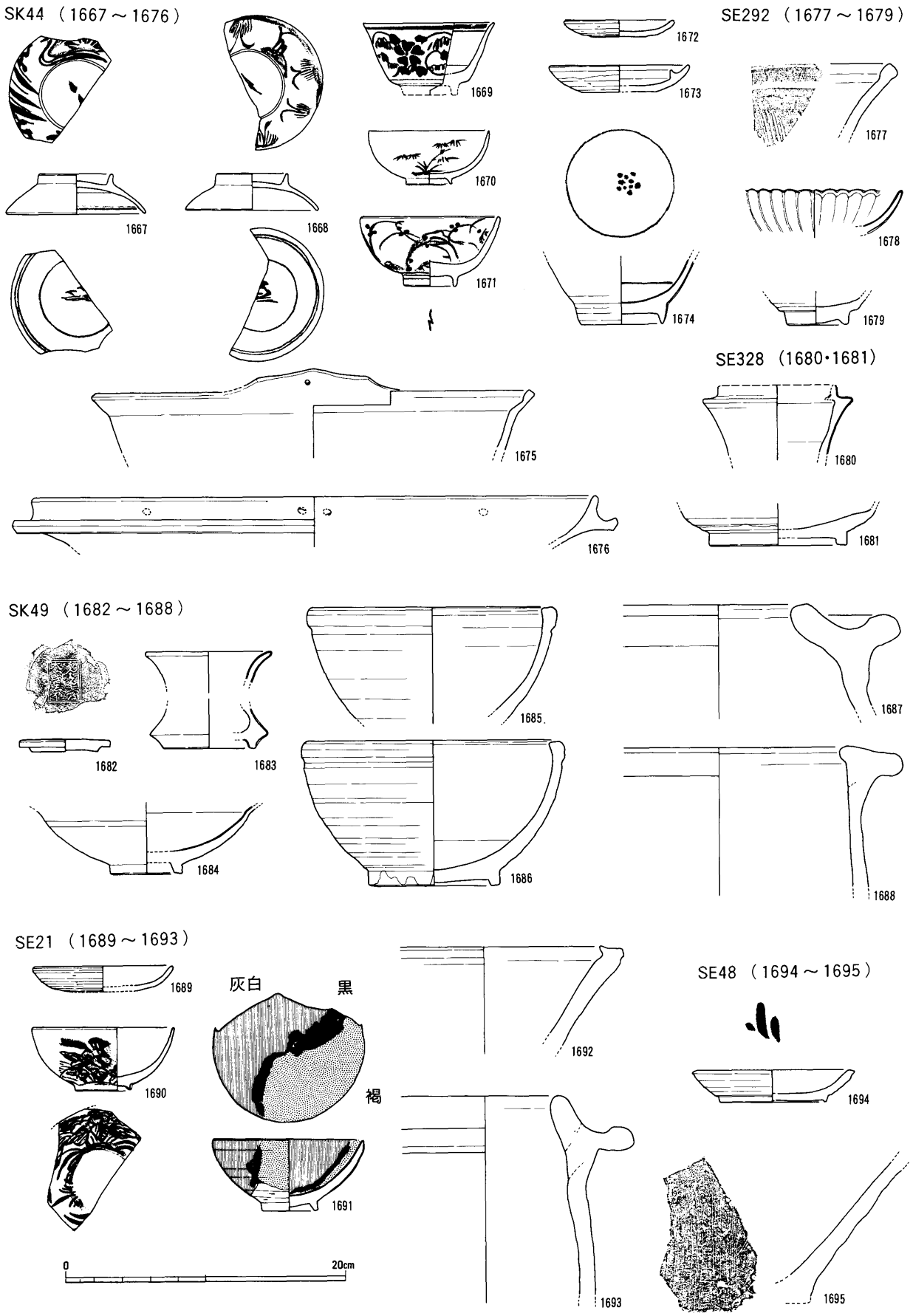


fig. 92　土坑ＳＫ 44 他　出土土器（1:4）

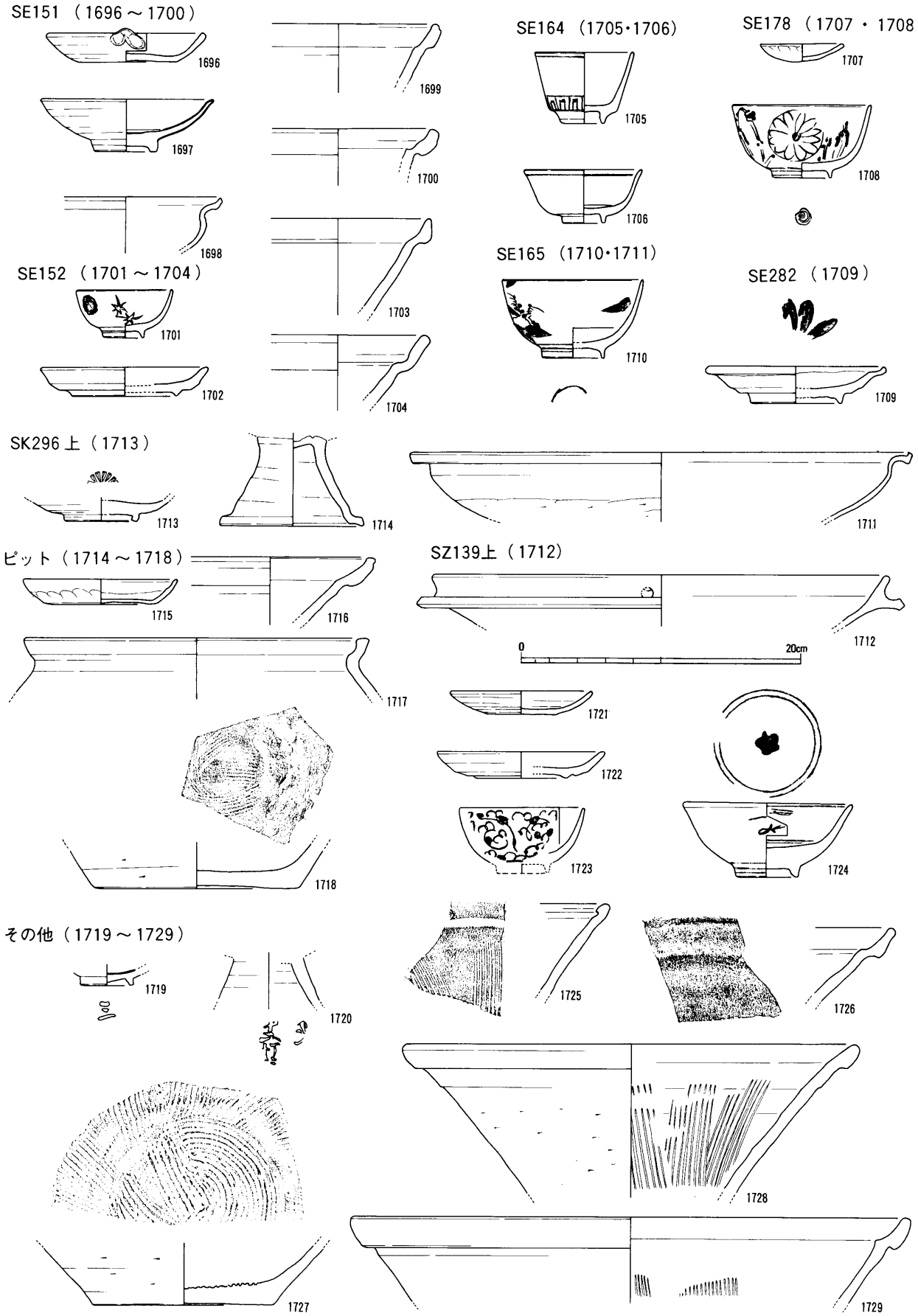


fig. 93　井戸 SE151 他　出土土器（1:4）

攪乱土坑（1730～1731）

近代軍用食器（1732）

近世土製品など（1733～1746）

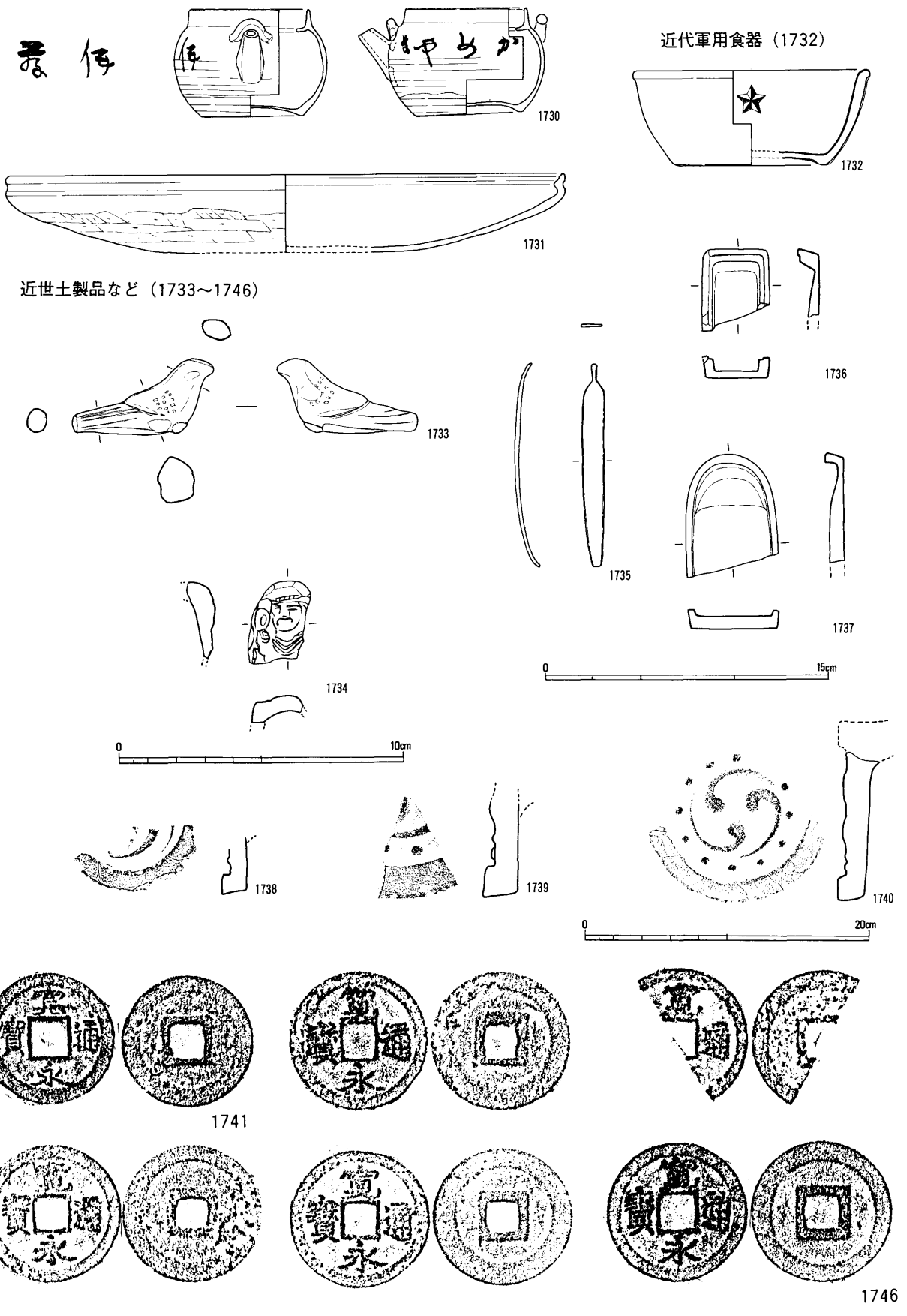


fig. 94　近代の土器、銭貨ほか（1730～1732、1738～1740は1:4、1733・1734は1：2、1735～1737は1: 3、1741～1746は1:1）

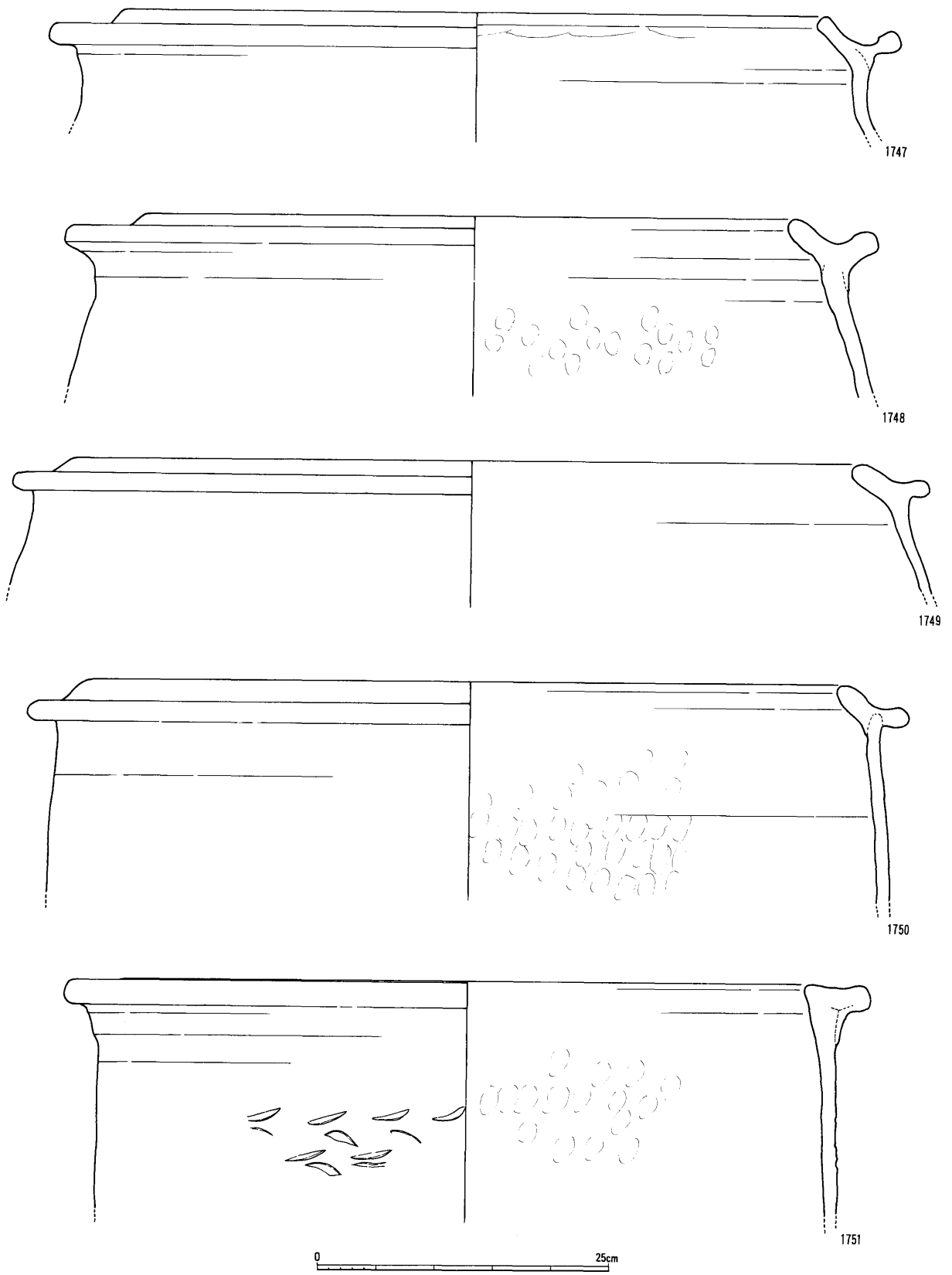


fig. 95　各地区出土土器　常滑大甕・井戸枠（1:5）

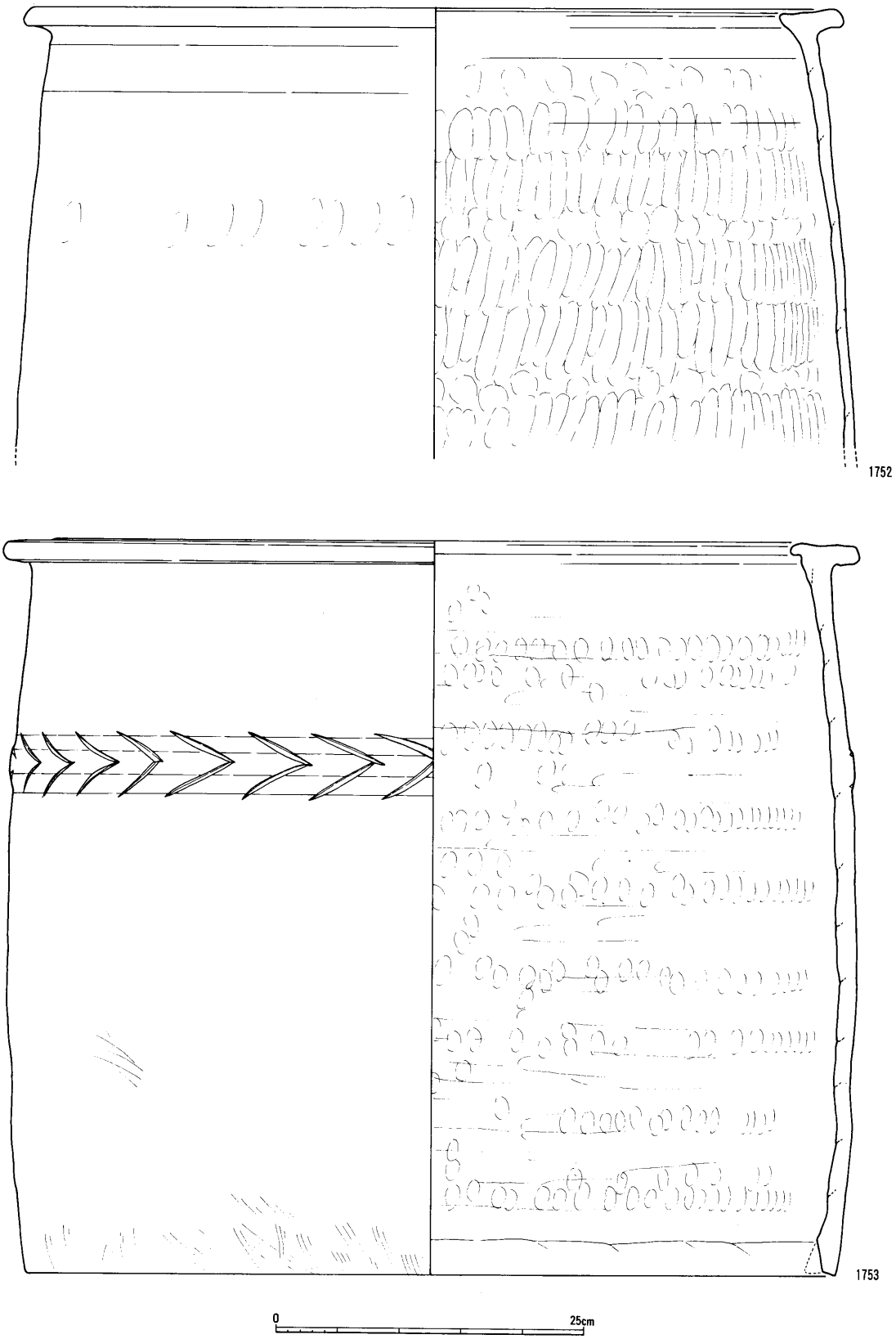


fig. 96　井戸 SE152 土器枠（1:5）

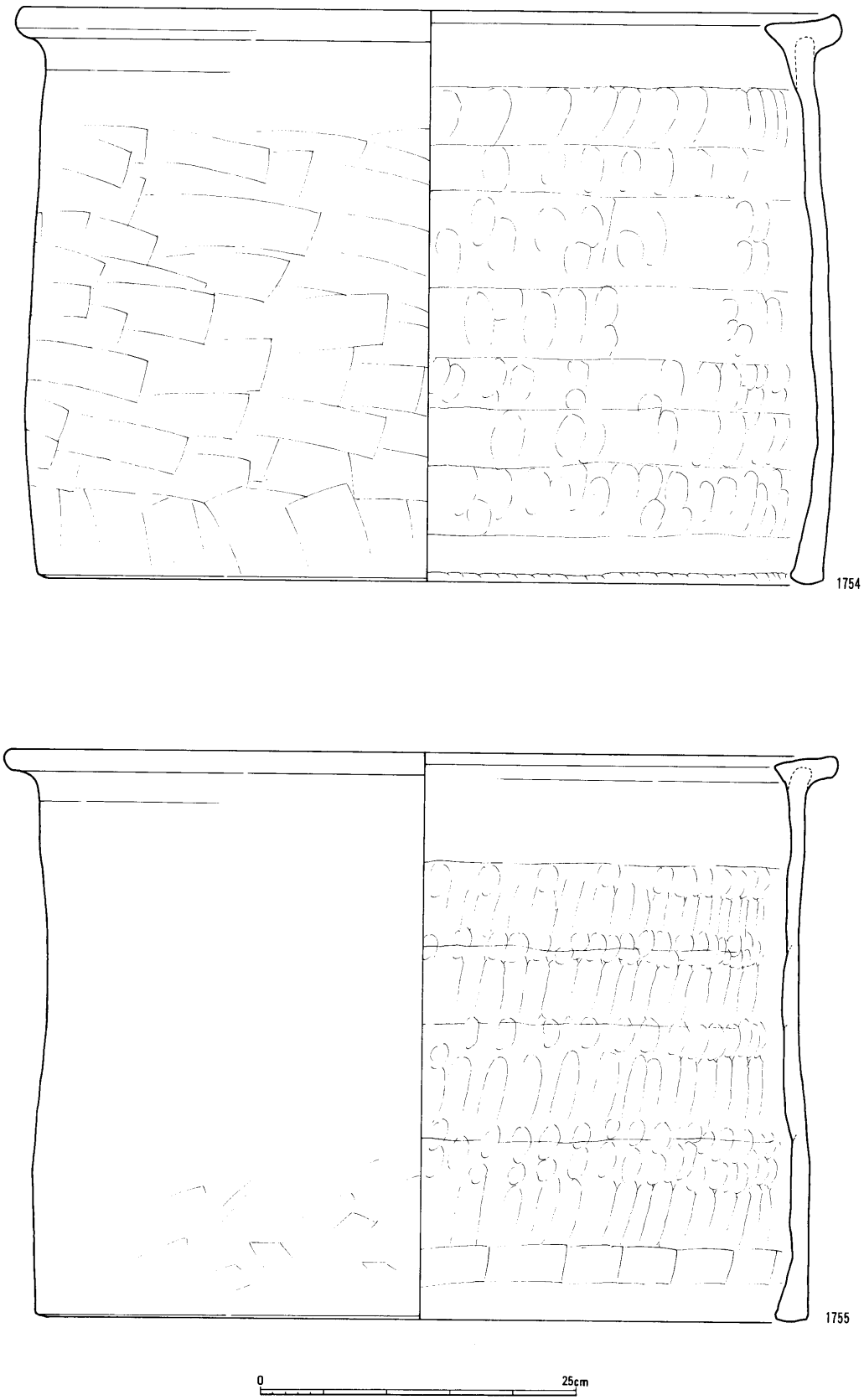


fig. 97　井戸 SE160　土器枠（1:5）

V　調査資料の科学分析

1　伊勢地域の遺跡出土中世土器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

1）　はじめに

高温で焼成する中世陶器の窯跡は残在しているが、軟質の中世土器を焼成した窯跡はほとんど残っていない。したがって、中世土器の産地問題を須恵器や中世陶器のようにして研究する訳にはいかない。このような場合、いくつもの遺跡から出土した多数の中世土器片を分析し、共通の胎土をもつ土器を抽出する作業から始める。共通の胎土をもつ土器は同じ産地で製作されたものと考えられる。この考え方に立って土器胎土を分類し、その結果から中世土器の伝播・流通を考える訳である。

伊勢地域の遺跡出土中世土器の蛍光X線分析は今回が初めてである。中北勢地域の安濃津遺跡群（津市柳山津興）、下川遺跡（安芸郡芸濃町雲林院）と南伊勢地域の岩出遺跡群（度会郡玉城町岩出）、前田町屋遺跡（一志郡三雲町星合）、櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区（松阪市櫛田町）から出土した中世土器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2）分析法

土器片試料の処理法および、蛍光X線分析法は従来通りである。分析値もデータ解析上、取り扱いが便利であるＪＧ－１による標準化値で表示した。

3）分析結果

今回分析した全試料の分析データは tab. 10～13 にまとめられている。これらの生データを使って分布図を作成し、図上でデータ解析を行った。使用した分布図は主成分元素同志の組み合わせであるＫ－Ca 分布図と、微量元素同志の組み合わせであるＲｂ－Sr 分布図である。tab. 10～13 からみて、Fe、Na の両因子は有為な差があるようには見えなかったので、データ解析では使用しなかった。

はじめに、データ解析の考え方について述べる。筆者が使用している蛍光X線分析装置（理学電機製3270型機）は安定性、再現性がきわめて良好で、同じ試料集団を数年後に測定しても、分布領域が全く変動しないことが確かめられている。したがって、同一窯の製品が遺跡から出土した場合、Ｋ－Ca 分布図とＲｂ－Sr 分布図上で同じ領域に分布するはずである。また、１遺跡から出土した土器を大量に分析し、Ｋ－Ca 分布図とＲｂ－Sr 分布図を作成した結果、例えば、２群に分かれたとしよう。その場合、２個所の生産地から製品が供給されていたと判断する。これはＫ、Ｃａ、Ｒｂ、Ｓｒの４因子を使ったクラスター分析に相当する。筆者は通常、クラスター分析で分類した上で、その結果をＫ－Ｃａ分布図とＲｂ－Ｓｒ分布図で確認することにしている。本報告では直接、両分布図を作成し、図上で分類を試みた。大部分の試料はこの方法で帰属を決めることができるが、少数の帰属不可能の試料も出る。目下のところ、これらは不明品としてとどめておき、帰属の決まった大部分の試料を使って伝播・流通を考えることにしている。

それでは今回分析した中世土器の分析結果を各遺跡ごとにみてみよう。

はじめに、南伊勢地域の遺跡出土中世土器の分析結果をみてみよう。fig. 98･99 には岩出遺跡群出土中世土器（12・13 世紀代）のＫ－Ca 分布図とＲｂ－Sr 分布図を示す。各試料をプロットしただけでは土器胎土の化学特性はよくわからないので、比較対照のための領域を作成してみることにした。fig. 98・99 では岩出遺跡群の 12・13 世紀代の中世土器をできるだけ数多く包含するようにして、かつ、領域としてはできるだけ狭くとるようにして、任意に岩出領域を作成した。この領域は決して、領界を定量的に示す訳ではないが、これから説明していくように比較対照のための領域として大変役に立つ。まず、fig. 98・99 をみて、中世土器群がまとまって分布することが確認される。このことはある特定の

産地から岩出遺跡群へ中世土器を供給したことを物語る。岩出領域は後述する、中北勢地域の下川遺跡出土中世土器の分布領域とは全く異なることがわかる。つまり、別産地の製品であるということである。fig. 98・99をよく見ると、12世紀代の土器と13世紀代の土器の分布が微妙に異なっていることがわかる。すなわち、12世紀代の土器はCa、Sr量が少ない領域に偏在して分布しているのに対し、13世紀代の土器は逆に、Ca、Sr量が多い領域に偏在していることがわかる。このことは両者の胎土が異なること、すなわち、12世紀代と13世紀代で若干ずれた場所で粘土を採取し、土器を製作していたことを示す。土器胎土の違いは素材粘土の違いを示し、このことは通常、生産場所の違いを示すものと考えられている。そうすると、岩出遺跡群へ中世土器を供給した産地は12世紀代と13世紀代で違ったことになる。ただ、分布のずれが小さいことから、両生産地はそんなに遠く離れてはいないと考えられる。

fig. 100・101には岩出遺跡群の中世土器（14・15世紀代）のK－Ca分布図とRb－Sr分布図を示す。両図でも、ほとんどの試料は岩出領域に分布することがわかる。したがって、12·13世紀から引き続いて、14·15世紀代にも、ほぼ、同地域で製作された土器が岩出遺跡群へ供給されたものと推察される。ただ、fig. 98～101を比較すれば分かるように、土器の分布位置には微妙な違いが認められる。つまり、同じ地域内で生産地は少しずつ移動しているのである。素材粘土を求めて生産場所が少しずつ移動したものと推察される。ただ、14世紀代と15世紀代の土器胎土にはほとんど差異は認められない。

fig. 102・103には前田町屋遺跡出土中世土器のK－Ca分布図とRb－Sr分布図を示してある。岩出領域を作成したのと同じ要領で前田町屋領域を描いてある。この領域は岩出領域に比較して、明らかにK、Ca、Sr量が多い領域へとずれていることがわかる。つまり、岩出遺跡群の土器の生産地と前田町屋遺跡の土器の生産地とは別場所であることを示している。また、中北勢地域の下川遺跡の土器の分布領域とも全く異なることがわかる。

次に、fig. 104・105には櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区出土土器のK－Ca分布図とRb－Sr分布図を示す。全体として眺めると、岩出領域よりもむしろ、前田町屋領域に対応しているようにみえる。したがって、前田町屋遺跡の土器と同じところで生産されたものが櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区へ供給された可能性もある。また、岩出遺跡群の場合と同様、櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区の中世土器も16世紀代の土器と18世紀代の土器で偏在しており、生産地が年代によって若干変わったことがわかる。

tab．10～13に示したように、これまでに述べてきた土器は皿・鍋・羽釜など種々の器種が含まれている。器種による胎土の違いはほとんど認められなかった。むしろ、同一遺跡でも年代によって土器胎土は異なっていた。さらに、遺跡ごとに胎土の違いが認められた。これらのことは同一産地では皿・鍋・羽釜などの種々の器種の土器を製作しており、かつ、遺跡ごとに別に中世土器を製作していたことがわかる。しかも、上述した遺跡では同じ年代では胎土はほぼ単色である。つまり、1個所の場所で製作したものであることを示している。そして、同じ遺跡群でも年代が変わると、生産場所も少しずつ移転していったことがわかった。

また、南伊勢地域の遺跡出土中世土器の胎土を比較してみると、Ca、Sr量は微妙にずれて、生産場所がすこしずつ移動したことがわかったが、K、Rb量には余り差異はなく、同一地域内、つまり、南伊勢地域内で作られた製品であることがわかる。そうすると、具体的に考えられる生産場所は上述した、各々の遺跡内である可能性がもっとも高い。遺跡間交流というよりも、自前供給を明示するデータだったと解析される。

次に、中北勢地域の遺跡出土中世土器の胎土をみてみよう。

fig. 106·107には下川遺跡出土土器のK－Ca分布図とRb－Sr分布図を示す。これらの図でも前述した要領で下川領域を描いた。下川遺跡出土土器もよくまとまって分布しており、大部分は同じ場所で製作された土器であることを示している。また、下川領域は前述した南伊勢の各領域とは全く異なっており、これが中北勢地域の土器胎土なのかも知れない。ここで注目されるのは下川領域を明らかにずれて分布したNo. 194·195の鍋とNo. 196の茶釜で

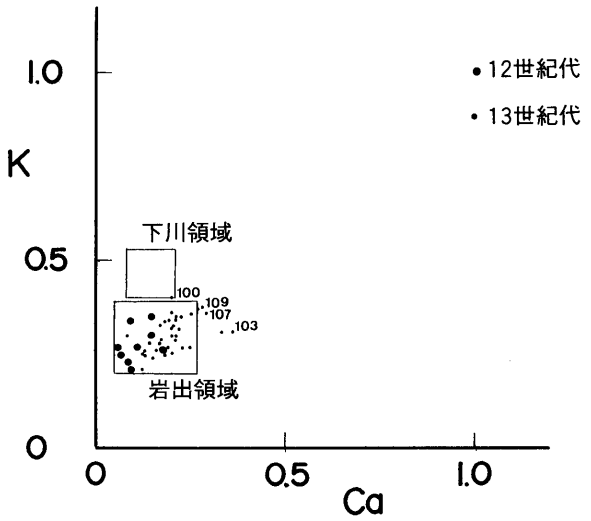


fig. 98　岩出遺跡群(12・13世紀)のK-Ca分布図

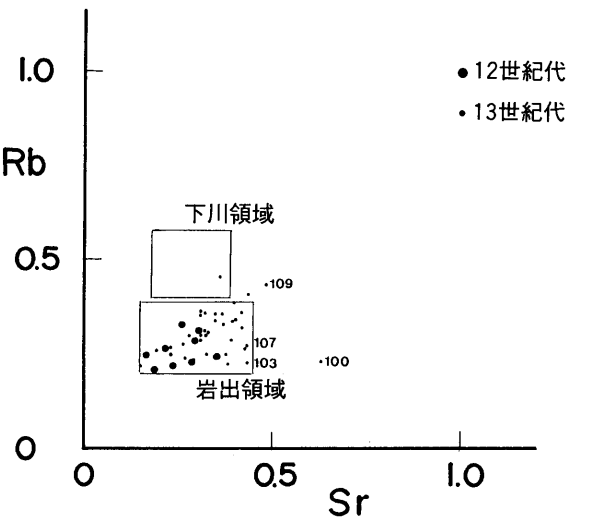


fig. 99　岩出遺跡群(12・13世紀)のRb-Sr分布図

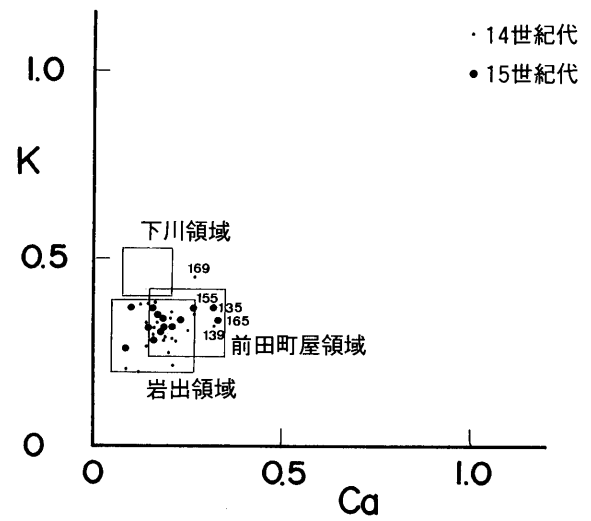


fig. 100　岩出遺跡群(14・15世紀)のK-Ca分布図

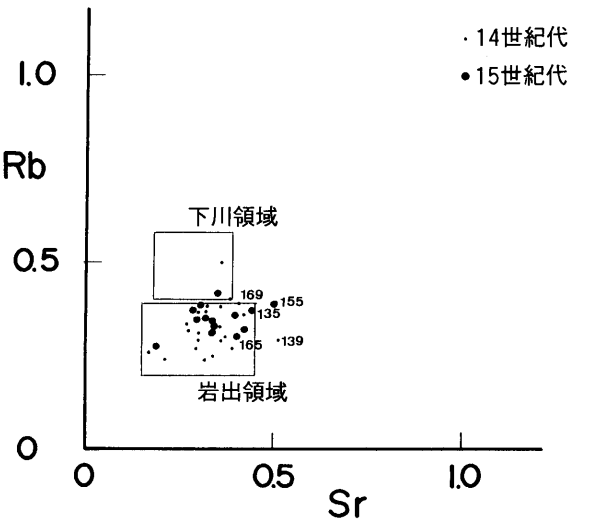


fig. 101　岩出遺跡群(14・15世紀)のRb-Sr分布図

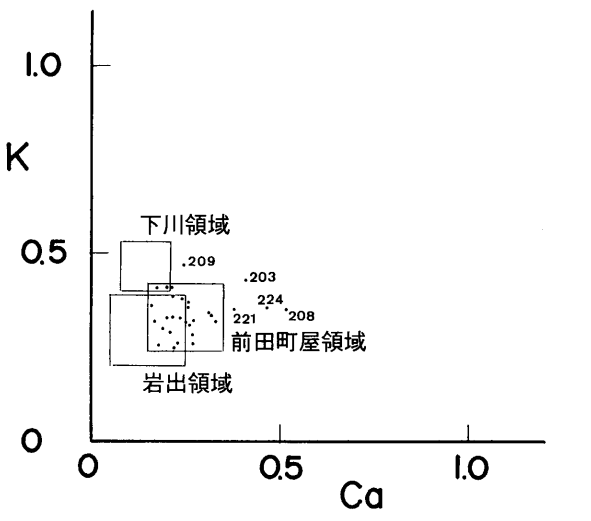


fig. 102　前田町屋遺跡のK-Ca分布図

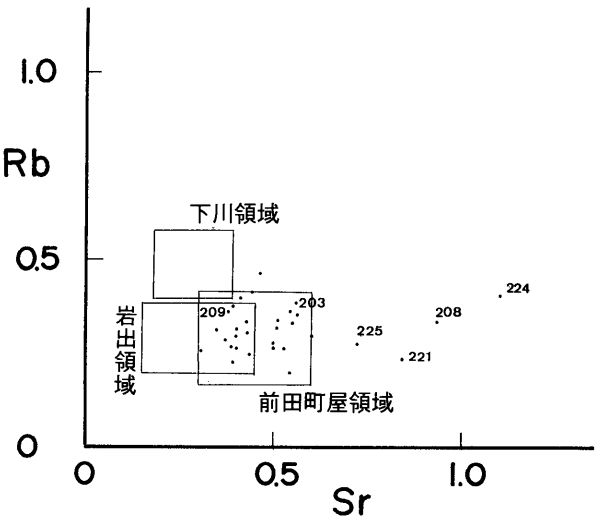


fig. 103　前田町屋遺跡のRb-Sr分布図

ある。これら3点の土器は下川遺跡のもの、というよりは中北勢地域の製品ではない。fig. 106·107からもわかるように、前田町屋領域に対応しており、南伊勢地域からの搬入品である。ここではじめて、中世土器の伝播・流通の実例が示された訳である。

次に、安濃津遺跡群の中世土器胎土をみてみよう。fig. 108·109には安濃津遺跡群出土中世土器（13世紀代）のK－Ca分布図とRb－Sr分布図を示す。これらの図でもこれまでの要領に従って安濃津領域を描いてある。これまでの説明からもわかるように、定性的な分布領域とはいえ、土器集団の化学特性を比較する上には大変便利なものである。この図を活用する上に大切な点は各遺跡には生産地から大量に土器が供給されていたという仮定がある点である。現時点では1・2点しか供給されていなかったというような特殊製品の産地問題ははずされている訳である。土器の伝播・流通から歴史文化論へと展開し得る土器とは特殊製品ではなく、遺跡の大量に供給されていたような産地の土器なのである。fig. 108·109をみると、安濃津領域は南伊勢地域の遺跡出土土器がほとんど分布しなかった領域である。ここでは一応安濃津領域としておく。安濃津領域を大きくずれるNo. 1·2の皿は岩出領域によく対応しており、南伊勢地域からの搬入品と推定される。

fig. 110·111には15世紀代および、18·19世紀代の土器のK－Ca分布図とRb－Sr分布図を示す。安濃津遺跡群出土の13世紀代の土器を使って描いた安濃津領域に分布する試料がきわめて少ない

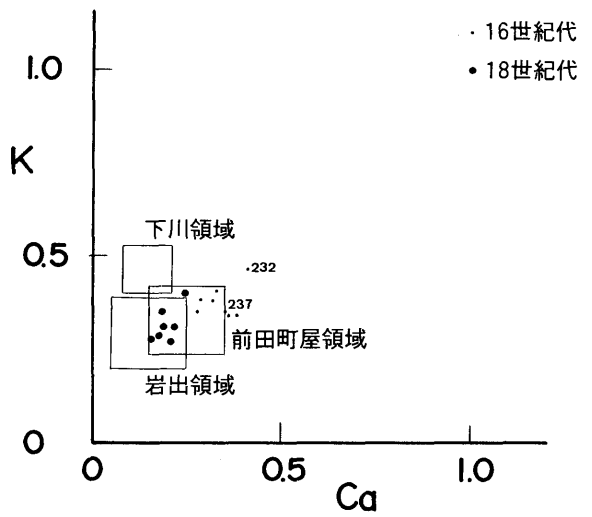


fig.104　櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区のK-Ca分布図

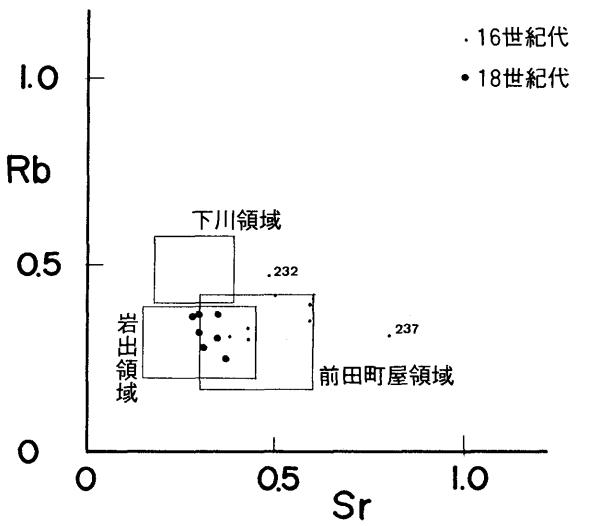


fig.105　櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区のRb-Sr分布図

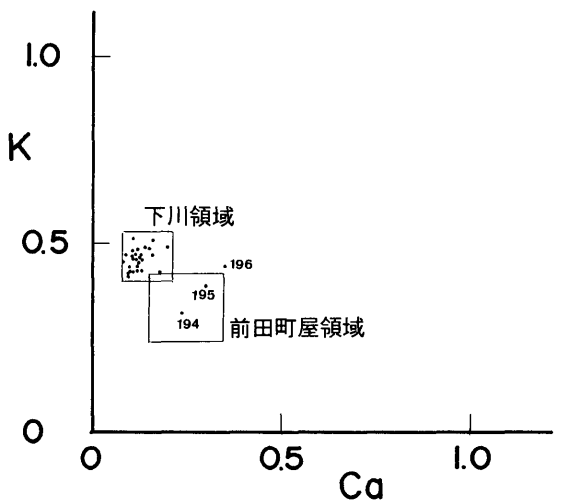


fig.106　下川遺跡のK-Ca分布図

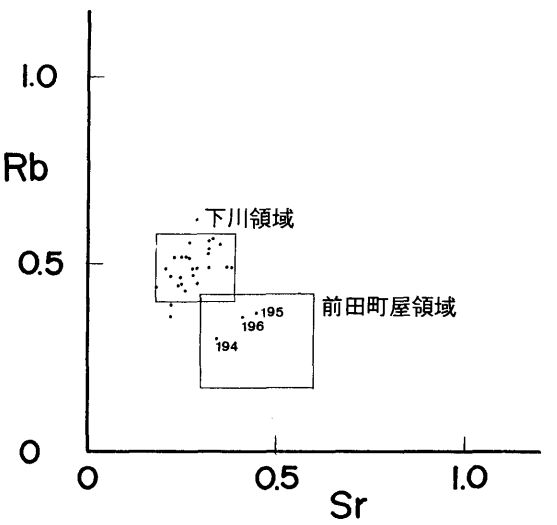


fig.107　下川遺跡のRb-Sr分布図

点が注目される。それに代わって、中北勢地域の下川領域と南伊勢地域の前田町屋領域に対応する試料が圧倒的に多くなる。それもとりわけ、前田町屋領域に対応する試料が多い。この分布図の結果を素直に受け止めると、15世紀代では安濃津遺跡群では土器は製作しておらず、大部分の土器が外部から供給されていたのではないかと推察される。とりわけ、南伊勢地域から土器を大量に供給されていたのではないかという推察が成り立つ。この推察は一つの試験的な解釈である。今後、さらに多くの分析データを集積することによって、伊勢地域における中世土器の伝播・流通問題が解明されることが期待される。

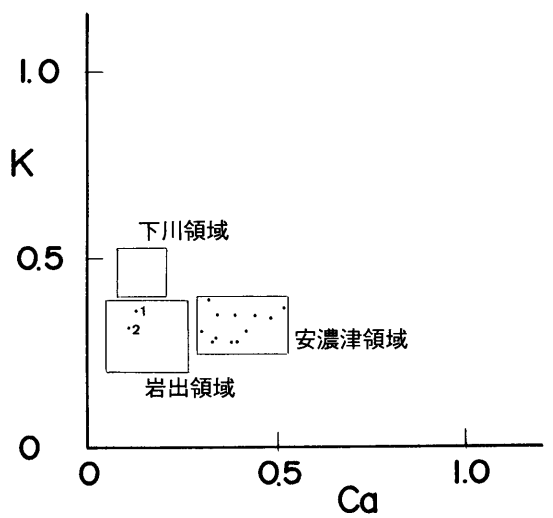


fig.108　安濃津遺跡群（13世紀）のK-Ca分布図

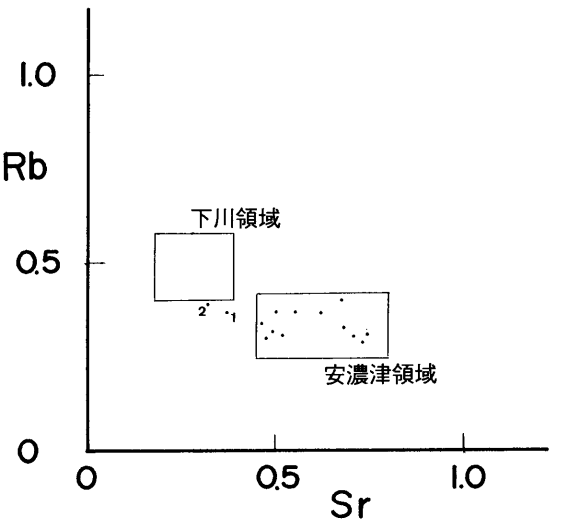


fig.109　安濃津遺跡群（13世紀）のRb-Sr分布図

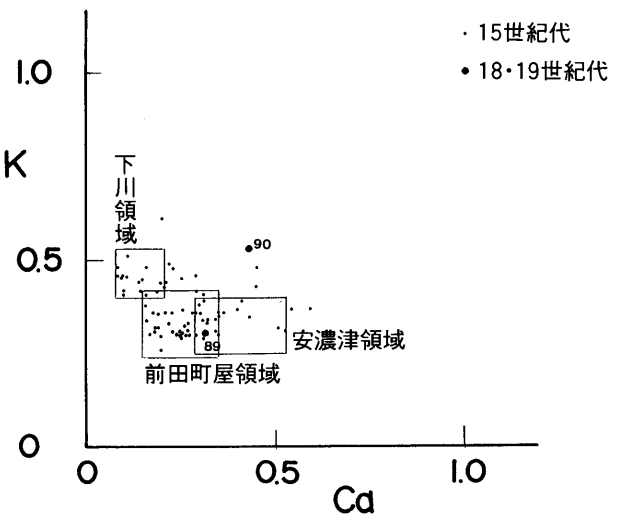


fig.110　安濃津遺跡群（15・18・19世紀）のK-Ca分布図

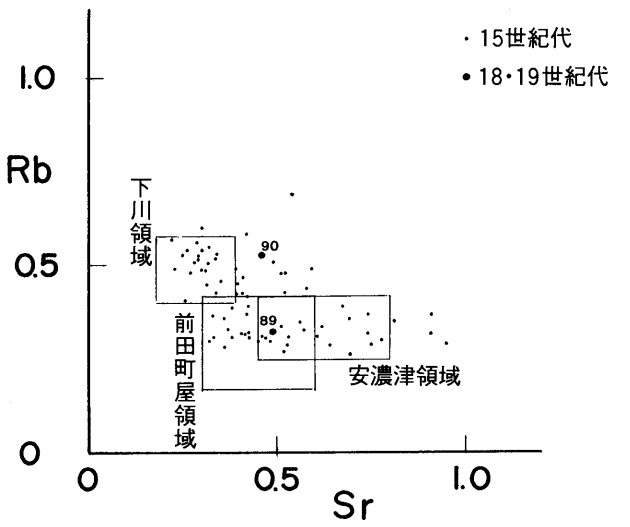


fig.111　安濃津遺跡群（15・18・19世紀）のRb-Sr分布図

						分析値					
資料No.	遺跡名	報告No	分類	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	安濃津遺跡群	49	南伊勢	皿	13C	0.358	0.126	1.10	0.374	0.369	0.123
2	安濃津遺跡群	50	南伊勢	皿	13C	0.316	0.109	1.22	0.387	0.321	0.099
3	安濃津遺跡群	170	南伊勢	鍋	13C	0.338	0.486	1.64	0.306	0.738	0.298
4	安濃津遺跡群	171	南伊勢	鍋	13C	0.371	0.523	2.34	0.305	0.705	0.262
5	安濃津遺跡群	173	南伊勢	鍋	13C	0.391	0.316	1.91	0.314	0.524	0.281
6	安濃津遺跡群	176	南伊勢	鍋	13C	0.351	0.394	1.62	0.370	0.499	0.180
7	安濃津遺跡群	177	南伊勢	鍋	13C	0.354	0.442	1.99	0.332	0.679	0.219
8	安濃津遺跡群	180	南伊勢	鍋	13C	0.314	0.421	1.93	0.370	0.552	0.212
9	安濃津遺跡群	184	南伊勢	鍋	13C	0.279	0.326	1.88	0.370	0.621	0.208
10	安濃津遺跡群	185	南伊勢	鍋	13C	0.349	0.341	1.85	0.402	0.675	0.171
11	安濃津遺跡群	186	南伊勢	鍋	13C	0.280	0.386	2.08	0.316	0.492	0.140
12	安濃津遺跡群	188	南伊勢	鍋	13C	0.291	0.343	1.71	0.843	0.463	0.260
13	安濃津遺跡群	190	南伊勢	鍋	13C	0.278	0.380	1.96	0.290	0.730	0.170
14	安濃津遺跡群	217	南伊勢	鍋	13C	0.305	0.304	1.89	0.302	0.476	0.249
15	安濃津遺跡群	265	南伊勢	鍋	15C	0.478	0.450	2.79	0.484	0.524	0.256
16	安濃津遺跡群	267	南伊勢	鍋	15C	0.348	0.427	1.91	0.301	0.775	0.301
17	安濃津遺跡群	268	南伊勢	鍋	15C	0.414	0.158	1.32	0.492	0.310	0.114
18	安濃津遺跡群	271	南伊勢	茶釜	15C	0.319	0.289	1.65	0.841	0.462	0.122
19	安濃津遺跡群	275	中北勢	羽釜	15C	0.455	0.109	1.47	0.531	0.287	0.115
20	安濃津遺跡群	294	南伊勢	鍋	15C	.0.361	0.303	2.28	0.430	0.341	0.194
21	安濃津遺跡群	320	中北勢	皿	15C	0.387	0.301	0.959	0.367	0.736	0.228
22	安濃津遺跡群	333	中北勢	羽釜	15C	0.457	0.087	1.87	0.568	0.219	0.111
23	安濃津遺跡群	334	中北勢	羽釜	15C	0.418	0.102	1.61	0.487	0.234	0.127
24	安濃津遺跡群	336	中北勢	羽釜	15C	0.416	0.100	1.64	0.534	0.246	0.096
25	安濃津遺跡群	347	南伊勢	皿	15C	0.431	0.211	1.14	0.512	0.490	0.140
26	安濃津遺跡群	344	南伊勢	皿	15C	0.483	0.083	1.14	0.564	0.286	0.116
27	安濃津遺跡群	359	中北勢	羽釜	15C						
28	安濃津遺跡群	361	中北勢	茶釜	15C	0.492	0.224	1.55	0.520	0.337	0.152
29	安濃津遺跡群	372	南伊勢	羽釜	15C	0.326	0.218	2.20	0.306	0.381	0.131
30	安濃津遺跡群	392	南伊勢	鍋	15C	0.299	0.249	2.24	0.316	0.415	0.107
31	安濃津遺跡群	394	南伊勢	鍋	15C	0.295	0.289	1.89	0.298	0.477	0.125
32	安濃津遺跡群	420	南伊勢	鍋	15C	0.316	0.191	2.45	0.368	0.333	0.117
33	安濃津遺跡群	447	南伊勢	鍋	15C	0.314	0.270	2.13	0.296	0.451	0.154
34	安濃津遺跡群	448	南伊勢	鍋	15C	0.336	0.306	1.84	0.337	0.620	0.177
35	安濃津遺跡群	451	南伊勢	羽釜	15C	0.349	0.349	1.85	0.310	0.605	0.189
36	安濃津遺跡群	452	南伊勢	羽釜	15C	0.323	0.506	1.71	0.369	0.908	0.188
37	安濃津遺跡群	461	中北勢	皿	15C	0.359	0.210	1.90	0.393	0.675	0.090
38	安濃津遺跡群	462	中北勢	皿	15C	0.608	0.198	1.16	0.583	0.510	0.159
39	安濃津遺跡群	464	中北勢	皿	15C	0.290	0.313	1.74	0.258	0.694	0.206
40	安濃津遺跡群	475	南伊勢	鍋	15C	0.326	0.324	2.01	0.312	0.531	0.281
41	安濃津遺跡群	482	南伊勢	羽釜	15C	0.335	0.159	1.64	0.413	0.263	0.107
42	安濃津遺跡群	525	南伊勢	皿	15C	0.355	0.346	0.85	0.294	0.747	0.259
43	安濃津遺跡群	526	中北勢	皿	15C	0.356	0.182	1.03	0.473	0.409	0.126
44	安濃津遺跡群	537	南伊勢	鍋	15C	0.314	0.343	2.20	0.274	0.516	0.169
45	安濃津遺跡群	545	南伊勢?	羽釜	15C	0.259	0.204	1.40	0.307	0.426	0.093
46	安濃津遺跡群	551	南伊勢	皿	15C	0.386	0.408	0.908	0.354	0.814	0.288
47	安濃津遺跡群	556	南伊勢	鍋	15C	0.360	0.357	0.999	0.322	0.740	0.298
48	安濃津遺跡群	557	南伊勢	鍋	15C	0.356	0.286	1.44	0.342	0.510	0.169
49	安濃津遺跡群	559	南伊勢	鍋	15C	0.308	0.227	1.72	0.334	0.373	0.147
50	安濃津遺跡群	560	南伊勢	鍋	15C	0.389	0.305	1.59	0.327	0.570	0.154
51	安濃津遺跡群	562	南伊勢	鍋	15C	0.301	0.247	1.32	0.356	0.362	0.115
52	安濃津遺跡群	565	南伊勢	茶釜	15C	0.309	0.180	1.88	0.303	0.316	0.096
53	安濃津遺跡群	568	南伊勢	皿	15C	0.356	0.193	1.46	0.429	0.393	0.117
54	安濃津遺跡群	575	南伊勢	鍋	15C	0.297	0.270	2.02	0.284	0.361	0.116
55	安濃津遺跡群	576	南伊勢	鍋	15C	0.325	0.257	1.65	0.373	0.416	0.145
56	安濃津遺跡群	577	南伊勢	鍋	15C	0.427	0.454	0.87	0.323	0.907	0.366
57	安濃津遺跡群	580	南伊勢	鍋	15C	0.334	0.274	2.09	0.427	0.406	0.138
58	安濃津遺跡群	593	中北勢	羽釜	15C	0.484	0.229	1.80	0.548	0.324	0.164
59	安濃津遺跡群	594	中北勢	羽釜	15C	0.443	0.206	2.25	0.535	0.260	0.163
60	安濃津遺跡群	602	南伊勢	鍋	15C	0.338	0.316	2.27	0.314	0.473	0.139
61	安濃津遺跡群	604	中北勢	羽釜	15C	0.457	0.103	1.58	0.478	0.274	0.144
62	安濃津遺跡群	621	中北勢	羽釜	15C	0.410	0.312	1.50	0.493	0.388	0.100

tab.10　中世土器胎土分析値（1）

						分析値					
資料No.	遺跡名	報告No	分類	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
63	安濃津遺跡群	628	南伊勢	羽釜	15C	0.371	0.543	1.22	0.356	0.686	0.188
64	安濃津遺跡群	655	中北勢	羽釜	15C	0.439	0.196	1.18	0.492	0.304	0.126
65	安濃津遺跡群	656	中北勢	羽釜	15C	0.423	0.145	1.53	0.542	0.304	0.094
66	安濃津遺跡群	660	中北勢	羽釜	15C	0.513	0.113	1.27	0.524	0.293	0.217
67	安濃津遺跡群	685	中北勢	羽釜	15C	0.445	0.149	1.40	0.533	0.343	0.152
68	安濃津遺跡群	686	南伊勢	羽釜	15C	0.301	0.270	2.39	0.393	0.382	0.134
69	安濃津遺跡群	687	南伊勢	羽釜	15C	0.298	0.250	2.04	0.418	0.418	0.137
70	安濃津遺跡群	737	南伊勢	皿	15C	0.297	0.251	1.21	0.293	0.526	0.213
71	安濃津遺跡群	739	南伊勢	皿	15C	0.461	0.088	1.23	0.600	0.304	0.114
72	安濃津遺跡群	743	南伊勢	皿	15C	0.369	0.588	1.00	0.285	0.948	0.327
73	安濃津遺跡群	746	南伊勢	皿	15C	0.463	0.288	1.10	0.485	0.587	0.146
74	安濃津遺跡群	755	中北勢	皿	15C	0.338	0.138	1.30	0.459	0.352	0.079
75	安濃津遺跡群	761	中北勢	皿	15C	0.295	0.171	1.72	0.323	0.415	0.198
76	安濃津遺跡群	771	中北勢	皿	15C	0.373	0.397	2.15	0.348	0.560	0.194
77	安濃津遺跡群	774	中北勢	皿	15C	0.376	0.160	1.28	0.385	0.424	0.185
78	安濃津遺跡群	777	中北勢	皿	15C	0.339	0.343	1.35	0.454	0.391	0.101
79	安濃津遺跡群	778	中北勢	皿	15C	0.356	0.225	1.31	0.427	0.517	0.208
80	安濃津遺跡群	781	中北勢	皿	15C	0.363	0.284	1.47	0.439	0.578	0.197
81	安濃津遺跡群	864	南伊勢	鍋	15C	0.301	0.202	2.08	0.307	0.329	0.124
82	安濃津遺跡群	866	南伊勢	鍋	15C	0.303	0.353	2.02	0.309	0.470	0.155
83	安濃津遺跡群	882	南伊勢	羽釜	15C	0.371	0.257	1.60	0.316	0.408	0.151
84	安濃津遺跡群	895	大和	羽釜	15C	0.421	0.292	1.89	0.579	0.423	0.162
85	安濃津遺跡群	899	中北勢	羽釜	15C	0.415	0.191	1.43	0.450	0.315	0.110
86	安濃津遺跡群	901	中北勢	羽釜	15C	0.453	0.249	1.63	0.511	0.320	0.146
87	安濃津遺跡群	906	南伊勢	羽釜	15C	0.311	0.525	2.35	0.286	0.637	0.193
88	安濃津遺跡群	909	中北勢	茶釜	15C	0.475	0.156	1.36	0.508	0.282	0.104
89	安濃津遺跡群	1711	南伊勢	焙烙	18C	0.296	0.314	2.49	0.316	0.494	0.126
90	安濃津遺跡群	1731	尾張・三河	焙烙	19C	0.533	0.426	2.72	0.533	0.464	0.371
91	岩出遺跡群	28	南伊勢	羽釜	13C	0.357	0.288	2.20	0.456	0.357	0.237
92	岩出遺跡群	92	南伊勢	鍋	13C	0.304	0.206	1.61	0.318	0.423	0.257
93	岩出遺跡群	93	南伊勢	鍋	13C	0.368	0.266	1.69	0.272	0.433	0.228
94	岩出遺跡群	138	南伊勢	皿	14C	0.223	0.212	1.30	0.274	0.392	0.137
95	岩出遺跡群	145	南伊勢	皿	14C	0.330	0.143	1.46	0.501	0.363	0.124
96	岩出遺跡群	192	南伊勢	皿	13C	0.295	0.200	1.93	0.296	0.313	0.135
97	岩出遺跡群	193	南伊勢	皿	13C	0.362	0.204	1.75	0.363	0.324	0.144
98	岩出遺跡群	199	南伊勢	鍋	13C	0.323	0.203	2.26	0.356	0.306	0.194
99	岩出遺跡群	205	南伊勢	鍋	13C	0.266	0.193	1.32	0.255	0.325	0.129
100	岩出遺跡群	228	南伊勢	皿	13C	0.265	0.251	2.07	0.235	0128	0.097
101	岩出遺跡群	243	南伊勢	鍋	13C	0.264	0.158	1.44	0.293	0.311	0.100
102	岩出遺跡群	244	南伊勢	鍋	13C	0.403	0.201	2.20	0.309	0.327	0.130
103	岩出遺跡群	264	南伊勢	皿	13C	0.305	0.358	2.19	0.228	0.429	0.146
104	岩出遺跡群	265	南伊勢	皿	13C	0.242	0.146	1.44	0.358	0.371	0.125
105	岩出遺跡群	266	南伊勢	皿	13C	0.289	0.173	1.70	0.326	0.370	0.110
106	岩出遺跡群	269	南伊勢	皿	13C	0.323	0.223	2.51	0.302	0.324	0.104
107	岩出遺跡群	270	南伊勢	皿	13C	0.307	0.334	2.58	0.270	0.430	0.137
108	岩出遺跡群	271	南伊勢	皿	13C	0.211	0.119	1.24	0.241	0.268	0.111
109	岩出遺跡群	276	南伊勢	鍋	13C	0.375	0.278	1.64	0.435	0.479	0.190
110	岩出遺跡群	277	南伊勢	鍋	13C	0.346	0.214	1.97	0.359	0.347	0.144
111	岩出遺跡群	280	南伊勢	鍋	13C	0.254	0.179	1.67	0.340	0.397	0.125
112	岩出遺跡群	281	南伊勢	鍋	13C	0.281	0.174	2.15	0.296	0.277	0.111
113	岩出遺跡群	283	南伊勢	鍋	13C	0.355	0.252	2.70	0.359	0.308	0.134
114	岩出遺跡群	303	南伊勢	皿	13C	0.248	0.128	1.72	0.259	0.194	0.067
115	岩出遺跡群	304	南伊勢	皿	13C	0.337	0.018	1.60	0.360	0.421	0.111
116	岩出遺跡群	305	南伊勢	皿	13C	0.331	0.167	1.02	0.409	0.436	0.145
117	岩出遺跡群	309	南伊勢	皿	13C	0.281	0.144	1.47	0.280	0.265	0.110
118	岩出遺跡群	310	南伊勢	皿	13C	0.347	0.225	1.57	0.336	0.396	0.159
119	岩出遺跡群	353	南伊勢	皿	13C	0.255	0.199	1.63	0.253	0.381	0.092
120	岩出遺跡群	354	南伊勢	皿	13C	0.259	0.127	1.86	0.266	0.229	0.070
121	岩出遺跡群	383	南伊勢	鍋	13C	0.270	0.228	1.42	0.225	0.385	0.139
122	岩出遺跡群	394	南伊勢	鍋	15C	0.259	0.086	0.88	0.276	0.195	0.070
123	岩出遺跡群	395	南伊勢	鍋	15C	0.315	0.187	1.59	0.320	0.424	0.143
124	岩出遺跡群	408	南伊勢	皿	13C	0.261	0.129	1.67	0.253	0.230	0.079

tab.11　中世土器胎土分析値（2）

						分析値					
資料No.	遺跡名	報告No	分類	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
125	岩出遺跡群	409	南伊勢	皿	13C	0.295	0.082	2.75	0.224	0.147	0.061
126	岩出遺跡群	448	南伊勢	鍋	13C	0.290	0.213	1.78	0.290	0.389	0.142
127	岩出遺跡群	476	南伊勢	皿	14C	0.351	0.272	2.11	0.238	0.315	0.119
128	岩出遺跡群	480	南伊勢	皿	14C	0.281	0.224	1.48	0.251	0.342	0.088
129	岩出遺跡群	493	南伊勢	皿	14C	0.277	0.185	1.72	0.269	0.295	0.070
130	岩出遺跡群	507	南伊勢	鍋	14C	0.359	0.210	1.09	0.364	0.420	0.121
131	岩出遺跡群	508	南伊勢	盤	14C	0.199	0.119	2.33	0.241	0.211	0.083
132	岩出遺跡群	517	南伊勢	皿	15C	0.316	0.208	1.47	0.345	0.335	0.112
133	岩出遺跡群	519	南伊勢	皿	15C	0.336	0.231	1.49	0.330	0.340	0.122
134	岩出遺跡群	521	南伊勢	皿	15C	0.312	0.184	1.37	0.317	0.339	0113
135	岩出遺跡群	530	南伊勢	椀	15C	0.367	0.317	2.83	0.373	0.436	0.138
136	岩出遺跡群	533	南伊勢	鍋	13C	0.348	0.213	2.14	0.389	0.400	0.177
137	岩出遺跡群	534	南伊勢	鍋	13C	0.329	0.205	2.10	0.343	0.352	0.196
138	岩出遺跡群	554	南伊勢	皿	14C	0.336	0.205	1.21	0.304	0.374	0.097
139	岩出遺跡群	556	南伊勢	皿	14C	0.322	0.322	1.40	0.290	0.509	0.142
140	岩出遺跡群	557	南伊勢	皿	14C	0.315	0.163	1.35	0.293	0.302	0.093
141	岩出遺跡群	559	南伊勢	皿	14C	0.265	0.140	1.58	0.372	0.321	0.102
142	岩出遺跡群	561	南伊勢	皿	14C	0.254	0.202	1.47	0.334	0.272	0.074
143	岩出遺跡群	565	南伊勢	皿	14C	0.295	0.158	1.46	0.365	0.301	0.100
144	岩出遺跡群	566	南伊勢	皿	14C	0.290	0.207	1.69	0.292	0.358	0.133
145	岩出遺跡群	571	南伊勢	皿	14C	0.294	0.188	1.51	0.314	0.297	0.122
146	岩出遺跡群	572	南伊勢	鍋	14C	0.209	0.094	1.51	0.259	0.174	0.036
147	岩出遺跡群	608	南伊勢	鍋	14C	0.313	0.247	1.90	0.328	0.350	0.147
148	岩出遺跡群	638	南伊勢	鍋	13C	0.337	0.190	1.98	0.306	0.326	0.107
149	岩出遺跡群	655	南伊勢	甕	12C	0.339	0.091	1.07	0.327	0.259	0.156
150	岩出遺跡群	656	南伊勢	甕	12C	0.232	0.088	1.12	0.255	0.226	0.086
151	岩出遺跡群	703	南伊勢	鍋	15C	0.367	0.101	1.26	0.367	0.292	0.085
152	岩出遺跡群	704	南伊勢	鍋	15C	0.319	0.154	1.70	0.422	0.354	0.136
153	岩出遺跡群	705	南伊勢	鍋	15C	0.348	0.174	2.41	0.354	0.327	0.139
154	岩出遺跡群	706	南伊勢	鍋	15C	0.342	0.193	1.63	0.359	0.403	0.119
155	岩出遺跡群	707	南伊勢	鍋	15C	0.366	0.274	1.71	0.392	0.499	0.182
156	岩出遺跡群	708	南伊勢	鍋	15C	0.370	0.158	2.80	0.348	0.295	0.186
157	岩出遺跡群	713	南伊勢	羽釜	15C	0.295	0.157	1.48	0.386	0.305	0.185
158	岩出遺跡群	747	南伊勢	皿	12C	0.273	0.110	1.44	0.305	0.306	0.095
159	岩出遺跡群	748	南伊勢	皿	12C	0.274	0.058	1.39	0.248	0.171	0.049
160	岩出遺跡群	749	南伊勢	皿	12C	0.258	0.184	1.70	0.237	0.355	0.085
161	岩出遺跡群	750	南伊勢	皿	12C	0.253	0.068	1.24	0.211	0.190	0.050
162	岩出遺跡群	789	南伊勢	甕	12C	0.302	0.153	1.27	0.286	0.298	0.136
163	岩出遺跡群	791	南伊勢	甕	12C	0.207	0.099	1.40	0.222	0.239	0.101
164	岩出遺跡群	792	南伊勢	甕	12C	0.354	0.147	1.19	0.233	0.287	0.116
165	岩出遺跡群	824	南伊勢	椀	15C	0.335	0.327	2.59	0.301	0.399	0.138
166	岩出遺跡群	826	南伊勢	盤	14C	0.326	0.168	1.85	0.380	0.355	0.162
167	岩出遺跡群	852	南伊勢	鍋	14C	0.380	0.125	1.01	0.377	0.321	0.102
168	岩出遺跡群	854	南伊勢	鍋	14C	0.378	0.163	1.66	0.316	0.275	0.258
169	岩出遺跡群	857	南伊勢	鍋	14C	0.453	0.271	1.90	0.391	0.405	0.579
170	岩出遺跡群	858	南伊勢	鍋	14C	0.379	0.147	0.72	0.396	0.380	0.133
171	下川遺跡	13	中北勢	皿	16C	0.464	0.111	1.37	0.618	0.286	0.098
172	下川遺跡	14	中北勢	皿	16C	0.473	0.128	1.27	0.543	0.324	0.120
173	下川遺跡	19	中北勢	皿	16C	0.484	0.116	1.33	0.519	0.272	0.118
174	下川遺跡	20	中北勢	羽釜	16C	0.419	0.095	1.41	0.516	0.265	0.103
175	下川遺跡	22	中北勢	羽釜	16C	0.444	0.097	1.20	0.523	0.252	0.093
176	下川遺跡	35	中北勢	皿	16C	0.439	0.122	1.51	0.494	0.292	0.109
177	下川遺跡	36	中北勢	羽釜	16C	0.469	0.129	1.63	0.534	0.318	0.118
178	下川遺跡	37	中北勢	羽釜	16C	0.436	0.123	3.19	0.360	0.222	0.148
179	下川遺跡	38	中北勢	羽釜	16C	0.426	0.103	2.58	0.443	0.179	0.089
180	下川遺跡	39	中北勢	羽釜	16C	0.487	0.199	2.23	0.491	0.383	0.252
181	下川遺跡	67	中北勢	皿	16C	0.493	0.137	1.28	0.494	0.318	0.107
182	下川遺跡	72	中北勢	羽釜	16C	0.453	0.079	1.03	0.488	0.209	0.080
183	下川遺跡	84	中北勢	羽釜	16C	0.469	0.164	2.59	0.450	0.291	0.220
184	下川遺跡	85	中北勢	羽釜	16C	0.462	0.126	1.93	0.449	0.254	0.190
185	下川遺跡	88	中北勢	羽釜	16C	0.432	0.126	1.22	0.430	0.256	0.122
186	下川遺跡	90	中北勢	焙烙	16C	0.512	0.160	1.46	0.556	0.351	0.198

tab.12　中世土器胎土分析値（3）

						分析値					
資料No.	遺跡名	報告No	分類	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
187	下川遺跡	100	中北勢	羽釜	16C	0.469	0.094	1.14	0.560	0.268	0.124
188	下川遺跡	103	中北勢	羽釜	16C	0.468	0.115	2.00	0.469	0.281	0.128
189	下川遺跡	104	中北勢	羽釜	16C	0.417	0.095	1.50	0.446	0.240	0.109
190	下川遺跡	107	中北勢	羽釜	16C	0.477	0.107	2.01	0.519	0.229	0.178
191	下川遺跡	109	中北勢	羽釜	16C	0.465	0.106	1.58	0.493	0.277	0.138
192	下川遺跡	130	中北勢	羽釜	16C	0.516	0.112	0.833	0.570	0.330	0.131
193	下川遺跡	131	中北勢	羽釜	16C	0.493	0.149	1.79	0.565	0.323	0.207
194	下川遺跡	132	南伊勢	鍋	16C	0.316	0.237	2.53	0.301	0.338	0.179
195	下川遺跡	133	南伊勢	鍋	16C	0.387	0.299	2.88	0.373	0.446	0.201
196	下川遺跡	134	南伊勢	茶釜	16C	0.439	0.347	2.63	0.362	0.414	0.245
197	下川遺跡	172	中北勢	皿	16C	0.444	0.121	1.33	0.456	0.245	0.124
198	下川遺跡	175	中北勢	羽釜	16C	0.468	0.124	2.89	0.466	0.218	0.150
199	下川遺跡	187	中北勢	皿	16C	0.425	0.180	1.80	0.492	0.372	0.137
200	下川遺跡	189	中北勢	羽釜	16C	0.427	0.111	2.84	0.389	0.222	0.132
201	前田町屋遺跡	67	南伊勢	甕	12C	0.380	0.238	1.60	0.299	0.386	0.164
202	前田町屋遺跡	89	南伊勢	鍋	13C	0.250	0.378	1.70	0.200	0.540	0.145
203	前田町屋遺跡	181	南伊勢	鍋	13C	0.428	0.412	2.02	0.392	0.558	0.242
204	前田町屋遺跡	185	南伊勢	鍋	15C	0.339	0.285	1.26	0.296	0.398	0.157
205	前田町屋遺跡	73	南伊勢	鍋	15C	0.256	0.179	1.55	0.264	0.314	0.098
206	前田町屋遺跡	20	南伊勢	鍋	15C	0.337	0.321	2.15	0.373	0.544	0.174
207	前田町屋遺跡	186	南伊勢	鍋	14C	0.357	0.161	1.05	0.399	0.412	0.119
208	前田町屋遺跡	13	南伊勢	鍋	13C	0.348	0.524	1.57	0.336	0.934	0.146
209	前田町屋遺跡	183	南伊勢	鍋	13C	0.473	0.245	2.00	0.373	0.378	0.231
210	前田町屋遺跡	188	南伊勢	鍋	15C	0.309	0.263	2.33	0.248	0.435	0.158
211	前田町屋遺跡	190	南伊勢	羽釜	15C	0.322	0.271	1.93	0.308	0.427	0.151
212	前田町屋遺跡	21	南伊勢	羽釜	15C	0.385	0.215	1.72	0.337	0.434	0.112
213	前田町屋遺跡	23	南伊勢	羽釜	15C	0.358	0.263	1.82	0.300	0.596	0.108
214	前田町屋遺跡	22	南伊勢	羽釜	15C	0.319	0.331	1.93	0.273	0.498	0.122
215	前田町屋遺跡	37	南伊勢	羽釜	15C	0.262	0.233	1.51	0.292	0.368	0.115
216	前田町屋遺跡	194	南伊勢	羽釜	15C	0.367	0.255	2.44	0.319	0.400	0.170
217	前田町屋遺跡	31	南伊勢	羽釜	15C	0.252	0.219	1.29	0.268	0.388	0.084
218	前田町屋遺跡	24	南伊勢	小皿	15C	0.329	0.197	1.13	0.361	0.561	0.167
219	前田町屋遺跡	175	南伊勢	小皿	15C	0.408	0.196	1.28	0.466	0.462	0.190
220	前田町屋遺跡	170	南伊勢	小皿	15C	0.318	0.166	1.07	0.277	0.497	0.139
221	前田町屋遺跡	14	南伊勢	小皿	15C	0.277	0.369	1.21	0.244	0.837	0.205
222	前田町屋遺跡	169	南伊勢	小皿	15C	0.297	0.188	1.70	0.266	0.404	0.100
223	前田町屋遺跡	70	南伊勢	皿	15C	0.327	0.235	1.06	0.335	0.548	0.101
224	前田町屋遺跡	16	南伊勢	皿	13C	0.355	0.467	1.03	0.409	1.100	0.124
225	前田町屋遺跡	46	南伊勢	皿	13C	0.319	0.250	1.12	0.276	0.722	0.127
226	前田町屋遺跡	45	南伊勢	皿	13C	0.258	0.271	1.49	0.267	0.530	0.160
227	前田町屋遺跡	163	南伊勢	皿	14C	0.411	0.167	1.06	0.420	0.438	0.179
228	前田町屋遺跡	156	南伊勢	皿	15C	0.414	0.215	1.62	0.384	0.386	0.155
229	前田町屋遺跡	160	南伊勢	皿	15C	0.288	0.207	1.17	0.315	0.353	0.075
230	前田町屋遺跡	25	南伊勢	皿	12C?	0.343	0.324	2.51	0.338	0.511	0.127
231	櫛田奥ノ垣内	1−1	南伊勢	鍋	16C	0.338	0.356	2.38	0.395	0.593	0.192
232	櫛田奥ノ垣内	2−2	南伊勢	鍋	16C	0.465	0.413	2.96	0.469	0.483	0.200
233	櫛田奥ノ垣内	2−3	南伊勢	羽釜	16C	0.410	0.327	2.64	0.424	0.496	0.157
234	櫛田奥ノ垣内	4−1	南伊勢	鍋	16C	0.385	0.286	2.30	0.331	0.432	0.207
235	櫛田奥ノ垣内	3−3	南伊勢	茶釜	16C	0.339	0.378	3.86	0.307	0.381	0.201
236	櫛田奥ノ垣内	3−6	南伊勢	茶釜	16C	0.382	0.320	2.18	0.351	0.586	0.149
237	櫛田奥ノ垣内	3−4	南伊勢	皿	16C	0.347	0.346	1.15	0.308	0.802	0.177
238	櫛田奥ノ垣内	3−5	南伊勢	皿	16C	0.348	0.275	1.81	0.298	0.430	0.153
239	櫛田奥ノ垣内	16−2	南伊勢	焙烙	18C	0.267	0.206	2.18	0.282	0.307	0.109
240	櫛田奥ノ垣内	16−1	南伊勢	焙烙	18C	0.312	0.187	2.22	0.322	0.295	0.107
241	櫛田奥ノ垣内	17−2	南伊勢	焙烙	18C	0.309	0.217	1.75	0.305	0.354	0.132
242	櫛田奥ノ垣内	17−1	南伊勢	焙烙	18C	0.293	0.184	2.11	0.369	0.297	0.106
243	櫛田奥ノ垣内	17−4	南伊勢	小皿	18C	0.349	0.191	1.99	0.371	0.298	0.096
244	櫛田奥ノ垣内	17−5	南伊勢	小皿	18C	0.400	0.246	2.86	0.367	0.350	0.131
245	櫛田奥ノ垣内	16−3	南伊勢	焙烙	18C	0.282	0.259	2.18	0.252	0.370	0.117

tab.13　中世土器胎土分析値（4）　※231～245の「報告No.」は、実測No.である。

2　蛍光X線分析結果に見る伊勢地域の中世土器

伊　藤　裕　偉

三辻利一先生に依頼した中世土器の蛍光X線分析結果について、その成果を考えてみたい。

a　分析目的と事前の予想

分析の目的は2つあった。ひとつは、伊勢における中世土器群が、大きく「中北勢」と「南伊勢」とに区分されるなか、その異なりが科学的に抽出可能かどうか、である。もうひとつは、南伊勢系土師器として認識している土器群が、時代毎あるいは器種毎で胎土の相違が観察されるのかどうかであった。

このことを検証するために、南伊勢地域の遺跡として玉城町岩出遺跡群、松阪市櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区、三雲町前田町屋遺跡を、中北勢地域の遺跡として安濃津遺跡群と芸濃町下川遺跡を抽出してみた。

分析前の見通しでは、前者についてはおそらく何らかの差異が観察されるであろうと考えていた。また後者については、肉眼観察では使用されている素地の雰囲気が異なるため、やはり何らかの差異が生じるものと考えていた。また遺跡単位で見ると、岩出遺跡群・櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区・前田町屋遺跡は3者で、下川遺跡は南伊勢系と考えられるものを除いて、それぞれ一定の領域を形成するのではないかと考えた。そして安濃津遺跡群では「中北勢」「南伊勢」両者が混合するため、上記2領域にそれぞれ収まるものと考えていた。なお、参考のため試料を出した三河・尾張地域の焙烙（試料番号90、当報告書1730番）や大和産と考えられる羽釜（試料番号85、当報告書895番）については、上記領域とは別の位置にあたるのではないかと考えていた。

b　分析結果について

上記の事前予想と分析結果とでは、いくつかの符合点とともに、新たな問題点も生まれた。

中世前期の土器胎土について

中世前期については、今回の資料中では南伊勢系土師器のみが該当する。岩出遺跡群および安濃津遺跡群との比較検討ということになる。

分析前の予想では、両者はある程度の胎土的な一致を見せるものと考えていた。ところが、両者は明らかな分布の異なりを示す結果となった。部分的には、資料番号1・2のように「岩出領域」に相当する安濃津遺跡群の土器もあるものの、大部分は岩出遺跡群とは異なるものと評価できる。南伊勢系土師器の供給地が、岩出遺跡群と安濃津遺跡群とでは異なると考えられる。

中世後期の土器胎土について

中世後期については、今回分析対象とした全ての遺跡が相当する。南伊勢系土師器および中北勢系土師器の傾向についてそれぞれ見よう。

中世後期の南伊勢系土師器　三辻先生のいう「前田町屋領域」は、岩出遺跡群14･15世紀の試料や櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区ともよく符合している。また、下川遺跡の南伊勢系土師器についても、三辻先生の指摘にもあるように、よく符合していると評価できる。

安濃津遺跡群の試料については、fig. 112･113にtab. 10・11から南伊勢系のもののみを抽出した図を作成した。これを見ると、概ね「前田町屋領域」付近にあり、南伊勢系土師器としては岩出遺跡群・前田町屋遺跡などと同様の傾向を示すものと考えてよいであろう。

ただし、fig. 113のＲｂ－Ｓｒ分布図により明瞭に表れているように、47・16・36・56・72などの試料がグラフ右方に集中する傾向も見出される。これは、安濃津へと供給された南伊勢系土師器の製作地が、比較的広範囲にわたっていることを示すものと考えられる。これは、16が南伊勢系にしては調整が粗く、一見中北勢系との類似が見られること、47（SK209出土、報告書番号556）の口縁部形態が、一括性の高い土坑内遺物のなかでもより保守的な形態であること、56が見た目にも白色が強く、外面調整のハケメも他とは少し異なること、87が手法的には中北勢系的であるものの、形態的

には南伊勢系であること、などの相違点が見られることとも関連しよう。

中世後期の中北勢系土師器　安濃津遺跡群の試料については、fig. 114・115に中北勢系のもののみを抽出したものを作成した。これを見ると、三辻先生の設定された「下川領域」とは一致が低いように見える。しかし、詳細に見ると「下川領域」から逸脱する個体は大部分が皿類であり、羽釜はほぼ一致しているといえる。

このことから、安濃津遺跡群に搬入された中世後期の中北勢系土師器は、羽釜と皿類とでは別の生産地であると考えられる。分布図から見れば、皿類に関しては、南伊勢地域寄りの場所ということであろうか。

その他の土器胎土について

尾張・三河地域のものや大和地域のものと考えられる試料を分析に出した。しかし、単体であるため、あまり明確な結果は得られなかった。

c　小結

以上、三辻先生に分析していただいた結果をもとに、いくつかの検討を行なってきた。詳細な検討は、今後の分析試料の蓄積後となろうが、ここでいちおうのまとめをしておきたい。

まず、南伊勢系土師器についてである。岩出遺跡

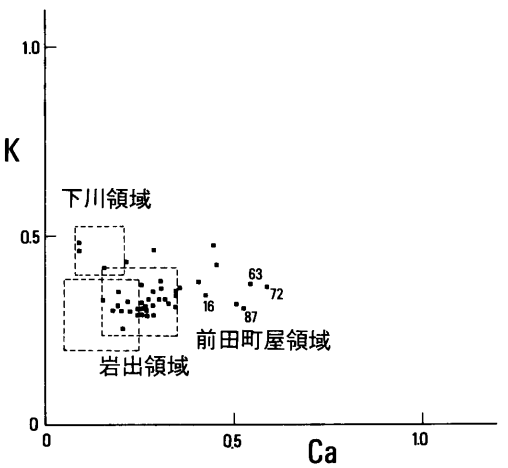


fig.112　安濃津遺跡群の南伊勢系（15世紀）のK-Ca分布図

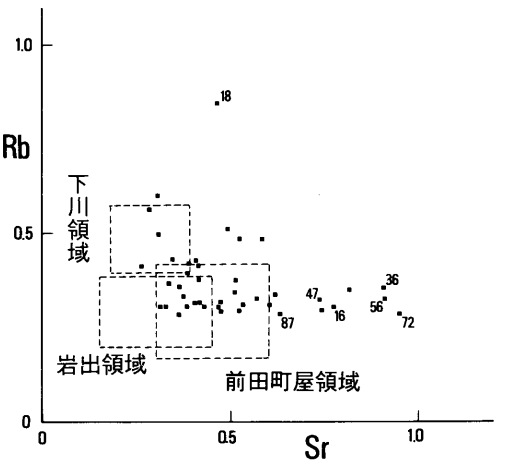


fig.113　安濃津遺跡群の南伊勢系（15世紀）のRb-Sr分布図

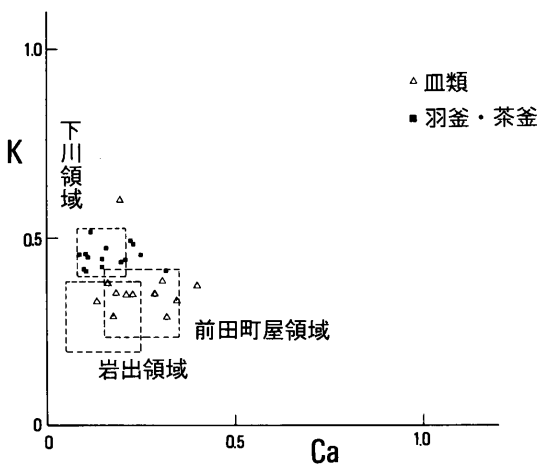


fig.114　安濃津遺跡群の中北勢系（15世紀）のK-Ca分布図

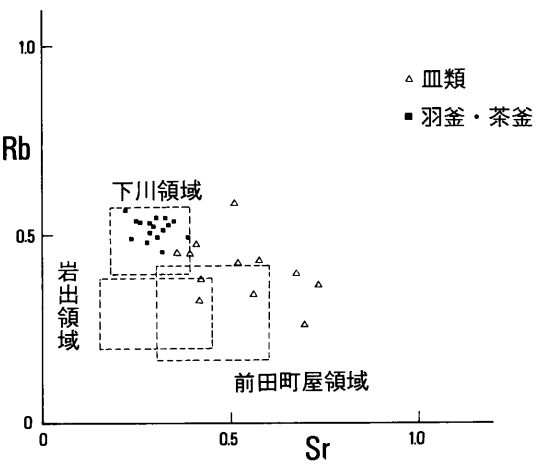


fig.115　安濃津遺跡群の中北勢系（15世紀）のRb-Sr分布図

群の試料を見ると、中世前期から後期にかけて、Ｒｂ－Ｓｒ分布図、Ｋ－Ｃａ分布図ともに、グラフ右方向へと分布領域の移動が見られる。岩出遺跡群の試料を基礎として考えた場合、南伊勢系土師器の生産地がある程度、時期的に変化している傾向がある、と評価することができる。

ここで、三辻先生のいう「前田町屋領域」を岩出遺跡群14・15世紀における両分布図と比較してみると、岩出遺跡群の試料は「前田町屋領域」の左側へと偏るものの、両者がほぼ同じ傾向を有している、と評価できるものと考えられる。同様のことは、櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区の試料についても言える。したがって、これらを包括して領域を設定することができるのではないかと考える。

この領域を、「南伊勢領域」として把握できるとすると、安濃津遺跡群における中世前期の分析結果についても、この範疇で把握することができる。前田町屋遺跡や櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区の試料についても、Ｒｂ－Ｓｒ分布図、Ｋ－Ｃａ分布図ともに、グラフ右方向へと偏る個体がいくつか存在している。これらについても、「南伊勢領域」として把握することが可能となるのではないかと考える。

このなかで、fig. 112・113に見られるような、グラフ右方へ集中する一群が見出されたことは重要である。南伊勢系土師器の製作工人については、例えば北畠氏の拠点・多気における土器生産など、とくに中世後期における領主権力との関わりのなかでの生産の方向性が生み出されることを推測していた[(1)]。今回の分析結果は、それ以外の方向性として、中北勢系土師器との手法的共通性を持つ一群にこのような傾向が見られることから、より多面的な展開を考察する方向性が示されたものと評価されよう。

このような中世後期のあり方を踏まえて中世前期を見ると、安濃津遺跡群で確認された、やはりグラフ右方へと偏る一群のあり方が注意される。しかし、中世後期のような手法的な差異がこの一群に見出されるわけではない。中世前期のあり方としては、中世後期とは別な意味でのより広範囲な生産活動がなされていた、と考えておきたい。

つぎに、中北勢系土師器についてまとめておく。中北勢系土師器については、三辻先生のいう「下川領域」が、羽釜においてより厳密に設定できるということが判明したことと、皿類が羽釜とは異なった生産地であることが分かってきた点が重要である。中北勢地域では、皿類は中世前期から継続して生産されていると考えられるものの、羽釜は１５世紀前葉頃にはじめて生産がなされるという性格を持つ。この違いが分析結果の違いとして現れた可能性もあり、ひいては製作者の違いに還元できる可能性を秘めているといえよう。

以上、三辻先生に分析いただいた土器について、いくつかの考察を加えてみた。今後、このような分析をより多くの遺跡で加え、伊勢の土器に見られる特色を明らかにしていきたいと思う。最後に、貴重なお時間を裂いて分析にあたっていただいた三辻先生に、改めて御礼申し上げます。

註

(1) 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」（『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター　1992）および越賀弘幸・伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996）

3　安濃津遺跡群の土壌・古植生等の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

安濃津遺跡群は、岩田川右岸の海岸線に３列認められる砂堆の中央列上に位置する。発掘調査により、鎌倉～室町時代（13～15世紀）の集落跡と江戸時代（18世紀）の集落跡が検出されているが、16～17世紀の遺構・遺物の確認は極めて少ない。このことは、明応７年（1498年）の大地震（明応大地震）により安濃津が壊滅したという記録に関連すると考えられている。

今回は、室町時代の各遺構土壌等を用いて、以下に示す調査課題を設定し、自然科学分析を行う。

1　調査課題と分析項目・試料

a　堆積環境の推定

各遺構内（ＳＫ137・229・263・296、SZ73）の堆積環境を明らかにするため、覆土の珪藻分析および粒度分析を行う。また、対照試料として、遺構基盤についても両分析を実施する。分析点数は珪藻分析14点、粒度分析13点である。各分析試料の詳細は、tab.14に示した。

b　古植生の推定

各遺構（SK137・296・229、SZ73）の使用（埋積時）の周辺植生を明らかにするため、花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定を実施する。分析点数は、花粉分析と珪藻分析が各５点である。樹種同定は、SZ137最下層から採取された試料で、３点ある。各試料の詳細はtab.１４に示した。

c　白色物質の種類

SK263より出土した、完形の大甕の底から採取された土壌試料に含まれている白色物質の素材を明らかにするため、Ｘ線回折分析を行う。点数は１点である。

2　堆積環境の推定

a　分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させ、プリュウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で任意の測線に沿って走査し、珪酸殻が半分以上残存するも

遺構	試料名	試料の質	分析項目					
			珪藻	粒度	花粉	植珪	Ｘ線	樹種
SK296	①層	黒褐色中粒砂	○	○				
	②層	黒褐色砂質シルト	○	○	○	○		
	⑥層	黒褐色砂質シルト	○	○	○	○		
	⑨層	黒色砂質粘土	○	○				
	⑩層	灰黄褐色中粒砂	○	○				
	⑫層	黒褐色中粒砂	○	○				
SK137	①層	にぶい黄褐色中粒砂	○	○				
	④層	灰黄褐色中粒砂	○	○				
	最下層	根材						○
SZ73	①層	にぶい黄褐色中粒砂	○	○				
	⑧層	黒褐色砂混り粘土シルト（植物遺体混じる）	○	○	○	○		
	⑨層	黒褐色砂質粘土（植物遺体混じる）	○	○	○	○		
SK229	最下層土壌サンプル	砂混じりシルト質粘土（植物遺体含む）	○	○	○	○		
SK263	カメ底の土	灰黄褐色中粒砂（白色物質混じる）	○				○	
遺構基盤	土壌サンプル	にぶい黄橙色中粒砂	○	○				

tab. 14　分析試料および分析項目

のを対象に、200個体以上同定・計数する。

（2）粒度分析

砕屑性堆積物研究会(1983)の方法を参考に、礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分は比重計法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析工程を示す。

試料を風乾して2㎜φ篩でふるい分け、篩上粒子は水洗して4㎜φ・2㎜φ篩でふるい分け、重量を測定する。一方、篩下粒子は50gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、水と分解剤（4%カルゴン）を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1,000mlにする。沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置する。所定時間（1,2,5,15,30,60,,240,1440分後）にそれぞれ比重計を懸濁液に挿入してその値を読みとる。別に測定した液温・メニスカス補正・土粒子の真比重から加積通過率(質量%)を求める。比重計読みとり終了後、懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105°Cで5時間熱乾後、1.0、0.5、0.25、0.125㎜φ篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率（質量%）を求める。比重計および篩分けで求められる加積通過率から粒径加積曲線を描き、Wentworth（1922）の粒径区分毎の質量を算出する。

b　結果

（1）珪藻分析

分析結果をfig. 116に示す。水生珪藻については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai,K.&Watanabe,T.(1995)の環境指標種を参考とした。珪藻化石は、一部の試料を除いて豊富に産出する。産出種は、淡水生種の中でも陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻が優占し、僅かに海水～汽水生種を含む。産出分類群数は、31属135種類である。

SK296は、第9層で珪藻化石の産出が少ないが、他の層では豊富に産出する。第6層を除いて、陸生珪藻の中でも耐乾性の強い陸生珪藻A群（以下、A群）のHantzschia amphioxys、Navicula muticaが優占し、同じくA群のNavicula contenta、Pinnularia borealis、P.borealis var.scalarisを伴う。第6層は、陸域にも水域にも耐性のある陸生珪藻B群（以下、B群）のNavicula confervaceaが優占し、流水不定性のGomphonema parvulum、Navicula pupulaなどを伴う。このうち、Navicula confervaceaとN.pupulaは、有機汚濁の進んだ富栄養水域に一般的な好汚濁性種である。

SZ137は、第1層と第4層で群集が異なる。第4層は、B群であり、好汚濁性種でもあるNavicula confervacea、N.seminurumが優占し、流水不定性で富栄養種のGomphonema parvulum、好汚濁性種のNitzschia paleaなどを伴う。第1層はA群のHantzschia amphioxys、Navicula muticaなどが優占する。

SZ73は、第1層、第8層、第9層ともHantzschia amphioxys、Navicula muticaなどのA群が優占するが、第8層では流水不定性で好汚濁性種のNitzschia paleaも多産する。

SK229最下層は、A群のHantzschia amphioxys、Navicula mutica、B群で好汚濁性種のNavicula confervacea、Navicula pupula、富栄養種のAchnanthes hungaricaが多産することを特徴とする。

SK263の大甕底の土は、A群のHantzschia amphioxys、Navicula muticaが優占し、Pinnularia borealis、流水不定で富栄養種のAchnanthes hungaricaを伴う。

僅かに産出した海水～汽水生種の中には、Achnanthes delicatulaなどの海水砂質干潟指標種、Thalassionema nitzschioidesの内湾や外洋指標種に含まれるものを含む。

（2）粒度分析

粒度分析結果をtab. 15に、Folk&Ward（1957）による評価結果をtab. 16に示す。平均粒径および尖度は試料によって多少異なるが、淘汰度はいずれの試料も悪い。

c　考察

各土坑埋積土の多くは陸生珪藻が優占する。その比率は現在の陸生珪藻の分布調査結果（伊藤・堀内1990）に比較すると、陸上堆積したことを裏付ける量(70%)以上である。また、その種類は各土坑ともよく似ており、耐乾性の強い土壌珪藻（Patrick 1977）とされる種類である。一方、干潟や内湾な

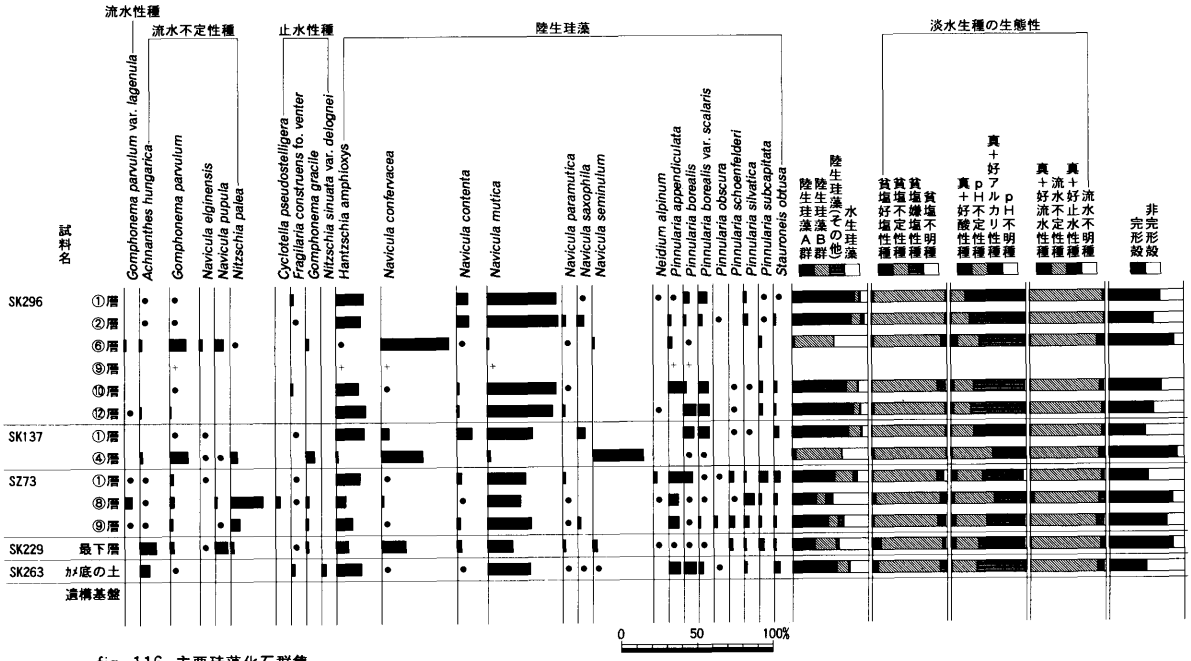


fig.116 主要珪藻化石群集

各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の種類を示す。

粒径区分 / 試料番号	礫		砂					泥	
	中礫 64～ 4.00㎜	細礫 4.00～ 2.00㎜	極粗粒砂 2.00～ 1.00㎜	粗粒砂 1.00～ 0.50㎜	中粒砂 0.50～ 0.25㎜	細粒砂 0.25～ 0.125㎜	極細粒砂 0.125～ 0.063㎜	シルト 0.063～ 0.0039㎜	粘土 0.039㎜
遺構基盤	0.0	0.1	1.2	47.1	36.4	5.8	1.1	1.2	7.1
SK229最下層	0.0	0.0	2.1	12.2	16.5	12.6	4.3	22.4	29.9
SZ73①層	0.0	0.2	8.7	32.8	26.8	18.6	2.8	2.8	7.3
SZ73⑧層	0.0	0.0	1.6	9.8	17.9	16.9	5.1	16.4	32.3
SZ73⑨層	0.0	0.1	2.9	22.6	31.6	21.7	4.0	3.1	14.0
SK137①層	0.0	0.1	1.5	18.8	39.1	26.0	3.6	3.3	7.6
SZ137④層	0.0	0.3	2.4	18.3	34.4	24.6	4.6	4.9	10.5
SZ296①層	0.0	0.4	4.4	27.0	25.3	20.8	3.6	5.4	13.1
SK296②層	0.6	0.2	5.1	28.9	28.8	15.4	3.4	5.4	12.2
SK296⑥層	0.0	0.1	3.7	22.3	26.7	16.0	4.0	10.7	16.5
SK296⑨層	0.0	0.1	3.0	22.7	27.8	15.4	5.1	11.2	14.7
SK296⑩層	0.7	0.6	4.4	25.3	27.0	16.1	4.4	7.9	13.6
SK296⑫層	0.2	0.4	3.9	26.8	32.8	16.7	3.6	5.4	10.2

tab.15　粒度分析結果

注）単位は重量％で表示。

試料名	平均粒径	中央粒径	モード径	分級度	歪度	尖度
遺構基盤	1.13φ(0.50㎜)粗粒砂	1.04φ(0.49㎜)	0.76φ(0.59㎜)	2.00非常に悪い	0.50著しい正	3.87極めて突出
SK229 最下層	5.39φ(0.172㎜)細粒砂	4.23φ(0.0533㎜)	10.7φ(0.0006㎜)	4.18極めて悪い	0.34著しい正	0.53非常に扁平
SZ73 ①層	1.45φ(0.46㎜)中粒砂	1.30φ(0.41㎜)	0.87φ(0.55㎜)	2.29非常に悪い	0.45著しい正	2.55非常に突出
SZ73 ⑧層	5.31φ(0.161㎜)中粒砂	3.75φ(0.074㎜)	10.7φ(0.0006㎜)	4.16極めて悪い	0.46著しい正	0.54非常に扁平
SZ73 ⑨層	2.50φ(0.32㎜)中粒砂	1.78φ(0.29㎜)	1.06φ(0.48㎜)	2.76非常に悪い	0.60著しい正	2.51非常に突出
SK137①層	1.84φ(0.33㎜)中粒砂	1.77φ(0.29㎜)	1.11φ(0.46㎜)	2.10非常に悪い	0.42著しい正	3.06極めて突出
SZ137 ④層	2.10φ(0.31㎜)中粒砂	1.85φ(0.28㎜)	1.13φ(0.46㎜)	2.33非常に悪い	0.47著しい正	2.72非常に突出
SZ296 ①層	2.47φ(0.35㎜)中粒砂	1.72φ(0.30㎜)	1.02φ(0.49㎜)	2.85非常に悪い	0.58著しい正	2.21非常に突出
SK296 ②層	2.21φ(0.38㎜)中粒砂	1.51φ(0.35㎜)	0.89φ(0.54㎜)	2.75非常に悪い	0.60著しい正	2.32非常に突出
SK296 ⑥層	3.62φ(0.31㎜)中粒砂	1.89φ(0.27㎜)	0.97φ(0.51㎜)	3.61非常に悪い	0.67著しい正	1.30突出
SK296 ⑨層	3.15φ(0.31㎜)中粒砂	1.86φ(0.27㎜)	0.97φ(0.51㎜)	3.23非常に悪い	0.65著しい正	1.41突出
SK296 ⑩層	2.71φ(0.35㎜)中粒砂	1.70φ(0.31㎜)	0.94φ(0.52㎜)	3.05非常に悪い	0.62著しい正	1.96非常に突出
SK296 ⑫層	1.96φ(0.37㎜)中粒砂	1.56φ(0.34㎜)	0.93φ(0.53㎜)	1.72悪い	0.42著しい正	1.39突出

tab.16　Folk＆Ward(1957)による粒度分析結果の評価

どの環境を指標する海水～汽水生種も産出するが、量的には少なかった。また、粒度分析の結果では、全ての試料で淘汰が悪いという評価が得られた。

本遺跡は明応７年の大地震で安濃津が壊滅したとされることとの関連性が指摘されている。今回分析試料とした遺構覆土は概して淘汰が悪いことから、各土坑が急速に埋積された可能性がある。この埋積が地震によるものか否かは不明であるが、少なくとも珪藻化石群集の特徴から見る限り、津波による埋積とは考えにくい。むしろ、洪水などによって周囲の土壌珪藻を含む乾いた土壌が急速に埋積した可能性がある。僅かに産出された海水～汽水生種は砂堆から二次的にもたらされた可能性がある。

SK296の第６層、SZ137の第４層、SZ73の第８層、SK229最下層では、有機汚濁の進んだ富栄養水域に一般的な好汚濁性種が優占することが特徴であり、洪水層とは確実に区別される。このことから、これらの層が埋積した頃は土坑内は富栄養水で満たされていた可能性がある。

ＳＫ２６３の大甕の底に堆積する土も陸生珪藻が優占し、その組成も他の土坑覆土と近似することから、洪水時に氾濫堆積物が大甕内に二次的混入したものと考えられる。

3　古植生の推定

a　方法

（１）花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、篩別（250μm）、重液分離（臭化亜鉛，比重２.３）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

（２）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（７０W, 250 KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重２.５）の順に物理・化学処理を行う。これを検鏡し易い濃度に希釈し、プリュウラックスで封入して、４００倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。出現するイネ科葉部短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

（３）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

b　結果

（１）花粉分析

結果をfig．117に示す。SK296では、花粉化石の保存状態が悪く、しかも花粉化石の検出個体数も少ない。SK229最下層およびSZ73遺構埋積物の花粉化石群集は類似しており、木本花粉ではマツ属が優占し、マキ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・シイノキ属・ニレ属ーケヤキ属・ブドウ属・ツタ属・イボタノキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科・クワ科・ソバ属・アカザ科・ナデシコ科・ヨモギ属・サンショウモなどを伴う。

（２）植物珪酸体分析

結果をfig．118に示す。いずれの試料でも栽培植物のイネ属が優占する植物珪酸体組成が見られ、イネ属短細胞珪酸体列も多産する。また、キビ族、ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科も認められる。SK296第２層のキビ族の中には、栽培種を含むヒエ属も認められるが、栽培種か否かの判別がつかない。

（３）樹種同定

木材は、全てヤナギ属＜根材＞に同定された。以下に解剖学的特徴を記す。

・ヤナギ属＜根材＞（Salix<root wood>）ヤナギ科

散孔材で、道管が年輪全体にほぼ一様に分布し、道管の占める割合が高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

c　考察

SK229最下層およびSZ73遺構埋積物とも花粉化

石群集は類似しており、マツ属が優占する。この結果から、室町時代以降、調査地点の周辺にはマツ林が成立していたと推定される。また、アカガシ亜属やシイノキ属など暖湿帯常緑広葉樹林の主要構成要素がわずかながらも検出されていることから、周囲は暖湿帯に属していたと考えられる。このような植生は、木本花粉の占める割合が総花粉・胞子数に対して低率であることから、遺跡の後背山地などに成立していたのであろう。ただし、ツル性木本類のブドウ属・ツタ属や低木類のイボタノキ属などは、花粉の生産量が少なくしかも花粉があまり遠くに移動しないことから、局地的な植生を反映していると見られる。なお、ヤナギ属が根材として検出されていることから、SZ137付近に生育していたものと思われる。

ところで、近畿地方の遺跡の花粉分析結果で、マツ属花粉は弥生時代中期以降になり増加し、古墳時代中期以降になると急増する場合が多く、これが人間の生業活動により森林が破壊されたことに起因すると推定されている（那須, 1980）。本地域における古植生の変遷については研究例が少ないが、今回想定されたマツ林の成立も人為的な植生干渉に由来する可能性もある。これは、今後、花粉化石群集の時期的な変遷様式を明らかにした上で改めて検討したい。

草本類としては、タケ亜科・ウシクサ族・イチゴ

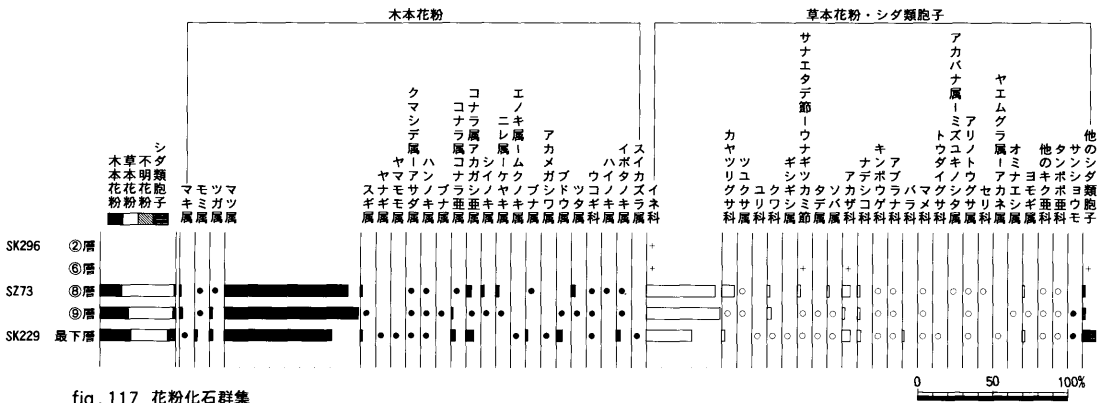


fig.117 花粉化石群集
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

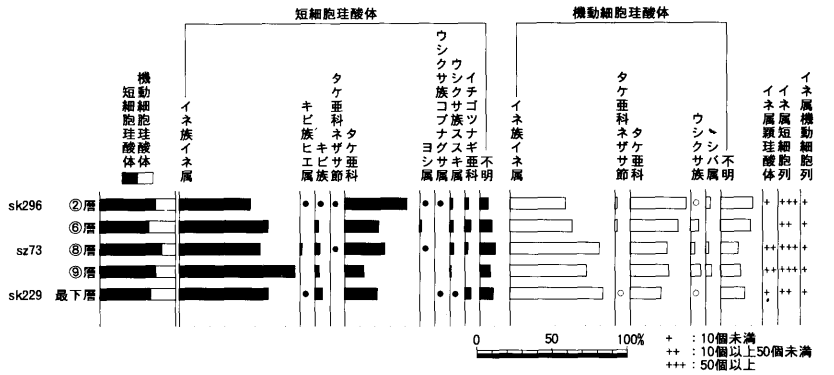


fig.118 植物珪酸体組成と組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

ツナギ亜科などのイネ科を中心として、カヤツリグサ科・クワ科・アカザ科・ナデシコ科・ヨモギ属などが生育していたと考えられる。なお、ヨシ属や浮水性シダ類のサンショウモが検出されることから、水溜状遺構の内部あるいはその導水経路には、これらの水生植物が生育していたと考えられる。ところで、SK296・SZ73・SK229の3基とも、栽培植物のイネ属が多産する。これらのイネ属珪酸体は、集落外の稲作地から運搬・堆積したと考えられる。また、栽培種か否かの判別がつかないヒエ属がわずかに認められた。このヒエ属が栽培種に由来するものであれば、周辺の畑作地でヒエ属が栽培され、その珪酸体が流れ込んできた可能性もある。またソバ属の花粉化石が検出されることから、本遺跡の周辺ではソバ栽培などの畑作が行われていたと考えられる。

4　白色物質の種類

a　分析方法

試料を105°Cで4時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉砕（200メッシュ以下）した。この微粉砕試料をアルミニウムホルダーに充填し、無定方位試料を作成した。

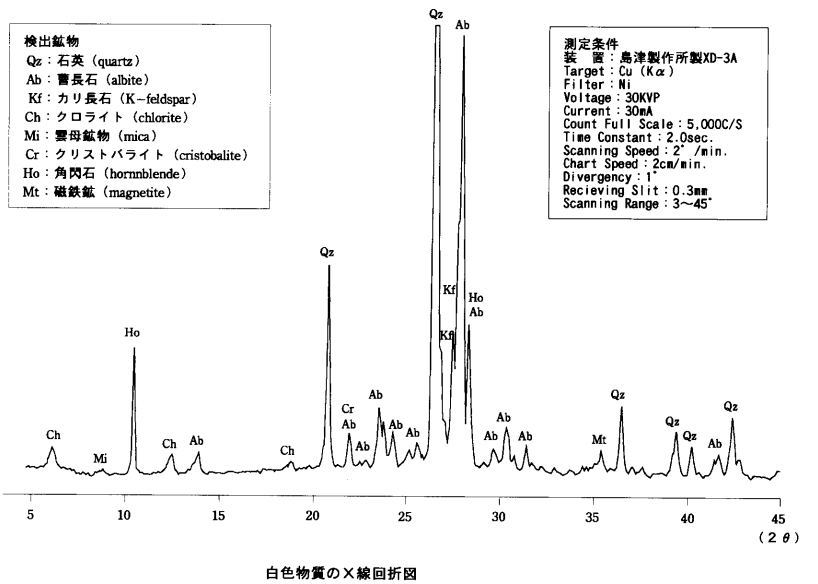
このX線回折分析試料について、fig. 119と共に示した測定条件でX線回折分析を行った。（足立. 1980；日本粘土学会，1987）。同定および解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

b　結果

X線回折チャートと検出鉱物をfig. 119に示す。検出された鉱物は、石英(quartz)、曹長石（albite)、カリ長石（potassium feldspar)、クロライト（chlorite)、雲母鉱物（mica minerals)、クリストバライト(cristobalite)、角閃石(hornblende)、磁鉄鉱（magnetite)、の8種類であり、特に白色を呈す鉱物等はX線回折結果からは確認されない。また、検出鉱物は土壌、岩石などに一般的に存在する鉱物であり、自然界に普遍的に存在する鉱物である。

c　考察

分析結果では、特に石英、長石類の存在量が多かった。これは、試料を肉眼で観察した際に白濁した石英、長石が多く確認されたことと調和的である。



白色物質のX線回折図

fig. 119　白色物質のX線回折図

このことから、試料中に含まれる白色物質は石英、長石が風化し、表面が白濁したものと推察される。

＜引用文献＞

足立吟也（1980）粉末X線回折法「機器分析のてびき3」, p.64-76　化学同人

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理, 42,p.73-88

Asai,K.&Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to OrganicWater Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, 35－47

Fork,R.L. and Ward,W.（1957）Brazons river bar； a study in the significance of grain size parameters. J.Sed.Petrol., 27,p.3-26.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌, 6,p.23-45.

近藤練三・佐藤　隆（1986）植物珪酸体分析,その特性　と応用. 第四紀研究, 25,p.31-64.

那須孝悌（1980）花粉分析からみた二次林の出現.関西自然保護機構会報, 4,p.3-9.

日本粘土学会編（1977）粘土ハンドブック　第二版. 1289p.,技報堂出版.

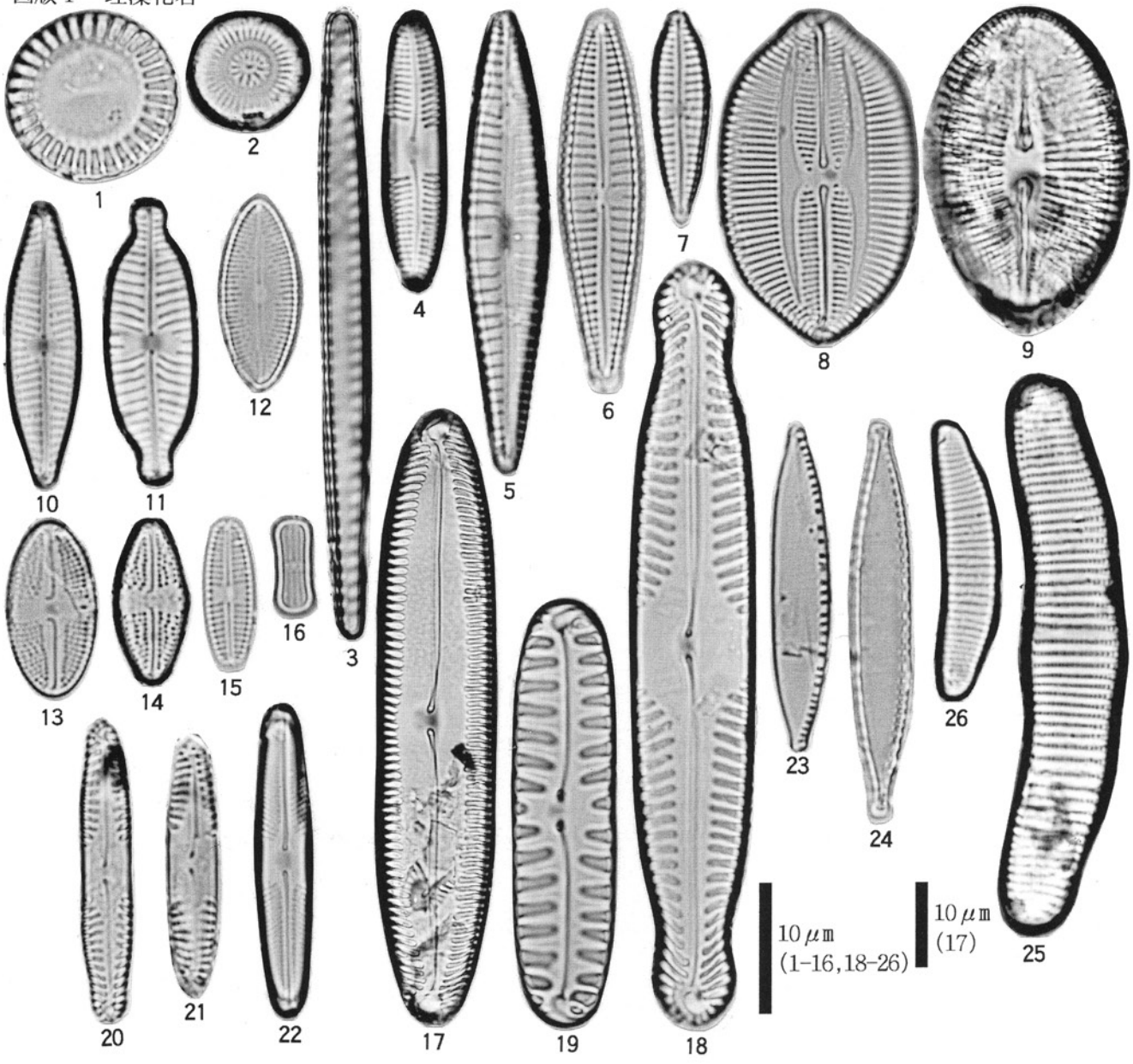
Patrick,R.（1977）Ecology of freshwater diatoms　and diatom communities. The biology of diatoms.,Botanical Monographs, 13,p.284-332. Blackwell Scientific Publication,London.

Powers.M.C.（1953）A new roundness scale for sedimentary particles. J.Sed.Petrol., 23,p.117-119

砕屑性堆積物研究会編（1983）地学双書24　堆積物の研究法」. 377p.,地学団体研究会.

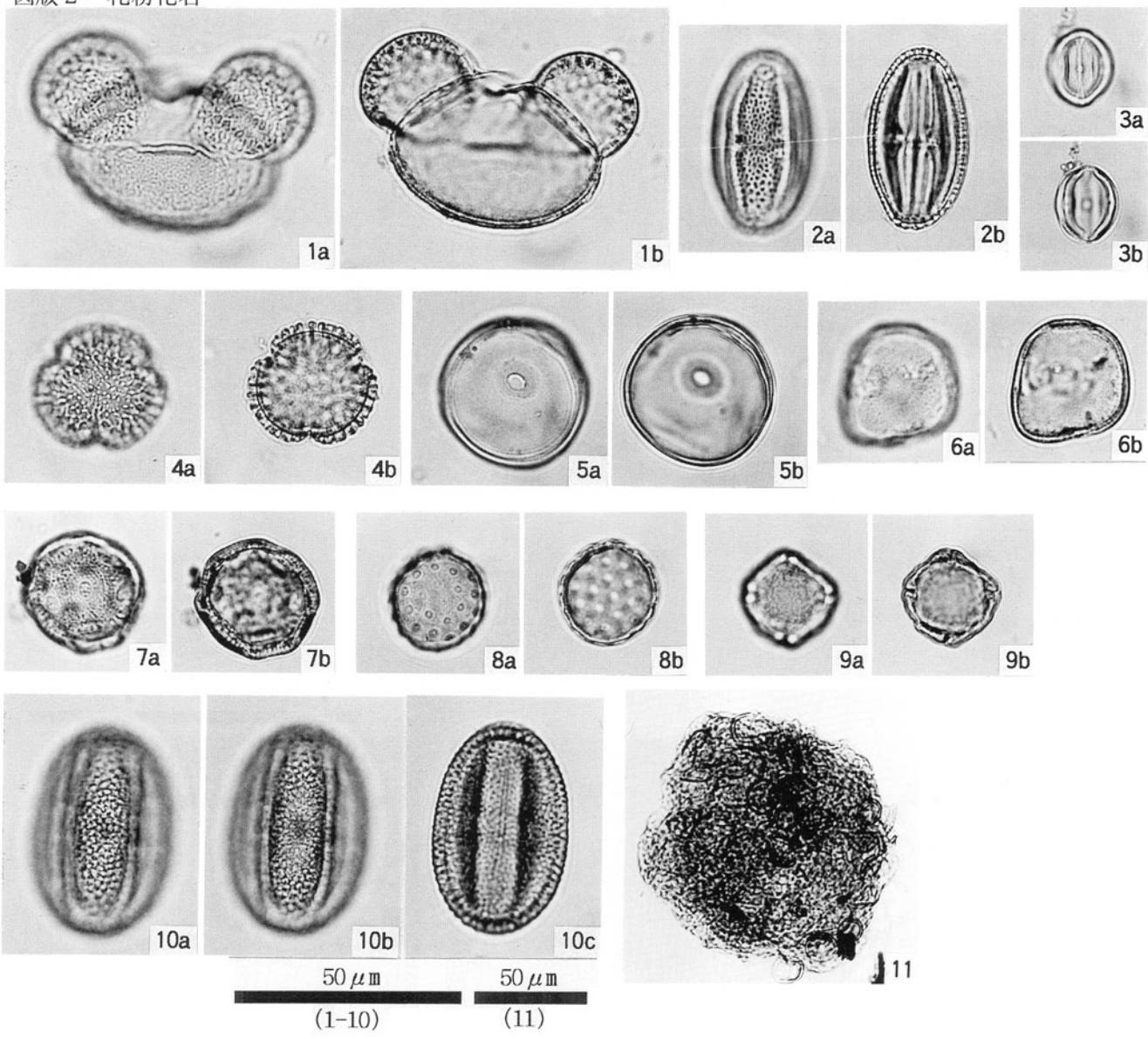
Wentworth,C.K.（1922）A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol, 30,p.377-392.

図版1　珪藻化石



1. *Cyclotella meneghiniana* Kuetzing(SK296;6層)
2. *Cyclotella pseudostelligera* Hustedt(SZ73;8層)
3. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.)Grunow(SZ73;9層)
4. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot(SK296;6層)
5. *Gomphonema gracile* Ehrenberg(SK296;6層)
6. *Gomphonema gracile* Ehrenberg(SK137;4層)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(SK296;6層)
8. *Navicula lyra* Ehrenberg(SZ73;1層)
9. *Navicula* hochstetteri Grunow(SZ73;8層)
10. *Navicula gregaria* Donkin(SZ73;8層)
11. *Navicula elginensis* (Greg.)Ralfs(SK296;6層)
12. *Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow(SK296;6層)
13. *Navicula saxophila* Bock(SK296;2層)
14. *Navicula mutica* Kuetzing(SK296;12層)
15. *Navicula seminulum* Grunow(SK137;4層)
16. *Navicula contenta* Grunow(SK137;1層)
17. *Pinnularia brevicostata* var. *sumatrana* Hustedt(SK296;6層)
18. *Pinnularia gibba* Ehrenberg(SK296;6層)
19. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(SZ73;1層)
20. *Pinnularia subcapitata* Gregory(SZ73;1層)
21. *Pinnularia silvatica* Petersen(SK296;2層)
22. *Stauroneis obtusa* Lagerst(SK137;1層)
23. *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(SZ73;9層)
24. *Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(SK296;6層)
25. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst(SK296;6層)
26. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst(SK296;6層)

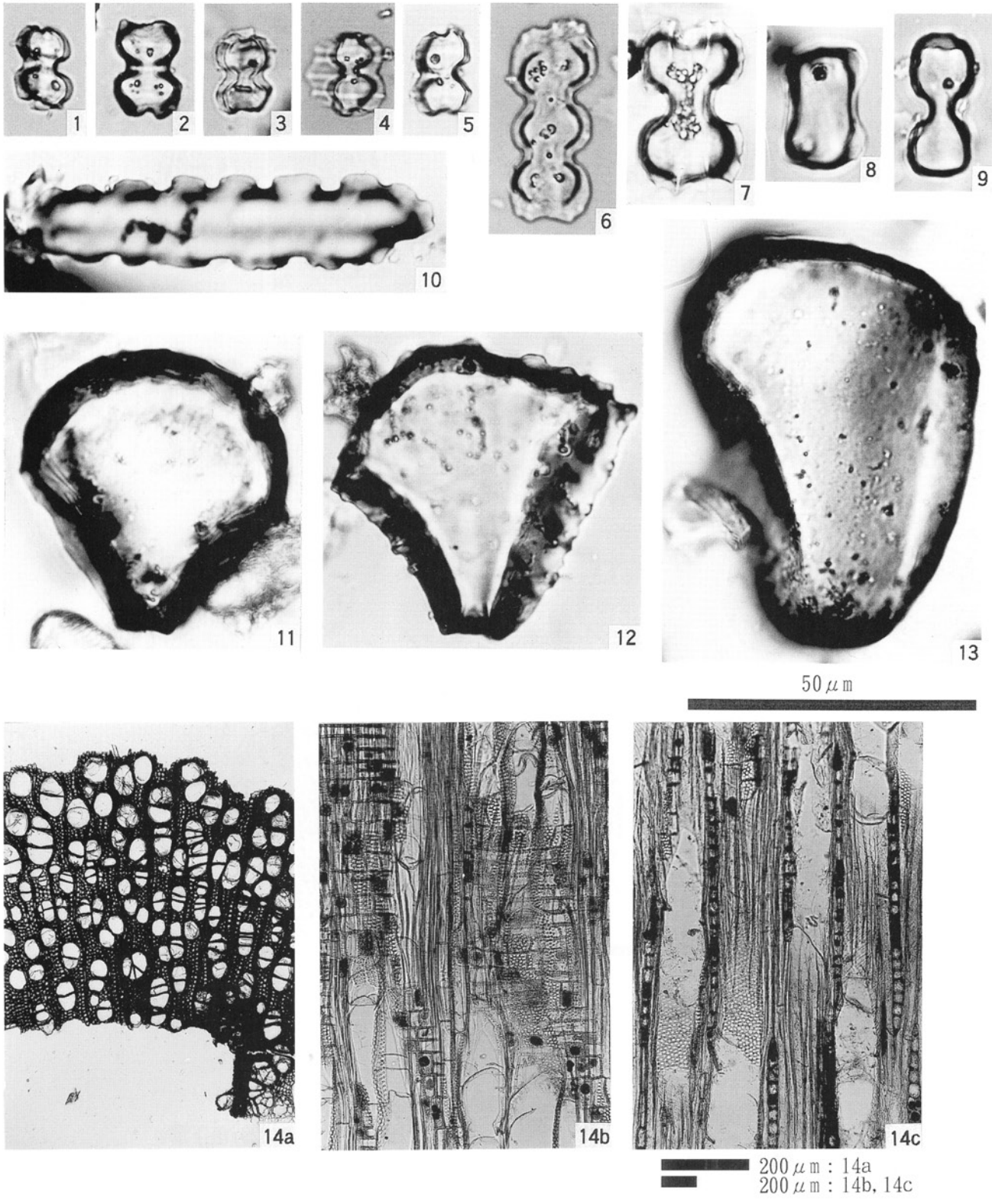
図版２　花粉化石



1. マツ属複維管束亜属(SZ73;8層)
2. ツタ属(SZ73;8層)
3. ブドウ属(SK229;最下層)
4. イボタノキ属(SK229;最下層)
5. イネ科(SZ73;8層)
6. カヤツリグサ科(SZ73;8層)
7. ナデシコ科(SZ73;8層)
8. アカザ科(SZ73;8層)
9. アリノトウグサ属(SZ73;8層)
10. ソバ属(SZ73;8層)
11. サンショウモ(SK229;最下層)

pho. 10　花粉化石

図版３　植物珪酸体・木材



1. イネ属短細胞珪酸体（SK296;2層）
2. イネ属短細胞珪酸体（SK296;6層）
3. イネ属短細胞珪酸体（SZ73;8層）
4. イネ属短細胞珪酸体（SZ73;9層）
5. イネ属短細胞珪酸体（SK229;最下層）
6. ヒエ属短細胞珪酸体（SZ73;8層）
7. キビ族短細胞珪酸体（SK296;6層）
8. タケ亜科短細胞珪酸体（SZ73;9層）
9. ススキ属短細胞珪酸体（SZ73;8層）
10. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（SK296;2層）
11. イネ属機動細胞珪酸体（SK296;6層）
12. タケ亜科機動細胞珪酸体（SK296;2層）
13. ウシクサ族機動細胞珪酸体（SK296;6層）
14. ヤナギ属＜根材＞（SK137;最下層）

pho. 11　植物珪酸体・木材

Ⅵ　安濃津に関する基礎検討

1　安濃津の景観復元

a　安濃の松原・洞津・穴津

これまで伝説的に語り継がれていた安濃津は、江戸時代以来その所在が興味の的となっていた。それについては目崎茂和氏の論考[1]で大まかな整理がされている。大雑把に言えば、明応の大震災によって安濃津は陥没し、地上からは消滅した、とする意見が大勢で、それを前提とした考察がいくつかある。これを大きく分類すると、ひとつは「安濃の松原」との関連で考える方向、もうひとつは「洞津・穴津」の名から考える方向である[2]。

前者は、現在の海岸線よりも海側に砂州があり、そこに松原があった、という江戸時代以降の文献を基礎とするものである。「安濃の松原」という文言は、『夫木和歌抄』にある。

＜史料１＞

伊勢のうみ　あのの松原　まつとても　いひしひかずに　なみはこえつつ[3]

この和歌から、「あのの松原」に関する認識は、少なくとも鎌倉後期にはあったものと思われる。しかし、それを現在の海岸線よりも海側にあったとするのは、江戸時代以降のものである。

「洞津」については、安濃津の港が洞のような入江になっていた、という認識が江戸時代になされていることによる。「洞津」の表記については、16世紀後葉までに編纂されたと考えられる『日本風土記』[4]に記載のある「三津」関連記事中にもある。ただし、同文中には「阿乃」の表記もあることは注意しなければならない。「穴津」は、16世紀後葉の織田信包の安濃津城中に、「穴津中将」などと呼称されていたとされることによる[5]。いずれの場合も、安濃津に洞状の内湾部があったことを想定する根拠となっている。

上記２例を基礎として景観復元をする際に、まず注意しなければならないのは、基本的には全て安濃津廃絶以降の史料を基礎にしている点である。まず、安濃の松原については、伊勢の平野部の海岸線であれば、まず間違いなく松原は形成される。それが中世以前に、現在の海岸線よりも海側にあったとする根拠は、江戸時代の伝聞以外には原則的にはない。『夫木和歌抄』の時代にあった松原が、現在の海中であると断定するのは難しい。

「洞津」については、同文中に「阿乃」の文字が見える以上、当て字と考えざるを得ない。「穴津」にしても、実質上安濃津が終焉している時期以降の表現であり、ここから中世以前の安濃津へと遡らせるのは無理がある。

このように、これまで安濃津の景観復元に重視されていた要素は極めて抽象的なものであり、どれも問題があると考えざるを得ない。

この方向とは別に、現在の地表下に安濃津に相当するものが存在するのではないかという研究が、近年になり盛んになっている。古くは『津市史』において、現在の津市津興地区を中心とした地がそれに相当するのではないかという指摘がある[6]。『津市史』以上に、より具体的に津興地区に安濃津の存在を考察したものとして、目崎氏の研究や矢田俊文氏の研究[7]がある。筆者も目崎氏、矢田氏と同様の見地から、安濃津は地上から消滅したものではなく、現在の状況からその範囲を推測できるものと考える。

では、目崎氏、矢田氏の成果にも導かれながら、安濃津の景観について、おおよその復元を試みよう。そのための具体的な資料として、考古学資料・地形的環境・文献史料を活用する。また、小字として残っている地名も、これらに準じる価値を持つものとして利用する。これらの要素を総合的に評価し、筆者なりの安濃津の港・港町を復元する。

b　砂堆・安濃川・岩田川

砂堆と安濃川　目崎氏と同様、安濃津を考えるうえで最も重要となるのが、海岸部に形成されている砂堆と考える。これは現在，海岸線と並行に三条

fig. 120　19 世紀後葉頃の安濃津周辺（1:40,000）（旧帝国陸軍地測量部地形図「上野村」「高野尾村」「津」「久居町」「矢野村」「高岡村」）

(列) ほど存在していることが国土地理院発行の表層地質図である「土地条件図（津；1：25,000)」から知ることができる。この地図を見ると、今回の調査地は、海岸から2条目の砂堆上に立地していることになる。

これらの砂堆は、現在の安濃川河口付近では乱れがある。そして、北部の白塚地区の砂堆は幅の広いものであり、安濃川河口以南のものとの連続性は乏しい。これらのことから、安濃川の河口に相当する部分は、砂堆形成時頃から変わっていない可能性が高いとともに、この部分以南が一連の砂堆であることを示している、と考えることができる。すなわち、安濃津想定地に見られる砂堆は、雲出川から安濃川にかけての地に形成されたものと考えられるのである。

この砂堆の形成要因となる砂がどこから運ばれたのかについては、目崎氏の指摘にもあるように、雲出川と考えるのが妥当である。それは、安濃津付近に見られる沿岸流が北流していること、そして、19世紀末に作成された地形図（fig. 120）を見ると、雲出川古川の河口左岸に北方へ派生する砂州を見ることができる。つまり、安濃津周辺の砂堆は、北上する沿岸流と雲出川の運んできた土砂によって形成されたと考えられるのである。

岩田川下流の評価　このことを踏まえて、2条目の砂堆に注意したい。この砂堆は、今回の調査区からやや北方で最も幅が広くなり安定している。そのさらに北方は、東流する岩田川をはさみ、津市乙部地区付近にまで及んでいるものと考えられる。つまり、砂堆は岩田川で分断されているのである。

現在の岩田川は、津市西部の標高約320 mの長谷山系を水源とし、総延長10.5 ㎞程度の河川である。安濃川が、伊勢・伊賀境の標高約820 m程度の布引山系北部を水源とし、総延長25㎞以上であることを考えれば、岩田川の規模が極めて小規模なことは明らかである。

注意しておきたいのは、比較的規模の大きい安濃川ですら、砂堆を分断するような流れの痕跡は、表層地質図上でも見られない、ということである。規模的には安濃川よりも格段に小さい岩田川に、比較的安定した砂堆を突き抜くほどの水勢を想定することはできない。

さて、安濃川と岩田川とは無関係な河川ではない。津市南河路町の西に流れる三泗川も、かつての安濃川筋と考えられるという[8]。江戸時代中期に編纂された『三國地誌』には「安濃川古へ古河村ヲ経、半田橋ノ下ニ至テ半田川（岩田川のこと‥‥筆者註）ト合流シテ海ニ入ル」という記述がある[9]。これらのことから、現在のように安濃川と岩田川とがそれぞれ別の河口を有している形態は、比較的最近のものと考えることが可能かと思われる。

さて、上記『三國地誌』記載の記事に注意しよう。岩田川が、古河村（現在の津市西古河・東古河町）経由で安濃川とつながっていたことは想像に難くない。しかし、この記述をそのまま信用すると、安濃川の方が岩田付近で岩田川へと接続していたことになる。こうなると、安濃川は現在の岩田川下流とほぼ同じとなるか、あるいは砂堆を貫くことが不可能と考えれば、今回の発掘調査区の西方を通り、八幡町西を経て藤方（後述）へと抜ける流れを想定する他ない。

しかし、問題の岩田川には、このような流れを想定するまでもないような不自然な部分がある。岩田川は、現在の津市南丸之内付近で異様なほど幅員が増す。そして、この部分を子細に見ると、東流してきた河川が北方へと曲がりかけたところで再度東側へと屈曲しているのである。この位置は、海岸から最も奥にあたる砂堆の西側約400m手前である。また、北方へと屈曲した河川が再度東流することなくそのまま北上すれば、近世の津城本丸のすぐ西へと通じる位置となる。

『津市史』によると、岩田川と河口港の浚渫は、近世津藩によって順次なされている[10]。このことは、岩田川の浚渫が津藩にとって重要な事業であったことを物語る。

以上のことを総合すれば、現在の津市南丸之内付近以東の岩田川下流域は、近世津城および城下町形成に際して、北流して安濃川へと合流していたものを、東流する方向へと改変したものと考えるのが妥当と思われる。岩田川は、2条目の砂堆を自ら貫くほどの川ではないと評価するべきであり、砂堆の分断は人工的なものと考える。岩田川の旧流路として

は、今の津市東古河町付近から津城外堀付近の間と想定できる。

この推測を裏付けるものとして、「をとめのはし」がある。安濃川の河口との関連も含め、次に考えてみる。

をとめの橋と安濃川河口　応永31（1414）年に足利義持が伊勢参宮する。その時の記録である『室町殿伊勢参宮記』に次のようにある。

＜史料２＞

あのの津を過ゆくに橋あり、名をとへば、をとめのはしとなん申す[11]

前後の記述から、一行が安濃津の地を北上していることは確実である。すなわち、「をとめのはし」は、安濃津の北端に架かっていた橋と考えることができる。

この「をとめ」について、『津市史』では「乙部（現在の津市乙部地区）」であるとする説を単なる憶測として一蹴しているが[12]、前述までの地形的な状況を考慮すれば、をとめ＝乙部である可能性は極めて高い。ここでは、『室町殿伊勢参宮記』所収の記録は、安濃津の北端が現在の乙部地区であることを示すものとして認識する。

では、「をとめの橋」が架かっていた安濃津北端の状況はどうなのであろうか。表層地質図を見ると、津市中河原地区には砂質土壌の安定した堆積が認められるが、乙部地区の砂堆とは連続性が認められない。そして、この地区が「中河原」であることが注意される。このことから、中河原地区が三角州状を呈し、安濃川が南北に分流していたと考えることができる。北部の流路は、今の流路とほぼ重なろう。南は乙部地区北部を巡り、表層地質図からは今の岩田川河口付近に達すると考えることができる。

このことから、さらに次のように考えることができる。つまり、流路を人工的に改変された岩田川とは、かつての安濃川河口を利用したものであり、岩田川の流路変更に伴って、安濃川の流路埋立も行われていた可能性が高いのである。

c　藤方

次に、安濃津の南部にあたる「藤方」に注目する。現在の津市藤方地区に相当する。まず、二つの和歌を見てみよう。

＜史料３＞

むらさきのかひよるうらのふぢかたはなみのかかるぞはなとみえける[13]

＜史料４＞

いせのうみ浦風さえてふぢかたやあののしほがま雪ふりにけり[14]

史料３は、斎王であった良子内親王が、斎宮在任中の長久元（1040）年に催した貝合にかかる歌。「ふぢかた」、「なみのかかる」から、当時の藤方が、海辺の波寄せる場であったことが想定される。史料４は『夫木和歌抄』に掲載された寂念法師の歌である。『夫木和歌抄』は、延慶３（1310）年頃に成立している。「藤方」と「あののしほがま」との関連からも、藤方の地が海との関連が深かったことが想定される。

しかし、これだけでは、藤方のどの地が海と関係していたのかはわからない。そこで、そのことをより具体的に示すものとして、伊勢神宮の御厨が記された二つの史料を見ておこう。

＜史料５＞

一志郡　外宮焼出御厨五斗　外宮垂水御厨九斗
二宮藤方御厨鹽六荷

安東郡　安濃津御厨御贄六九十二月、在家別[15]

＜史料６＞

安濃郡

垂水御厨鹽九斗内　六月三斗九月三斗十二月三斗

焼出御厨鹽九斗内　六月三斗九月三斗十二月三斗

藤方御厨鹽六荷内　六月二荷九月二荷十二月二[16]

史料５は『神鳳鈔』。関連部分のみを抽出した。これは、応和元（1368）年から永和２（1376）年の間に作成されたと考えられており、それまでに作成されたいくつかの神領目録をもとに書き上げられたと考えられるものである。史料６は「外宮神領目録」。これは、権祢宜度会延経によって記された外宮領の一覧である。延元４（1339）年頃に成立したとされている。「垂水」とは現在の津市垂水で、

藤方の西方約500ｍ、焼出は、現在の津市藤方に「八木田」の字があり、それに比定されている。

この２史料から、垂水・焼出・藤方が、塩を納める御厨であったことがわかる。垂水は、現在では海岸まで１kmほど離れているが、この史料から、当時はこの地まで海が入り込んでいた可能性が高いと考えることができる。

そして、垂水・焼出・藤方が、史料５と６とでは所属する郡が異なっていることも注目される。これは、当地の郡境が不鮮明であったことの現れと素直に見れば、入海の存在によってそのような現象が引き起こされたと考えることができよう。

このことは、垂水地区と藤方地区とに挟まれた場所に「入江」、現在の高茶屋小森町の丘陵東部裾に「浜替」「南浜替」、さらに、雲出長常町の集落北部に「浜垣内」「浜出」などの字が見られることも傍証となる。

このように、藤方・垂水から雲出長常の間にかけての地には、かつて入海～藤潟～が存在していたことが想定されるに至った。では、この入海は、どの時期にまで存在していたのであろうか。そのことを間接的ながら示す史料を掲げる。

＜史料７＞

蘇原城江取懸付北口之面々致意見被相抱候由御存知候、面々儀付藤潟殿へも被成奉尽候、然は先年之儀ニ新右衛門城へ在陣仕各被申談心懸専一候由所候也、恐々謹言

正月廿八日　　兼（房兼）（花押）

佐藤殿[17]

永禄年間頃に北畠氏奉行人・房兼から、佐藤氏に宛てられた奉書である。「蘇原」は、今の一志郡三雲町曽原であり、一志郡東部の内容であることに間違いない。

この史料は、内容的は安濃津と何ら関係ないが、「藤潟殿」の字句に注意したい。藤方が、中世末期の段階においても「藤潟」とも呼ばれていたことを示しているのである。このことから、中世末期まで、この地が潟として存在していた可能性を推測することができる。

さらに、江戸時代、17世紀前半に作成された「正保国絵図」を見ても、藤方付近には入り海となっている表現がなされている。[18]

以上のことから、現在の藤方地区と垂水地区の南部には、安濃津が機能している中世の段階では入海が存在していたと考えることができよう。「藤方」とは、まさに「藤潟」なのであり、この地が「潟湖」であったことを示すと推測する。そして、中世以前に「カタ」表現されていることから、この地は海から閉ざされた環境ではなく、海水が入り込むような潟＝海と連続した環境下にあったことを示している。

潟湖を控えた港の代表例として、陸奥国十三湊（青森県市浦村）を挙げることができる。[19]十三湊は、安濃津と同じく海岸から二本目の砂堆上に形成された港町なのであり、岩木川の流れ込む十三湖に面している。同様な地形的環境は、伊勢では大淀や有滝などでも見られる。

d　明応の大地震と安濃津住人

明応の大地震は明応年間に起こった群発地震であったらしく、伊勢への最も大きな被害となったのが明応７（1498）年の地震であったという。

＜史料８＞

今度大地震ノ高潮ニ、大湊ニハ家千間餘、人五千人計流死ト云々、其外伊勢島間ニ、彼是一万人計モ流死也明応七年戊午八月廿二日ノ事也[20]

明応の大地震では、大湊も大きな被害を受けている。しかし、安濃津についての表現はなく、「伊勢島（志摩）間」の表現から、間接的に判るに過ぎない。しかし、今回の発掘調査成果から、中世後期の集落が16世紀まで継続していないことが確認されているので、これまで確証のなかった明応の震災における安濃津の壊滅が実際に確認できたものと考えられる。

明応の震災後、いくつかの日記によって、安濃津近郊の状況を知ることができる。そのうち、最も著名なのが大永２（1522）年に安濃津を訪れた連歌師・宗長の日記である『宗長手記』である。『宗長手記』には、それ以外にも興味深い記述がいくつかある。これまであまり具体的に分析されていないの

で、少し長くなるが引用する。

＜史料９＞

雲津川阿野の津のあなた、當國牟楯の境にて、里のかよひも絶たるやう也。あなたは関民部大輔、今は隠遁何似斎、こなたは多気より宮原七郎兵衛尉盛孝、あの丶津の八幡までいひあわせ、自身平尾の一宿まて山田を立、平尾の一宿のあした夜をこめて出。辰の刻より雨しきりにふりて、みわたりの舟渡り鹽たかくみち、風にあひて雲津川又洪水。乗物人おほくそへられをくりと丶けらる。此津十餘年以来荒野となりて、四五千軒の家堂跡のみ。浅茅蓬か杣、誠に鶏犬はみえす、鳴鴉たに稀なり。折りふし雨風たにおそろし。をくりの人は皆かへり、むかへの人は来たりあはすして、途をうしなひ方をたかへた丶すみ侍る程に、有知人き丶つけて、このあたりのあしかるを頼、窪田といふ所二里をくりと丶けつ。其夜中に関よりのむかへ、乗物以下具してたつね来りぬ。けふの無為こそ、ふしきにおほえ侍れ。

（中略１）

窪田の六太院より発句所望に、

す丶かやまいろ丶丶になるこ丶ろかな

この院の本尊観音の心にや、越前へ人つかはすにも、これよりあないしりたるものを坂本までそへのほさる。阿野の津を退たる里、鹽屋のやうなる蓬ふきに。何似よりをくらる。又の日は宮原盛孝よりむかへの人を待て逗留。この津の人々の懇望にて、連歌あり。

かへるよをまつやしらなみ秋の海

此里もとの津還住のあらまし事なるへし。此濱のゆふへ立出て、渺々たる遠近伊勢尾張の海つらくまもなく見えわたされ。

（中略２）

九月一日こ丶をたちて、をの丶丶もとの津のあたりまて酒もたせ、かたみに別おしみて、雲津川にいたりぬ。朝倉太郎左衛門教景の使の山伏たつねあひ、文ともみて、平尾の宿へともなひ、一宿のあしたに返事書て、（後略）[21]

大永２年８月16日から９月１日までの記録である。山田（伊勢市）を発った宗長は、平尾（松阪市町平尾町付近）、みわたり（三渡川）、雲津川（雲出川）を経て、安濃津へと至る。送ってきた多気（北畠氏）の宮原盛孝と別れた後、迎えの関民部大輔（関氏）からの使いと会えず、道に迷う。住人が聞きつけ、宗長を窪田（津市大里窪田町）まで送り届け、そこで関氏からの迎えの人と会う。中略１の間には、亀山逗留時の記録がある。亀山から、宗長は近江へと向かおうとする。しかし、近江路は合戦中の緊迫した状況下にあり、それが果たせず、山田へと戻ろうとする。次いで、窪田の六大院からの発句の願いを請け、また、関何似斎に送られて「阿野の津を退きたる里」に逗留し、ここの住人との饗宴がある（中略２の部分）。９月１日に、宗長は「阿野の津を退きたる里」を発ち、「もとの津のあたり」まで至り、雲出川に至っている。記述内容の概略は、以上のようなものである。

安濃津の八幡　まず、「あの丶津の八幡」の表記に注目する。当時の安濃津に「八幡」と呼ばれる場所のあったことがわかる。しかし、これだけでは八幡神社を示すのか、土地の名称なのかはわからない。そこで、宗長より35年後の弘治３（1557）年に伊勢を訪れた山科言継の記録を見てみる。

＜史料10＞

廿二日（弘治三年三月）丙子天晴　院家へ罷向、朝食相伴、次發足、人夫両人、乗馬等被申付之、阿野之津迄一里、佐野神六、木村将監来、二里又八幡、木森過雲出に到、是迄音部衆十人計送に来、馬以下返之、（後略）[22]

一身田専修寺を発った言継は、安濃津→八幡→木森→雲出と至っている。「木森」とは、現在の津市高茶屋小森町、雲出は現在の津市雲出島貫町字池田付近と考えられる。「八幡」とは、表記の方法からすれば地名であり、位置的には現在の津市八幡町付近と考えるのが妥当である。

このことから、『宗長手記』にある「あの丶津の八幡」とは、『言継卿記』の「八幡」と同じと考えることができる。しかし、ここから次のような問題が浮上する。すなわち、宗長の段階では安濃津と一体のものとして認識されていた「八幡」が、言継の段階では安濃津とは分離している、ということをどのように解釈するかである。これは、宗長から言継に至る35年の間に、安濃津の港町に何らかの変化

が生じている可能性を考えておきたい。想像をたくましくすれば、明応の大地震による被災からほどない宗長の段階と、稲本氏の指摘にもある『大湊文書』から推察される安濃津の復興時期[23]に近い言継の段階との相違と把握できる可能性があり、第Ⅱ章で触れた「津三郷」という惣郷的な結合とも多分に関わるものである可能性が高い。いずれにしても、現在の津市八幡町付近までは、中世安濃津港町の範囲として考慮しておくべきかと思われる。

なお、言継の記録にある「御料所くるま也」は、栗真庄のことと考えられる。栗真庄は、現在の津市栗真中山町・栗真町屋町から安芸郡河芸町にかけての荘園（禁裏御料所）であり[24]、言継の認識違いかと考えられる。

安濃津を退きたる里　もう一つ、『宗長手記』から読みとれる安濃津関連のことがある。それは、「阿野の津を退きたる里」（以下、「退きたる里」と呼称）が存在することである。この里が一体どこなのかは、直接的には何も記述されていない。矢田俊文氏は、津市津興地内の小幅な移動であると考えられているが[25]、今回の発掘調査結果を見る限り、16世紀代に連歌会を開催できるほどの復興を遂げていたとは考えにくい。

この史料から、幸い宗長の往還路を推定することができる。往路の道程として考えられるのは、平尾→雲出川→安濃津（八幡）→窪田→亀山であり、八幡→窪田の間に道に迷っている。宿は、平尾・窪田・亀山である。復路は、亀山→退きたる里→安濃津→雲出川→平尾であり、宿は、亀山・退きたる里・平尾である。

宗長の記述を見ると、「退きたる里」は海が近い場所である。この道程間で海が近い場所という点から候補として挙げられるのが、白塚（津市白塚町）と部田（津市栄町～上浜町）である。しかし、白塚はそれ自体が港町の様相を呈していた場であり、「退きたる里」の表現は妥当ではない。また、部田は砂堆上ではあるが、安濃津を退去した人々が安濃津に近いこの地にわざわざ住居を構えるということも少々考えにくい。

「退きたる里」の候補地として、この道程から考えられるもうひとつ場所は窪田である。復路中に「窪田の六太院」から発句が所望されているのも関連すると見ることもできる。しかし、窪田であるとするには解決しなければならない問題がある。宗長の記述にもあるように、「退きたる里」には浜があり、伊勢尾張の海が見渡せるような場所なのである。このような場所として、果たして窪田は認識可能であろうか。

窪田は、標高12ｍ程度の東西に派生する低丘陵上に位置し、北東部には志登茂川が流れ、現在標高４ｍ程度の水田地となっている。この地には、今も六大院が存在する。六大院には、かつて大きな松があり、近年までこの松を目印に舟が往還していたという[26]。現在の志登茂川は規模の小さい川で水量も多くないが、かつてはかなりの暴れ川で、流路が頻繁に変わっていたという。つまり、窪田北東部の水田地帯は、前述した藤方と相川との関係に近いような潟状を呈していた可能性が高いのである。このことは、先述の「正保国絵図」の記載方法からも類推することができる。

窪田の東方、今の津市栗真小川町の南端には「逆川神社」がある。「逆川」とは、まさに川が逆流することから付けられた名称と考えられ、志登茂川下流が潮の満ち引きによって海水が逆流するような環境下にあったことを物語る。

さらに、六大院と安濃津との関連もないわけではない。かつて安濃津に存在していた観音寺の後身である現在の津市大門にある観音寺は、塔頭７ヶ寺があり、そのうちの本坊である大宝院の前身が窪田の六大院なのである[27]。

以上のことから、宗長の記述中にある事柄は、窪田付近でかつて見られた環境とは矛盾しないといえる。また安濃津と窪田との関連も、観音寺と六大院との関係を通して推量することができる。連歌会を開催するだけの財力があった安濃津住人は、明応の震災以前から窪田の地に何らかの施設（別宅等）を有していたのか、あるいは観音寺と関連があった六大院の関与により、「退きたる里」を形成することができた、と考えることができるのではないか。推測の域を出ないが、可能性のひとつとして安濃津住人の窪田への移住を考えておく。

fig. 121　安濃津の景観復元（150,000）国土地理院 1:25,000「津西部」「津東部」「大仰」「松阪港」より

d　安濃津の都市範囲と港の位置について

以上のことから、中世安濃津の状況を筆者なりに復元してみよう。まず、安濃津付近に形成された砂堆は、現在では３～４条がある。中世の段階で今の海岸より海側にもう１条存在していた可能性を完全に否定することはできない。しかし、明応の震災以前に今の海中に砂堆があったとすると、安濃川以北にある白塚の海岸線との不連続性が問題となる。当然、白塚の海中にも砂堆を想定しなければならない。明応の震災以前に仮に砂堆が存在していたとしても、それは極めて小規模な、形成途上のものであったと考えざるを得ない。当然それは、集落を潮流から守ほどの効果が期待できないものである。

安濃津周辺にある三条の砂堆のうち、最も海岸寄りの一条については、目崎氏の指摘にもあるように、集落が形成されていたと考えることは困難である。同様な砂堆を利用した港町である十三湊遺跡でも、海岸となる砂堆上には集落は存在していない。したがって、二条目以西の砂堆を中心として港町が形成されていたと考える。港町安濃津の範囲としては、北端は津市乙部地区、南端は津市八幡町から米津地区にまで及んでいたと把握しておく。また、安濃川と岩田川は合流しており、その河口は現在の乙部の北部に存在していたものと想定される。

港町が形成されていた砂堆の南部には「藤潟」が存在していたものと考えられる。「藤潟」の北部は、安濃津の所在する砂堆を残しながら櫛歯状に入りくんでいたと考える。「藤潟」の南部は、現在の雲出本郷・雲出島貫・雲出池田町の北部集落地近くにまで及んでいたと考えられる。そして、伊勢湾側の東部は、雲出川が形成しつつある砂堆によって閉ざされ、潟へは現在の日本鋼管の北にある相川河口付近から進入が可能であったものと考えられる。

これらの環境から、安濃津の港（船着場）の位置はいくつかの候補地が想定できる。安濃津の港町への進入には、北部安濃川方面からと南部「藤潟」方面からの進入が可能である。

北部では、２箇所ほどが想定できる。まず、目崎氏の指摘された、かつて「湊田」と呼ばれた場所がある。この場所は、広義には乙部地区の西にあたる低地から、字湊中道南付近にまで拡大して考えておく必要がある。つぎに、乙部地区の西にある後背湿地である。状況によっては、ここにも船着場のあった可能性がある。

「藤潟」から進入する南部は、さらに多くの船着場が想定できる。まず、現在の八幡町の西方にある字入江は、「藤潟」の関連で考慮することができ、この最奥部が候補地となる。今回の調査地の南にある字馬池も、後背湿地状の場であり、船着場があったと想定される場所である。さらに、字八木田付近も後背湿地状となり、この場も可能性は高いであろう。字馬池付近の船着場については、調査区付近の地割の検討を含め、後述することとなろう。

このように、安濃津の港の位置は、いくつかの想定が可能である。あるいは、安濃津の規模が中世の伊勢で群を抜いていたとすれば、これらの停泊候補地全てが機能していた可能性をも考えてよいのかと思われる。

以上のことから、安濃津遺跡群については、fig. 121のように把握する。なお、現在の海中にもう１条の砂堆が形成されていた可能性も無くはないので、最も海岸部寄りの砂堆についても、一応遺跡群の範囲中に含めておく余地もある。しかし、この部分に集落の展開している可能性は、今のところ低いと考えている。

註

(1)　目崎茂和「「安濃津港」検証」（『津のほん』第29号　1989）
(2)　このあたりの江戸時代における考察については『津市史』第１巻（津市　1959）に詳しい。
(3)　『夫木和歌抄』13813　家長朝臣　（『新編国歌大観』第２巻　角川書店　1984）
(4)　林文理「「博多綱首」関係史料」（『福岡市博物館研究紀要』第４号　1994）、および稲本紀昭『日本三津に関する史料の研究』（津市　1989）
(5)　註（2）文献
(6)　註(２)文献
(7)　矢田俊文「明応地震と港湾都市」（『日本史研究』412　1996）
(8)　前川明男氏の御教示による
(9)　『三國地誌』巻之三十二伊勢國安濃郡神祠河松神祠の項（上野市古文献刊行会復刻　1987）
(10)　『津市史』第三巻　（1961）
『室町殿伊勢参宮記』（『大神宮叢書神宮参拝記大成』所収神宮司庁　1976）
(12)　『津市史』第一巻（1959）p 12
(13)　『斎宮貝合』（『新編国歌大観』第五巻　角川書店　1987）
(14)　『夫木和歌抄』11726　寂念法師（註(３)文献に同じ）

⑮ 『神鳳鈔』（『群書類従』第 輯）
⑯ 「外宮神領目録」（『続々群書類従』第 国書刊行会）
⑰ 『佐藤文書』（石水博物館所蔵）
⑱ 鎮国守国神社蔵、三重県『三重県史』別編 絵図・地図（1994）所収資料に拠った。
⑲ 千田嘉博・小島道裕ほか「青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第64集 1995）
⑳ 『内宮子良館記』（『続群書類従』第 輯下）
㉑ 『宗長手記』大永二年8月～9月の条（『群書類従』第 八輯）
㉒ 『言継卿記』第三（国書刊行会 1914）
㉓ 稲本氏註⑷文献
㉔ 稲本紀昭「栗真庄について」（『三重大学教育学部研究紀要』第33巻 人文科学 1982）
㉕ 矢田氏註(7)文献
㉖ 穂積裕昌氏の聞き取りによる。
㉗ 『三重県の地名』p 370「観音寺」の項（平凡社 1983）

2　陶器類から見た安濃津の物資集積と拡散

安濃津遺跡群から出土した遺物のなかで、とくに注目しておきたいのが中世前期の溝SD176から出土した尾張産の陶器類（山茶椀類）である。安濃津における物資の集積と拡散という問題を、この土器類から探ってみよう。

a　未使用陶器と物資集積

未使用陶器　　SD176からは、tab.17・18に示したような土器が出土している。尾張産陶器の椀（山茶椀）については、口縁部計測[1]では118点、重量による計算[2]では135点の個体数が復元できる。破損した土器が相当量含まれていることを鑑みれば、椀の総数は実質は200点を越えているものと推察される。時期的には藤澤良祐氏による山茶椀編年の第6型式から第7型式[3]にかけてのもので、概ね13世紀中葉頃に比定されている。

これらは2次的な火を受けているものが含まれており、火災を受けて廃棄された可能性が高い。そして、陶器類は多くが破損しているが、使用痕のあるものは陶器小皿では3点、陶器椀では5点、陶器練鉢では5点と、圧倒的に未使用のものが多い。中には、焼成時に破損したとしか考えられないような亀裂のあるものまで含まれている。

また、破片資料ではあるが、fig．45－61は、底部内面に焼成前に記したと考えられるヘラ記号がある。このような資料は、窯跡を発掘すればいくつか確認できるが、生産地から離れた地での出土は極めて稀である[4]。

さらに興味深いことがある。これらの陶器椀類は、生産元の窯では十数個を重ねて焼成されるもので、その際、上に重なった椀の高台が剥がれ、下にあった椀の内面に付着する場合がある。今回の調査では、このような高台が内面に貼り付いたままの状態で出土したものがある。そして、この剥がれて貼り付いた高台は、指に力を込めれば難なく剥がせることができる程度のものである（pho.12）。

以上のことは、これらの陶器椀類が生産地で選別され、完成品として出荷されたのではなく、生産地では何の調整もされず～重ね焼きをした窯詰め状態のまま～まさに十把一絡の状態で安濃津へと運ばれてきたことを示している。このような資料が確認さ

pho.12　陶器椀内面に残った重ね焼き時の高台

種　類	産地等	器種	口縁部残	比率（%）	
土師器	南伊勢	小皿	482	13.06	39.56
	南伊勢	皿	972	26.34	
	中北勢	皿	6	0.16	
陶　器	尾　張	小皿	63	1.71	39.79
	尾　張	椀	1405	38.08	
	尾　張	練鉢	71	1.93	1.93
	尾　張	壺	3	0.08	0.08
土師器	南伊勢	鍋	686	18.59	18.64
	南伊勢	羽釜	2	0.05	
総　計			3690	100.00	100.00

※「口縁部残」は口縁の1/12を1として集計　高田恵里子作成

tab.17　SD176出土土器構成（口縁部計測）

種　類	産地等	器種	破片数	比率（%）	
土師器	南伊勢	小皿	289	4.13	17.57
	南伊勢	皿	935	13.37	
	中北勢	皿	5	0.07	
陶　器	尾　張	小皿	13	0.18	17.04
	尾　張	椀	1179	16.86	
	尾　張	練鉢	91	1.31	1.31
	尾　張	小壺	1	0.02	0.02
	尾　張	壺	2	0.03	0.06
	信　楽	壺	2	0.03	
	知　多	甕	8	0.11	0.11
土師器	南伊勢	鍋	4463	63.83	63.89
	南伊勢	羽釜	4	0.06	
総　計			6992	100.00	100.00

tab.18　SD176出土土器構成（破片数）　高田恵里子作成

れたことから、安濃津では、商品としての椀の選別や調整がなされていたと考えることが可能である。そしてそれは、安濃津には陶器の二次的集積者＝卸問屋的な集団が存在していたことを示していると把握されるのである。

伴出する土師器　この遺構出土土器に見られるその他の興味深い傾向として、土師器類のあり方がある。出土した土師器のほとんどが南伊勢系土師器で、中北勢系のものは小片が数点あるのみであった。中世前期の土師器類は、この遺構のみならず、包含層中から出土したものについても、南伊勢系のものがほとんどで、中北勢系のものはまず見られない。

SD176と時期的に並行する近隣の遺跡として、川北城跡がある。陶器椀類では、藤澤編年の第5型式から第7型式のものが認められるＳＤ７から出土している土師器皿類は、中北勢系のものが主体で、南伊勢系の皿は極めて少量である[5]。時期的にはやや古いが、安濃津の南方にある宮間戸遺跡[11]からも、南伊勢系とは異なる土師器の一群を見ることができる。このことは、当該時期における安濃津の土師器が、近隣の遺跡とは異なり、南伊勢方面からの供給によっていることを示す。南伊勢系土師器の分布傾向[7]を考慮すれば、安濃津が神宮領であることと無縁とは思えない現象である。

b　物資の集積・拡散の媒体

SD176から出土した尾張産陶器類のなかで、もうひとつ注目しておきたいのが、墨書土器である（fig．122）。ここから出土した墨書土器は、少なくとも4点あるが、ある程度判読できるのは図示した1のみである。

墨書の書かれた場所　まず、この墨書がどの時点で書かれたものかを考える。考えられるのは、ａ；尾張からの出荷時に書かれた、ｂ；安濃津からの出荷時に書かれた、ｃ；安濃津で使用するために書かれた、の大きく3者に区分できる。

まず、これらの墨書土器は、前述のように未使用製品である。ｃとすれば、製品としての使用が大前提となるが、fig．45−66・67ともに、焼成時の歪みや小石の抜け落ちなどによって、まず液体の使用には耐えない。したがって、ｃではないと考えられる。ｂにしても、再出荷時のマークと考えれば、使用に耐えないものにも書かれる可能性はあるが、それでは安濃津以外の場所でも再選別が必要ということになる。未使用土器が出土土器の主体であることを評価すれば、ａの出荷時に書かれたものと考えるべきであろう。

書かれた文字と派生する問題　次に記載内容である。66は底部外面に2文字分書かれている。上の文字は「丁」でよいであろう。「丁」については、安濃津の神人が「漕丁部」と呼ばれており[8]、「丁」の一字で「よぼろ」と読むこともある。したがって、「よぼろの某」と読める可能性もある。下の文字をどう読むかについては、3つの案がある。

ひとつめの案は、「問」で、「丁問」と記されたという考えである。「問」は「問丸」に通じるものと想定でき、「よぼろの問」、あるいは、「丁」という集団の問である可能性が考えられる。「丁問」と読んだ場合、安濃津には陶器の流通に携わった運送業者の存在を想定できるのである。

二つめの案は「阿」である。つまり「丁阿」と記されたという考えである。

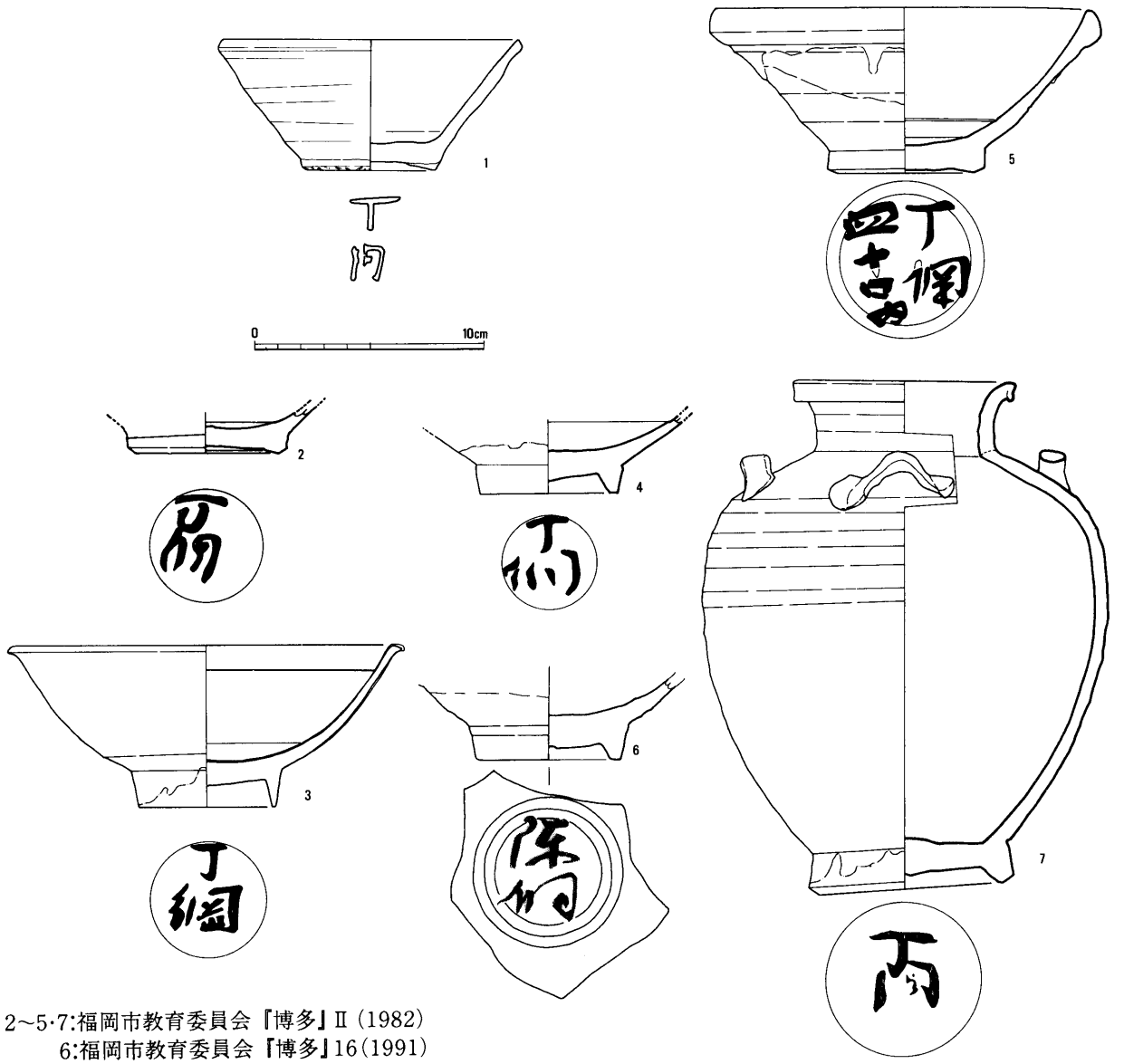
「丁阿」とすれば、まず思い浮かぶのが「丁阿弥陀仏」の略で、僧侶、とくに勧進聖の名ではないかと考えられる。鎌倉新仏教と港町との関連は、近年盛んに指摘されているところである[9]。とくに、「無縁所」をその中心とする時宗系集団の港町との関連は強いようで、彼らの存続にかかる財的基盤が勧進、あるいは金融であるとするならば、安濃津において物資集積と拡散に携わっていた可能性は充分考慮されねばならないであろう。

時期的には少し新しくなるが、大土坑ＳK276からは「念佛衆生」の墨書を持つ蔵骨器蓋（623、瀬戸産陶器練鉢）が出土している。また、『耕雲紀行』には、著者の花山院長親が安濃津の「念仏の導場」に宿泊している[10]。15世紀初頭の段階とはいえ、公家が安濃津での宿泊場としてこのような場を選ぶということは、神宮のみならず、安濃津と鎌倉新仏教集団との関連も極めて深いことを示すものに他ならない。したがって、この墨書が「丁阿」であることに、何ら不自然なものはなく、物資流通媒体としての新仏教集団を再評価することができるのである。

三つめの案は「綱」である。fig．122には福岡県福岡市の博多遺跡群出土陶磁器に見られる墨書を示した。博多遺跡群出土の12世紀代を中心とした貿易陶磁には、様々な興味深い墨書が見られるのであるが[11]、図示したものの二文字目は全て「綱」と判読されているものである。くずし字のそれと安濃津出土の墨書土器とは、よく類似しているように見える。

博多遺跡群からは「一綱」と書かれた墨書土器が多数出土している。当時の博多には「綱首」と呼ばれる中国人船団長が存在しており、「一綱」はこれに関するものと考えるのが妥当であろう。この解釈については、所有者個人を指す、販売権者を指す、綱という集団の所有者を指す、などの様々な解釈が存在している[12]。博多では、「丁綱　四十口内」という墨書土器がある。また、一定の場所から「一綱」の墨書のあるものばかりが出土するわけではない。このことから、「一綱」の墨書が、流通の最終段階で消費者によって書かれた、つまり、所有を示すもの、と考えるよりは、中国から出荷される段階で書かれたものと考えておくのが妥当であろう。

さて、安濃津から出土した墨書が「丁綱」であり、上記の博多遺跡群との類似によって中国との関連を想定した場合[13]、いくつかの重要な問題と論点が生まれる。その問題は、安濃津と中国人商人との関連という問題と、この墨書が中国陶磁器ではなく、国産で狭い地域に流通する陶器に書かれているという問題の2点に集約されよう。



2～5･7:福岡市教育委員会『博多』Ⅱ(1982)
6:福岡市教育委員会『博多』16(1991)

fig．122　安濃津・博多出土の墨書土器（1：安濃津、2～7：博多）(1:3)

まずは、安濃津と中国との関連である。ここで想起されるのが、中国側の16世紀末～17世紀前葉の史料である『日本風土記』や『武備志』[14]などに記載されている「三津」関連記事である。記事の内容はとにかくとして、安濃津が中国側にも認識されていた港であるという事実は疑うまでもない。では、なぜそうなのかを考えれば、この墨書から想定される中国人商人と安濃津との関与がその理由のひとつと考えることができる。墨書が「丁綱」ではなかったとしても、中国商人と安濃津とが密接に結びついていたと考えることは、何ら違和感はないのである。

つぎに、中国商人と国産陶器類との関係である。一見、両者の関連は見出し難いように思われる。しかし、国産陶器類も海運によって流通していたこと、そして、鎌倉時代以降における為替の発達を考慮すれば、両者が全く無縁な存在ではないことが想定できるのである。

中世前期に常滑産陶器が、瀬戸内から九州までの西日本各地に広く流通していた、という事実がある[15]。この点に関しては、これまで中世前期以前における海運が想像以上に活発であったことを示すものとして注意されていたが、その理由については今のところあまり言及されていない。ただ、この背景には、安濃津など伊勢湾沿岸部の港が媒介となって九州方面との交易がなされていたことは明らかである。その媒介主体のひとつに、「綱首」などの九州と直接関係した存在を考えることによって、より具体的なあり方を追求できる可能性がある。これは、前述の墨書を「丁阿」と読んだ際に想定した仏教系集団を媒介と考えても同様である。

以上のような想定が妥当であるとするならば、中国商人が、中国からの貿易品の流通にとどまらず、国産陶器流通の中継という、国内地域間の貿易にも関与していた可能性を生み出すことにもなる。村井章介氏は、詳細な研究結果により、列島における国際貿易の主な担い手は中国商人であった可能性を指摘されている[16]。そうすると、列島太平洋側における海路の困難性と相俟って、中世国内流通における中国商人の介在を考慮する余地も、充分に残されていよう。

安濃津出土の墨書土器について、「丁問」「丁阿」あるいは「丁綱」と読める可能性を指摘し、それぞれの場合に想定できることを述べてきた。今の段階では、いずれの判読が正しいのかは断定はできないが、いずれの読み方にしても、安濃津における中継商人的なものの存在は指摘でき、その重要な機能が考えられるのである。

c　物資流通における安濃津の機能について

以上、安濃津における中世前期の尾張産陶器類を検討してきた。このことによって、物流および安濃津の機能についていくつかの視点および論点を提示することができる。

まず、物資流通における港の存在意義を、改めて評価することができるようになったと考える。これまでに考古学的に提示されてきた商品の流れは、生産→消費という流れである。そこには、港の介在は認識されてはいたものの、港の主体性はあまり論点とはならなかった。誤解を恐れずに言えば、生産者あるいは消費者の意志こそ加味されるものの、その流れを中継・媒介するものの意志はあまり意識されていなかったように思われる。

しかし、今回提示できた資料によって、生産者と消費者とを媒介する存在は、物流を考える上でも無視できるものではないことが示されよう。

さて、物資集積地としての評価が可能な遺跡は生産地付近にも存在していることが判明している。知多半島の東側、愛知県武豊町・ウスガイト遺跡からは、近隣の陶器窯から運ばれてきたと考えられる未使用の陶器類が数多く出土しており、集積地としての機能を果たしていたものと評価できる[17]。ウスガイト遺跡のような場を第1次集積地とし、その後、安濃津などの大規模港への搬出が想定される。ここからも、生産者と消費者との間に中継者の存在を窺うことができる。

安濃津やウスガイト遺跡の例からは、物資の流れとして、

生産→集積・選別→拡散→消費

というあり方が提示できる。

このように、中継・集積者の存在が明らかになってくると、物資の拡散主体が、生産者ー工人側ではなく、中継者ー港町側にあったことを極めて強く示

唆することになる。ここに安濃津が位置づけられることは、非常に重要である。つまり安濃津は、物資流通の単なる中継地ではなく、物資の結節点であり、さらに、物流そのものを左右する場であった～どのような物資を流通するのかは中継者側に委ねられていた～という評価ができることになる。

つぎに、このような物流における港・港町の存在を評価することによって、中世物流の多面的なあり方の一側面を類推することが可能になると考える。原則的には荘園体制下にあった当時における物流は、貢納品の流通という側面を一方で持つが、これ以外にも領域の枠を越えて流通する国産土器類などの存在がある。後者の評価について、中国商人、あるいは鎌倉新仏教集団といった荘園体制下に収まりきらない存在が、港という媒介地を有することによって機能していた可能性を提示することができよう。

このように見てくると、安濃津の機能を、単なる所属地域（安濃郡）物資の中継地流通という視点のみで推し量ることは、安濃津の評価として妥当ではないことはもはや明らかである。尾張で生産された陶器類が、量的な多寡こそあれ全国的に拡散しているという状況を考慮すれば、安濃津を経由して拡散する商品は、伊勢に対する物資だけでなく、伊勢湾沿岸部、さらには太平洋を介在して拡散する物資までも含まれていた可能性を充分考えることができる。

つまり安濃津は、伊勢湾沿岸部、さらには広く日本列島における物資流通の集積・拡散拠点地として考察しなければならない対象といえよう。

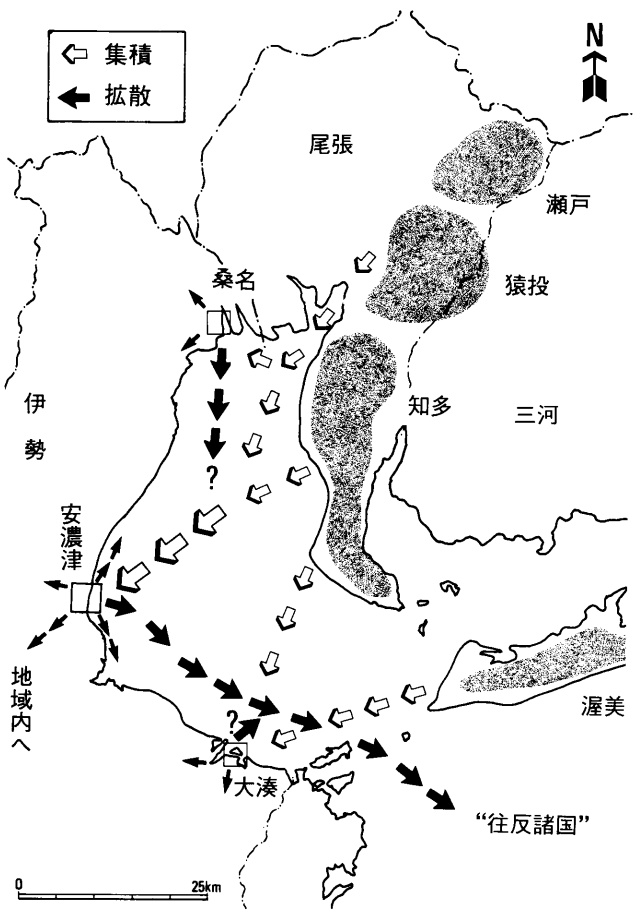


fig. 123　港を介在した陶器の流れ（想定図）

註

(1) 口縁部の1/12を1として換算する方法による。ただし、この方法では体部片しか出土していないものについては、数字として現れないという難点がある。

(2) 総重量を分子に、完形品の平均値を分母として求めた数字。SD176の場合、陶器椀の出土総重量は36,614 gで、完形品もしくはそれに準じる椀の重量平均値は272.7 gであった。この方法も、完形品として見た場合の数値となるため、破損品については考慮できないという難点がある。

(3) 藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」(『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990）ほか

(4) 奥川弘成「知多半島の古窯と集落－知多郡武豊町ウスガイト遺跡から見渡すー」(『考古学ジャーナル』396　1995）

(5) 萱室康光ほか『川北城跡発掘調査概報』第1次調査（津市教育委員会　1981）

(6) 中村信裕「宮間戸遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1983）

(7) 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『研究紀要』第1号　三重県埋蔵文化財センター　1992）

(8) 「安東郡専当沙汰文」(『神宮神領記』）元徳元（1329）年～正慶元（1332）年頃成立、稲本紀昭『日本三津に関する史料の研究』(津市　1989）所収

(9) 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』『続・日本の歴史をよみなおす』(1991・1996　筑摩書房）など

(10) 『耕雲紀行』(『大神宮叢書神宮参拝記大成』神宮司庁　1976）

(11) 博多研究会編『博多遺跡群出土墨書資料集成』(1996）

(12) 佐伯弘次「陶磁器に記された文字」(『よみがえる中世』1東アジアの国際都市博多　平凡社　1988）

(13) 日本にも、「綱丁」という海運業者の存在があり、それとの関連も当然考慮する必要がある（大石直正「平安時代後期の徴税機構と荘園制」(『東北学院大学論集』歴史学・地理学1 1970）]。しかし、この点を考察する時間が残念ながら今はなく、今後の課題として明記する。

(14) 林文理「「博多綱首」関係史料」(『福岡市博物館研究紀要』第4号　1994)、および稲本氏註(7)文献

(15) 永原慶二編『常滑焼と中世社会』(小学館　1995）において、その実態がかなり鮮明にされた。

(16) 村井章介「中世における東アジア諸地域との交通」(『日本の社会史』第1巻　1987）

(17) 奥川氏註(4)文献

3　安濃津都市空間の変遷

当章第1項において、安濃津港町の範囲を考察してみた。ここでは、調査区周辺の状況について、より具体的に考えてみたいと思う。

ここで考察の対象とするのは、発掘調査によって確認できた遺構の配置と、周辺部の土地利用から推察される微視的な空間構造である。当章第1項と同じく、地名と地形を中心に考察し、地籍図を利用することによって考えてみる。

a　発掘で確認された遺構の推移

発掘調査で確認された遺構は、大別すると、13世紀・15世紀・18世紀以降、の3時期に大きく区分できる。掘立柱建物については明確に確認できたものが少ないため、区画の方向を示すと考えられる溝を中心に推移を見る。おおよその区画をfig.124に示している。

13世紀の区画

13世紀では、溝SD176とそれに関連すると考えられる溝SD310・SZ190などによって、おおよその区画が推察できる。SD176は弧状を呈するもので、検出した範囲の中央部では概ねＮ４５°Ｅの方向に走っている。今回の調査では、掘立柱建物は明確にできなかったが、この時期のみの遺物を含むピットも見られることから、いくつかの掘立柱建物が存在していたことは確実である。概ねこの溝の方向に沿った建物群があったものと考えられる。

15世紀の区画

多くの遺構が確認されている時期である。区画の方向は、区画溝と考えられる溝SD1・170・224・265・243・254・255などのほか、溝SD304・307・313などによって推察できる。溝SD1・170については、概ねＮ７°Ｅの方向であり、13世紀の区画方向とは大きく異なっていることが明白である。SD1からSD170の西は細長い空間が存在していたものと考えられ、通路に相当すると考えられる。また、SD254・255とSD243・265の間、SD307とSD313の間も同様に通路と考えられる。

確認された掘立柱建物は、SB347・348・349など、東西に細長い建物が中心である。15世紀代と考えられる掘立柱建物の確認例は伊勢ではあまりないが、同じ安濃川水系である津市南所遺跡Ｄ４地区で確認された掘立柱建物[1]は総柱建物を中心としており、中世前期と同様、通常の民家では基本的にはこのような形態が主流と考えられる。今回の発掘調査で確認できた掘立柱建物の形態は、後に短冊形地割の登場する町屋における家屋の形態を示すものとして、とりあえず把握しておく。

この他に、地割を知る手がかりとなるのが大土坑と井戸である。まず、大土坑の位置を見ると、ＳＺ60･73の一群やSK229･230などの一群が、区画溝に沿うか接して構築されていることが分かる。このような大土坑は、大きさから見ても敷地の中央部に穿つようなもおのとは考えにくく、おそらくは敷地の外縁部に設置されたものと考えてよいであろう。また、近接した一群は、1区画における掘り直しによるものと考えることができる。このように見ると、複数が近接あるいは重なっている一群と、単独で存在しているものとがあるといえる。

つぎに、井戸の位置を見ると、やはり近接して構築されている一群と単独で存在するものとがある。井戸についても、区画の中に含まれると考えられるので、区画を想定する要素のひとつとなる。

以上のように、大土坑と井戸の位置から、区画溝で囲まれた部分のおおよその区割りが推測できる可能性がある。ただし、大土坑・井戸ともに、当該時期には共同であった可能性も高い[2]。区画のあり方は、今回の調査区では溝で推測するほかなく、これらの組み合わせについては今後の課題である。

18世紀以降の区画

18世紀以降の区画については、遺構検出面が低かったこともあって、あまり良好な資料は少ない。そのなかにあって、近世遺構面の検出を当初から意図して行ったｉライン以南で確認された溝SD143･144によって、この時期の区画の方向は概ね知ることができる。溝SD143は、Ｎ７°Ｅ方向に走る。この溝は、15世紀の区画溝SD170と、位置も方向もほぼ一致する。

井戸は合計22基確認され、区画を知る手がかり

になると思われるが、上述のような検出面であったため、残念ながら明確にできない。

区画方向の推移

以上のことから、安濃津における区画については13世紀と15世紀の間に大きな画期を認めることができるとともに、15世紀と18世紀ではあまり大きな隔たりがないといえる。この結果、以下のような検討課題ないしは問題を指摘することができる。

まず、中世における土地区画の変化である。今回の調査区内に限るべきかもしれないが、14世紀という空白の時期を経て、その区画（都市区画）は大きく変貌していることが指摘できる。中世の安濃津を、必ずしも一律には評価できないことを示すものといえよう。

つぎに、15世紀と18世紀の区画に見る共通性の問題である。安濃津の港町は、15世紀末に発生した明応の地震災害によって、あるいは陥没したとされ、あるいは津波災害を受けたとされる[13]。いずれにしても、この時期は安濃津にとって大きな画期と評価される。しかし、土地の区画については、地震災害後もほとんど変わることなく継続していたことを、今回の調査結果は示している。このことは、以下のことを示唆する。

まず、安濃津における土地区画の最も大きな画期とは、地震災害によるものではなく、14世紀あるいは15世紀段階における区画によるものである、と評価できる。区画の点からいえば、中世から近世の画期以上に、中世前期と後期との間に大きな変換点の存在することを意味しよう。

つぎに、15世紀と18世紀の区画の共通性は、15世紀における土地区画のあり方を、地籍図によって推察することが可能であることを意味する。この点について、改めて考えてみる。

b　地籍図にみる調査区周辺の状況

調査区周辺に見られる地割を、当地が津興村であった時期（1886年以前）に作成された地籍図を基に考えてみる。

調査区周辺の状況

地籍図に、今回の調査区に相当する箇所を入れたのがfig．125である。地籍図であるため、若干の

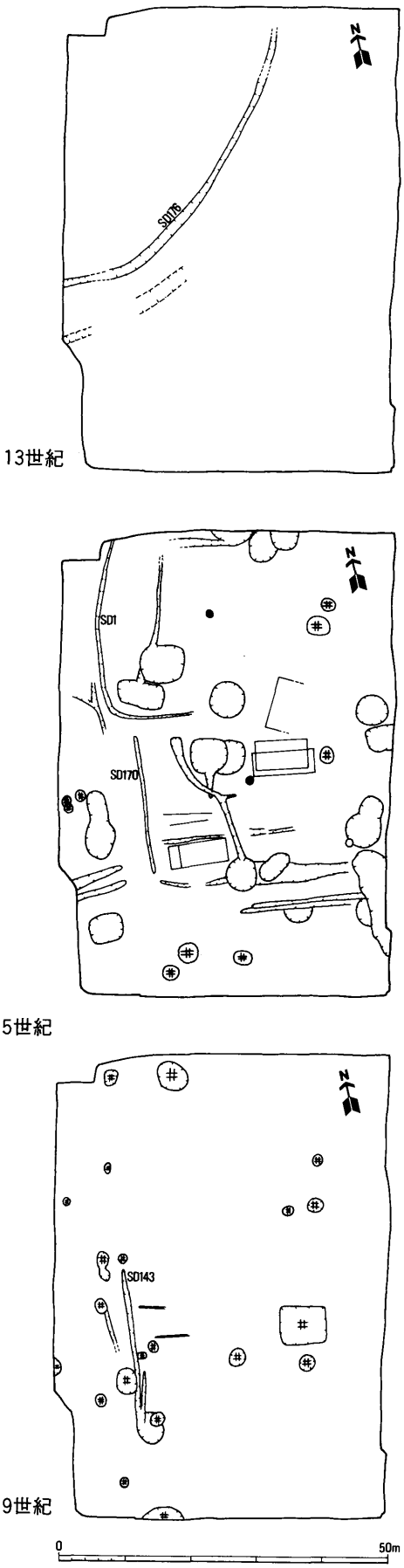
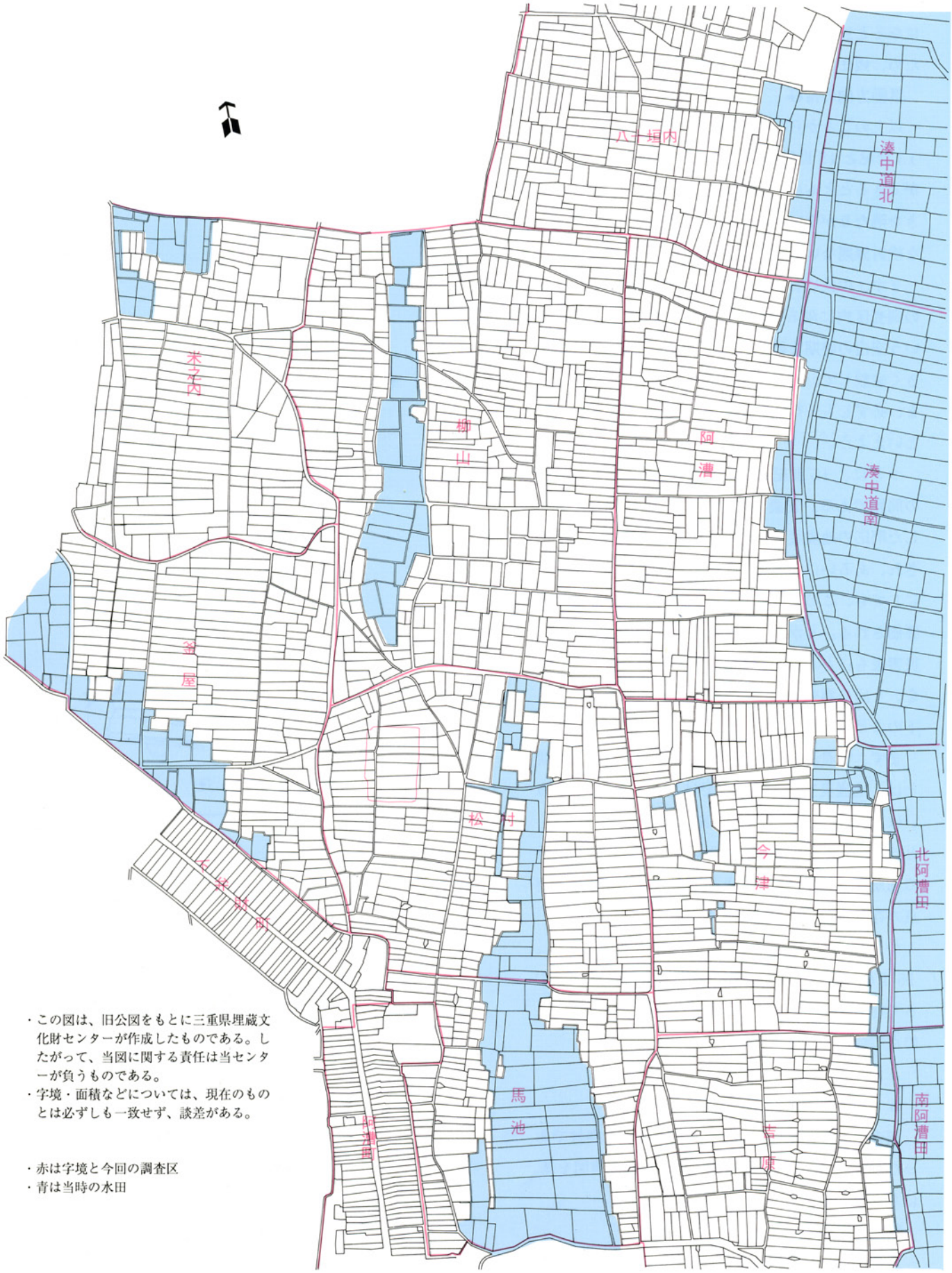


fig. 124　時期別主要遺構（1:1,000）「井」は井戸



・この図は、旧公図をもとに三重県埋蔵文化財センターが作成したものである。したがって、当図に関する責任は当センターが負うものである。
・字境・面積などについては、現在のものとは必ずしも一致せず、誤差がある。

・赤は字境と今回の調査区
・青は当時の水田

fig. 125 調査区周辺旧地籍図（明治後期頃）および1:5,000

微動は伴うであろうが、南北方向に走る道が、今回確認された近世の溝SD143や15世紀の溝SD1・170が設定されている場所に相当するようである。つまり、前述した15世紀・18世紀の地割に見られた状況は、地籍図の作製された19世紀代にまで踏襲されていた、と考えることができ、ひいては地籍図の検討によって中世後期までの安濃津の環境がある程度類推可能であることを意味する。

そのことを踏まえて、地籍図を見よう。調査区周辺には、短冊形に区画された地割が南北に広がっていることもわかる。短冊形地割は、都市的な様相を示す有力な手がかりとして重視されている[14]。さらに、調査区付近の旧津興村字松村1,266番地からは、大正13（1922)年に埋蔵蓄銭が出土している。このようなことから、今回の調査区付近が中世の当時、安濃津港町の町屋の一角として存在していたと考えて、まず間違いない。

短冊形地割は、東側の水田を挟み、その東側にも認めることができる。ここには南北に貫く道路があり、いわば“メイン・ストリート”であったのであろう。この短冊形地割は、字柳山地内の北部ではかなり複雑になっている。この付近には「観音堂」などの地名が認められる場所である[15]。この地の検討は、今後詳細に行う必要があるが、とりあえず、この部分に寺院・大規模な屋敷などの中核的な施設が存在していた可能性があると考えておきたい。

寺院については、今回の調査区付近にも存在する可能性がある。調査区内からも中世に相当する時期の瓦や人骨が認められた。人骨は、調査区東部の大土坑中に多く見られる。また、地元での聞き取りによると、調査区の東部にある「国民金融公庫柳山ハイム」の造成時に、多くの人骨が出土したという。今回の調査区からは、「念佛衆生」と書かれた蔵骨器練鉢（fig．66－623）や、梵字らしきものが墨書された、やはり蔵骨器と考えられる陶器練鉢（fig．64－597）などが、人骨の集中する調査区東部から出土しているため、この付近に中世墓群の存在していたことは間違いない。しかし調査区の東部は、地籍図には寺院跡を示すような明確な地割は認められない。調査区の近隣に存在していたのが単独の中世墓群のみなのか、寺院と墓域であったのかは、今後の課題である。

つぎに、安濃津の港町としての調査区周辺の環境を考えるために、調査区付近の土地利用に注目する。fig.125の水田部を見てみよう。調査区付近の水田部は、調査区の北部と東部に見られ、いずれも南北方向に細長く延びている。調査区東部のものは、調査区の東約100ｍほどで北限となり、南部ほど広がっている。この部分は、当章第1項でも触れた船着場の候補地である字馬池の部分に相当する。つまり、調査区の所在する字松村に南接する字馬池は、「馬池」と呼ばれていた後背湿地で「藤潟」の一部なのであり、その北端は今回の調査区のすぐ東にまで延びていると評価できる。

このことを踏まえて、改めて「馬池」北端を見てみたい。水田部が、畑地に入り組んだような状況になっていることが観察される。「馬池」が砂堆形成時の後背湿地であるという環境を考慮するしてもこの入り組みは複雑で、人為的な改変が伴った結果であると見るのが妥当である。

このことから、「馬池」北端に見られる地割とは、「馬池」を進入する小型船舶が最終的に到達する船着場の遺構である可能性が出てくる。しかし、「馬池」のような細長い後背湿地の場合、ここへはかなりの土砂が流入するものと考えられる。現実に、ここへ船舶の引き込みは可能であろうか。

「馬池」北端部の状況は、かなり人為的に改変された地形であると考えた。つまり、この場所は自然の後背湿地を利用しながらも、頻繁な浚渫が必要であった可能性が高い。このことは、安濃津の港が天然の地形を利用しながらも、かなり人工的な造作を伴った港であったことを示すものと考える[17]。

そもそも安濃津港町が乗る砂堆は、今回の調査によっても明らかなように、古墳時代前期以前には安定して存在していた場なのであるから、潟湖が後背湿地へと変化していくのは自然のことである。にもかかわらず、港町として機能していくためには、何らかの人為的な環境整備が必要であったものと思われる。少し性格は異なるかも知れないが、京都府鳥羽離宮跡昭和４７年度調査で確認された、鳥羽離宮成立以前と考えられている船着場跡も、人為的な石積が良好に認められている[18]。このことから、船着

場＝船舶の最終定着地を整備するという意識は、平安時代以降には確実に見られると考えてよいのではないか。

以上のことから、「馬池」は小型船舶導入路としての機能を充分に果たし得る場所として認識する。したがって、今回の調査区とはまさに船着場を間近に控えた地であるといえ、当章第２項で検討した陶器集積地としての機能は、このような環境のもとで形成されている、と評価することができよう。

地籍図を基にした検討は、時間的な制約から、ここでは以上に止める。ここでの検討を見ても、安濃津の景観を考えるうえでの地籍図の持つ重要性は充分に認識できる。今後、地籍図による検討を踏まえたうえでの調査が重要であり、その作業を進めることによって安濃津の景観はより具体的になることは間違いない。ただし、言うまでもないことであるが、地籍図とはその作成時期の土地区画を表すものでこそあれ、それがそのまま中世まで遡るものでない。考古学的な観察結果という根拠のもとに援用していきたい。

註

(1) 伊藤裕偉ほか「大里地区内遺跡群」(『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊　1992)

(2) 一乗谷朝倉氏遺跡において、共同井戸のあり方が具体的に検出されている。小野正敏「越前一乗谷の町割と若干の問題」(『日本海地域史研究』第三輯　文献出版　1981)

(3) このことについては『津のほん』第29号(津のほんの会　1989)に詳しい。

(4) 前川要『都市考古学の研究』(柏書房　1991)や、千田嘉博・小島道裕・前川要『城館調査ハンドブック』(新人物往来社　1993)など

(5) 伊藤裕偉「三重県下の埋蔵銭－中世を中心として－」(『摂河泉文化資料』第44号　1995)

(6) 史談會編輯部「安濃津歴史読本(承前)」(『安濃津郷土史会誌』第11号　1940)

(7) ここで考慮しておきたいのが、明応の震災によって安濃津・大湊ともに壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず、大湊のみがその後完全に復興しているという点である。両者の差は、人工的な港であったのか、天然の良港であったのかの差ではなかろうか。安濃津は勿論自然の地形を基礎としている。しかし、「藤潟」は、次第に埋まりつつある潟であることには違いなく、その自然条件との闘いのなかで安濃津の機能は持続させられていたと考えている。

(8) 杉山信三ほか『京都市埋蔵文化財年次報告　1972』(京都市文化観光局文化財保護課　1973)

4　中世後期の土器類について

今回の調査区から出土した土器類は、その過半数が中世後期の土器に相当する。しかし、中世後期を通じて安定して出土しているのではなく、南伊勢系土師器の鍋では第4型式a～c型式、古瀬戸では、藤澤良祐氏の編年[1]による後Ⅳ期に集中する。一括資料としては、土坑ＳＫ192や土坑ＳＫ209など、良好なものが存在するが、今回の資料によって土器編年を行うのは、時間的な制約もあり、ここでは困難である。

以上のことから、ここでは、中北勢系土師器群の問題、土器製作技法上の問題、中北勢系羽釜の使用方法について見ておき、今後の検討に備えることとしたい。

a　出土中世土器の上限と安濃津の被災について

これまでに何度か触れてきたように、安濃津の港町は、明応7(1498)年に発生した大地震によって壊滅した、とされている。では、今回の出土資料は、この被災時期との関連が見出せるであろうか。

今回の中世に相当する出土土器群は、当項の冒頭でも触れたように、古瀬戸後　期の時期に集中する。そして、最も新しく位置付けられるのは、土坑ＳＫ200・256などに見られる瀬戸大窯期の資料である。しかし、大窯期の資料は極めて少なく、大窯期以降にまで集落が盛行するもととして把握するのは難しい。したがって、大窯期のある時点で、今回の調査地における安濃津の集落は明らかに断絶しているのである。では、大窯期のどの時点まで集落の存続は考えられるであろうか。

大窯期に相当する擂鉢は、報告番号292・657・661・828などがある。これらの擂鉢は、藤澤良祐氏による編年では、大窯1段階頃に相当する。天目茶椀では、概ね大窯1段階に相当するが、包含層出土の797は2段階まで下る可能性がある。

これらのことから推測すると、明らかに遺構に伴っている遺物は大窯1段階までのものであると評価してもよさそうである。藤澤氏は、大窯期の成立は15世紀末とされており、明応の震災に伴う安濃津港町の被災と時期的に符合する。したがって、今回の調査区は、これまで伝聞としてしか知られていなかった安濃津の被災を考古学的に裏付けるものと評価できる。

b　中北勢系の土師器について

所属時期　第Ⅵ章第2節でも触れたが、中世前期の中北勢系土師器は、今回の調査区からはほとんど出土していない。その意味で、同じく旧安濃郡に相当する川北城跡（津市）[3]や大石遺跡（芸濃町）[4]などの安濃川流域の諸遺跡とは異なった様相を持つ遺跡といえそうである。

中世後期に至ると、当調査区からも出土が確認できる。皿・小皿・羽釜・茶釜などの器種が見られる。

さて、中北勢系土師器を最も特徴付けるのは羽釜である。口縁部と鍔部との間に、2個一対（計4個）の焼成前穿孔による円孔を持つ。この一群で、当調査区で最も古く位置づけられるのは、大土坑ＳＫ69出土のものである。南伊勢系の鍋では第3段階b型式から第4段階a型式のものと共伴し、古瀬戸の藤澤編年では後Ⅰ～Ⅱ期にかけてのものが見られる。このことから、15世紀前半までのものである可能性は極めて高く、あるいは14世紀後半にまで及ぶ可能性も含んでいる、と考えることができる。

中北勢系の羽釜については、鈴鹿市・西条遺跡のＳＥ6[5]から南伊勢系の鍋第3段階b型式に相当するものと伴出しており、最も遡るものとして認識していたが[6]、類例がこれのみであったため、確実とまではいえないものであった。今回確認した大土坑ＳＫ69出土資料にしても、一括性には乏しいものである。しかし、西条遺跡以外の類例が増加したものとして、中北勢系の羽釜が15世紀前半以前に出現していた可能性を若干ながら補強するものという程度の認識は可能であろう。

羽釜の形態　中北勢系の羽釜に見られる形態については、倉田直純氏によってＡ～Ｄの4類に分類されている[7]。当遺跡群出土の羽釜は、口縁部形態を中心に形式を見ると、次のような分類が可能である。

A類　口縁部・鍔部ともに短く、口縁部が内傾する一群である。口縁端部には凹線状の窪みを持つ。口縁部径から、20㎝前後の小形（A1類；896など）、26～30㎝の中形（A2類；332·660など）、35～40㎝の大形（A3類；275·336など）がある。小形・中形ものには頸部に焼成前穿孔が2個1対付くのが通常で、大形のものには付かない傾向があるようである。倉田氏の分類によるB・C類に相当する。

B類　短い鍔部とやや長い口縁部を有するものである。やや小形のものがある（491など）。

C類　口縁部・鍔部ともに短く、口縁端部が内面に突出するものである（620）。倉田氏による分類のA類に相当する。

今回の調査資料からは、一応、上記のような分類をしておく。このうち、B・C類については、確認例の少ないことから、極めて客体的な存在であると考える。また、A類のなかでも出土点数は中形のものが圧倒的に多い。

この分類を基にした型式については、別稿にて検討することとしたい。

使用方法　中北勢系の羽釜の使用方法は、外面に付着した煤の状況によって推測することが可能である。A類の状況を見ておこう。

fig. 127は、特徴的な煤の付着状況を示すものを図示したものである。まず観察されるのは、煤の付着が、鍔を越え、口縁部にまで及んでいることである。このことから羽釜A類は、カマドなどで下部が密閉されたような場で使用されたのではなく、囲炉裏などのオープンな火処での使用を考えることができる。

次に、口縁部における煤の付着状況を見ると、円孔から斜め上方にかけて、直線的な煤の付着しない

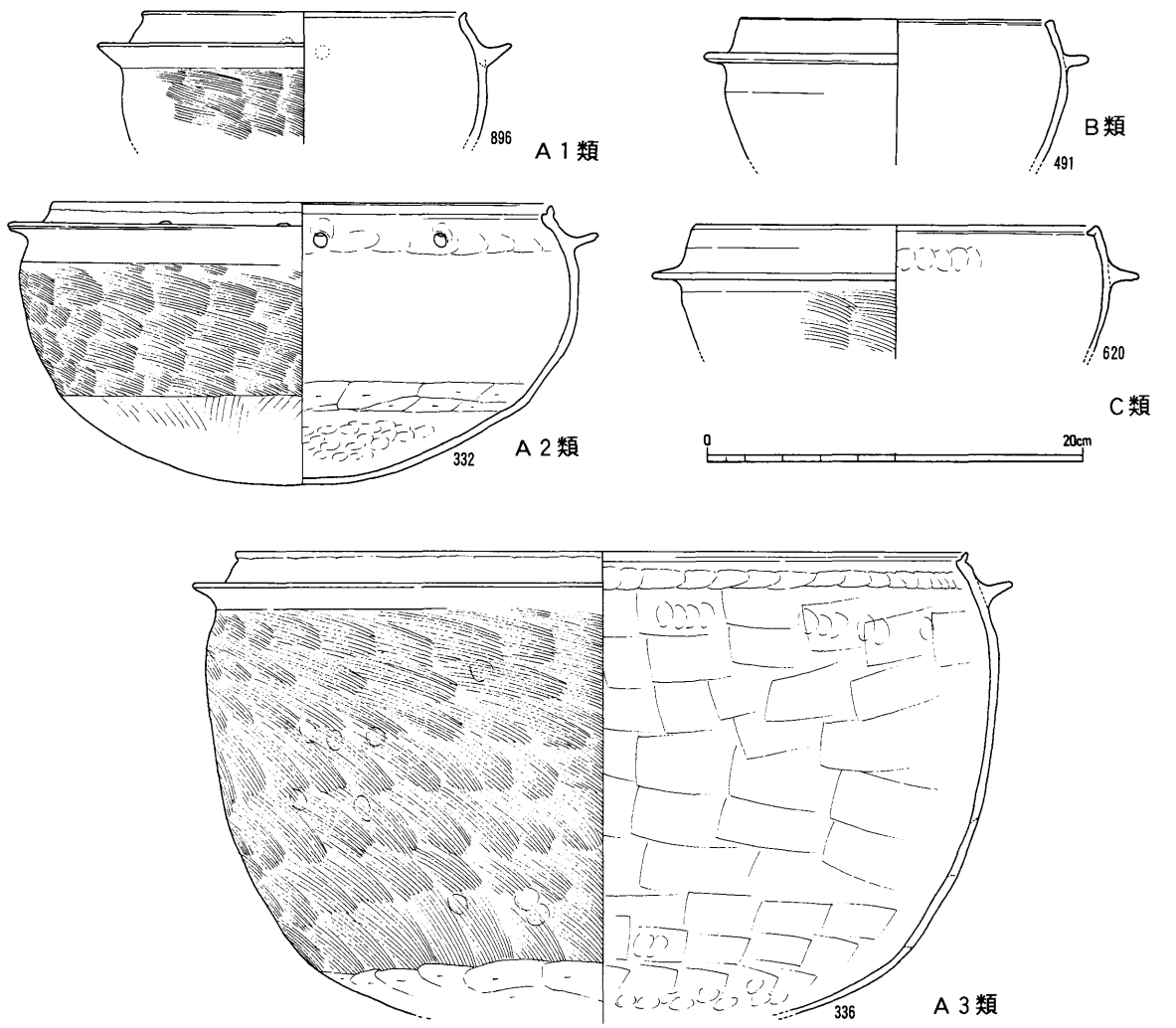


fig.126　中北勢系羽釜の形態（1:4）

部分が存在する。これは、隣接する円孔とは左右対照形の付着状況を示している。したがって、円孔に付けられた紐状具の部分に煤の付着がなかったものと考えることができる。

以上のことから、この土器は、囲炉裏などの火処で用いられるもので、吊り紐が付けられていたと考えることができる。なお、紐でなく、金属の可能性も無くはないが、円孔に磨耗がほとんど無いことと、煤による痕跡が直線的～上から引っ張られていたためと考える～であることから、紐であった可能性が高いと考える。

次に、吊り紐はどのように用いられたかを考えてみる。まず、煤無付着部分の角度から、円孔に付けられた紐は比較的短く、対面の円孔まで直接つなげているようなものではないといえる。つまり、1対間で紐は一応の完結をしているのであり、対面のものとは別の紐か金具でつなげられていると想定できる。そして、煤の付着が吊り紐の部分のみに見られないことから、煮炊きをしている最中に吊り下げられていたことがわかる。このことから、この円孔から延びる吊り紐は、自在鉤状のものに直接取り付くものではなく、さらに何かを取り付けることによって自在鉤状のものへと取り付き、上から吊されていたものと考えることができる。

このように羽釜A類には、囲炉裏状の火処において吊り下げられるという使用方法がひとつ想定できるのである。

中北勢系羽釜の地域的特色　「羽釜」といえばカマドで用いられるものであり、中北勢系の羽釜に見られたような使用方法は、形態的には極めて異例という言い方が、一方ではあり得る。しかし、「羽釜」とはいえ、あくまでも「羽釜形土器」なのであり、それを金属器の羽釜と同じ用途とは考えていない。つまり、「煮炊きする壺」[注]もあれば、同じ「皿」とはいえ、土師器・磁器・陶器では用途は異なると考えるのである。

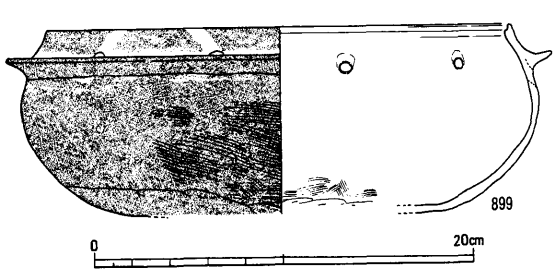


fig.127　中北勢羽釜に見られる煤の付着状況概念（1:4）

さて、ではなぜ羽釜という形態をとりながらも、鍋と同じ用法が取られているのであろうか。これには、中北勢系の煮沸用土器に見られる地域的特色を考える必要がある。[注]

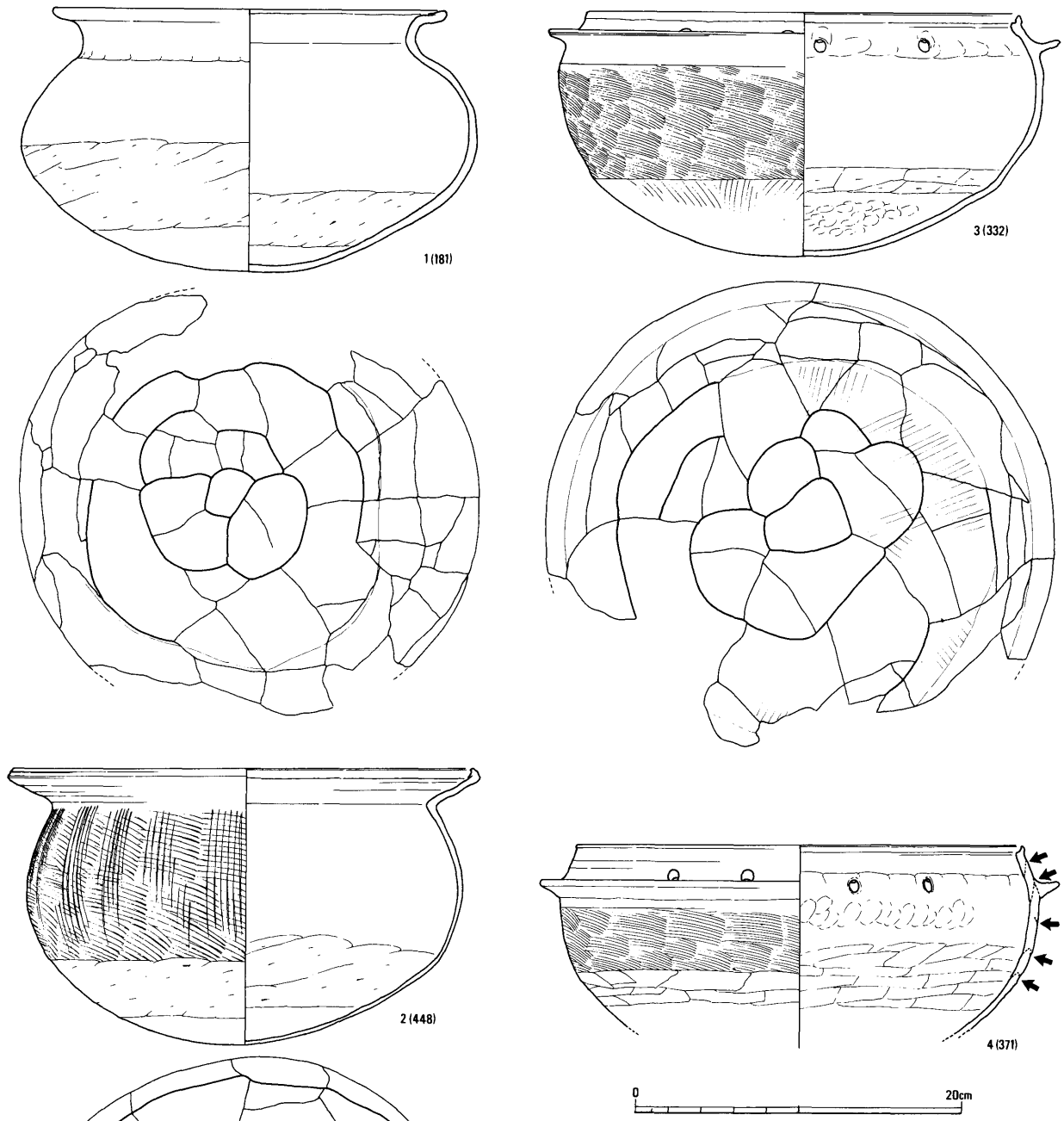
中北勢系の土師器群は、南伊勢系土師器群と同様、12世紀後葉頃には地域的特色を萌芽する。しかし、この段階で中北勢系土師器群で生産されたのは、皿類のみなのであり、煮沸具は、土器としては南伊勢系に委ねられたかたちとなっている。この傾向は、先述したように、14世紀後葉ないしは15世紀前半における羽釜形土器の生産開始まで待たねばならない。

中世後期における土器製煮沸具の再生産という傾向は、広く本州北東部に見られ、内耳や形態的な特徴などから、大枠として金属器模倣による再生産ということができる。この点からすれば、中北勢系の羽釜も、本州北東部地域の一環として把握できる。しかし、本州北東部に見られる傾向には、さらに鍋形を形態的に志向するという点も見出すことができ、中北勢系に見られる羽釜形の採用とは異なる。

一方、本州西部の大和・近江などの地域では、中世前期からの伝統によって、羽釜形土器の生産が継続している。しかし、当調査区出土の大和系の羽釜(677･895)に見られるように、鍔の形骸化は著しく、カマドでの使用とはとても考えられないものである。

同じ時期の南伊勢系の羽釜を見ると、今回の調査区で出土したものを見ても分かるように、金属器模倣を志向するもの（881～883など）とともに、451･452のように、細部の調整こそ異なるものの、形態的には中北勢系羽釜に類似したものも安定して存在する。素地粘土についても、南伊勢系のものと類似した傾向を示している。

以上の点を踏まえて中北勢系羽釜を位置づけよう。まず、中世後期における原則金属器模倣による煮沸用土器の再生産という点で、本州北東部の状況と連動している。一方で、形態的には近畿地方との関連もあろうが、南伊勢系との関連も強いと考えられる。したがって、本州北東部のうち、西端に位置する伊勢では、いずれの要素も少なからず認めることができる、とすることができる。その中にあって、



・底部の太線は、接合痕、細線は、それ以外の破断面
・⬅は接合痕
・（　）内は報告書土器番号

fig. 128　鍋・羽釜に見られる製作手法痕（1:4）

中北勢系の要素には、南伊勢系の存在を前提としている部分をかなり有している、と評価される。

c　土器製作と廃棄に関する問題

上記bとも関連する問題として、土器製作に関わる問題を採り上げる。

鍋・羽釜の製作　fig. 128の4は、体部上半に見られる整形時の接合痕が良好に認められるものである。南伊勢系・中北勢系にかかわらず、体部上半に見られる成形手法は、このような素地粘土を輪積みしていくものと考えられる。

体部下半の成形手法を知る手がかりになるのが、fig. 128の1～3である。ともに、底部に見られる破断面を平面で示したものである。両者共通に見られる手法として、まず、中央に円盤状のものを作り、その周囲に素地粘土を引き出すか、あるいは付加していくことによって、広げていることが分かる。ともに、中央は螺旋状に丸くし、その外側は同心円状となっている。2では明瞭ではないが、3の内面には指頭圧痕が見られる。また、3では、同心円状となった外側にハケメ調整が及び、その内側のハケメとは異なった調整として認識できる。そして、同心円状となった外側のさらに外側では、断面図にあるような段ができている。

このような形状となる製作手法として、体部下半に外型を用いる方法を考えておきたい。つまり、体部下半のみ外型を使用し、そこから先は素地粘土の輪積みによる成形手法を採っている、と考えられるのである。この手法は、南伊勢系・中北勢系にかかわらず見られるものと考えられ、両者の手法的共通性を示すものとして評価できる。

土師器皿の製作　土師器皿には、混和材に特徴的なものが見られるものがあった。fig. 54－319、fig. 69－667は、素地粘土中に明らかに土師器皿片と思われるものを含んでいる。土器製作にあたって、破損した土器を破砕して混入することは既に指摘されているが、それを如実に示す資料といえる。

廃棄に伴う行為　fig. 58-452の羽釜、fig. 62-563の鍋には、使用後に穿たれた穿孔が体部に認められる。土器の仮器化については、縄文時代以降、多数の資料が認められるのであるが、中世後期にもこのような資料の存在することが判明した。この意図については、勿論弥生土器などと直接同一視はできないが、今後、当該時期のものについても意識的に観察する必要があることを示している。

註

(1) 藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」(『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996)
(2) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』　1986)
(3) 萱宰康光ほか『川北城跡発掘調査概報』第1次調査（津市教育委員会　1981)
(4) 森川幸雄ほか「大石遺跡」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊　三重県埋蔵文化財センター　1991)
(5) 服部芳人「西条遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊　三重県埋蔵文化財センター　1990)
(6) 伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(『鍋と甕そのデザイン』第四回東海考古学フォーラム　1996)
(7) 倉田直純「下川遺跡」(『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990)
(8) 佐藤由紀男「煮炊きする壺」(『考古学研究』40－4　1993)
(9) 以下については伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol. 1　1990)・「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『研究紀要』第1号　三重県埋蔵文化財センター　1992)

5　加工円盤に関する基礎作業

ここでいう「加工円盤」とは、土器片を利用して円形に加工しているものである。「冥銭」「小型円板」「円板状土製品」などど呼ばれている。三重県では、山崎恒哉氏が「円形加工陶磁製品」と呼称している[1]。これらの総称として、ここでは「加工円盤」と呼称する。

この遺物については、いくつかの研究史がある。水野正好氏は、元興寺極楽坊検出の包蔵壙における出土状況から、銭貨を模倣した土銭とされる[2]。また、元興寺極楽坊出土包蔵壙出土状況から、何らかの信仰資料という解釈もあり[3]、小田原昭嗣氏も同様な見解を示している[4]。兼康保明氏は、奈良県仏塚古墳横穴式石室内からの出土状況を重視し、灯明皿の灯心を押さえるための「掻き立て」であるとされている[5]。さらに、近世からの提言として、成田涼子氏は土製弾碁玉との類似から「陶磁器転用おはじき」としている[6]。このほかに、石蹴、泥めんこなどの遊玩具類とする説、あるいは「つぶて」とする説、計算具や換算具と考える説などがあるが[7]、未だ定まった評価はない。

三重県下でもこれまでいくつかの遺跡から加工円盤の出土は報告されている。このうち、安濃津遺跡群から出土したものは、県内におけるこれまでの最も多い出土例となった。

ここでは、安濃津遺跡群から出土した加工円盤について、基礎的な作業を行い、そこから考えられることについて述べてみたい。

a　分類

安濃津から出土した加工円盤は、土師器・陶器・磁器を利用したものがある。第Ⅳ章でも触れたように、以下のように分類される。

・整形方法

　a；敲打で整形するもの

　b；敲打の後、調整部を研磨するもの

　c；高台をそのまま利用するもの

・大きさ

　fig．129を見る。個体数としてのピークが2.0～2.4㎝の間にあることは一目瞭然であるが、単純な三角形状ではなく、直径が大きくなる右側ほどゆるやかな傾斜となっている。つまり、一口に加工円盤といっても、様々な大きさがあるといえる。

つぎに、大きさを詳細に見る。最小は径1.5㎝で、2.0㎝から急激に増加し、2.4㎝から次第に少なくなっているが、右下がりの角度は右上がりのそれよりも緩やかである。詳細に見ると、2.8㎝で若干増加している。このことから、2.1㎝付近を頂点とする三角形と、2.8㎝付近を頂点とする三角形が交差しているものと判断する。また、4.2㎝付近と4.8㎝付近にも、小規模ながら集中箇所が見られる。同様なことは、5.8㎝から6.5㎝、あるいは7.0㎝から7.5㎝の間にも存在すると見るべきであろう。

以上のことから、大きさについては以下のように区分する。

1；2.1㎝ないしは2.8㎝を頂点とする一群。両者は厳密には区分できるものと思われるが、現実的には接近し過ぎており不可能であるため、一括する。

2；4.2㎝および4.8㎝内外を頂点とする一群。これも1と同様、現実には区分できないので一括する。

3；5.8～6.5㎝程度の一群

4；7.0～7.5㎝程度の一群

これらを、大きさと重さによって作図すると、fig.130のようになる。この図から、大きさと重さによって、4箇所程度の集中域を見出すことができる。このような法量区分は、ある程度意味のあるものと考えるべきであり、同じく加工円盤といっても、4種類以上のものがあると言い換えることができよう。

b　出土状況

今回の調査区内における出土状況は、あまり顕著なものはない。大土坑に集中する傾向があると言えなくもないが、土器の多い大きな遺構に集中しているというだけのように思われる。包含層中（検出中・褐色砂・黒褐色砂など）についても、特定の場所に集中するような傾向はない。つまり、ある特定の遺構・場所から出土するものではなく、調査区内全域からばらばらと出土している状況が観察される。

c　機能（用途）

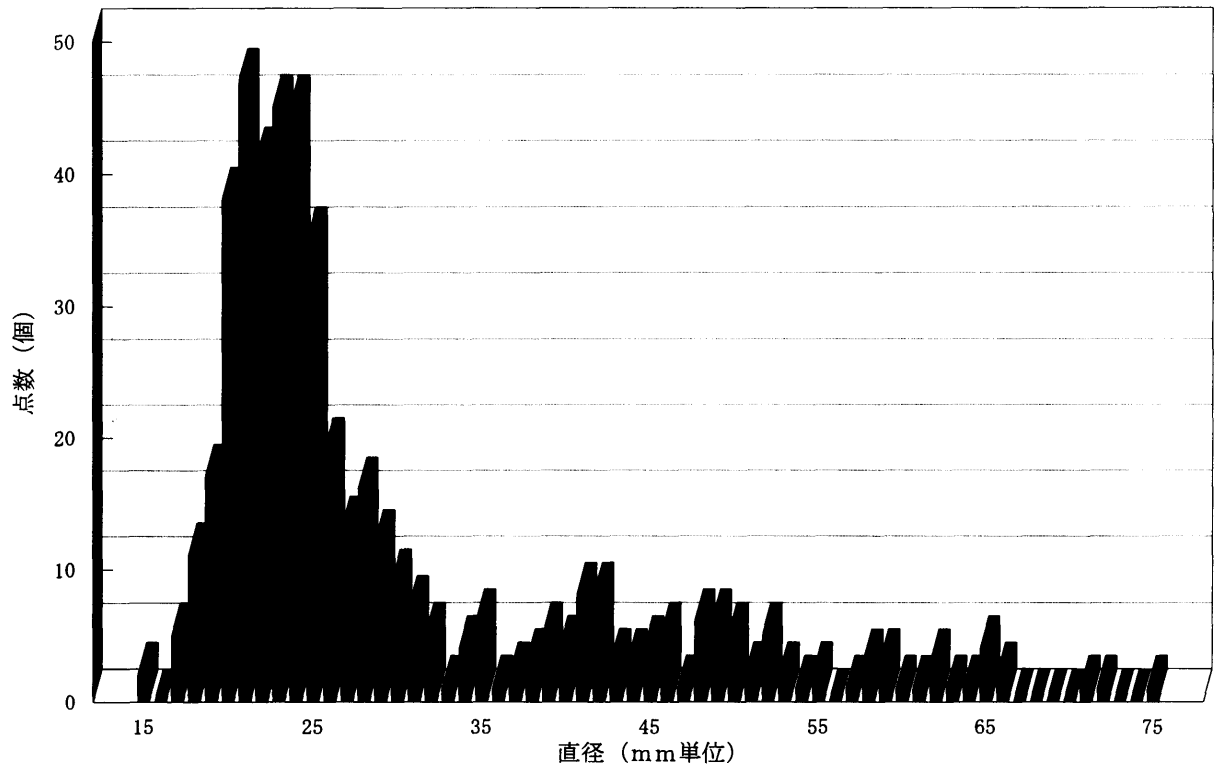


fig. 129　加工円盤　直径の分布

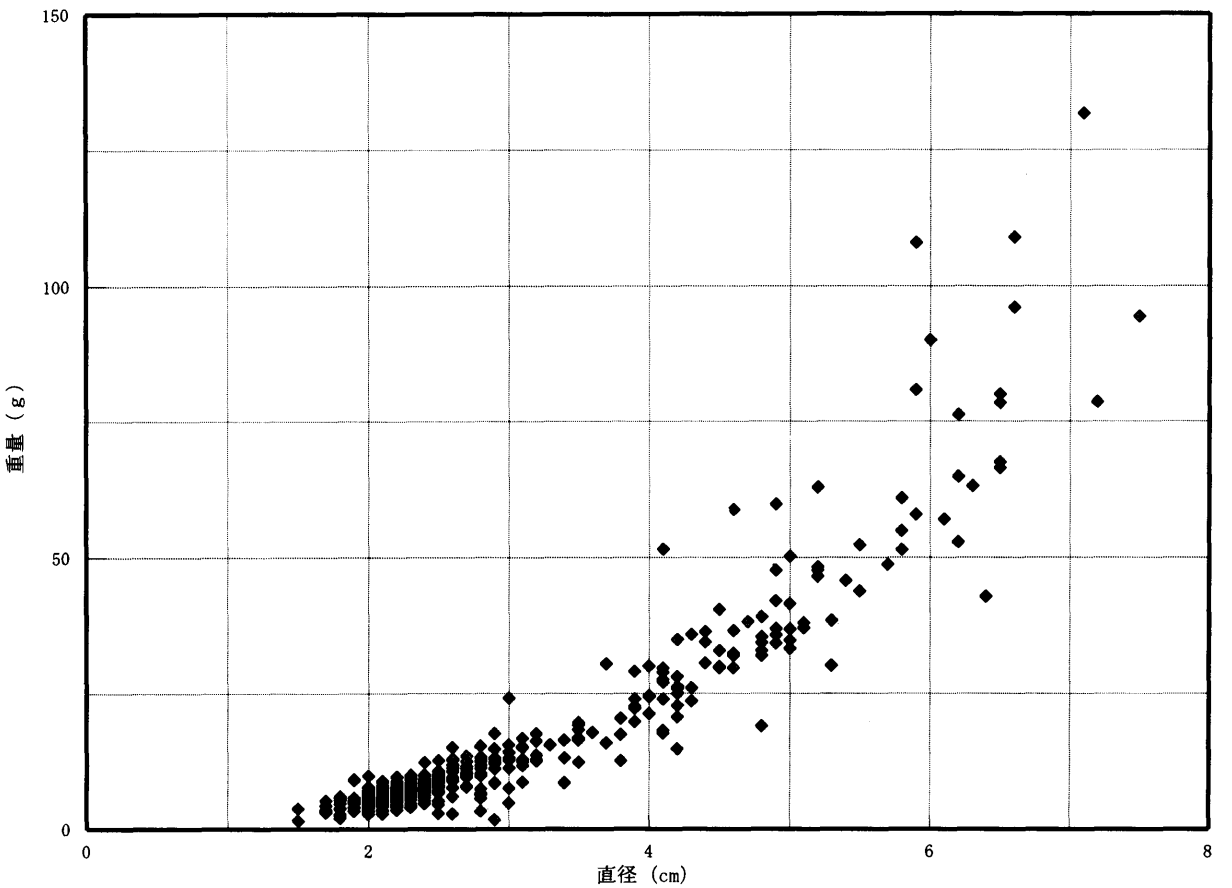


fig. 130 加工円盤　直径と重量の相関

機能（用途）については、上述した既に提示されている説以外に、筆者は妥当な見解を持たない。とりあえず、安濃津遺跡群における資料から諸説を検討し、今後この遺物を考えるための覚書とする。

機能を考える際には、安濃津が都市的な場であること、三重県下で最も多い確認例であること、さらに法量による機能分化があることを重視する。この点からいえば、冥銭説は確かに魅力的なのであるが、やはり考えにくい。

兼康氏の掻き立て説はどうであろうか。掻き立てならば、法量的に一定である方がよいので、安濃津のものについて言えば妥当性に欠ける。また、陶器甕の体部片を利用して直径2㎝程度に成形したものについては、「円盤」というよりは「円柱」に近いものとなる。さらに、陶器甕の口縁部や陶器椀の高台などを利用したものについては、どうも掻き立てとしての機能が考えにくい。したがって、兼康説の妥当性は認めつつも、必ずしも兼康説に符合するものばかりではないと考える。

「おはじき」説も、兼康説と同様の視点から肯定・批判が可能である。a1・b1類については、おはじきの可能性はある。しかし、単純に考えても、直径6㎝以上、重さ70g以上にもなる加工円盤を“指で弾く”という光景を、筆者は想像することができない。ビリヤードのような使用方法があるのであれば、話は別だが。

遊玩具説は、都市的な場に多いという点からすればあり得ることで、法量分化している点も矛盾はない。しかし、積極的に肯定できる要素はない。

「つぶて」説は、何とも言えず、批判も肯定もできない。計算・換算具とする説は、法量分化の点からも、都市・安濃津に多いという点からも、一応の妥当性はある。しかし、これも決定的な証拠はない。これ以外の説で、筆者に想像できるものはない。

以上のように、各説はいくつかの点で妥当性を有するとともに、いくつかの批判が可能であることがわかる。では、なぜこのような批判が可能なのであろうか。

それは、出土した遺物を一括して評価を与え、機能を考えようとした点、裏を返せば、法量的に均一なものについてのみ評価をし、それ以外を省いた点、にあると考える。そもそも、土器片を敲打して円形に加工するという、極めて単純なものであるから、いくつかの目的によって同様な形態が成立し得ることをも考慮すべきかと思われる。

このような状況下でも、いくつかの重要な点がある。まずこの遺物は、時期的には12世紀ないしは13世紀以降に増加・成立し、近世まで継続するものであること、である。いわゆる古代以前には存在していない？ことも重視する必要がある。そして、今回の出土資料からみても、確実に法量によっていくつかのグルーピングが可能であるという事実である。

このなかで、今後注意していく視点がいくつかある。まず、磁器椀の高台部を利用したものについてである。これは、やはり直径2cm程度のものとは明確に分離して考えるべきであろう。つぎに、直径と重さとの関係である。これは、使用した土器の厚さとも大いに関連するものと考えられる。

d　おわりに

結局のところ、加工円盤の機能（用途）限定はできない。今のところ、遊玩具、計算・換算具、掻き立て、いずれの可能性もある。しかし、これらの諸説のいずれかひとつに限定できるような遺物ではない、という点は強調しておきたい。

註

(1) 山崎恒哉「円形加工陶磁製品について」（『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅵ三重県埋蔵文化財センター　1990）
(2) 辻村泰圓・水野正好「南都元興寺極楽坊中世信仰資料包蔵坑発掘調査概要」（『大和文化研究』7－1　1962）
(3) 辻村泰圓ほか『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻　元興寺極楽坊（中央公論美術出版　1977）
(4) 小田原昭嗣「草戸千軒町遺跡の円板状土製品」（『草戸千軒』142　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1985）
(5) 兼康保明「謎の円板」（同氏著『考古学推理帖』大巧社　1996）
(6) 成田涼子「江戸遺跡出土の「陶磁器転用おはじき」について」（『市谷仲之町遺跡』　新宿区遺跡調査会　1996）
(7) 川吉謙二「土製円板小考」（『紀要』創刊号（財）のぎじく文化財保護研究財団　1996）

6　近世以降の陶器井戸枠について

安濃津遺跡群からは、18世紀以降と考えられる井戸のなかに、井戸枠専用に作られた陶器を用いたものがある。これは、口縁部の形態や素地粘土の状況から、常滑産と考えられるものである。

このような土器製井戸枠は、大和産の瓦質土器[1]や、讃岐の土師質土器にも見られる[2]。大和の瓦質土器についての年代は不明であるが、いずれの場合も中世前期まで遡るものではなく、近世以降に盛行するものかと想定する。

近年三重県でも、津市大里窪田町・六大B遺跡[3]、一志郡三雲町・宮ノ腰遺跡[4]、松阪市五曲町・松坂城三の丸五曲口跡[5]などでこの種の井戸が確認されている。また、各地の田畠の脇などにこのような陶器枠を用いた井戸が今も残っている。筆者の知るところでは、松阪市櫛田町地内[6]や、一志郡三雲町久米地内などに良好なものがある。

今後、このような井戸の発掘調査事例も増加することが予想されるので、現状をまとめておきたい。

a　使用方法

安濃津遺跡群　SE160では、同種の土器枠を、口縁部を上にして3段積にしていると考えられる。その下には上端をタタキ土で覆った結桶が配されている。SE152でも同様であるが、この遺構では、結桶が下段土器枠内に入り込み、上段土器枠は口縁部を下にして配置されている。

六大B遺跡　G地区のSE511から、2段積の土器枠が検出されている。完掘はしていない。

宮ノ腰遺跡（pho. 13）　結桶の上に器高の低い土器枠を配置する。さらに、それよりも一回り大きい土器枠が2段分確認されている。

松坂城五曲口跡　結桶が確認され、その上から2個体分の土器枠が出土している。土器枠は破壊されていたため、詳細は不明である。

櫛田地区内の井戸（pho. 14）　現在なお残存している資料である。土器枠は3段で、直下に結桶らしきものがあり、さらにその下にタタキ土の枠がある。これ以下は、湧水のため、分からない。土器枠の最上段部は、地上に露出している。

これらの類例から推察すると、土器枠は、少なくとも2段以上積まれ、最上段部は地上に露出している、と考えることができる。

b　土器枠の形態と変遷について

出土資料、および現存資料を見ると、大きさから、次のような分類が今のところ可能である。

A類　口縁部径70㎝前後で、器高が40～50㎝ほどのもの。頸部にタガを模倣した文様のあるもの（A1）と無いもの（A2）に分けられる。

B類　口縁部径が60㎝前後で、器高が30㎝ほどのもの。いまのところ、宮ノ腰遺跡でしか明確には出土していない。

A1類の形態を見る限り、この土器は明らかに結

pho.13　三雲町・宮ノ腰遺跡検出の井戸（SE17）

pho. 14　松阪市・櫛田地区の井戸

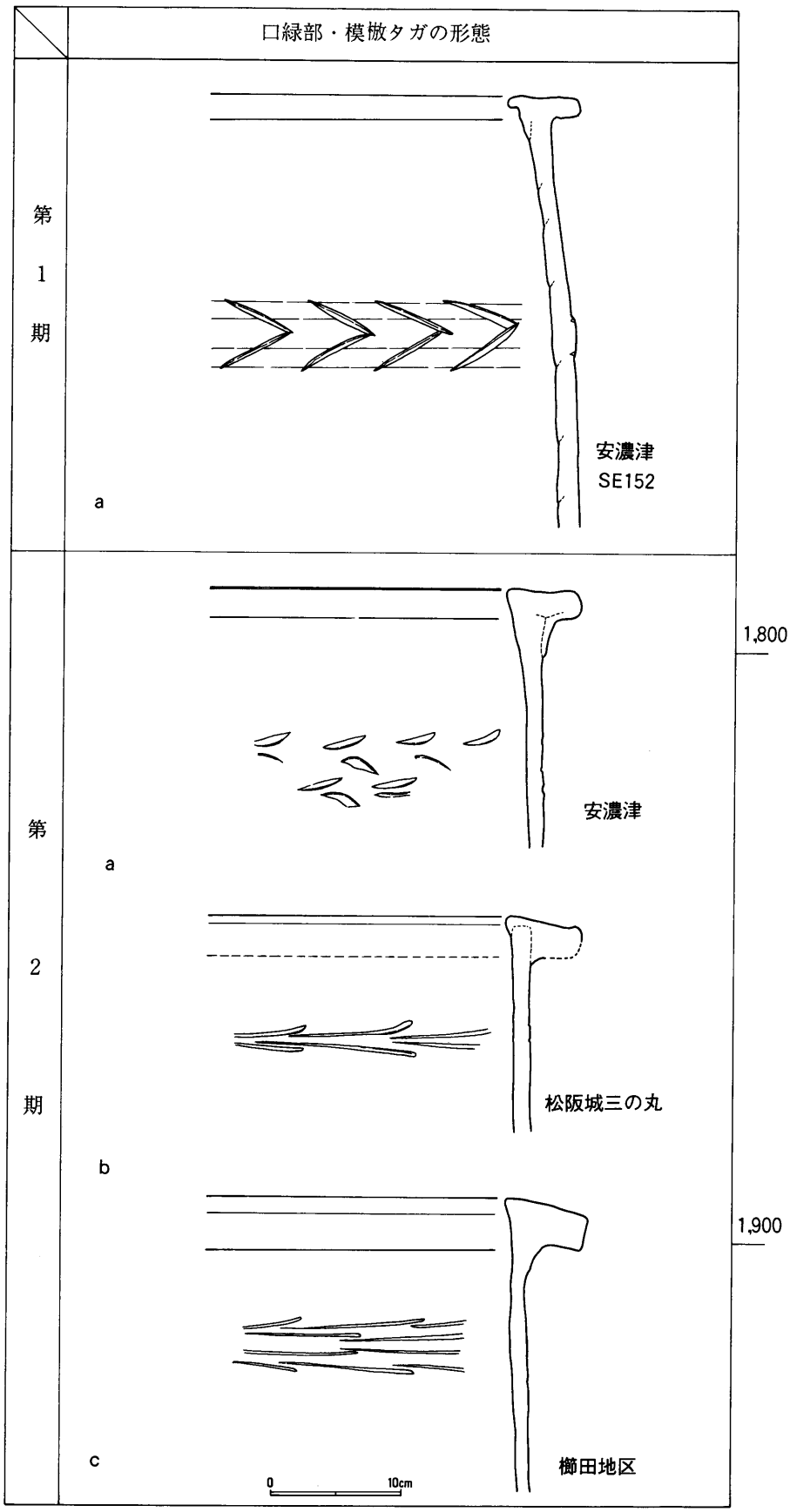


fig. 131 陶器井戸枠A1類の変遷（1:5）

桶を模倣したものであるといえる。

つぎにA１類について、口縁部形態と模倣タガの手法から、現状における変遷仮定をみておく。

第１期　結桶のタガ形態を突帯状にするような、かなり忠実に模倣する段階を第１期とする。この段階の安濃津SE152下段井戸枠をａとする。

第１期のａは､口縁部の横方向への拡張幅が狭く、外面の端部は強い面をなさない。口縁端部内面の突出が強い。口縁端部上面は緩く窪む。模倣タガは明確な横転させたＶ字形を連続して施文する。器面は凸帯状に膨らませている。体部が内彎気味であるのも特徴といえよう。

なお、ここでいうａ以前にも、より忠実に結桶のタガを模倣したものが存在すると想定され、今後の資料増加に期待したい。

第２期　結桶のタガ形態の模倣が形骸化する段階を第２期とする。口縁部および模倣タガの形態から、ａ～ｃの変遷が考えられる。

ａは、口縁部の横方向への拡張幅は狭く、外面は若干面をなすようになる。口縁端部内面は若干突出するが、第１段階に比べて丸みを帯びる。口縁端部上面は緩く窪む。模倣タガは横転させたＶ字形であるが、かなり粗雑である。

ｂは、口縁部の形状はａと同様である。口縁端部内面は、ａと同様な突出を示す。口縁端部上面は緩く窪む。模倣タガは横転Ｖ字形の連続ではあるが、１単位がかなり長くなっている。

ｃは、口縁部の横方向への拡張幅が広く、外面は明確な面をなす。口縁端部上面の窪みが消滅し、平坦になる。模倣タガはｂと同様、１単位がかなり長いものである。

第３期　模倣タガに相当する部分に、タガではなく、他の文様を施すようになる段階を第３期とする。発掘資料中には無いが、現在の畑地などに見られるもののなかにこのようなものが存在する。

ｃ　年代観について

この土器の口縁部形態は、基本的には同時期に見られる大甕のそれとほぼ連動して変化していると考えられる。したがって、年代観については、伴出した土器類と、大甕の編年によって得られた年代観を参照することとする。

第１期ａであるSE152からは、18世紀前半頃の擂鉢が掘形埋土から出土している[7]。また、ａの口縁部形状は、扇浦正義氏の常滑産大甕編年[8]によるＤ類と類似し、それは18世紀後半に位置づけられている。中野晴久氏も18世紀後半に位置づけている[9]。したがって第１期ａは、18世紀後半頃と考えることができる。

第２期ｂの松坂城三の丸五曲口跡出土の資料は扇浦編年のＥ類と類似し、それは、19世紀前半に位置づけられている。ｃは扇浦編年のＦ類に見られる形状に類似し、19世紀後半頃と考えられる。ｃの新しい部類と考えられる櫛田地区の井戸は、現在もなお使用可能な井戸に見られるものであることから、20世紀前半頃まで含めておく必要もあろう。

以上、現状では類例の乏しい井戸枠専用土器について、若干の検討を加えた。今後は、資料増加を待って、なぜこのような枠専用土器が出現するのか、あるいはどの地域にまで需要があったのかなどについて、常滑産大甕の分布とも絡めた検討が必要となろう。

註

(1) 近江俊秀「大和における中世後期の在地系土器～瓦質土器をめぐる二・三の問題～」(『北野腰越遺跡』奈良県立橿原考古学研究所　1992)

(2) 佐藤竜馬氏((財)香川県埋蔵文化財センター)の御教示による。

(3) 杉谷政樹ほか「六大Ｂ遺跡－Ｂ～Ｇ地区」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』　三重県埋蔵文化財センター　1991)

(4) 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』Ⅰ(三重県埋蔵文化財センター　1997)

(5) 木野本和之『松坂城三の丸五曲口跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1996)

(6) 平成８年度に三重県埋蔵文化財センターが行った発掘調査区の西隣の畑地に所在する。

(7) 藤澤良祐「本業焼の研究(２)～赤津村・上水野村を中心に～」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』　1988)

(8) 扇浦正義「常滑大甕の編年的考察」(『自證院遺跡』自證院遺跡調査団・新宿区教育委員会　1987)

(9) 中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」(『常滑市民俗資料館研究紀要』　1986)

Ⅶ 総　括

ここでは、調査の成果と今後に残された問題について触れ、調査の総括とする。

1　都市・安濃津の背景

第Ⅱ章でも触れたように、伊勢湾西岸部には数多の港がある。その点からすれば、安濃津が特別に重要な港である必要はない。港が物流のための拠点であることは言うまでもないが、地域の物資を流通するためのみであれば特別に大きな港が形成される必要性はないのである。

これは安濃津についても言える。ここが安濃郡内の物資を流通させるためのみの港であれば、安濃津がことさら表立つ必要もない。にもかかわらず安濃津が注目されるのは、それ相応の意義があるとみるべきである。たとえ近世以降の史料を基礎にしているにしても、である。

中世後期の安濃津は、「この國のうちの一都會にて、封彊もひろく、家のかすもおほくて、いとみところあ」った場なのである[1]。このことから安濃津は、港を中心としてできた伊勢地域屈指の都市だったと見ることができる。

では、なぜ安濃津は都市たり得たのか、あるいは数多ある港の中でも中心的な位置を占めるのであろうか。

ひとつの理由として、領主権力が関与していた港である、という説明が挙げられる。事実、安濃津は中世を通じて神宮領であり、中世後期には室町期守護や国人領主なども積極的に関与しようとする場である。

また、中世後期には、大湊に見られたような惣郷的な結合が見られた点も重要である。都市を成立させる媒体としてのある種の共同体がいかに重要かについては、豊田武氏以来幅広い検討が加えられている[2]。

このような、領主権力が複雑に関与する場であること、あるいは、都市共同体が形成されていたことなどをもって、安濃津は都市たり得たという評価は極めて妥当である。しかし、これらは中世安濃津がたどり着いた一定の成果を示すもの、ないしは、成果に依拠したものであることを物語るものなのであり、なぜ都市たり得たのか、という問に対する説明にはならない。

事の淵源は、中世以前に遡ると見るべきであろう。第Ⅱ章で触れたように、弥生時代・古墳時代に見られた文化伝播は、海路によるものと考えることによってより膨らみを増す。その要の位置に安濃津が存在していることは看過できない事実である。安濃津の淵源を有史以前にまで遡ることによって、安濃津の実質的な評価が可能となろう。

このような淵源を持つ安濃津の、中世以降の展開を物語るものとして、次の史料[3]を注目したい。

＜史料１＞

太神宮神主帖　諸國往反津泊預

欲被任先例、無事煩令往反、當宮御領安濃津御厨刀禰中臣國行等状、

右、得彼國行解状爾、當宮御領神人等、依無指寄作田畠、往反諸國成交易之計、致供祭之勤、成世途之支者、承前之例也、因之、往反渡海之間、自往雖無事煩、近年以降、背先例致其妨之條、大愁也、然則任先跡無事煩、欲彼令往反渡海之状、帖送如件、神威無止、先跡有限、何無寛優哉、以帖、

建久[1196]七年四月十五日　　大内人荒木田

祢宜荒木田神主在判

これまでに何度か触れてきた、伊勢神宮による「往反諸国成交易之計」が保障されている史料である。この「往反諸国」の文言は、伊勢では比較的史料の残っている大湊にも見られない。また、廻船鋳物師が「諸国七道往反」していたことは確認できる[4]ものの、日本列島にある数多の港町中にも、この

ような文言はほとんど見られない。この「往反諸国」の文言こそ、安濃津の重要な部分を言い当てていると考える。第Ⅵ章2で触れた物流拠点としての安濃津も、この「往反諸国」の結節点であるからこそ発生するものと考えるのである。

このように考えれば、中世において領主権力が積極的に関与したくなるような安濃津とは、中世における領主権力によって形成されたような代物ではなく、それ以前の長い歴史のなかで培われてきた場であると見ることができよう。

そして、広域に展開する物流の結節点という視点から見れば、安濃津をとりまく海運・海路の考察にあたっては、日本列島に限った視野ではもはや不可能とさえいえよう。すなわち、日本列島はまぎれもなく東アジアという大地域の1小地域なのであり、日本史とはアジア世界から決して遊離して考察されるべき問題ではないのである。都市・安濃津をとりまく環境は、まさに国際的なものなのである。

2　残された課題

つぎに、今回の調査によって明確となった、安濃津遺跡群が提起する問題点を掲げておきたい。

a　安濃津遺跡群の初現

まず、安濃津遺跡群の初現である。今回の調査区からは、古墳時代前期の遺構・遺物が見つかり、当地での人間活動がこの時期にまで遡るのは確実である。また、包含層中から出土した遺物には、弥生時代の石鏃や土器もあり、遺跡の形成が弥生以前にまで及ぶ可能性は充分ある。弥生時代以前における安濃津の歴史的機能を考古学的に検討する点からも、古墳時代以前の状況は非常に興味深く、今後の調査成果が期待される。

b　古代の安濃津

安濃津が信頼できる文献にはじめて登場するのは、次の『中右記』永長元(1096)年12月9日条である。

＜史料2＞

後聞、伊勢国阿乃津民戸、地震之間、為大波浪、多以被損云々、凡諸国有此如事、

同書中から、この地震が11月24日に発生したことがわかる。稲本紀昭氏も指摘するように、当時の安濃津には、既に多くの家が立ち並んでいたことがわかる。しかし、今回の調査区からは、当時の遺構は明確には確認できず、わずかに灰釉陶器などが確認されたに過ぎない。古代の安濃津の実態は、依然として不明のままである。

c　中世の安濃津

都市化した以降の安濃津についても新たな問題が浮かび上がった。今回の調査でも、中世を通じて遺構・遺物が確認できるとは言えるものの、13･15世紀にその中心があることは明らかであり、14世紀代のものは今一つはっきりしなかった。これが、この調査区のみの傾向なのか、あるいは遺跡群全体を通していえることなのかは重要な問題である。

この問題は、安濃津の終焉に関する問題と絡めると、さらに大きくなる。安濃津は、15世紀末に発生した明応の大地震で壊滅的な打撃を受けたとされており、今回の調査でもそのことは裏付けることができる。しかし、この震災以降の18世紀の当地は、原則的に15世紀の地割を踏襲している。とくに、15世紀末段階まで機能していたと考えられる溝SD170と18世紀の溝SD143とは、ほぼ同じ位置に方位を同じくして設定されている。このことは、集落の景観そのものに限って見た場合、15世紀末と18世紀ーすなわち中世と近世ーとの違い以上に、13世紀と15世紀ーすなわち中世前期と後期ーの違いの方が大きいといえるのである。歴史的画期としての14世紀をより一層評価する意義のあることを、この遺跡は示しているのである。

d　近世以降の安濃津

近世以降は、15世紀の地割りを踏襲するかたちで集落が形成されている。今回の調査では確認できなかったが、16～17世紀にかけての当地が、どのような景観を呈していたのかは追求しなければならない。そして、中世のあり方を問う意味からも、近世以降の遺構調査は極めて重要なのである。

e　埋蔵文化財として見た安濃津

最後に、埋蔵文化財としての安濃津について触れておく。今回の調査で確認したように、現在の生活面と中世のそれとでは、深い場所では1.3ｍほどの差がある。これは、市街化された当地とはいえ、遺跡の保存状態は決して悪くないことを示している。

今回の発掘調査は、破壊を前提とした記録保存であった。しかし、今後は、保存を前提とした調査を継続する必要がある。その際、砂質土壌を基盤とした安濃津遺跡群では、発掘調査を行えば、即、遺構崩壊へとつながることを忘れてはならない。単なる発掘調査ではない、何らかの方策が必要である。

安濃津は、15世紀末に震災を契機とした廃絶(規模縮小)が確認される場所であり、当時における町屋が良好に残されている遺跡である。15世紀末の段階における港町の景観復元についても、安濃津は全国的に強い発言力を持つ遺跡であることを認識して調査を進めていく必要がある。そのためには、今回の調査でも確認された、15世紀末段階と18世紀段階における地割の共通性にどのような背景が隠されているのかも、より一層追求しなければならない。

このことは、ほかの港・港町についてもいえるであろう。安濃津のみでなく、港町を検討するための文献史料は少ないが、その状況下における考古学的資料の重要性は、今回の調査成果を見ても明白である。ところが、伊勢湾西岸部の港・港町のなかで、遺跡として把握されている場所は数少ない。安濃津と同様、港町の考古学的調査を充実させていく必要がある。そのためには、地籍図などの調査を先行あるいは並行して進め、充分な保護対策を講じたうえでの調査が必要である。そして、今回の調査では充分にできなかった近世以降の遺構調査も、中世以前を考えるうえで、非常に重要であることを、改めて指摘しておきたい。

3　おわりに

以上、不充分ながら、安濃津に関するいくつかの問題について検討を加えてきた。今回の調査によって、安濃津に関する情報がはじめて提示できたものと考える。

今後、伝説を脱却したより具体的な安濃津像が考察されることになると考えられる。最後にあたり、安濃津は、伊勢の中世史を構成するうえでのみ重要なわけではなく、東アジア史としての日本列島を考察するうえで重要であるという点にこそ、歴史的意義があると考える点を再度強調しておきたい[6]。

註

『耕雲紀行』(『大神宮叢書神宮参拝記大成』所収　神宮司庁　1976)

(2)　豊田武『中世の商人と交通』(豊田武著作集第3巻　1883)ほか一連の研究。ほかに、脇田晴子『日本中世都市論』(東京大学出版会　1981)など

(3)　「神宮雑書」(『鎌倉遺文』842)

(4)　「真継文書」嘉禎2月11月日付、蔵人所牒写など(『中世鋳物師史料』名古屋大学文学部国士研究室編　法政大学出版局　1983　所収「中世文書」10～12号)

(5)　稲本紀昭『日本三津に関する史料の研究』(1989　津市)

(6)　第Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ章で触れたことについては、伊藤裕偉「中世の港湾都市・安濃津に関する覚書」(『ふびと』49　1997)で述べたことを骨子としている。

報告書抄録

ふりがな	あのつ
書名	安濃津
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	147
編著者名	伊藤裕偉
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 05965（2）7031
発行年月日	西暦　1997年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
あのついせきぐん 安濃津遺跡群	みえけんつし 三重県津市 やなぎやまつおき 柳山津興 あざまつむら 字松村1239番地	242012	832	34° 42′ 09″	136° 31′ 00″	19960417～ 19960826	3,700	津実業高等学校総合学科棟・体育館建築工事に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安濃津遺跡群	都市遺跡	古墳前期	溝	壺	
		古墳前期～ 平安後期		土師器・須恵器 灰釉陶器など	
		中世前期	溝・土坑・ピット	土師器・陶器など	港町を示す未使用土器類が多量に出土
		中世後期	区画溝を伴う町屋跡	土師器・陶器多量 石製スタンプ 常滑産大甕の完形品	中世前期の溝と区画方位が異なる。 15世紀末で廃絶
		近世後期	井戸・溝	土師器・陶器 常滑産井戸枠	中世後期の区画方向と一致
		安濃津遺跡群の土壌分析（パリノ・サーヴェイ㈱）と、伊勢における南伊勢系・中北勢系の土師器の胎土分析（三辻利一氏）を掲載			

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１４７

安　濃　津

―本　文　編―

１９９７年３月発行
編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　者　　東海印刷株式会社

『安濃津』 1997年3月
三重県埋蔵文化財センター
付　　図

安濃津遺跡群調査区（1996年）平面図（1:100）　※中世遺構面

0　10m